

現代日本語における自他両用漢語動詞の用法について

著者	楊 健
学位名	博士(文学)
学位授与番号	24501甲第72号
学位授与年月日	2023-03-24
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00002493/

第一章 序章

1. 本研究の背景と動機

現代日本語において、和語動詞に関して、「伴う」「開く」「閉じる」のような自動詞用法と他動詞用法を併せ持つ、いわゆる自他両用の和語動詞は存在するものの、少数しかない。それに対して、漢語動詞について、自他両用の動詞は数多く存在する。楊尚郎 (2009) は、国語辞書において「自他サ変」と分類されている二字漢語動詞の総数を、『岩波国語辞典』: 411 語、『学研現代新国語辞典』: 587 語、『明鏡国語辞典』: 686 語』とのように示している。

また、和語動詞には、「始める・始まる」「壊す・壊れる」「広げる・広がる」のように、ペアになっている自他動詞は多く、形から自他を判別することができる。今までの研究では、ペアになっている和語動詞、いわゆる有対動詞に関する考察は数多く見られる。しかし、漢語動詞には、「開始する」「破壊する」「拡大する」のように、「VN する」という一つの形しか持っていないため、形からの自他判別が困難である。しかも、意味概念から見れば、「開始する」には「始める・始まる」、「破壊する」には、「壊す・壊れる」、「拡大する」には、「広げる・広がる」とのように、自動詞と他動詞の両方の意味解釈を持っている¹。

以上のことを踏まえて、漢語動詞の自他動詞の判定は、和語動詞より困難な一面があると思われる。特に、日本語学習者にとっては辞書を頼ることはほぼ唯一の手段である。しかし、国語辞書において、動詞の自他判定

¹ ヤコブソン (1989) は、以下の例を挙げている。

- (1) 開始する (始まる、始める)
- (2) 落下する (落ちる、落とす)
- (3) 拡大する (広がる、広げる)
- (4) 燃焼する (燃える、燃やす)

(ヤコブソン 1989: 167)

にはゆれがあることはすでに先行研究で判明されている²。したがって、本研究は、国語辞書において自他両用とされる漢語動詞に注目して、自他両用の漢語動詞の用法について考察するものである。

2. 本研究の考察対象

本研究は、漢語サ変動詞のうち、特に二字漢語動詞に注目する。小林 (2004)、張志剛 (2014)、楊健 (2019)では、二字漢語動詞の特徴を次のように指摘した。語種から見れば、サ変動詞のうち、漢語動詞のほうが圧倒的に多い。また、漢語サ変動詞のうち、三字・四字の漢語動詞に比べて、二字漢語動詞の使用頻度がより高いと思われる。したがって、本研究は二字漢語サ変動詞を考察対象とする。

また、本研究は、日本語学習者の立場から二字漢語動詞の自他用法について考察するものである。日本語国語辞書と「現代日本語書き言葉均衡コーパス(中納言)」を利用して、国語辞書の記述、およびコーパスの実例に基づいて、二字漢語動詞の自他用法について考察する。

3. 考察の進め方

考察の進め方としては、まず「現代日本語書き言葉均衡コーパス(中納言)」(BCCWJ)を利用して、実例に基づいて自他両用とされる二字漢語動詞を選別する。自他両用とされる漢語動詞の用法を記述して、そこから一般的な規則を究明することを目標とする。

考察の手順として、まず漢語動詞をめぐる先行研究を概観して、従来の研究における自他両用の定義を明らかにしたうえで、本研究の立場や先行研究との関連性について述べる。また、国語辞書において「自他サ変」とされる二字漢語動詞に注目し、これらの動詞は「対格構文 vs 非対格構文」という構文的な対応関係を持つか否かについて考察する。さらに、自他両用の漢語動詞には、自動詞と他動詞の使用上に、偏りなく使われているか否かについて考察する。自動詞専用、または他動詞専用の傾向に見ら

² 楊尙郎 (2010) は、『岩波国語辞典』、『学研現代新国語辞典』『明鏡国辞典』という 3 種類の国語辞書を利用し、3 種の国語辞典における二字漢語動詞について、自他の分類が一致している動詞は異なり語数からみると約 30%に過ぎないと指摘している。

れる動詞がある場合、それらの動詞は使用上に制限があるか否かについて検討する。最後に、自他両用の漢語動詞のうち、特別な用法を持つ動詞、具体的には、対象格と移動格を併せ持つ動詞「移動スル」と、二格を取る自動詞用法を持つ「反映スル」を対象にして、使用上の特徴を記述する。

4. 論文の構成

本論文は、序章にあたる第一章および終章にあたる第八章を除けば、本論の部分にあたる第二章から第七章までを、以下のようにまとめる。

第二章では、漢語動詞をめぐる先行研究を概観する。漢語動詞をめぐる研究について、動詞の内部構造に関する研究と、動詞の自他用法に関する研究が多く見られる。先行研究に従い、「対格構文 vs 非対格構文」という構文的な対応関係を持つ動詞を自他両用の動詞とする本研究の立場を明らかにする。

第三章³では、国語辞書において「自他サ変」とされる漢語動詞に注目し、これらの動詞は「対格構文 vs 非対格構文」という構文的な対応関係を持つか否かを判定する。国語辞書で「自他サ変」とされる動詞は、すべて「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係を持つか否かについて判明する。また、「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係を持つ自他両用の漢語動詞は、自動詞と他動詞のどちらかに傾く傾向を示すものがあるか否かについて考察する。「開始する」「破壊する」などの動詞は他動詞専用の傾向にある動詞であり、「増加する」「減少する」「発生する」などの動詞は自動詞専用の傾向にある動詞ということを、BCCWJの実例に基づく例文数で判明する。最後に、BCCWJにおいて自動詞専用、または他動詞専用の傾向にある動詞は、日本語母語話者には同じ傾向が見られるか否かを、アンケート調査で究明する。

第四章⁴では、「増加する」「減少する」「発生する」といった自動専用の

³ 第三章は、次の論文をもとに添削したものである。楊健 (2021) 「国語辞書において「自他両用」とされる二字漢語サ変動詞の用法」『神戸外大論集』74、pp. 173-196

⁴ 第四章は、次の論文をもとに添削したものである。楊健 (2021) 「自動詞専用の傾向を示す自他両用の二字漢語サ変動詞の他動詞用法」神戸市外国語大学研究科論集 24、pp. 1-22

傾向にある動詞に注目し、これらの動詞の他動詞用法に見られる制限について考察する。先行研究では、「再帰性」や「再帰的な関係」でその制限を説明したが、実際に「再帰性」や「再帰的な関係」で説明できない例文もある。本章では、他動詞文の主語を、「動因者主語」と「経験者主語」の2種類に分けて、認知言語学における動詞の他動性に関する論述を参考しつつ、以下のことを明らかにする。「動因者主語」の場合は、有生物主語は目的語との間にコントロールする関係を持つこと、無生物主語は目的語との間に因果関係を持つことは重要な条件である。「経験者主語」の場合は、主語と目的語の間に「全体部分の関係」に該当しなければならない。

第五章では、「開始する」「破壊する」といった他動詞専用の傾向にある動詞に注目し、これらの動詞の自動詞用法に見られる制限について考察する。他動詞専用の傾向を示す漢語動詞の自動詞文について、非情物や出来事を表す名詞が主語になることが多いこと、これらの自動詞文が描く事態は、外的な働きかけによって生じた事態が多く見られることを明らかにする。また、自動詞文の成立要因について、認知言語学における認知モデルに関する概論を参照しつつ、次のことを究明する。外的な働きかけによって生じた結果事態は、認知ベースにおいて、その働きかけが背景化されうる場合、結果事態が焦点化されて、自動詞文が成立する。しかし、認知ベースにおいて、その働きかけが背景化されえない場合、自動詞文が成立しないこと、自動詞文の成立には働きかけと結果との直接性に関わることを究明する。

第六章では、漢語動詞「移動スル」に注目し、「移動スル」には対象補語を取る用法、移動補語を取る用法、状況補語を取る用法があるか否かについて考察する。また、各用法の間に関連性が存在するか否かについて論じる。移動補語を取る「移動スル」の場合は、移動経路の用法が一般的であるが、そのうち、特殊な経路を示す例文、多義性のある例文について分析し、その多義性が生じる原因について論じる。

第七章では、二格を取り、着点を表す補語を取る漢語動詞「反映スル」に注目し、「反映スル」の用法について考察する。本章は、日本語における「再帰性」や「再帰的な関係」をめぐる先行研究を概観しつつ、「反映スル」と「反映サセル」には再帰性が見られるか否かについて考察する。

5. 例文・記号の規定

本論文で扱う例文は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(中納言)」からの引用である。例文後に出典する著作が明記されている。また、例文番号、注釈番号は、各章ごとに区別して使用される。さらに、例文の判断記号は、以下のように規定する。

- * 文法的に非文であること
- ? 不自然であること
- # 当該の文脈において不成立であること

第一章参考文献

- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』 ひつじ書房
- 張志剛 (2014) 『現代日本語の二字漢語動詞の自他』 くろしお出版
- ヤコブソン、ウェスリー・M (1989) 「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』 くろしお出版 須賀一好・早津恵美子 (1995) 『動詞の自他』 に再掲、pp. 166-178、ひつじ書房
- 楊健 (2019) 「二字漢語サ変動詞の自他分布に関する一考察-BCCWJ に基づいて」『神戸市外国語大学研究科論集』 22、pp. 47-60、神戸市外国語大学外国語学研究所
- 楊健 (2021) 「『国語辞書』において「自他両用」とされる二字漢語サ変動詞の用法」『神戸外大論集』 74、pp. 173-196、神戸市外国語大学研究会
- 楊健 (2021) 「自動詞専用の傾向を示す自他両用の二字漢語サ変動詞の他動詞用法」『神戸市外国語大学研究科論集』 24、pp. 1-22、神戸市外国語大学外国語学研究所
- 楊高郎 (2007) 「自動詞・他動詞用法に意味的制限を持つ自他両用動詞について—二字漢語動詞を中心に—」『筑波日本語研究』 12、pp. 65-88、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
- 楊高郎 (2010) 「国語辞典における自他認定について:自他両用の二字漢語動詞を中心に」『筑波日本語研究』 14、pp. 75-95、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室

第二章 漢語動詞に関する先行研究

0. はじめに

本章では、漢語動詞、特に二字漢語動詞をめぐる先行研究の流れを概観する。これらの研究を紹介しつつ、本研究の立場や位置づけを明らかにしたい。和語動詞に比べて、漢語動詞に関する研究は決して多いとはいえない。本章は、主に二字漢語サ変動詞の内部構造、及び漢語動詞の自・他動性という二つの面から、漢語サ変動詞をめぐる先行研究を概観する。

1. 二字漢語動詞に注目する理由

漢語サ変動詞のうち、特に二字漢語サ変動詞に注目する研究が数多く見られる。これは、二字漢語動詞の特徴と関係があると思われる。

張志剛 (2014) は、「使用頻度」「語彙化」「語構成」という三つの角度から二字漢語サ変動詞の特徴を概観している。

第一、使用頻度において、「二字漢語動詞とそれ以外の漢語動詞を比較した結果、明らかに二字漢語動詞が多く使われている¹」(張 2014: 10) と

¹ 張 (2014) は、田村・野村 (1982) と小林 (2004) のデータを引用して二字漢語動詞の高い使用頻度を論証している。

田村・野村 (1982) は、「日本科学技術情報センター抄録テープの公害篇(本2冊分)と経営篇(本12冊分)」からサ変動詞を抽出した結果を報告している(%は張による計算)。

表1 科学資料における漢語動詞語幹別の頻度表

語幹	異なり語数	割合	延べ語数	割合
1字	69	3.2%	5473	19.0%
2字	1576	72.3%	22232	77.2%
3字	213	9.8%	692	2.4%
4字	295	13.5%	381	1.3%
5字	20	0.9%	21	0.1%
6字	6	0.3%	6	0.0%
小計	2179	100.0%	28805	100.0%

(田中・野村 1982: 188)「表Iサ変動詞の語幹部による分類」により)

小林 (2004) は、1989年1年分の朝日新聞の社説の漢語動詞を調べた結果を報告してい

のことである。

第二、語彙化において、「二字漢語の方が一字漢語動詞より、日本語としての語彙化が進んでいない」ため、二字漢語を分析するにあたり、「漢語+する」という語形を取りながらも、「漢語」という部分を取り出して分析することが可能である」(張 2014: 11) とのことである。

第三、語構成において、「三字以上の漢語動詞は二字漢語動詞を構成の基本とするものが多いので、二字漢語動詞の性質を明らかにすることは、三字以上の漢語動詞の性質を把握するための先決条件になる」(張 2014: 11) とのことである。

以上のような理由で、一字、三字、四字漢語に比べて、二字漢語動詞に注目する研究が多く存在する。本研究は、先行研究と同様に、二字漢語動詞に注目する。

次の節では、漢語動詞の内部構造、及び漢語動詞の自・他動性との二つの角度から先行研究を概観する。

2. 漢語サ変動詞の内部構造に関する研究

漢語サ変動詞の内部構造について、三字漢語動詞、四字漢語動詞より、二字漢語動詞に注目する研究が多い。斎賀 (1957)、日向 (1985)、野村 (1999)、小林 (2004)、張志剛 (2014)といった研究が挙げられる。

斎賀 (1957) は、二字漢語を構成する二つの要素の間にいくつかの意味的關係が存在すると指摘する。その意味關係を以下の 6 類に分類する。

(1) A.並立關係

(前部分と後部分とが対等の資格で並立する關係)

る(%は張による計算)。

表 2 新聞における漢語動詞語幹別の頻度表

	異なり語数	割合	延べ語数	割合
二字漢語動名詞	1440	82.3%	10523	95.0%
三字漢語動名詞	134	7.7%	313	2.8%
四字漢語動名詞	123	7.0%	163	1.5%
その他	53	3.0%	75	0.7%
合計	1750	100.0%	11074	100.0%

(小林 2004: 24)

[表 1 と表 2 は (張 2014: 9-10) により引用]

a.同義語・類義語による一義形成

階級 学校 結果 思想 精神 責任 援助 関係
研究 生産 努力 貿易 経済 国家 人民 世界
程度 平和 理由 会議 解決 活動 戦争

b.類義語・対義語の並列対照

公私 黒白 山河 晴雨 前後 大小 男女 東西
貧富 夫妻 利害(比較対照)
鳥獣 犬馬 風雨 算数 図工 京阪 米英 (累加列举)

B.主述関係

(前部分が後部分に対する主語になるような関係)
地震 日没 氷解 雲集 国营 市立 事変

C.補足関係

(前部分が後部分に対する客語になる関係)
文選 水防 水浴 足温(器) 靈安(室) 液浸(標本)

D.修飾関係

(前部分が後部分の意味を修飾する関係)
英語 海軍 家族 校務 文学 財政 税金 (後が前に所属)
映画 議会 作品 住宅 笑声 食糧 製品 捕虜
(前が後の動作・作用)
悪法 安価 偉業 高級 古代 少年 新聞 青年大戦
多数 (前が後の性格・情態)
外国 大衆 諸国 全体 現状 総論 直接 必要 最後
唯一 独占 予定 (前が後の範囲・量・程度)

E.補助関係

(後部分が前部分を形式的に補助する関係)
椅子 様子 女子 国内 個人 婦人 端的 当然 整然
強化

F.客体関係

(後部分が前部分に対する客語となる関係)
愛国 企業 休戦 講和 殺人 専門 同時 犯罪
被害 協力 結婚 成功 (「を」で結ばれる関係)
帰国 就職 集中 出席 徹底 統一(「に」で結ばれる関係)

(齋賀 1957: 37-42)

齋賀 (1957) は、二字漢語を構成する二つの要素の意味関係で具体的な分類を行った。しかし、その意味関係は必ず明確的なものとは限らない。例えば、齋賀 (1957) は「集中」を「ニ格」で結ばれた「客体関係」と解釈したが、「中に集まる」と認識されることが適当か否かは疑問である。また、「ヲ格」で結ばれた「客体関係」と分析した「企業」も、「業を企む」との解釈も疑問に思われる。

日向 (1985) は、二字漢語動詞に注目し、「動詞性の訓を持つ漢字」と「一字で漢語サ変動詞となる漢字」を含めた 835 字に限定し、これらの漢字が構成する漢語サ変動詞を対象としている。二字漢語サ変動詞を構造上から、並立関係、修飾関係、客体関係、実質関係の 4 種類に分ける。

(2) A.並立関係

同意の漢字の結合: 稼働 添加 繁茂 崇拜

反意の漢字の結合: 屈伸 開閉 出没 売買

B.修飾関係

形容詞や副詞性の漢字が添加した場合: 安眠 静座 大破 激変
再建 直送

名詞性の漢字が添加した場合: 玉碎 山積 寸評 雄飛 盲従
横行 林立 点在 鯨飲

動詞性の漢字が添加した場合: 群棲 列举 誤認 傾聴 凍死
競売 暴飲 坐食 黙認 乱入 改築

C.客体関係

客体部が「を格」をとる場合: 読書 抜歯 加熱 失望 注水
送金

客体部が「に格」をとる場合: 帰国 乗船 赴任

客体部が「から格」をとる場合: 落馬

D.実質関係: 強化 鈍化 酸化 退化

(日向 1985: 162-163)

日向 (1985) は、二字漢語サ変動詞を構成する漢字の意味を中心に、そ

の意味関係について有力な分類を示した。最初から考察対象の範囲を設定しているため、その意味関係に関する分類は網羅的とはいえない。

野村 (1999) は、漢字 1 字で表記される最初の意味を持つ単位を「字音形態素」と呼び、さらに「語基」と「接辞」の 2 種類に分けている。語基の品詞性を、事物類(N)、動態類(V)、様相類(A)、副用類(M)の 4 種類に分けている。

(3) A.語基

事物類(N): 叙述の対象となる物や事を表す。

例: 鉄、国、水、土、道、心、品

動態類(V): 事物の動作・作用を表す。

例: 見、増、置、感、立、発

様相類(A): 事物や精神の性質・状態を表す。

例: 新、軽、大、高、逆

副用類(M): 動作や状態の程度・内容を限定・修飾する。

例: 特、再、絶、予、必

B.接辞(s): 語基について形式的な意味を添える。

例: 不、御、的、性、化、風

(野村 1999)

また、野村 (1999) は、各構成要素の関係を、補足関係(+)、修飾関係(>)、並列関係(・)、対立関係(-)、反復関係(=)の 5 つのパターンに分類する。各級の組み合わせにより、二字漢語サ変動詞が組立てられるとのことである。その結果、以下のように、計 22 種類の漢語サ変動詞が整理されている。

(4) 「N+V」: 気絶、骨折、人選、文通、墓参、洋行

「V+N」: 握手、開花、帰宅、就職、脱帽、募金

「A+N」: 多言、多作、貧血、無視、無心、無理

「N>V」: 音読、兄事、山積、水泳、冬眠、目測

「V>V」: 愛用、滑降、誤診、試食、凍死、立食

「A>V」: 安眠、快勝、軽視、激怒、多発、冷遇

「M>V」：一掃、共感、再演、専売、必着、予防
 「V・V」：引退、救助、思考、睡眠、跳躍、模倣
 「V-V」：開閉、屈伸、呼吸、出没、継続、明滅
 「V=V」：云々、転々
 「N>N」：金策、原因、手術、他界、病気、礼装
 「V>N」：起因、残業、湿布、乗務、炊事、慢心
 「A>N」：紅葉、新作、粗食、大病、漫談、凡打
 「N・N」：影響、葛藤、形容、伯仲、矛盾、網羅
 「N-N」：左右、始末、上下、先後、前後
 「A=A」：清々
 「sV」：殺到、所期、所有、否認、不参、不足
 「sA」：不精
 「Ns」：液化、酸化、電化、美化、風化、緑化
 「Vs」：欠如、消化、分化、崩御、黙殺、冷却
 「As」：悪化、強化、激化、深化、軟化、忙殺
 「その他」：運休、軍縮、操短、中退、定昇、配転

(野村 1999)

日向 (1985) に比べて、野村 (1999) の分類は、漢語サ変動詞の語構成の全貌を精細化したものといえる。ただし、「拡大」「縮小」のような「動詞的要素+形容詞的要素」類の二字漢語動詞は、日向 (1985) にも、野村 (1999) にも触れていない²。

小林 (2004) は、「サ変になり得る名詞」を「動名詞」³と呼び、二字漢語動名詞に限らず、三字漢語動名詞と四字漢語動名詞も視野に入れて、漢語動名詞について全面的な考察を行っている。

まず、二字漢語動名詞に関して、以下の4つのタイプに分類する。

² 張 (2014: 39) は、形容詞的要素が動詞的要素の後に来る「縮小」「減少」「増強」などの動詞を「動補関係」として扱う。

³ 「動名詞」の特徴について、小林 (2004) は主に、影山 (1993) を参照にしている。

- (5) A. VN⁴-N タイプ二字漢語動名詞
 (動詞的要素と名詞的要素で構成される二字漢語動名詞)
 読書、投票、観戦、開封……
- B. VN-VN タイプ二字漢語動名詞
 (動詞的要素と動詞的要素で構成される二字漢語動名詞)
 使用、殴殺、摘出、採用……
- C. ADJ-VN タイプ二字漢語動名詞
 (付加詞的要素と動詞的要素で構成される二字漢語動名詞)
 銃殺、病死、完訳、密売……
- D. 構成要素が抽出できない二字漢語動名詞
 挨拶、支配、勉強、料理……

(小林 2004: 87-88)

小林 (2004) による分類と野村 (1999) による分類との対応関係は次のようになる。

(6) 小林 (2004) と野村 (1999) の分類の対応関係

小林 (2004) による分類	野村 (1999) による分類
VN-N タイプ二字漢語動名詞	V+N, N+V
VN-VN タイプ二字漢語動名詞	V>V, V・V, V-V
ADJ-VN タイプ二字漢語動名詞	N>V, A>V, M>V

(小林 2004: 90-91)

小林 (2004) の分類は、野村 (1999) より欠けているもの (「N>N」「V>N」など) が見られる。小林 (2004) は、「音訓両用の漢字」や「字音専用で自立する一字漢字」⁵で構成要素が表記され、二字漢語動名詞の意味から

⁴ 小林 (2004) は、漢語動詞を構成する「動詞的要素」を「VN」と表記している。しかし、影山 (1993) といった研究では、「VN」は「動名詞 (verbal noun)」の表記として使われるのが一般的である。

⁵ 「音訓両用の漢字」や「字音専用で自立する一字漢字」について、小林 (2004) は主に森岡 (1994) を参照している。森岡 (1994) は、「音訓両用の漢字」の例として、(1)のような

分析意識が大きく離れていないもの」(p.86) を研究対象とするため、野村(1999) より欠けているものの多くは、「構成要素が抽出できない二字漢語動名詞に分類する」(p.91) とのことである。

また、小林(2004) は、構成要素の結びつき方に基づいて、三字漢語動名詞を以下の3種類に分類する。

(7) A. 「1+2」タイプ⁶

(二字漢語に接頭辞が付加されたもの)

猛反対、大渋滞、急上昇、……

B. 「2+1」タイプ

(二字漢語に接尾辞が付加されたもの)

映画化、英雄視、事故死、……

C. そのほか

ものを、

- (1) 山、川、草、木、日、月、星、空、雲、人、牛、馬、虫、魚、花、葉、枝、根、目、口、耳、鼻、手、足、家、壁、杖、町、村、里、心、右、左、上、下、前、後、行、帰、動、歩、走、飛、追、越、去、逃、投、引、押、話、聞、歌、書、読、見、考、思、笑、泣、鳴、着、脱、切、釣、洗、止、休、過、起、寝、居、射、鑄、入、参、悪、安、遠、近、高、低、深、浅、太、細、長、短、大、小、甘、辛、新、古、寒、暑、悲、楽、美、汚、久、珍、激、厳、忙

「字音専用で自立する一字漢字」の例として(2)のようなものを挙げている。

- (2) 案、胃、液、院、王、億、恩、客、気、菊、京、句、区、刑、芸、劇、券、碁、師、策、詩、式、軸、銃、順、税、席、線、僧、層、賊、隊、題、段、茶、党、堂、徳、毒、脳、肺、罰、票、福、棒、魔、脈、紋、役、陸、獵、湾

(小林 2004: 132)

⁶ 小林(2004) は、接頭辞の意味により、「1+2」タイプの三字漢語動名詞を以下の4種類に分ける。

- (3) <様 態> 猛反対、密入国、逆輸出、……
<程度・数量> 大渋滞、最接近、総辞職、……
<時間・局面> 急上昇、急発進、……
<頻 度> 初来日、再上陸、再調査、……

(小林 2004: 138)

ただし、「2+1」タイプについて、接尾辞「～化」「～視」「～死」を取り上げているが、意味による分類が見られない。

(二字漢語と二字漢語を圧縮して三字漢語にしたもの)
許認可、出入国、全半壊、……

(小林 2004: 137-139)

最後に、四字漢語動名詞について、構成要素の結びつき方に基づき、(8)のように、「1+3」タイプ、「2+2」タイプ、「3+1」タイプと四字熟語類(その他)との4種類に分類する。そのうち、「2+2」タイプを、構成要素により、さらに「N-VN」「VN-VN」「ADJ-VN」との三つの下位分類がある。

(8) A. 「1+3」タイプ 再活性化

B. 「2+2」タイプ

N-VN タイプ四字漢語動名詞

(名詞的要素と動詞的要素で構成される四字漢語動名詞)

法律改正、意識改革、地盤沈下、……

VN-VN タイプ四字漢語動名詞

(動詞的要素と動詞的要素で構成される四字漢語動名詞)

通勤通学、対面販売、受注生産、……

ADJ-VN タイプ四字漢語動名詞⁷

(付加詞的要素と動詞的要素で構成される四字漢語動名詞)

空中爆発、同時決定、相互訪問、……

C. 「3+1」タイプ 大規模化、高性能化、最有力視、…

D. その他 換骨奪胎、牽強付会、彫心鏤骨、……

(小林 2004: 205-206)

⁷ ADJ-VN タイプの四字漢語動名詞について、付加詞的要素(ADJ)の意味により、小林(2004) は以下のように分類する。

- (4) <場 所> 空中爆発、校門指導、体外受精、……
<時間・局面> 同時決定、永久保存、事前協議、……
<程度・数量> 完全撤退、全面禁止、大量生産、……
<様 態> 高速回転、集団帰国、相互訪問、……
<手 段> 手動着陸、私費留学、武力弾圧、……
<評 価> 公式訪問、不法投棄、不正出張、……

(小林 2004: 207)

小林 (2004) は、斎賀 (1957)、日向 (1985)、野村 (1999) と同様に、漢語動詞を構成する各要素の意味関係で分類した。しかし、小林 (2004) は、各要素の明確な意味関係を重視し、「二字漢語動名詞の意味から大きくかけ離れていない」(p.87) ものに注目するところは特別である。

張志剛 (2014) は、二字漢語動詞の自・他動性と漢語動詞の構成要素の意味との関係を記述することを目標とする。その記述の前提となるのは二字漢語動詞の内部構造による分類である。張 (2014) は、野村 (1999) の分類に従い、構成要素の品詞性を、事物類(N)、動態類(V)、様相類(A)、副用類(M)と接辞(s)の五種類に分けて、各構成要素間の関係を、補足関係(+)、修飾関係(>)、並列関係(・)、対立関係(-)、反復関係(=)の五種類を取り上げ、二字漢語動詞を以下のように分けている⁸。

- (9) A. AV 型: 様相類(A)と動態類(V)で構成されるもの。
 - a.修飾型: 形容詞的要素と動詞的要素が修飾関係になる場合。「A>V」
軽視、激怒、新築…
 - b.動補型: 形容詞的要素と動詞的要素が動補関係になる場合。
 - b1.形容詞的要素後置型: 「V<<A」
補強、肥大、改正…
 - b2.形容詞的要素前置型: 「A>>V」
軽減、低減…
- B. VN 型: 動態類(V)と事物類(N)で構成されるもの。
 - a.補足型: 動詞的要素と名詞的要素が格関係を持つ。
 - a1.動詞的要素が後置する型。「N+V」
尾行、骨折、人選…
 - a2.動詞的要素が前置する型。「V+N」

⁸ (9)の内容は、張 (2014) により整理されるものである。張 (2014) は、漢語動詞を構成する要素と二字漢語動詞の自他の関係を考察するものである。特に、二字漢語を構成する動詞的要素と動詞全体の自他との関係に注目するため、漢語動詞を構成する動詞的要素を自動詞(Vi)・他動詞(Vt)に分けている。

- 帰国、受賞、開封…
- b.修飾型: 動詞的要素と名詞的要素が格関係を持たない。
- b1.名詞的要素が動詞的要素を修飾する型。「N>V」
水死、銃殺、山積…
- b2.動詞的要素が名詞的要素を修飾する型。「V>N」
放浪、注文、起因…
- C. VV 型: 動態類(V)と動態類(V)で構成されるもの。
絞殺、焼死、訪問、開閉…
- D.その他: 以上の3種類以外のもの。
- d1.副用類(M)と動態類(V)で構成されるもの。
強行、共感、再会、先行、直面…
- d2.接辞(s)を含むもの。
退化、強化、軟化、緑化…
- d3.事物類(N)と事物類(N)で構成されるもの。
後悔、物色、世話、意味、網羅、左右…
- d4.様相類(A)と様相類(A)で構成されるもの。
平均、清浄、喧嘩、貧乏…
- d5.事物類(N)と様相類(A)で構成されるもの。
細工、同意、正装、便秘…

(張 2014: 42.76.97.119)

張 (2014) は、二字漢語動詞を構成する各要素の性質、及び各要素の意味関係について、主に野村 (1999) に従っている。「肥大」「改正」のような「形容詞的要素後置型」の「動補型」は野村 (1999) に対する補足だと思われる。

以上は、漢語サ変動詞の内部構造に関する先行研究の流れをまとめたものである。そのうち、野村 (1999) は、二字漢語サ変動詞の内部構造に関する最も詳しい分類といえる。その後の研究は野村 (1999) に従うものが多い。小林 (2004) は、二字漢語動詞に限らず、三字漢語動名詞と四字漢語動名詞も視野に入れて、扱う対象が最も広い研究と思われる。これらの考察は漢語動詞を構成する各要素の意味関係を解析するのに重要な意義がある。しかし、多くの研究にも触れたように、各要素の間に明確な意

味関係を持たない場合も存在する。

本研究は、以下の理由で、二字漢語サ変動詞の内部構造について深く検討しない。

第一、二字漢語動詞の各要素の品詞性、及び各要素の統語パターンについて、すでに 20 種類以上の考察結果に至っている。二字漢語サ変動詞の内部構成には、さらに考察する余地がないと考えられる。

第二、先行研究にも指摘されているように、二字漢語の内部構成や意味関係を分析するにあたって、意味関係が明白でない動詞は避けられない問題である。

例えば、斎賀 (1957) は、以下のように述べている。

- (10) 問題は、現代における一般人の語意識の中に、右のような二単位としての結合関係がどの程度生きているかという点である。これらの語は常に漢字二字で表記されるから、視覚的には二つの単位の結合であることが意識できるかもしれない。しかし、その限りでは厳密な意味での「二単位間の結合」を意識したことにはならない。個々の漢字ないし個々の字音がそれぞれいかなる意味を有する単位であり、かつその両単位がいかなる意味的關係によって結合するかという分析意識が無理なく働いてこそ、その結合が初めて一般に意識されたことになり、ひいてはそういう語構成法が現在もなお生産的であると言えることになるはずである。ところが、右に掲げたような二単位間の分析は、相当に発生的観点を交えてするのでなければ不可能であって、その点で現代人の語構成意識とははるかに隔たったものと言っている。このように考えてくると、いわゆる二字の漢語の大多数のものは、現代に生きる語構成要素としては単一のものとして取扱って差し支えないであろう。

(斎賀 1957: 42-43)

斎賀 (1957) は、二字漢語の各要素を独立したものとして、両単位の意味関係を分析したものの、各要素を独立したものとはせず、二字漢語を全体的に「単一のもの」と扱うことも認めると示している。

野村 (1988) は、同じことを述べている。

- (11) 現代語の二字漢語を分析するには、さまざまな困難が予想される。その最大のものは、現代語では、二字漢語が複合語であるという語構成意識が、ほとんどうすれてしまったことである⁹。

(野村 1988: 45)

西尾 (1988) は、同じように、「二字漢語が単純語として認識しやすい」ことを述べている。

- (12) 漢字は元来は一字が一語を表すものであるから、二字漢語は二語の複合という性格をもちやすそうにも思われる。しかし、現代日本語における漢字の一つ一つは独立の語には相当しないものが多い。構成要素である各々の字音は、造語成分として新たな語の形成にあずかるものの、日本語としては独立的な要素ではないものが多い。したがって、二字漢語の多くは、現代語では単純語的なものとして意識されやすい傾向をもっている。

(西尾 1988: 144)

そのほか、小林 (2004; 2016) は、西尾 (1988) の論述を引用し、共時論的な立場から二字漢語動詞を分析する際に、その要素の意味がはっきりしたもの限定したほうがいいということを主張している。なお、張 (2014) は、「案内」、「我慢」、「工夫」、「電話」、「熱中」、「手術」といった

⁹ 二字漢語分析の難点について、野村 (1988) は、形態の面と意味の面から論述している。形態の面では、「スルをともなってサ変動詞を構成したり、いわゆる形容動詞の語感となったりするほか、文の成分となったり、他の言語成分と結合したりする点で、二字漢語は、単純語とほとんどかわりがない」という。意味の面では、「犯罪を犯す」「旅行に行く」「従来から」などのいいかたが、なんのためらいもなく、おこなわれるようになっている。「討論」と「討議」のような類義語で、多少のニュアンスの差があるとしても、そのちがいが語構成上の問題だと意識するひとは、ほとんどいない」とのことである。

(野村 1988: 45)

各要素を分類できない語彙が実際に多く存在することを指摘した。

先行研究からは、二字漢語動詞の語構成や内部構造をめぐる分類はすでに詳細な結果に至っている。同時に、そのような分析意識は現代日本人の語構成意識と合わない可能性があることが分かる。したがって、本研究は、二字漢語の内部構成に関して、さらなる考察をせずに、先行研究を概観することにとどめる。

3. 漢語サ変動詞の自他に関する研究

この節では、日本語における漢語動詞の自他をめぐる主要な研究を概観する。まず、日本語において、自動詞と他動詞を判定する方法に関する諸説をまとめる。

3.1 動詞の自他判定に関する研究

日本語において、動詞の自他の区別が存在するか否かについて、長い議論が続いている。ここでは、野村 (1982) が描き出した日本語の動詞の自他をめぐる諸説を概観する¹⁰。

まず、日本語動詞の自他をめぐる長い議論の中に、否定的な観点を持つ代表として山田孝雄氏が挙げられる。野村 (1982) は、山田氏¹¹の観点を以下のようにまとめている。

- (13) 第一に、語彙・形態的に自他が必ずしも一定の規則性を伴って対応しないことを取り上げる。「おもふに舊来の自他論者の弊の第一は自他を必対偶あるべきものとせることなり。」次に山田は、助詞の「を」が必ずしも他動詞を定義する標準とはなり得ないことを指摘する。…(中略)…さらに、構文論的観点から、受身への転換の可否が取り上げられる。山田によれば、英文典において *passive voice* への転換の成否をもって、自他の「分積の原理」となり得るが、日本語では「所謂自動詞にも受身の態

¹⁰ 野村剛史 (1982)「自動・他動詞・受身動詞について」、須賀一好・早津恵美子 (1995) に再収録、pp.137-150、頁数は須賀・早津 (1995) による。

¹¹ 山田孝雄 (1936)『日本文法学概論』宝文館

は成立する」ので、「この自他と働き掛受身の転換との間に文法上の関係ありやと見るに更にその事なし。」として、この方法も退けられる。…(中略)…「かくてその受身と働き掛との対比の有無を以て自他を区別せむとしてもわれには所謂自動詞にして受身の態をなすことあり。又所謂他動詞にして受身をなさぬことありて、その受身の主格も亦他動詞と必然の関係なきこと明かなりとす。」と結論される。…(中略)…結局、形態・構文・意味等の面から、「動詞の自他の研究といふことは……文法上殆ど一の規律も立てられず、又何等の必要もなき事の如くに見ゆるに至れり。」という断が下される。

(野村 1982: 137-138)

次に、野村 (1982) は、自他の分別に折衷的な観点をもつ時枝 (1950) の論述を取り上げている。

- (14) 国語学者、国語辞典編者の多くは、自他の分別に対して容認あるいは肯定とも否定とも判断できかねる折衷的な発言を行っている。例えば、時枝誠記。「日本語では、客語 (或は目的語) object を表示する記号が無いために、客語の必要の有無といふことで、本来的に動詞については、自動・他動を決定することが出来ない。ただ意味の上から、或は接尾語によって、動詞の対立が考へられる場合、相互に一方を自動詞といひ、他を他動詞といふことがある。」

(野村 1982: 138)

最後に、日本語における動詞の自他を重視する説として、野村 (1982) は、「「を」格との結び付き」、「自他の対応」と「受身への変換」という三つの異なる局面を重視する説と取り上げている。代表的な研究として、松下 (1928)、金田 (1965)、三上 (1853)¹² が挙げられている。

¹² 松下大三郎 (1928) 『改選標準日本語文法』 中文館

金田一春彦 (1965) 「動詞」『続日本文法講座』 第1巻 明治書院

(15) 松下の説は結果的に見れば単純明解で、「を」格を取る動詞はすべて他動詞、それ以外はすべて自動詞としてしまうのである。

「動詞の自他動性の区別を簡単に説明すれば、他動性動詞は他物を自己の作用の中へ入れて自己の作用の一材料にする作用を表す動詞で、自動性はそうでない動詞である。……他動詞性動詞が自己の動作の材料にする処の事物は「○○を」に由つて表される。」そしてこの「○○を」を解して次の四義を認める処に、松下説の特徴がある。「他動詞には生産、保有、使用、処置の四種がある。手紙を書く……生産 子を持つ……保有 山に登る、橋を渡る、国を去る、年を経……使用 考えを書く……処置

(……中略……)

金田一春彦は、次のように述べている。「「並ブ」対「並ベル」、「ハジマル」対「ハジメル」のような、明瞭な語形の対立の例があることを考えると、日本語にも自動詞・他動詞の区別を考えた方が好都合と思われる。また、窓ガ明ケテアル。窓ガ明イテイル。のような二つの言い方の説明にも、自動詞・他動詞の別に言及しなければならない。」

(……中略……)

三上は、自他分別無用論に対して次の疑問を提出する。「一、自動詞にも成立つ受身は他動詞に成立つ受身と同じ性質のものか否か。二、その種の受身がすべての自動詞を通じて成立つか否か。……結論をさきに言えば、第一、第二問とも答は「否」である。」

(……中略……)

以上、全体を通して言えることは、現在も「を」格の有無によって動詞の自他を弁別しようとする傾向が根強いこと。それ故に、通過点や出発点を表す「～を」が問題視され、この種の「～を」は、例外的に自動詞と共起するものと認めること。なぜ動詞の自他を区別するかと言え、恐らく意味形態的に対応する自他動詞の説明に好都合であることをその理由とするようだ。

(野村 1982: 139-141)

以上は、野村 (1982) による日本語における動詞の自他をめぐる諸説の解説である。形態的な対応関係が見られる多数の動詞には、自他を弁別することには大きな価値のあると思われる。

本研究は、二字漢語サ変動詞を対象にし、特に自動詞用法と他動詞用法を持つ「自他両用」の漢語サ変動詞に注目する。したがって、本稿は野村 (1982) の立場に従い、「ヲ」格は他動詞であるか否かを判断する重要な基準の一つとして、通過点や出発点などの移動を表す「ヲ格」は例外とする。

3.2 動詞の自他対応に関する研究

この節では、日本語動詞の自他対応¹³に関する研究を概観する。最初に動詞の自他対応に厳密な定義を与えたのは、奥津 (1967) である。

奥津 (1967) は、構文的な関係に注目し、自他対応に厳密な定義を以下のように規定している。

(16) 自・他対応とは、次の二文

(i) N_1 ga N_2 o [+V, + Transitive, X, Y]

(ii) N_2 ga [+V, - Transitive, X', Y']

において、 $Y=Y'$ なる時、[+V, + Transitive, X, Y] [+V, - Transitive, X', Y'] で表される二動詞間の関係を言う。(但し X, X' は自・他の対立に伴って必然的に変化する主語、目的語に関する特徴、例えば主語や目的語が生物であるか無生物であるか、など。)

(奥津 1967: 50)

¹³ 劉劍 (2013: 01) は、「自他対応」と「自他交替」の区別について、以下のようにを述べている。

- (5) 日本語には、同一の語根のもとに、さまざまな語尾変化が付いて、動詞が形成されるシステムが存在する。このような同一の語根のもとに形成された自動詞と他動詞の関係を取り扱う先行研究は、大きく二つのパターンに分けられる。一つのパターンは日本語学の伝統的な自他の捉え方に即した「自他対応」と呼ばれるものであり、もう一つのパターンは西洋流の自他交替(transitivity-alternation)という観点の影響を受けたものである。前者は主に形態を中心としており、後者は主に意味を中心としている。

佐藤 (1994; 2005) は、奥津 (1967) といった研究の基本的な枠組みに基づき、自他対応の定義を、(17)に示すように、意味、形態、統語という三つの条件から厳密に規定している。(18)はその例である。

(17) 自他対応の定義:

- a. 意味的条件: 自動詞文と他動詞文が同一の事態の側面を叙述していると解釈可能である。
- b. 形態的条件: 自動詞と他動詞が同一の語根を共有している。
- c. 統語的条件: 自動詞文のガ格と他動詞文のヲ格が同一の名詞句で対応している。

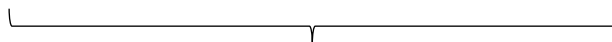
- (18) a. 鉛筆が 折れる。
 b. 太郎が 鉛筆を 折る。

(佐藤 2005:170)

本研究は、日本語における動詞の自他対応の定義を、先行研究に従う。日本語の和語動詞には形態的な対応関係が存在するため、動詞の自他対応関係をめぐる研究は、和語動詞に注目するものが多い。西尾 (1954)、奥津 (1967)、早津 (1989) が挙げられる。

西尾 (1954) は、<-eru>と<-aru>型の動詞に注目し、以下のような自・他動詞のペアを挙げて、動態的な立場から<-eru>型の他動詞と<-aru>型の自動詞との派生関係を考察した。その結果、「受かる」のような自動詞は、「受ける」のような他動詞から派生されたものだと主張している。

- | | |
|---------------|------------|
| (19) あげる: あがる | かける: かかる |
| かえる: かわる | かさねる: かさなる |
| とめる: とまる | まげる: まがる |
| あてる: あたる | さだめる: さだまる |
| さげる: さがる | etc |



=うける: X

X=うかる

これは一例であるが、これに似た例が他にもある。例えば、

(上段)	(下段)
つとめる(勤)	つとまる
まける(負)	まかる
いいつける(言付)	いいつかる

これらの対立例において、(…中略…) 上段の<-eru>式他動詞の方は奈良時代、おそいものでも平安時代までたやすく文献を遡って多くの例を見出すことができるが、下段の<-aru>式自動詞の方は明治以前に遡ることはできない。明治以後の辞書でものせていないものがある。

(西尾 1954: 106-107)

奥津 (1967) は、動態論的な立場から日本語の自他対応動詞を捉えて、実際に以下の3種の派生関係があると指摘した。

- (20) i (自動詞からの)「他動化」(Transitivization)
- ii (他動詞からの)「自動化」(Intransitivization)
- iii (自・他への)「両極化」(Polarization)

例えば、

- i 上にあげた「乾ク→乾カス」は春庭のいわゆる「佐行にうつりてわかるる」他動化であるし、
- ii 西尾論文の中心をなす「マゲル→マガル」などは、他から自への自動化であるし、
- iii 「帰ル→帰ス」などは春庭の言う「佐行より羅行にうつりたるにもあらずまた羅行より佐行に移りたるにもあらず¹⁴」自・他への両極化の例である。

(奥津 1967: 51)

早津 (1989) は、対応する自動詞があるか否かによって、日本語の他動

¹⁴ 本居春庭『詞の通路』本居宣長全集 第11巻、p.62

詞を「有対他動詞」と「無対他動詞」に分ける。例えば、「倒す」と「曲げる」は有対他動詞であり、「たたく」と「読む」は無対他動詞である。

- | | |
|-----------|--------|
| (21) 木を倒す | 木が倒れる |
| 針金を曲げる | 針金が曲がる |
| 戸をたたく | 戸が× |
| 本を読む | 本が× |

(早津 1989: 231)

早津 (1989) は、有対他動詞の「乾かす」と無対他動詞の「干す」について、以下の考察を行った。

- (22) a. ? 洗濯物を乾かしたがまだ濡れている。
b. 洗濯物を干したがまだ濡れている。

- (23) a. ? 洗濯物を日当たりのいい所に乾かして干した。
b. 洗濯物を日当たりのいい所に干して乾かした。

(早津 1989: 233)

(22)と(23)からは、「乾かす」は「水分が完全になくなる」という動作の結果を含意するが、「干す」は動作の結果まで含意していないことが分かる。したがって、早津 (1989) は、有対他動詞と無対他動詞の意味的な特徴を以下のようにまとめている。

- (24) 有対他動詞には、働きかけの結果の状態に注目する動詞が多い。
無対他動詞には、働きかけの過程の様態に注目する動詞が多い。

(早津 1989: 232)

以上は、自他対応の和語動詞に関する主たる研究を概観した。西尾 (1954) と奥津 (1967) は形態の面から対応関係を持つ自他動詞の派生関係について考察した。早津 (1989) は意味の面から有対動詞と無対動詞の意味特徴の傾向を示した。次の節では漢語動詞の自他に関する研究を概

観する。

3.3 漢語サ変動詞の自他に関する研究

和語動詞に比べて、漢語サ変動詞の自・他動性に関する先行研究は多いとはいえない。そのうち、自動詞と他動詞用法を併せ持つ自他両用の漢語動詞をめぐる議論が主流である。影山 (1996)、金 (2004)、楊 (2007; 2010)、張 (2014) が挙げられる。

影山 (1996) は、日本語における漢語サ変動詞を以下の3種類を取り上げている。

(25) a. 自動詞のみ

事故が発生する、地価が下落する、火薬が爆発する、
水が蒸発する、株価が暴落する、ビルが乱立する。

b. 他動詞のみ

ビルを爆破する、通行人を殺害する、家を新築する、
郊外を緑化する、顔を整形する、主張を正当化する。

c. 自他両用

拡大する、縮小する、変形する、完備する、完成する、
正常化する、回転する、閉店する、展開する、解散する、
実現する、解消する、具体化する。

(影山 1996: 202)

影山 (1996) は「動詞が自動詞として機能するか他動詞として機能するかは、恣意的に決まっているのではなく、意味的な要素によって定められている」と指摘した。また、自他両用の漢語動詞に関しては、「他動詞を基にして、そこから反使役化¹⁵によって自動詞が派生されているものと思

¹⁵ 影山 (1996) は、反使役化を以下のように定式化している。

(6) 概念構造における反使役化(anti-causativization)

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT -z]]]
→[x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT -z]]]

(影山 1996: 145)

われる」(p.203) と主張した。他動詞を基本とする根拠を二つ挙げている。

一つ目は「自他両用動詞が何等かの使役主を含意している」(p.203) ということである。例えば、以下のようなアスペクト的な意味を表す動詞は、「意図的な活動が対象となり、逆に、自然発生の事象はこれらの動詞で描写することができない」(p.203) ということである。

- (26) a. 会議を終了する／会議が終了する
a'. *梅雨を終了する／*梅雨が終了する
b. 操作を継続する／操作が継続する
b'. *伝染病を継続する／*伝染病が継続する

(影山 1996: 203)

二つ目の根拠は、「他動詞用法と自動詞用法では自動詞用法のほうに意味的・認知的制限が観察される」(p.203) ことである。例えば、

- (27) a. ナポレオンがフランス領土を拡大した。
a'. フランス領土が拡大した。
b. コピー機を使って、図面を拡大した。
b'. * (コピー機で)図面が拡大した。

- (28) a. 水を分解すると水素と酸素に分かれる。
a'. 水が水素と酸素に分解した。
b. 時計をばらばらに分解した。
b'.? *時計がばらばらに分解した。

(影山 1996: 203-204)

(27) と (28) からは、自他両用動詞の「拡大する」と「分解する」は自動詞の用法に制限が見られたことは分かる。その制限の由来に関しては、影山 (1996) は「変化対象の自力ないし内在的コントロールが認められる場合だけ自動詞が成り立っている」(p.204) と説明している。

金英淑 (2004; 2006) は、影山 (1996) に反例を出し、自他両用の漢語サ変動詞はすべて自動詞用法に制限があるわけではなく、以下のように、他動詞用法に制限が見られる動詞もあると指摘した。

- (29) A: a. イラクとの国交が回復した。
 b. ヨルダンがイラクとの国交を回復した。
 B: a. 景気が回復した。
 b. *経済学者が景気を回復した。
 C: a. 患者の意識が回復した。
 b. *医者が患者の意識を回復した。

(金 2004: 91-92)

「回復する」は自他両用の漢語動詞であるが、(29B)と(29C)に示すように、他動詞用法に制限がある。金 (2004; 2006) はその制限を「再帰的な関係」で説明している。

- (30) a. 回復 喪失 一変 紛失 全焼 集中 発症 解散 中断
 停止 結束 完了 終了 復活
 b. a の他動詞用法が可能な場合、主語と目的語の間には再帰性、再帰的な関係が存在する。また、そのような関係が存在しない場合、他動詞文は成立しない。
 c. 再帰性、再帰的な関係とは、行為、あるいは変化の結果を被るイベントの範囲が主語に限られる性質であり、具体的には、目的語が主語の身体部位や所有物、組織における上下関係のようなモノ名詞の場合、あるいは主語が携わるイベントのようなコト名詞の場合である。
 d. a の「VN する」は自動詞用法に比べ他動詞用法に相対的な制限があり、L&RH¹⁶の派生の説明にしたがうと、自動詞用法を

¹⁶ Levin & Rappaport Hovav (1995) は、自他交替の意味構造を(7)のように表している。

(7) [x DO (something) y] CAUSE [y BECOME [BE AT z]]

金 (2006) は、(7)の関係に基づいて、自他交替の両動詞間には二つの派生の方向が考えられると指摘した。一つは「自動詞が表す状態変化のイベントに行為のイベントが結合して他動詞構造を派生させるという自動詞から他動詞への派生」、もう一つは「他動詞のイベントから行為の部分を削除することによって自動詞が派生するという他動詞から自動詞への派生」(p.19-20) である。

もとにして他動詞用法を派生させると捉えることができる。

(金 2006:56)

金 (2004; 2006) は、他動詞用法に制限が見られる漢語サ変動詞は自動詞から他動詞への派生方向を示していると指摘した。

楊高郎 (2007) は、金 (2004; 2006) が取り上げている「再帰的な関係」という概念について、その基準が曖昧であるという問題点を示し、以下のような反例を挙げている。

(31) A: a.収入が半減した。

b. *太郎が収入を半減した。(太郎の収入)

B: a.国民の要求が実現した。

b.政府が (税率の引き下げという) 国民の要求を実現した。

(#政府の要求)

(楊 2007: 70-71)

(31A)では「太郎の収入」という「再帰的な関係」が成立するのにも関わらず、他動詞文が非文となる。(31B)では、「#政府の要求」という「再帰的な関係」が存在しないにも関わらず他動詞文が成立する。しかし、金 (2004; 2006) は、他動詞用法に制限が見られる動詞を扱ったが、「実現する」は「他動詞用法に制限がある」という条件に合わない語である。ただし、問題意識として「再帰的な関係」のみで他動詞文に見られる制限を解釈するのに足りない部分があることは正確な指摘と思われる。

楊 (2007) は、漢語動詞の自他用法に見られる制限について深く考察せず、影山 (1996) 及び金 (2004:2006) の研究に基づき、自他両用動詞を以下の3種に分類した。分類は自動詞用法、他動詞用法と動詞の使役用法と受身用法との関係を主な基準とする。詳しくは後述する。

(32) a. 自動詞から他動詞が派生される動詞

「回復する」「半減する」「増加する」

b. 他動詞から自動詞が派生される動詞

- 「解決する」「拡大する」「分解する」
 c.自動詞と他動詞が同等に働く動詞
 「停止する」「中断する」

(楊 2007: 73)

張志剛 (2014) は、漢語動詞の自他性の規則を記述するために、「AV 型」、「VN 型」、「VV 型」という 3 種類の漢語動詞を扱い、漢語動詞を構成する内部要素と漢語動詞全体の自他との関係について考察してみた。各類の自他を決める要因を次の表に示す¹⁷。

(33) 張 (2014) による二字漢語動詞の自他を決める要素¹⁸

AV 型 漢語動 詞	修飾型 (A>V)	① 動詞的要素の自他 (カバー率 75%) ② 動詞的要素が自動詞である場合、AV 型漢語動詞が特定の分野に限定して使われる際、または動詞的要素に意味を付加する際に、AV 型漢語動詞が自動詞になる (カバー率 67%) ③ 動詞的要素が自他両用動詞である場合、形容詞的要素が「激」を含む際に AV 型漢語動詞が自動詞になる (カバー率 12%)
	動補型 (V<<A)	① 動詞的要素の自他 (カバー率 60%) ② 動詞的要素と形容詞的要素との関係 (カバー率 100%)

¹⁷ (33)は張 (2014) の内容によりまとめられたものである。詳しくは張 (2014: 171-178) を参照されたい。

¹⁸ 張 (2014) では、各要因の順によりカバー率を計算されている。例えば、まず、要因①でカバーできる語(例内の語)の語数及びカバー率を計算する。次は、要因①に含まない語(例外の語)を要因②でカバーできる語数及びカバー率を計算する。以下も同様である。

VN 型 漢語動 詞	NV 型 VN 型	① 動詞的要素と名詞的要素の格関係:ヲ格、ニ格 (カバー率 93%)、ガ格 (カバー率 100%) ② 名詞的要素の意味特徴: 0 項名詞か (カバー率 62%)1 項名詞か (カバー率 53%) ③ 1 項名詞の項の取り方 (カバー率 85%) ④ 0 項名詞の意味分類と動詞的要素の格体制 (カバー率 63%)
VV 型漢語動詞		① 後項要素の自他 (カバー率 90%) ② 「他動性調和の原理」 (カバー率 81%) ③ 主要部位置 ④ 特定の形態素を持つ

張 (2014) は、読売新聞一年分の全データをコーパスとし、二字漢語動詞の内部構成要素のから漢語動詞の自他との関連を考察した。客観的な研究手段による考察は本研究の最大の特色といえる。しかし、(33)に示した要因とカバー率はあくまでも概率的なもので、漢語動詞の自他性とはどの程度関連性があるかは不明である。

以上は、二字漢語サ変動詞の自他に関する研究をまとめた。影山 (1996)、金 (2004; 2006) と楊 (2007) は、自他両用の漢語動詞の自動詞と他動詞との派生方向を考察したものである。しかし、自動詞と他動詞は、どちらに制限が見られることによってその派生方向を判定することは更なる考える余地があると思われる。張 (2014) は漢語動詞を構成する内部要素と漢語動詞の自他動性との規則性を考察したものである。しかし、その規則性はどの程度の一般性があるのかは不明である。

本研究は、先行研究に基づき、自他両用の漢語サ変動詞の用法を考察する。特に自他両用の漢語動詞の用法に見られる制限について不明なところが多いと思われる。

3.4 漢語動詞の自他とヴォイスに関する研究

自他両用の漢語動詞の自・他動詞の用法とヴォイス用法との関係をめぐる研究は多く見られる。

江口 (1989) は、自動詞用法と他動詞用法を併せ持つ自他両用の漢語サ

変動詞について、「主体そのものに作用を与えて変化をもたらし、又、他の力を經由して他の力が主体に作用して変化を生じさせる事も出来る」という意味特徴を持つと指摘した。また、自他両用の動詞と他動化、受動化との関係について、以下のようにまとめている。

(34) A: 他動化との関係

- (自動詞文)世の中が革新化する→[他動化]世の中を革新化させる
(「他動詞」的意味)
(他動詞文)世の中を革新化する→[他動化]世の中を革新化させる
(「使役」的意味)

B: 受動化との関係

- (自動詞文)世の中が革新化する→[受動化]世の中に革新化される
(「迷惑の受身」)
(他動詞文)世の中を革新化する→[受動化]世の中が革新化される
(「まともな受身」)
(江口 1989: 772.779)

江口 (1989) によれば、「革新化する」は自他両用の動詞であるため、「世の中を革新化させる」という文は「他動詞」的な意味と「使役」的な意味との二義性を持つということである。「世の中(が/に)革新化される」のように、助詞の使い分けによって、自動詞と他動詞の「受動化」には違う意味が生じるとのことである。

金英淑 (2006) は、自他両用の漢語サ変動詞と使役との関係について考察し、以下のような例を挙げている。

(35) A: a.意識が回復した。

b.太郎が意識を回復させた。

B: a.問題が解決した。

b. *太郎が問題を解決させた。<操作使役>

(金 2006: 156)

「回復する」と「解決する」は自他両用の漢語サ変動詞であるが、(35)のように、同じ使役文でも(35A)が成立するが、(35B)が成立しない。その違いを説明するために、金 (2006) は、Shibatani (1976a.b) の使役システム¹⁹を引用して、被使役者の性質の区別を加え、その対応関係を以下のように図示する。

(36)	意味	構造	形態
a.	操作使役	$\left\{ \begin{array}{l} \text{単文構造 [s \quad]} \\ \text{被使役者: 対象} \\ \text{太郎が花瓶を壊した} \end{array} \right\}$	不規則→語彙的使役
b.	直接使役	$\left\{ \begin{array}{l} \text{複文構造 [s [s \quad]]} \\ \text{被使役者: 動作主} \\ \text{太郎が花子を止まらせた} \end{array} \right\}$	させ→統語的使役

(金 2006: 113)

金 (2006) によれば、(35B)における「太郎が問題を解決させた」における「問題」は「対象の意味を表す」ことになり、このような被使役者の性質から、(35B)は「主語「太郎」が「問題が解決する」ことを引き起こす

¹⁹ 金 (2006) は、Shibatani (1976a.b) の使役システムにおける構造、意味、形態との対応関係について、以下の図式で示す。

(8)	意味	構造	形態
a.	操作使役	$\left[\begin{array}{l} \text{単文構造 [s \quad]} \\ \text{太郎が花瓶を壊した} \end{array} \right]$	不規則 語彙的使役
b.	直接使役	$\left[\begin{array}{l} \text{複文構造 [s [s \quad]]} \\ \text{太郎が次郎を止まらせた} \end{array} \right]$	させ 統語的使役

(金 2006: 111)

Shibatani (1976a.b) によれば、操作使役とは「使役者が被使役者に物理的な力を加えて、被使役者の変化をもたらす」(金 2006: 109) との意味で、直接使役とは「使役者が被使役者に指示し、それにしたがって被使役者が行為を行う」(金 2006: 109) との意味である。

そのため、漢語動詞の場合、「する」形も「させ」形も操作使役を表すことが可能な形態である。金 (2006) は、漢語動詞と操作使役、意味と構造と形態との関係を以下のようにまとめた。

(40) a. 意味	構造	形態
操作使役	$\left[\begin{array}{c} \text{被使役者:対象} \end{array} \right]$	す(る)/ させ(る)

- b. 操作使役を表す他動詞が存在する場合、「す」形が付与される。
- c. 操作使役を表す他動詞が存在しない場合、「させ」形が付与される。

(金 2006: 156)

金 (2006) によれば、漢語動詞「解決する」は操作使役を表す他動詞が存在するため、「させ」形が付与されることができないが、「回復する」は操作使役を表す他動詞がないため、「させ」形が付与されたこととこのことである。

- (41) a. 太郎が問題を解決 [する/*させる] <操作使役>
- b. 医者が患者の意識を回復 [*する/させる] <操作使役>

金 (2006) は、「回復する」に「す」形と「させ」形が共存するが、それぞれ異なる意味を表すと指摘した。

- (42) 太郎が意識を回復 [する/させる] ← 形態
- [再帰/操作使役] ← 意味

(金 2006: 157)

楊高郎 (2007) は、典型的な自動詞と典型的な他動詞と対照しながら、違った派生方向を示した自他両用の漢語動詞の「する」形、「させる」形と「される」形の用法を詳しく記述した。各種の用例を以下のようにまと

める²⁰。

(43) 典型的な自動詞

- a. 肉が腐敗した。
- b. *太郎が肉を腐敗した。
- c. 太郎が肉を腐敗させた。
- d. *母が太郎に肉を腐敗させた。
- e. *肉が腐敗された。

「腐敗する」は典型的な自動詞であり、他動詞文(43b)は非文であり、使役形「腐敗させる」(43c)は「操作使役」を表している。受身形「腐敗される」(43e)は非文である。

(44) 典型的な他動詞

- a. *新しい技術が発明した。
- b. 新しい技術が発明された。
- c. 太郎が新しい技術を発明した。
- d. *太郎が新しい技術を発明させた。
- e. 上司が太郎に新しい技術を発明させた。

「発明する」は典型的な他動詞であり、自動詞文(44a)は非文である。受身形「発明される」(44b)は成立する。使役形「発明させる」(44e)は「直接使役」を表している。

(45) 他動詞用法に制限が見られる両用動詞

- A: a. 収入が半減した。
- b. *太郎が収入を半減した。
 - c. 太郎が収入を半減させた。
 - d. *社長が太郎に収入を半減させた。

²⁰ (43)~(47)は、筆者が楊 (2007) における例文を整理したものである。詳しくは楊 (2007) を参照されたい。

e. *収入が半減された。

B: a.原油生産が半減した。

b.アラブ産油国が原油生産を半減した。

c.アラブ産油国が原油生産を半減させた。

d. ??アメリカがアラブ産油国に原油生産を半減させた。

e. *原油生産が半減された。

(45A)と(45B)を対照すれば、漢語動詞「半減する」は他動詞用法に制限があることが分かる。使役形「半減させる」(45Ac)と(45Bc)は「操作使役」を表す。受身形「半減される」(45Ae)と(45Be)は成立しない。

(46) 自動詞用法に制限が見られる両用動詞

A: a.水が水素と酸素に分解した。

b.太郎が水を水素と酸素に分解した。

c. *太郎が水を水素と酸素に分解させた。

d.花子が太郎に水を水素と酸素に分解させた。

e.水が水素と酸素に分解された。

B: a. *パソコンが分解した。

b.太郎がパソコンを分解した。

c. *太郎がパソコンを分解させた。

d.花子が太郎にパソコンを分解させた。

e.パソコンが分解された。

(46A)と(46B)を対照すれば、漢語サ変動詞「分解する」は自動詞用法に制限があることが分かる。それに、使役形「分解させる」(46Ad)と(46Bd)は「直接使役」を表す。受身形「分解される」(46Ae)と(46Be)は成立する。

(47) 自動詞と他動詞が同等に働く両用動詞

a.エンジンが停止した。

b.太郎がエンジンを停止した。

- c. 太郎がエンジンを停止させた。
- d. 花子が太郎にエンジンを停止させた。
- e. エンジンが停止された。

漢語動詞「停止する」は自動詞と他動詞が同等に働く動詞である。使役形「停止させる」(47c)と(47b)は「直接使役」とも「操作使役」とも表す。受身形(47e)「停止される」も成立する。

楊 (2007) は、上記(43)~(47)を(48)のようにまとめている。

(48) 「される」形と「させる」形の対応関係

動 詞	される	自動 詞文	他動 詞文	させる	分 類
腐敗する	×	○	×	○	自動詞
成長する	×	○	×	○	
回復する	×	○	△	○	両用 動詞
半減する	×	○	△	○	
増加する	×	○	△	○	
停止する	○	○	○	○	
中断する	○	○	○	○	
解決する	○	△	○	×	
拡大する	○	△	○	×	他動詞
分解する	○	△	○	×	
発明する	○	×	○	×	
表示する	○	×	○	×	他動詞

(楊 2007: 84)

以上、漢語サ変動詞の自他用法とヴォイス用法に関する研究を概観した。漢語動詞の自他用法、特に自他両用の漢語動詞の自他用法と受身と使役との関係に関する研究が多い。

二字漢語サ変動詞、特に自他両用漢語サ変動詞に関する研究はさまざまな成果が得られている。しかし、データを用いた研究にはまだ大いに進展の余地があると考えられる。本研究は、主に「自他両用」とされる漢語

動詞を収集し、大きなデータベースに基づいて考察を進める。

第二章参考文献

日本語文献

- 江口泰生 (1989) 「漢語サ変動詞の自他性と態」 奥村三雄教授退官記念論文集刊行会(編)『奥村三雄教授退官記念 国語学論集』pp. 765-784、桜楓社
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動詞および両極化転形-自・他動詞の対応」『国語学』70、pp. 46-66、国語学会
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版
- 金英淑 (2004) 「「VN する」の自他交替と再帰性」『日本語文法』4-2、pp. 89-102、日本語文法学会
- 金英淑 (2006) 『「VN する」の自他交替と構造:現代日本語の漢語動詞の分析』筑波大学博士論文
- 金田一春彦 (1965) 「動詞」『続日本文法講座』第1巻 明治書院
- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 小林英樹 (2016) 「書評 張志剛著『現代日本語の二字漢語動詞の自他』」『日本語の研究』12-2、pp. 76-83、日本語学会
- 斎賀秀夫 (1957) 「語構成の特質」(岩淵悦太郎 等編)『現代国語学第2(ことばの体系)』筑摩書房 斎藤倫明・石井正彦(編)(1997)『日本語研究資料集第1期第13巻 語構成』ひつじ書房 に再掲、pp. 24-45
- 佐藤琢三 (1994) 「動詞の自他対応と様態指定」『筑波応用言語学研究』01、pp. 21-32、筑波大学大学院
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
- 須賀一好・早津恵美子(編)(1995)『動詞の自他』ひつじ書房
- 張志剛 (2014) 『現代日本語の二字漢語動詞の自他』くろしお出版
- 西尾寅彌 (1954) 「動詞の派生について-自他対立の型による」『国語学』17、pp. 105-117、国語学会
- 西尾寅彌 (1988) 『現代語彙の研究』明治書院
- 野村雅昭 (1988) 「二字漢語の構造」『日本語学』7-5、pp. 44-55、明治書院
- 野村雅昭 (1999) 「サ変動詞の構造」森田良行教授古稀記念論文集刊行会(編)『日本語研究と日本語教育』pp. 1-23、明治書院

- 野村剛史 (1982)「自動・他動詞・受身動詞について」『日本語・日本文化』
11、須賀一好・早津恵美子(編)(1995)『動詞の自他』ひつじ書房に再掲、
pp.137-150
- 早津恵美子 (1989)「有対他動詞と無対他動詞の違いについて-意味的な特徴を中心に」『言語研究』95、pp.231-256、日本言語学会
- 日向敏彦 (1984)「漢語サ変動詞の構造」『上智大学国文学論集』18、pp.161-179、上智大学国文学会
- 松下大三郎 (1928)『改選標準日本語文法』中文館
- 三上章 (1853)『現代語法序説:シンタクスの試み』刀江書院
- 山田孝雄 (1936)『日本文法学概論』宝文館
- 楊尙郎 (2007)「自動詞・他動詞用法に意味的制限を持つ自他両用動詞について-二字漢語動詞を中心に-」『筑波日本語研究』12、pp. 65-88、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
- 劉劍 (2013)『現代日本語の他動詞文と自動詞文: 事象構造の分析による再整理』筑波大学博士論文

英語文献

- Beth Levin & Malka Rappaport Hovav. 1995 Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface. Cambridge Mass : MIT Press
- Shibatani, Masayoshi ed. 1976a Syntax and semantics 5: Japanese generative grammar. New York: Academic Press.
- Shibatani, Masayoshi ed. 1976b Syntax and semantics 6: The grammar of causative constructions. New York: Academic Press.

第三章 国語辞書において自他両用とされる二字

漢語サ変動詞の用法

0. はじめに

現代日本語の動詞のうち、和語動詞に関しては、「閉じる」「開く」「伴う」¹のような自動詞用法と他動詞用法を併せ持つ、いわゆる自他両用の動詞は少数に限られるが、漢語サ変動詞には自他両用とされる動詞が数多く存在する²。また、「割る・割れる」「始める・始まる」「流す・流れる」のようなかなりの割合の和語動詞については、他動詞と自動詞がペアになっているため、形態が自動詞か他動詞かを判断する手がかりとなりうる。これに対して、二字漢語サ変動詞の場合は、「勉強する」「存在する」「解散する」のように、「VN する」という一つの形態しか持っていないため、形態的な自他判別の手がかりは基本的にない。日本語学習者にとっては、辞書の記述に頼ることが判断のほぼ唯一の手段と考えられる。

本章では、国語辞書において「自他両用」とされる二字漢語サ変動詞の用法について考察する。次節では、動詞の自他対応を判定方法について概観する。

1. 動詞の自他の判定方法

この節は、動詞の自他を判断する方法について考察する。まず、国語辞書に自動詞と他動詞を判断する基準について述べる。

1.1 国語辞書において自他を判断する基準

楊高郎 (2010) は、『岩波国語辞典』、『学研現代新国語辞典』、『明鏡国

¹ 「目 {が/を} 閉じる」「扉 {が/を} 開く」「危険 {が/を} 伴う」。

² 楊高郎 (2010) では、国語辞書において「自他サ変」と分類されている二字漢語動詞の総数を、『岩波国語辞典』:411 語、『学研現代新国語辞典』:587 語、『明鏡国語辞典』:686 語』のように示している。

語辞典』³との3種の国語辞書に注目し、国語辞書において、日本語の動詞の自他の認定について考察した。各種の辞書において自他の判定方法を以下のようにまとめた⁴。

(1) 『岩波国語辞典』：

- a. 他動詞は動作・作用が他に影響を及ぼす意を積極的に表した動詞、自動詞はそういう意を積極的には表していない動詞である。
- b. 他動詞は助詞「を」のついた文節によって修飾され得るが、「山を越える」「空を飛ぶ」「席を立つ」などのように、助詞「を」が動作の規準点・経過点を示すものは自動詞である。

『岩波国語辞典』 pp. 1320-1321

(2) 『学研現代新国語辞典』：

- a. 「水が流れる・授業が終わる」のように<対象>を表す目的語を必要とせず、それ自身の働きとして、充足した意味を表すことのできる動詞が自動詞、「水を流す・授業を終える」のように、ある事物(水・授業)に及んで、それに対する働きかけを表す動詞は他動詞である。
- b. 「走る」「跳ぶ」「生きる」のように本来的な自動詞が、「～を」をとって他動詞に転じる用法もあり(マラソンを走る・三段跳びを跳ぶ・八十年の生涯を生きる)、本来的な他動詞(机を右に寄せる)を、「波が寄せる」のように自動詞として使う例がある(この場合は、「自動詞」「他動詞」を両方とも表示している)。

『学研現代新国語辞典』 pp. 1431-1432

³ 『岩波国語辞典 第六版』岩波書店、『学研現代新国語辞典』学習研究社、『明鏡国語辞典 携帯版』大修館書店

⁴ 国語辞典における動詞の自他の定義は楊(2010: 76-77)から引用したものである。楊(2010)により、『岩波国語辞典』と『学研現代新国語辞典』では「日本語文法における自動詞と他動詞の定義を説明している」が、『明鏡国語辞典』では、「自動詞と他動詞をどのように区別して辞書の項目に表記するのかについて説明している」ということである。

(3) 『明鏡国語辞典』：

- a. 「割れる/割る」のように、形態的な対と「～が/～を」の格の対応があるものは、「～が」を取るものを自動詞、「～を」を取るものを他動詞とする。「夜を明かす」のように、「～を」への働きかけは希薄でも、「夜が明ける」のような対を持つものは他動詞とする。
- b. 対を持たないが、「～を」を取る動詞のうち、「ご飯を食べる」「石を蹴る」のように意味的に「～を」への働きかけの強いものは、他動詞とする。
- c. 「道を歩く」や「幸福な人生を送る」など、移動や時間の経過を表す動詞で、対もなく、「～を」への働きかけも認めにくいものは、自動詞とする。
- d. 「人にかみつく」のように、対象への働きかけはあるが、「～を」にはならないものも、自動詞とする。
- e. 「ダンスを踊る」「マラソンを走る」のように、対がなく、しかも動詞と意味的に近接した名詞（いわゆる「同族目的語」）だけが「～を」で現れるものは、項目の品詞表示では自動詞とするが、語法では他動詞としての用法があることを注記する。
- f. 動詞の連用形について複合動詞を作る用法や補助動詞には、自他の区別をしない。

『明鏡国語辞典』 pp. 1785-1786

そして、三種の国語辞書のうち、自他両用の動詞に言及したのは、『学研現代新国語辞典』のみとのことである。

- (4) 「もちにかびが生ずる (自)」「もちがかびを生ずる (他)」「解決には困難が伴う (自)」「解決は困難を伴う (他)」や、「字が上手に書けますか (自)」「字を上手に書けますか (他)」のように、自他動詞で意味が異ならないと考えられるものもあり、この意味では、日本語の動詞は自他に二分されるとするよりは、自動詞・他動詞・自他動詞に三分されると考えるべきかもしれない。「二〇〇ccの血を輸血する」「本丸を築城する」など、目的語を含み持

つ漢語サ変動詞にとりわけこの傾向が強いようだ。

『学研現代新国語辞典』 p. 1432

以上は、楊 (2010) がまとめた国語辞書における自他を判定する基準である。国語辞書の記述に基づき、3種の辞書に共通する判断基準は以下の2点が挙げられる。

第一、「を格」を取って、ある事物に対する動作や作用の働きかけを表す動詞を他動詞とする。働きかけが認められないものが自動詞とする。

第二、「道を歩く」「空を飛ぶ」のような移動を表す動詞について、『岩波国語辞典』と『明鏡国語辞典』では自動詞とする。『学研現代新国語辞典』は言及していない。

つまり、国語辞書において動詞の自他を判断する時に、形態と意味との二つの面を重視することが分かる。形態の面に関しては、「ヲ」格を取ることができる動詞を他動詞とする。ただし、動作の経過や移動を表す「ヲ」格は例外である。意味の面に関しては、対象への働きを積極的に扱う動詞を他動詞とし、そうでない動詞を自動詞とする。

1.2 動詞の自他対応を判断する基準

和語動詞と異なり、漢語動詞は形態的な対応関係がないため、構文から判断するのは手段の一つである。この節では、日本語における動詞の自他対応の定義に関する研究を概観する。

動詞の自他対応に厳密な定義を与えたのは奥津 (1967) である。奥津 (1967) によれば、自他対応関係を持つ動詞は(5)のような構文的な対応関係を持つ。

(5) 自・他対応とは、次の二文

(i) N_1 ga N_2 o [+V, + Transitive, X, Y]

(ii) N_2 ga [+V, - Transitive, X', Y']

において、 $Y=Y'$ なる時、[+V, + Transitive, X, Y] [+V, - Transitive, X', Y']で表される二動詞間の関係を言う。(但し X、X'は自・他の対立に伴って必然的に変化する主語、目的語に関する特徴、例えば主語や目的語が生物であるか無生物であるか、な

ど。)

(奥津 1967: 50)

佐藤 (2005) は、奥津 (1967) に基づき、自他対応の定義を、(6)のように示し、意味、形態、統語という三つの条件から厳密に規定している。(7)は例である。

(6) 自他対応の定義:

- a. 意味的条件: 自動詞文と他動詞文が同一の事態の側面を叙述していると解釈可能である。
- b. 形態的条件: 自動詞と他動詞が同一の語根を共有している。
- c. 統語的条件: 自動詞文のガ格と他動詞文のヲ格が同一の名詞句で対応している。

- (7) a. 鉛筆が 折れる。
b. 太郎が 鉛筆を 折る。

(佐藤 2005: 170)

本稿では、自他両用の二字漢語サ変動詞を判断する時に、奥津 (1967) と佐藤 (2005) の基準に従い、以下のような対応関係が成立する漢語サ変動詞を自他両用とする。

- (8) a. N_1 ガ N_2 ヲ VN スル (他動詞)
 N_2 ガ VN スル (自動詞)
b. 移動動作の起点・経由点・経路を示す「ヲ格」を取る動詞を「自動詞」とする⁵。

⁵ 当然、「ヲ格」を自動詞は、「移動動詞」以外に、ほかの意味用法もある。森田 (1994) は、ヲ格を取る自動詞について、以下の4種類を挙げている。

(1) A. 移動動詞

- a. 動作の起点を表す動詞: 去る、退く、など
- b. 動作の経由点・経路を表す動詞: 通る、渡る、抜ける、など
- c. 動作の方向性を表す動詞: 向く、ふり向く、など

例: 「空中を移動する」「常軌を逸脱する」⁶⁾

本章では、国語辞書において自他両用とされる二字漢語サ変動詞に注目し、以下の3つの問いに答えることを目標とする。

第一、二字漢語サ変動詞が、国語辞書において「自他両用」とされることと、(8)の対応関係を持つこととはどのように関わるか。

第二、(8)の対応関係を持たない動詞が国語辞書で「自他両用」と判断されることがある要因は何か。

第三、(8)の対応関係を持つ動詞は、単純な自他両用で、用法に偏りなどはないのか。

2. 先行研究

B. 移行・継続を表す動詞

a. 程度の基準を表す動詞: 超える、上回る、下回る、など

b. 時間の経過を表す動詞: 経る、など

c. 継続的な動作・状態を表す動詞: 見慣れる、など

C. 時間的な概念を表す語を伴う継続性の動詞

a. ある期間のあいだ継続する意の動詞: 過ごす、暮らすなど

b. ある時期・時点での継続的状态を表す動詞: ときめく、など

D. 非移動性の行為・作用を表す動詞

a. 心情を表す動詞: 焦る、怒る、侘びる、など

(森田 1994: 177-178)

ただし、本稿で扱った漢語動詞のうちに、「ヲ格」を取る自動詞は移動用法しか見られないため、(8b)の条件の中に「移動動詞」のみを挙げている。

⁶⁾ 『学研現代新国語辞書』により、「逸脱」の解釈は以下のようである。

(2) ① <名・自サ> 本筋からそれること。「社会の常識から—した行動」

② <他サ> 誤ってぬかすこと。また、ぬけること。「活字を一字—した」

「常軌を逸脱する」における「ヲ格」は、「故郷を離れる」と同様に、目的語への働きが希薄なため、本稿では、「～を逸脱する」を「移動動作の起点・基準点」の同類用法とみて、自動詞とする。ほかに、「{ルール/秩序/常識/範囲/道 …} を逸脱する」などがある。ちなみに、BCCWJでは、「活字を一字逸脱した」のような他動詞用法はなかった。

国語辞書における漢語動詞をめぐる研究は少ない。調べた限りでは、楊高郎 (2010) 「国語辞典における自他認定について: 自他両用の二字漢語動詞を中心に」のみである。

楊 (2010) は、『岩波国語辞典』、『学研現代新国語辞典』『明鏡国辞典』という 3 種類の国語辞書を利用し、三つの辞書における動詞の自他判断の一致率について調べた。

その結果、「三つの国語辞典における自他両用の漢語動詞は異なり語数 912 語であり、そのうち、三つの国語辞典において「自他サ変」として自他分類が一致している動詞は 269 である⁷。一方、自他の分類が国語辞典によってゆれている動詞は 643 語であり、自他の分類が一致している動詞は異なり語数からみると約 30%に過ぎない」ということが分かった。

また、楊 (2010) は、自他分類がゆれている 643 語を、以下のように細分をした。

- (9) a. 三つの国語辞典ともに自他分類が異なる動詞—42 語
- b. 二つの国語辞典において自他分類が一致している動詞(つまり、一つの国語辞典のみ自他分類が異なる動詞)—464 語
- c. 一つ以上の国語辞典において品詞分類が「名詞」になっている語、または、その語自体が国語辞典に収録されていない動詞—137 語

(楊 2010: 80)

さらに、楊 (2010) は、自他分類がゆれている動詞の場合、(10)のように他動詞文の主語が自動詞文の主語にもなるという「非能格構文 vs 対格

⁷ 楊 (2010) では、各国語辞書において自他分類が『自他サ変』として一致している 269 語のほとんどの動詞は、自動詞と他動詞の対応において下記のような対応関係を持っていると指摘している。

(3) a. Yが ～ する (自動詞文)

[非対格構文 vs 対格構文]

 b. Xが Yを ～ する (他動詞文)

(楊 2010: 81)

構文」の対応関係をなす動詞が多いと指摘する。

- (10) a. Xが³～する (自動詞文)
 ↓
 b. Xが³Yを～する (他動詞文) [非能格構文 vs 対格構文]

例えば、

- (11) a. アメリカが譲歩する。
 ↓
 b. アメリカが主張を譲歩する。
 c. *主張が譲歩する。

(楊 2010: 81)

最後に、楊 (2010) は、上記のような「非能格構文 vs 対格構文」の対応関係を持つ動詞はさらに以下の四つのタイプ⁸に分けている。

- (12) A タイプ：典型的な「非能格構文 vs 対格構文」
 a. 新人が力演する。(非能格自動詞文)
 b. 新人がハムレットを力演する。(他動詞文)
 c. ??ハムレットが力演する。

B タイプ：「動作主体=変化主体」

- a. 選手たちが A 球団から B 球団に移籍した。(自動詞文)
 b. 選手たちが球団を移籍した。(他動詞文)
 c. ??球団が移籍した。

C タイプ：「再帰的目的語」

- a. スケート選手が回転する⁹。(自動詞文)

⁸ (12) は、筆者が楊 (2010) の記述に基づいて整理したものである。

⁹ 「回転する」には「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立すると思われる。楊 (2010)

- b. セケート選手が {体/リンク} を回転する。(他動詞文)
- c. スケート選手の体が回転する。

D タイプ：「同族目的語」

- a. 太郎が輸血した。(自動詞文)
- b. 太郎が 500cc の血を輸血した。(他動詞文)
- c. ??血が輸血した。

楊 (2010) は、「国語辞典において自他両用の定義が曖昧であり、国語辞典によって漢語動詞の自他認定がゆれている」という結論に至った。前節でも述べたように、国語辞書における動詞の自他判別の基準は、辞書によっては異なり、漢語動詞の自他判別は難しいことがうかがえる。

野村 (1982) は、「多くの国語辞典が、認定の基準についてほとんど何もふれぬままに、見出しにのみ自他の分類を与えている」ものが多いと述べ、「動詞の自他の別を国語辞書に記すことにどれ程の意味があるか」、「辞書の自他記述が、一体何ほどの情報量を担うのだろうか」との問題点が残されていると指摘した。

本研究は、日本語学習者の立場から、国語辞書における漢語動詞の自他判別に注目し、国語辞書において「自他サ変」とされる漢語動詞の用法について考察する。

3. 研究対象と研究方法

本章で扱う研究対象は、楊 (2010) が指摘した 3 種の国語辞書において「自他サ変」と分類される 269 語のうち、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(中納言)」(BCCWJ)における例文数が 10 件以下の 50 語を除いた 219

は、「回転する」には「非対格自動詞」と「非能格自動詞」の両方とも使われている動詞であると指摘した。しかし、「回転する」の他動詞文のほとんどの例は「まわり(場所)を回転する」のような「場所ヲ」格をとる例と、「体(の一部)を回転する」のような再帰的な他動詞文の例であり、「対象」格をとる他動詞文は「毎日新聞」が 0 例、「BCCWJ」で 2 例しかみられなかった」ため、特殊な例として扱っている。

語である¹⁰。したがって、本稿で扱う語数は219個である。これらの語は、(8)の自他の対応関係が成立するか否かを確認したうえで、自他両用動詞には自動詞または他動詞としての用法に偏りが見られるか否かを観察する。

研究方法としては、国語辞書における漢語動詞の記述を参照しつつ、BCCWJを利用して、漢語動詞の使用実態を記述したうえで、自他両用の漢語動詞を選別して、その使用上に偏りが存在する否かについて考察する。

コーパス検索にあたって、「BCCWJ(中納言)・短単位検索」を使い、検索条件を以下のように設定する(「開始」を例に):「キー - 語彙素 - 開始」「後方共起 - 語彙素読み - スル」、検索結果を表計算ソフト Excel で整理する¹¹。

4. 自他両用動詞の選別結果

本節では、(8)の基準に従い、楊 (2010) で三つの国語辞書において自他両用と判断された語(219語)を、BCCWJの検索結果に合わせて再分析する。分析した結果、国語辞書において「自他サ変」と判断される二字漢語サ変動詞には以下の四つの種類がある。

4.1 「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立する動詞

この種の動詞は、(8)のような、「対格構文 vs 非対格構文」の構文的な対応関係をなし、自動詞用法と他動詞用法が対応しているものである。本稿で扱う自他両用の漢語サ変動詞であり、計186語である。例えば¹²、

(13)a. 環境問題を適正かつ円滑に解決し、よりよい環境を実現して

¹⁰ BCCWJにおける例文数が少なすぎる場合、動詞の自他を判定するのが難しくなることがあると考えられる。

¹¹ 本研究で扱ったデータは、2019年04月にBCCWJで行った検索結果である。

¹² 本章で扱う例文のうち、出典のある例文は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(中納言)」(BCCWJ)からの実例である。(13c)は、(13a)と(13b)によって簡略化された作例であり、以下も同様である。

いくためには、行政的な対応や企業の努力のみならず、国民一人一人が環境に配慮した生活行動を心がけていくことが大切である。

『環境白書』

- b. 千九百四十五年になり、すべての問題が解決し、七月十六日に、アラモゴードの砂漠で最初の原爆実験が行われた。実験は成功し、準備はすべて完了したのである。

『アインシュタインの予言』

- c. 企業が問題を解決した (他動詞)
問題が解決した (自動詞)

- (14)a. 肺結核の診断として治療中、抗結核剤が効かず、画像的にも改善しない場合、診断を確定するために気管支鏡を施行することもある。

『結核症と非定型抗酸菌症』

- b. 胃のファイバースコープの専門医へ紹介し、一週間以内に早期胃癌の診断が確定し、東大病院第1外科にて無事手術を終えるまでにわずか三週間というスピードでした。

『プライベートドクターを持つということ』

- c. 医者が患者の診断を確定した (他動詞)
患者の診断が確定した (自動詞)

4.2 「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係が成立する動詞

この種の動詞は、楊 (2010) が指摘したような「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係が成立する動詞である。(8)に示す「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立しないため、本稿ではこれらの動詞を自他両用の漢語サ変動詞とせず、他動詞とする。

- (15) N₁ ガ N₂ ヲ VN スル
N₁ ガ VN スル
* N₂ ガ VN スル

(15)のような「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係が成立する語は、計 14 語である。その実例を以下に示す。

- (16)a. 睡眠の際にも、体全体が完全に水平にはならないありさまで、また不十分な格好で腰かけると、ものを飲食するのもままならなかった。

『暗黒魔王の陰謀』

- b. *ものが飲食する
c. 朝、人参果汁をコップ 3 杯飲み、昼は腹 5 分目、夜は普通に飲食して、ひと月に十キロ減量した結果、リバウンドがないというからお試しあれ。

『Yomiuri Weekly』

- (17)a. 『荒城の月』をはじめ、『箱根八里』や『散歩』など、数々の名作を作曲し、二十三歳の若さで夭折した瀧廉太郎（千八百七十九～千九百三）は、多感な少年時代を竹田の城下町で過ごした。

『旅の手帖』

- b. *名作が作曲する
c. 英雄だと思っていたナポレオンのために作曲し、彼が皇帝志願だと分かって怒ったんですから、例えば、第三交響曲は《俗物》とでもつければよかったと思います。

『クラシック音楽自由自在』

(16a)と(17a)は、「飲食する」「作曲する」の他動詞文である。それに対応する非対格自動詞文(16b)と(17b)は非文であるため、本稿で扱う自他両用の漢語サ変動詞ではない。これらの動詞は目的語 N₂が基本的に自明であるため、(17c)と(18c)に示すように、目的語 N₂(「飲食物を」「楽曲を」)が現れなくても文の意味が明白である。

- (18)a. 「さればお留守居役どの、天江吉兵衛どのは、いったいいかなる絵を修業しておられたのでございます」佐多林蔵はほつ

と安堵し、今度は声を柔和にしてたずねた。

『火宅の坂』

- b. *絵が修業する
- c. パリに本店のある国立と銀座の店で四年ほど修業し、フランスで研修中に父から物件が弘前に見つかったとの報告を受けた。

『ようこそ、フランス料理の街へ。』

- (19)a. 3年の受講者数は約五十四万人で、原付免許新規取得者のほとんどがこの講習を受講した。

『警察白書』

- b. *講習が受講する
- c. 昭和五十二年度における安全運転管理者に対する講習は、延べ千三百六十一回行われ、全受講対象者の九十六・三%に当たる十九万三千二十二人の安全運転管理者が受講した。

『警察白書』

(18a)と(19a)は、漢語サ変動詞「修業する」「受講する」の他動詞文であり、それに対応する非対格自動詞文(18b)と(19b)は非文である。したがって、「修業する」「受講する」は本稿で扱う自他両用の漢語サ変動詞ではない。また、(18c)と(19c)に示したように、目的語 N₂(「料理を」「講習を」)が現れないものの、前後の文脈から判明したり、主題にしたりすることで判別できる。これらの動詞の目的語 N₂は基本的に必須補語であるため、現れない場合は、文脈から判明するものでなければならない。文脈を離れて「主語 N_iが修業した」「主語 N_iが受講した」と言う場合、「何を？」という「目的語 N₂」の情報に関する疑問が生じることがある。

4.3 二格を取る自動詞用法を併せ持つ動詞

(20)のように、二格を取る自動詞用法を持っているが、他動詞文に対応する非対格自動詞文「N₂がVNスル」が成立しないものである。本稿で扱う自他両用動詞ではない。計8語である。

- (20) N_i ガ N₂ ヲ VNスル

N₁ ガ N₂ ニ VN スル
* N₂ ガ VN スル

例えば、

- (21)a. なぜ、世界が日本の開国を注目していたのか、ということ
を明らかにするためには、当時十九世紀中葉における東アジア
が、欧米列強の勢力拡大の焦点となっていた地域であるとい
う、国際的位置を考える必要がある。

『近代日本と国際社会』

- b. *日本の開国が注目する
c. 人口の高齢化、家族構造の変化、女性の就労増加等の社会的
変化は先進諸国共通の動きであり、互いに他国の状況を知り、
意見や経験を交換することが重要である。このため、他の先
進国の社会保障の動向に注目し、国際的な議論に積極的に参
加していくなど、国際交流を深めていくこととしている。

『厚生白書』

- (22)a. 地域の発展の拠点となる地方の中心都市を効率的に連絡し、
地域相互の交流の円滑化に資するもの。

『建設白書』

- b. *地方の中心都市が連絡する¹³
c. なお、故障の場合は、緊急性を考慮して教育委員会を通さず、
学校が直接納入業者に連絡し、修理を依頼しているケー
スがほとんどである。

『校長・教頭のための学校施設・事務管理百科』

(21a)と(22a)は漢語サ変動詞「注目する」と「連絡する」の他動詞文である。それに対応する非対格自動詞文(21b)と(22b)は非文である。しかし、二格を取る自動詞文(21c)と(22c)は成立する。このような動詞は「対格構

¹³ (22b) は (22a) に対応する非対格自動詞文の場合を指す。ちなみに、「連絡する」は「ト格」を取る例文もあるが、本稿では「ト格」を自動詞用法として扱う。

文 vs 非対格構文」の対応関係を持たないため、本稿で扱う自他両用の漢語サ変動詞ではない。

4.4 他動詞用法が実際に見られない動詞

この種の動詞は国語辞書において「自他サ変」と判定されているが、BCCWJにおいては他動詞文の実例が実際に見られなくて、自動詞用法だけを持っている。計 11 語がある。例えば、

- (23) ブッチの予測は、見事に当たった。ネルソン戦が開幕し、タイガーはスケールの大きな活躍を見せる。

『新帝王伝説』

- (24) 運よくここに残った者たちも、家族が全滅したり、少なくとも家を焼かれなかった者はほとんどありませんでしたよ。

『美濃路殺人事件』

国語辞書においては、漢語サ変動詞「開幕する」と「全滅する」の解釈は以下のようにになっている。

- (25) 開幕する

《名・自他サ変》

①舞台の幕があいて演劇などが、始まること (始めること)。

②物事が始まること (始めること)。「オリンピックのー」

(『学研現代新国語辞典』(第六版): 237)

- (26) 全滅する

《名・自他サ変》

全部ほろびること。「守備隊がーする」「冷害で農作物がーする」

「敵軍をーする」のような他動詞用法もまれに用いられるが、

「全滅させる」の形が標準的¹⁴。

¹⁴ BCCWJ では「~を全滅する」の他動詞の用例は見られなかったが、「~を全滅させる」は

(『明鏡国語辞典』(第二版): 976)

国語辞書の記述からは、「開幕する」と「全滅する」は、自動詞としての意味も、他動詞としての意味も持っていることが分かる。しかし、本稿は BCCWJ における使用実態に基づくという立場を取るゆえに、BCCWJ において実際に他動詞用法の実例が見られないこれらの動詞を自動詞として、自他両用の漢語サ変動詞として扱わない。

以上、(8)の判断基準に従い、国語辞書において「自他サ変」とされる二字漢語サ変動詞を再分析してみた。その結果、(8)に適う自他両用動詞でないものが含まれていることが分かった。「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立する両用動詞、「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係が成立する動詞、二格を取る自動詞用法を併せ持つ動詞、他動詞用法が実際に見られない動詞という四つの種類が存在する。「対格構文 vs 非対格構文」が成立する両用動詞を除き、他の 3 種類は本稿で扱う自他両用漢語サ変動詞の判定基準である(8)を満たさないため、考察の対象から外す。

上記 4 種類の漢語サ変動詞の語数を表 1 に示す¹⁵。

表 1 自他両用の二字漢語動詞の選別結果

「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立する動詞	186
「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係が成立する動詞	14
二格を取る自動詞用法を併せ持つ動詞	8
ヲ格を取る他動詞用法が実際に見られない動詞	11
合計	219

以上は、国語辞書において「自他サ変」と判断される二字漢語動詞を、(8)の「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係に合わせながら、「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立する動詞を選定した。先行研究からは国語辞書において漢語動詞の自他判別にゆれがあることが分かった。以

51 例があった。

¹⁵ 各語と用例数を付録 1 に示す。

上の考察を経て、3種の国語辞書においてすべて「自他サ変」と判断される漢語動詞のうち、実際に「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係を持たない動詞が含まれることが分かった。

漢語動詞の自他判断になぜそのようなゆれが見られるのだろうか。その理由の一つは、一部の国語辞書は、漢語動詞の自他を認定するのにあたり、漢語動詞の意味と構文形式を同時に考慮することが難しいと思われる。例えば、「開幕する」「全滅する」のような漢語動詞は、意味の面からは自動詞、他動詞との両方の意味を持つと一般的に考えられるが、実際に「ヲ格を取る」他動詞の用法が見られない。つまり、実例から見れば、このような動詞は、他動詞の意味から離れて、自動詞の意味に偏る傾向があると思われる。

もう一つは、一部の動詞には、他動詞文に対応する自動詞文といえ¹⁶、「非対格自動詞文」以外に、「非能格自動詞文」と「ニ格」を使う自動詞文も存在する。森田 (1994) は、日本語における自動詞と他動詞が対になる場合、以下の五つのパターンを挙げている。

- (27) a. A ガ B ヲ 他動詞 / B ガ 自動詞
私は財布を無くした / 財布が無くなった
- b. A ガ B ヲ 他動詞 / A (ニ) ハ B ガ 自動詞
私は星を見る / 私 (に) は星が見える
- c. A ガ B ヲ 他動詞 / B ガ A ニ 自動詞
警察が泥棒をつかまえる / 泥棒が警察につかまる
- d. A ガ B ヲ 他動詞 / A ガ B ニ 自動詞
私は大学を受ける / 私は大学に受かる
- e. A ガ B ヲ 他動詞 / A ガ 自動詞
月が庭を照らす / 月が照る

(森田 1994: 158-160)

森田 (1994) は、(27)の五つのパターンには和語動詞の例しか挙げてい

¹⁶ ここでいう「対応する」関係を持つ自動詞文は、「対格構文 vs 非対格構文」という対応関係に限らない。

ない。和語動詞の場合は、自動詞と他動詞とはペアになっているため、形態から自他を判断することができる。しかし、漢語サ変動詞の場合は、形態的な対応関係が見られないため、構文的な対応関係から判断することはほぼ唯一の手段である。

(27a)は、「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係を持つ動詞であり、自他両用の漢語サ変動詞とは同じ構文的な対応関係を持っている。(27d)は、他動詞文に対応した自動詞文は「二格」を取る自動詞文である。漢語動詞「連絡する」「注目する」は、同じ「二格」を取る自動詞文も使える。(27e)は、他動詞文に対応した自動詞文は、「非能自動詞文」である。漢語動詞の中にも、「非能格自動詞文」と他動詞文との対応関係も多く存在するが、本研究で扱う自他両用とは違う対応関係である。

5. 自他両用動詞の用法の偏り

前節では、国語辞書において自他両用とされる二字漢語サ変動詞を4種類に分けて、「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係を持つ自他両用の漢語サ変動詞を厳選した。この節では、「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立する自他両用の漢語サ変動詞(186語)に注目し、これらの動詞には自動詞用法と他動詞用法に偏りが見られるか否かについて調べる。

考察にあたって、「～o VN-su (-ru)」「～ga VN-su (-ru)」「VN-sa-se (-ru)」「VN-sa-re (-ru)」という四つの項目を設定し、各々の用例数を比較することで、自他両用動詞の用法の偏りを判定する。

自他両用の漢語サ変動詞「VN スル」が使われる構文から見ると、「～o VN-su (-ru)」は他動詞文であり、「～ga VN-su (-ru)」は自動詞文である。また、使役形「VN-sa-se (-ru)」は「自動詞+ -se (-ru)」と「他動詞+ -se (-ru)」に分けられる。受身形「VN-sa-re (-ru)」は「自動詞+ -re (-ru)」と「他動詞+ -re (-ru)」に分けられる。さらに、受身文の性質により、「他動詞+ -re (-ru)」には「直接受身」と「間接受身」の2種類がある。

ここでは、漢語サ変動詞「停止する」¹⁷を例として、各パターンを表2

¹⁷ 楊高郎 (2007) は、「停止する」を自動詞と他動詞が同等に働く動詞としている。表2の例文①-④、例文⑥(括弧内は筆者による)は楊高郎 (2007) からの引用で、例文⑤⑦は筆者の作例である。

に示す。

表 2 自他両用の漢語サ変動詞「VN スル」の構文パターン

~ o VN-su (-ru)	<u>他動詞</u>	太郎がエンジンを <u>停止</u> した。	①
~ ga VN-su (-ru)	<u>自動詞</u>	エンジンが <u>停止</u> した。	②
VN-sa-se (-ru)	<u>自動詞+ -se (-ru)</u>	太郎がエンジンを <u>停止</u> させた。	③
	<u>他動詞+ -se (-ru)</u>	花子が太郎にエンジンを <u>停止</u> させた。	④
VN-sa-re (-ru)	<u>自動詞+ -re (-ru)</u>	花子はエンジンに <u>停止</u> されて困っている。	⑤
	<u>他動詞+ -re (-ru)</u> (直接)	エンジンが (太郎によって) <u>停止</u> された。	⑥
	<u>他動詞+ -re (-ru)</u> (間接)	花子は太郎にエンジンを <u>停止</u> されて困っている。	⑦

自他両用の漢語サ変動詞「VN スル」の自動詞用法と他動詞用法の偏りを判定するにあたり、表 2 の各パターンに基づいて、以下の四つの比較項目を立てる。

項目 A: 自動詞用法 ②+⑤

項目 B: 他動詞用法 ①+④+⑦

項目 C: 「自動詞+ -se (-ru)」 ③

項目 D: 「他動詞+ -re (-ru)」 ⑥

その理由は以下のとおりである。

項目 A: 「VN スル」が自動詞として使われる場合の用例数

項目 B: 「VN スル」が他動詞として使われる場合の用例数

項目 C: 「自動詞+ -se (-ru)」と他動詞の用例数との比較

自動詞、他動詞と使役との関係について、青木 (1977) は、「使役とは二重の他動であって、自動詞に「す」「せる」「させる」をつけたものは他動の意味を表わし、使役にはならない」という時枝説に対して疑問を唱え、「対立する他動詞をもつすべての自動詞が所謂使役態をもたぬならば、

自動詞使役態が他動詞と等価値なるが故として、時枝説を裏付けることにもなるが、実際には対立他動詞があってもなお所謂使役態の成立するものの方が多く…」¹⁸と指摘している。

また、江口 (1989) は、自動詞用法と他動詞用法を併せ持つ自他両用の漢語サ変動詞について、「主体そのものに作用を与えて変化をもたらし、又、他の力を經由して他の力が主体に作用して変化を生じさせる事も出来る」という意味特徴を持つと指摘した。また、自他両用の動詞と他動化との関係について、以下のように述べる。

(28) 他動化との関係

- (自動詞文) 世の中が革新化する→[他動化] 世の中を革新化させる
(「他動詞」的意味)
(他動詞文) 世の中を革新化する→[他動化] 世の中を革新化させる
(「使役」的意味)
(江口 1989: 772)

江口 (1989) によれば、「革新化する」は自他両用の動詞であるため、「世の中を革新化させる」という文は「他動詞」的な意味と「使役」的な意味との二義性を持つということである。本稿では「使役」的な意味と「他動詞」的な意味の区別を考慮せずに、使役形「-se (-ru)」前に使われているのは、自動詞か他動詞かを区別する。

さらに、早津 (2016) は、「サ変動詞の中には、他動詞としても自動詞としても使われる、あるいは自他が安定していないもの」が、「それらの動詞を用いて対象に対する働きかけを表す文を作ろうとするとき、その動詞を他動詞とみなせば「～ヲ V」とし、自動詞だとみなせば「-(サ)セル」をつけて「～ヲ V-(サ)セル」とすることになる」(p.258) と述べている。

これらの研究をふまえ、本稿では自他両用の漢語サ変動詞について、「VN スル」が他動詞として使われた用例数と、「自動詞+ -se (-ru)」の形で使われた用例数を比較する。

¹⁸ 青木 (1977) は「学生を集める/学生を集まらせる」「水を一度に流す/溝を掘って水を流れさせる」などの例を示して、「直接作用と間接作用」の違いと説明している。

(江口 1989: 779)

江口 (1989) によれば、「革新化する」は自他両用の動詞であるため、「世の中 (が/に) 革新化される」のように、助詞の使い分けによって、自動詞と他動詞の「受動化」には違う意味が生じるとのことである。

自他両用の漢語サ変動詞の場合、他動詞「～o VN-su (-ru)」に対応するものとして、自動詞「～ga VN-su (-ru)」と、受身動詞の「他動詞+ -re (-ru)」形があり、並立関係をなしている。そこで、本稿では自他両用の漢語サ変動詞の「他動詞+ -re (-ru)」形と自動詞の用例数を比較項目の一つとする。

例文総数が多い場合は判定しやすいと考えられるため、ここでまず BCCWJ において例文総数が 1000 以上の語を選定し、各用法の数量分布を見てみる。まず、BCCWJ における例文の総数を分母にして、「自動詞の用例数/例文総数」「他動詞の用例数/例文総数」「自動詞+ -se (-ru)/用例総数」「他動詞+ -re (-ru)/用例総数」を用いて各用法の比率を計算する。そして、自他動詞の比率の差、「自動詞+ -se (-ru)」と「他動詞+ -re (-ru)」の比率の差を計算する。自他動詞の使用率が 0 以上の場合、自動詞のほうが多く、0 以下の場合、他動詞のほうが多く使われている。「自動詞+ -se (-ru)」と「他動詞+ -re (-ru)」の比率の差が 0 以上の場合、「自動詞+ -se (-ru)」が多く使われていて、0 以下の場合、「他動詞+ -re (-ru)」が多く使われていることを意味する¹⁹。「停止」を例にすれば、以下のようになる。

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
停止	1204	595 (49.4%)	413 (34.3%)	105 (8.7%)	91 (7.6%)	1.2pt	15.1pt

5.1 自動詞用法に偏る自他両用動詞

この節は、上記の方法で計算した結果に基づき、自動詞用法と他動詞用

¹⁹ 次の節で各語をグループに分けて考察を進むが、紙幅の関係で、すべての語を示さず、付録 2 に示す。

法の比率の差が 0 以上の語、あるいは、自動詞用法が多く使われる動詞について分析する(計 19 個)。以下のグループに分けて分析する。

グループ 1: 「増加」「発生」「減少」「消滅」「増大」「復活」「乾燥」。

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
増加	7015	6520 (92.9%)	102 (1.5%)	377 (5.4%)	16 (0.2%)	5.1pt	91.5pt
発生	8007	7432 (92.8%)	146 (1.8%)	427 (5.3%)	2 (0.0%)	5.3pt	91.0pt
減少	4762	4375 (91.9%)	42 (0.9%)	342 (7.2%)	3 (0.1%)	7.1pt	91.0pt
消滅	1284	1142 (88.9%)	14 (1.1%)	128 (10.0%)	0 (0.0%)	10.0pt	87.9pt
増大	1694	1380 (81.5%)	59 (3.5%)	252 (14.9%)	3 (0.2%)	14.7pt	78.0pt
復活	1116	762 (68.3%)	53 (4.7%)	282 (25.3%)	19 (1.7%)	23.6pt	63.5pt
乾燥	1141	672 (58.9%)	55 (4.8%)	402 (35.2%)	12 (1.1%)	34.2pt	54.1pt

上記の 6 語は、共通する特徴が見られる。まず、自動詞の使用数は他動詞の使用数を遥かに超えて、その差を見れば、最小は 54.1pt で、最大は 91.5pt である(A≫B)。これは自動詞の使用が優勢になっていることを意味する。また、「自動詞+ -se (-ru)」の数は他動詞の使用数より多い(C>B)。それと同時に、項目 D「他動詞+ -re (-ru)」の使用数が非常に少なく、わずか 1%前後である。これは、「～を VN + -se (-ru)」は、「～を VN する」の代用の働きをするために、他動詞の使用が劣勢になっていることを意味する。したがって、上記の六つの語は、自動詞専用の傾向にある自他両用の漢語動詞といえる。ちなみに、上記の表からは、自他用法の比率の差が大きくなるにつれて、「自動詞+ -se (-ru)」と「他動詞+ -re (-ru)」の比率の

差も大きくなるのが分かる。

グループ 2: 「停止」「拡大」「継続」

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
停止	1204	595 (49.4%)	413 (34.3%)	105 (8.7%)	91 (7.6%)	1.2pt	15.1pt
拡大	3831	1761 (46.0%)	1551 (40.5%)	163 (4.3%)	356 (9.3%)	-5.0pt	5.5pt
継続	1921	906 (47.2%)	804 (41.9%)	56 (2.9%)	155 (8.1%)	-5.2pt	5.3pt

「停止」「拡大」「継続」は、自動詞と他動詞の使用率の差はグループ 1 の語と異なり、50pt 以上の差は見られなかった（「停止」の自他動詞使用率の差は 15.1pt であるが、決して多いとはいえない）。特に「拡大」と「継続」は、わずか 5pt ぐらいの差しかない。同時に、「自動詞+ -se (-ru)」と「他動詞+ -re (-ru)」の比率の差も同じく 5pt 前後である。したがって、「停止」「拡大」「継続」という三つの漢語動詞は、自動詞と他動詞は同等に働く動詞といえる²⁰。

グループ 3: 「移動」「集中」

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
移動	3637	2667 (73.3%)	426 (11.7%)	523 (14.4%)	21 (0.6%)	13.8pt	61.6pt
集中	2794	2085 (74.6%)	388 (13.9%)	285 (10.2%)	36 (1.3%)	8.9pt	60.7pt

²⁰ これは、楊高郎 (2007) が指摘した「停止する」が自動詞と他動詞が同等に働く動詞であるという論証の証拠にもなりうる。

「移動」²¹と「集中」は、自動詞の使用率は他動詞の使用率を 60pt 以上超えている。しかし、グループ 1 の語と違って、自動詞専用の傾向にならない。項目 C「自動詞+**-se (-ru)**」の使用率と項目 B「他動詞」の使用率は大きな差がないためである。つまり、「移動」と「集中」は、「自動詞+**-se (-ru)**」と他動詞は同程度に使われている。使役形の「自動詞+**-se (-ru)**」は完全に「～を VN する」の代用になっていることはなく、他動詞用法が完全に劣勢になっているわけではないことを意味する。

グループ 4: 「終了」「完了」「回復」

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
終了	2580	1895 (73.4%)	553 (21.4%)	125 (4.8%)	7 (0.3%)	4.6pt	52.0pt
完了	1184	800 (67.6%)	327 (27.6%)	51 (4.3%)	6 (0.5%)	3.8pt	39.9pt
回復	2215	1347 (60.8%)	616 (27.8%)	204 (9.2%)	48 (2.2%)	7.0pt	33.0pt

「終了」「完了」「回復」は、自動詞のほうがやや多く使われている。しかも、「他動詞+**-re (-ru)**」の使用数は少ない。これは自動詞の使用が優勢であることを意味する。しかし、他動詞の使用率は「自動詞+**-se (-ru)**」の使用率をある程度超えている。その差はそれぞれ 16.6pt、23.3pt、18.6pt である。「自動詞+**-se (-ru)**」の使用率は少なく、他動詞の代用になることはない。そのため、「終了」「完了」「回復」は、自動詞の使用が少し優勢であるが、自動詞専用の傾向にならず、他動詞の使用がある程度保留されていると思われる。

グループ 5: 「結合」「確定」「接続」

²¹ 「移動」の自動詞用法の中には、「空中を移動する」のような移動行為を表す用法も含まれている。

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
結合	1080	790 (73.1%)	138 (12.8%)	76 (7.0%)	76 (7.0%)	0.0pt	60.4pt
確定	1345	855 (63.6%)	314 (23.3%)	53 (3.9%)	123 (9.1%)	-5.2pt	40.2pt
接続	1747	860 (49.2%)	573 (32.8%)	21 (1.2%)	293 (16.8%)	-15.6pt	16.4pt

「結合」「確定」「接続」は、自動詞の使用数が高動詞より多い動詞である。「自動詞+ -se (-ru)」の使用率は10%以下であり、他動詞の使用率より少ない。同時に「他動詞+ -re (-ru)」の使用率も相応に高い(これはグループ4との違いである)、他動詞の使用が劣勢になっていない証拠である。この点から見れば、「結合」「確定」「接続」の自動詞用法が完全に優勢になっているとはいえ、他動詞用法は一定の程度で使用されている。

グループ6: 「完成」

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
完成	3194	2021 (63.3%)	297 (9.3%)	622 (19.5%)	254 (8.0%)	11.5pt	54.0pt

「完成」には、自動詞の使用率は他動詞の使用率を54.0pt超えている。「自動詞+ -se (-ru)」の使用率は他動詞より10.2pt多い。自動詞の使用が優勢であることを示す。しかし、自動詞専用の傾向にある動詞には「他動詞+ -re (-ru)」の使用率が1%前後であるが、「完成」には、「他動詞+ -re (-ru)」の使用率は決して少なくない(8.0%)。他動詞用法がある程度保留されている。

上記グループ3～6は、自動詞専用の傾向にならない漢語動詞であるが、自動詞と他動詞の使用上にゆれが見られる漢語動詞である。ゆれの現れ

方はそれぞれ異なるが、すべての動詞には他動詞の使用が完全に劣勢にならない状況が含まれている。

この節のまとめると、上記の六つのグループの自動詞用法に偏る漢語動詞は、3種類にまとめることができる。

第一類、自動詞専用の傾向にある漢語動詞: 「増加」「発生」「減少」「消滅」「増大」「復活」「乾燥」

第二類、自動詞と他動詞が同等に働く漢語動詞: 「停止」「拡大」「継続」

第三類、自動詞が優勢に使用されるが、他動詞が完全に劣勢ではない漢語動詞: 「移動」「集中」「終了」「完了」「回復」「結合」「確定」「接続」「完成」

5.2 他動詞用法に偏る自他両用動詞

この節では、自動詞用法と他動詞用法の比率の差が 0 以下の語、他動詞用法が多く使われる動詞について分析する(計 11 個)。前節と同様に以下のグループに分けて考察していく。

グループ 1: 「開始」「破壊」

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
開始	4166	180 (4.3%)	2812 (67.5%)	8 (0.2%)	1166 (28.0%)	-27.8pt	-63.2pt
破壊	1755	69 (3.9%)	1014 (57.8%)	10 (0.6%)	662 (37.7%)	-37.2pt	-53.8pt

「開始」と「破壊」には、自他動詞の使用率の差は 50pt 以上あり、他動詞の使用数は自動詞より圧倒的に多く、他動詞の使用が優勢になっている(B≫A)。同時に、項目 D「他動詞+ -re (-ru)」の数が項目 A「自動詞」の数よりも遥かに多い(D≫A)。項目 C「自動詞+ -se (-ru)」の用例数は非常に少ない。他動詞の使用が優勢になっていると同時に、自動詞の使用が劣勢である。したがって、「開始」と「破壊」は他動詞専用の傾向にある

漢語動詞といえる。

グループ 2: 「実現」

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
実現	5092	1642 (32.2%)	2581 (50.7%)	371 (7.3%)	498 (9.8%)	-2.5pt	-18.4pt

「実現」について、自他動詞の使用率の差は 18.4pt であり、他動詞のほうがやや多く使われているが、50pt 以上の差は見られない。また、「実現」には、項目 C 「自動詞+ -se (-ru)」の数は 371 個(7.3%)であり、項目 D 「他動詞+ -re (-ru)」の数は 498 個(9.8%)であり、両者の使用率の差は小さく、わずか 2.5pt である。したがって、「実現」には自動詞と他動詞が同等に働く動詞だといえる。

グループ 3: 「更新」「固定」

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
固定	1587	518 (32.6%)	663 (41.8%)	34 (2.1%)	372 (23.4%)	-21.3pt	-9.1pt
更新	1325	477 (36.0%)	521 (39.3%)	10 (0.8%)	317 (23.9%)	-23.2pt	-3.3pt

「更新」と「固定」には共通する点が三つある。まず、他動詞のほうがやや多く使われ、自他動詞の使用率の差は小さい。しかも項目 C 「自動詞+ -se (-ru)」の使用数は少ない(それぞれ 0.8%、2.1%)。項目 D 「他動詞+ -re (-ru)」の使用率は 20%以上あり、少なくない。この点からは他動詞の使用が少し優位かどうかはえる。しかし、項目 D 「他動詞+ -re (-ru)」の数は項目 A 「自動詞」の数を超えることはない。つまり、「更新」と「固定」は、他動詞の使用数は自動詞の使用数を少し超えるが、完全に優位になっ

ているわけではなく、自動詞の使用は劣勢になっていない。

グループ 4: 「解消」「確立」「展開」「決定」

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
解消	1542	323 (20.9%)	844 (54.7%)	30 (1.9%)	345 (22.4%)	-20.4pt	-33.8pt
確立	2553	601 (23.5%)	1320 (51.7%)	55 (2.2%)	577 (22.6%)	-20.4pt	-28.2pt
展開	4472	1119 (25.0%)	2162 (48.3%)	100 (2.2%)	1091 (24.4%)	-22.2pt	-23.3pt
決定	4718	1253 (26.6%)	2301 (48.8%)	15 (0.3%)	1149 (24.4%)	-24.0pt	-22.2pt

グループ 3 に比べて、「解消」「確立」「展開」「決定」は、自他動詞の使用率の差は大きい。その差は 20pt~30pt 前後であり、他動詞の使用率は、ある程度自動詞の使用率を超えている。それに、「他動詞+ -re (-ru)」の使用率は 20% ぐらいである。この点からは、他動詞の使用はある程度優勢であることが分かる。しかし、項目 D 「他動詞+ -re (-ru)」と項目 A 「自動詞」の使用率の差は小さい(0.6pt~2.2pt)。つまり、これらの動詞は、他動詞の使用がある程度優位になっているが、自動詞の使用がある程度保留されている。

グループ 5: 「解決」

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
解決	3424	1276 (37.3%)	1837 (53.7%)	17 (0.5%)	294 (8.6%)	-8.1pt	-16.4pt

「解決」は、自他動詞の使用率の差は 16.4pt であり、他動詞のほうがや

や多く使われている。しかも、「自動詞+**-se (-ru)**」が非常に少なく、わずか 17 件(0.5%)である。これは他動詞の使用の優勢を意味する。しかし、優勢とはいえ、項目 D「他動詞+**-re (-ru)**」の数は項目 A「自動詞」の数を超えることはない。つまり、「他動詞+**-re (-ru)**」は「自動詞」の代用になることはなく、自動詞の使用はある程度保留されている。

グループ 6: 「反映」

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
反映	3454	356 (10.3%)	1721 (49.8%)	483 (14.0%)	894 (25.9%)	-11.9pt	-39.5pt

「反映」は、他動詞の使用率は自動詞の使用率を、30pt 以上を超えて、他動詞の使用が多数である。それに、「他動詞+**-re (-ru)**」の使用率は自動詞の使用率を 15.6pt を超えている。この点からは、他動詞の使用が優勢であることが分かる。自動詞の使用率は 10.3%であり、多いとはいえない。しかし、他動詞専用の傾向にある漢語動詞と異なり、「反映」には「自動詞+**-se (-ru)**」の使用数はまれではなく、483 個(14.0%)もある。つまり、自動詞の使用が完全に劣勢になることはない。

グループ 3～6 は、他動詞専用の傾向にならない漢語動詞であるが、自動詞と他動詞の使用上にゆれが見られる漢語動詞である。ゆれの現れ方はそれぞれ異なるが、すべての動詞に自動詞の使用が完全に劣勢にならない状況が含まれている。

この節のまとめると、上記の六つのグループの他動詞用法に偏る漢語動詞は、大きく以下の 3 種類にまとめることができる。

第一類、他動詞専用の傾向にある漢語動詞: 「開始」「破壊」

第二類、自動詞と他動詞が同等に働く漢語動詞: 「実現」

第三類、他動詞が多く使用されるが、自動詞が完全に劣勢ではない漢語動詞: 「更新」「固定」「解消」「確立」「展開」「決定」「解決」「反映」

本節は、国語辞書において「自他両用」とされる漢語動詞に注目し、BCCWJの使用実態に基づき、自他両用の漢語動詞には自動詞用法と他動詞用法に偏りがあるか否かについて考察した。その結果、自他両用の漢語動詞には以下の4種類に分けることができる。

第一、自動詞専用の傾向にある漢語動詞: 増加、発生、減少、消滅、増大、復活、乾燥

第二、他動詞専用の傾向にある漢語動詞: 開始、破壊

第三、自動詞と他動詞が同等に働く漢語動詞: 停止、拡大、継続、実現

第四、自他動詞の使用にゆれがある動詞:

自動詞が多く使用される(他動詞が完全に劣勢にならない):

移動、集中、終了、完了、回復、結合、確定、接続、完成

他動詞が多く使用される(自動詞が完全に劣勢にならない):

更新、固定、解消、確立、展開、決定、解決、反映

上記4種類の漢語動詞には、自動詞または他動詞専用の傾向にある動詞に限って明確な条件がある。

自動詞専用の傾向にある動詞は、以下の三つの条件が必要である。①自動詞の使用数は他動詞より圧倒的に多い($A \gg B$)。②「自動詞+ -se (-ru)」の使用数は「他動詞」の使用数を超える($C > B$)。③「他動詞+ -re (-ru)」の使用数は極めて少ない(D が少数)。この三つの条件が揃えば、自動詞の使用が優勢で、他動詞の使用が劣勢になる動詞である。

一方、他動詞専用の傾向にある動詞は、以下の三つの条件が必要である。①他動詞の使用数は自動詞より圧倒的に多い($B \gg A$)。②「他動詞+ -re (-ru)」の使用数は「自動詞」の使用数を超える($D > A$)。③「自動詞+ -se (-ru)」の使用数は極めて少ない(C が少数)。この三つの条件が揃えば、他動詞の使用が優勢で、自動詞の使用が劣勢になる動詞である。

自動詞と他動詞が同等に働く動詞(第三類)と自他動詞の使用にゆれがある動詞(第四類)は、明確な基準を持たず、上記した専用傾向にある動詞の条件を基にして、判定した結果である。今までの考察はBCCWJにおける例文総数は1000以上もある動詞を対象とした。例文数が少ない場合、自・他動詞の用法にゆれが見られるか否かに関する判定は困難なため

ある。ただし、自・他動詞の専用にあるか否かについては、上記の基準に基づいて、ある程度判定することは可能である。

本章では、BCCWJにおける例文総数が1000以下の動詞のうち、自動詞専用の傾向、他動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語サ変動詞も選別した。その結果、自動詞専用の傾向にある動詞は計22個であり、他動詞専用の傾向にある動詞は計7個である。詳しくは付録3に示す。

自動詞専用の傾向を示す自他両用の二字漢語サ変動詞は、例文総数を問わず、合わせて計29語である。それに対して、他動詞専用の傾向を示す自他両用の二字漢語サ変動詞は計9語のみである。現代日本語において、自他両用の漢語サ変動詞に関しては、自動詞専用の傾向になることは他動詞より多く、自動詞に偏りやすい傾向があると思われる。これは、表3からもうかがえる。

表3 自他動詞の使用率の差による動詞数量の分布

自他使用率の差	自動詞に偏る	他動詞に偏る
80pt 以上	19	0
70pt～80pt	18	5
60pt～70pt	14	4
50pt～60pt	16	4
40pt～50pt	12	7
30pt～40pt	17	9
20pt～30pt	11	9
20pt 以下	18	23
合計	125	61

表3によれば、自動詞用法の使用率が他動詞の使用率を、80pt以上超えた語は19語あるが、同じ差を持つ他動詞の使用率が高い動詞はない。それに、全体的に自動詞の使用率の高い語数は125もあるのに対して、他動詞の使用率の高い語数は61である。つまり、使用率において、自動詞の使用率が高い動詞は他動詞より倍ぐらい多い。

この現象は池上(1981)が主張する「ナル的表現」と関連すると考え

られる。池上 (1981) は、日本語には事態を表現する時に、「スル表現」より「ナル表現」²²を好む傾向があると指摘している。自他両用の漢語サ変動詞の中では、自動詞専用の傾向にある動詞が多いこと、他動詞用法より、自動詞用法を好む傾向を示す動詞が多いことは、「ナル的表現」を好む傾向がある日本語の特徴と一致していると考えられる。

次節では、自他両用の漢語動詞には、自動詞または他動詞専用の傾向を示した理由について考察する。

6. 自他両用の漢語サ変動詞の語彙概念構造

永澤 (2007) は、歴史的な観点から、コーパス²³を用いて、近代から現代に至る漢語動詞の自他体系の変化およびそれを引き起こす要因について考察した。その結果、「近代の自他体系のうち、現代までに変化が見られるのは、自他両用動詞の一部に限られ、その方向性として、自他両用から自動詞専用化するもの、他動詞専用化するものの 2 系列がある」ということが判明し、その 2 系列のうち、自動詞専用化が優勢になっていることも明らかになったと述べている。

本稿は、通時的な考察を行ったわけではないが、現代日本語においても、自他両用の漢語サ変動詞は自動詞専用の傾向が優勢になっていることを判明した。

その原因としては、永澤 (2007) は、「漢語動詞においても和語と同様に自他を分化させる方向へ力が働いた結果だ」と指摘し、日本語において、接辞「一させる」による「他動詞化」が可能である一方で、「自動詞化」を可能とするような接辞が日本語にはない²⁴としている。

²² 詳しくは池上 (1981) を参照されたい。

²³ 近代日本語のコーパス『太陽コーパス』、朝日新聞記事データベース『聞蔵(さくぞう)』、朝日新聞社サイト『asahi.com』など。

²⁴ 永澤 (2007) は、受身の接辞「一される」に関して、「自動詞化」に近い機能を持っているが、必ず背後に動作主の存在を感じさせるため、下記のような自動詞用法に代わるができない場合があると指摘する。

(i) 風が吹き、風車が回転した/*回転された。

(ii) 気温が上がり、花粉の飛散地域が拡大した/*拡大された。

(永澤 2007: 25)

本稿は、永澤 (2007) の結論に反対するわけではない。ただし、自動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語サ変動詞を選別する際に、最初から、項目 C「自動詞+ -se (-ru)」と項目 B「他動詞」の数を比較するという条件 (C>B)を設定している。永澤 (2007) が原因として扱われた条件を、本稿では自動詞専用の傾向になった結果の一つとして扱っている²⁵。

森田 (1994) は、漢語動詞の自他について、『する』を伴って動詞として定着する場合にも二様の篩に掛けられる。それが自動詞として生きるか他動詞として働くのかの分岐点である」(p.260) と述べた。例えば、

(31) 鉱山廃液で下流河川が汚染する。(自動詞)

鉱山廃液で下流河川を汚染する。(他動詞)

(森田 1994: 260)

森田 (1994) は、「汚染」について、「事実この両例が見られるのであるが、このまま進めば自他両用動詞として定着するし、もし自動詞用法が優勢となれば、他動詞用法に代わって『河川を汚染させる』と使役表現にしなければならない。逆に他動詞用法に落ち着けば、自動詞に代わって『河川が汚染される』と受身形となる」(p.260) と指摘した。

本稿は、漢語サ変動詞の自動詞と他動詞専用の傾向について考察するのにあたって、先に設定された4つの項目は、森田 (1994) の指摘に一致する条件である。

また、森田 (1994) は、漢語動詞の自他に見られるゆれについて、「漢語熟語をその位置する文脈や文型、あるいは表す語彙的意味の在り方から自動詞・他動詞と弁別することは、…(中略) 必ずしも平易で明解な事

ただし、「?回転される」はそもそも受身として使いにくく、「回転させられる」のほうが自然と思われる。

²⁵ 永澤 (2007) は、近代語の自他両用漢語動詞について、現代語への変化の一つとして「自律性の高い事象を表す場合には他動詞用法が存立しにくくなった」(p.26) ことを挙げている。しかしながら、これに従えば、逆に自律性の低い事象と、「[略] 他からの人為的なはたらきかけを受けずとも成立し得る変化を表す場合に、自他両用動詞として存立できる」(永澤 2007: 21、下線筆者) の下線部とは両立しないと考えられ、表「(22)」の「(e)自他両用」(永澤 2007: 22) の動詞がどのような条件の下に存立しているのか不明である。

柄ではない。それは、漢語が新漢語として用いられ始めてから歴史が浅いこと。特に造語時は意味・文法面で白紙の状態にあるため、使用する側に不確かで戸惑いのあること。それが短期間のうちに用法面で生ずるゆれを大きくしていること。漢語自体が本来、形式と語彙的意味のみで、日本語としての文法性を持っていないこと。しかも、その語彙的意味が必ずしも品詞性に反映しないこと。このような諸理由によって、漢字熟語が自動詞的に用いられるか他動詞的に用いられるかが、かなりあいまいとなっているのだと思われる」(p.261) と、いくつかの理由を指摘した。

影山 (1996) は、自他両用の漢語サ変動詞の語彙概念構造について、(32) のように規定している。

(32) 自他両用動詞の概念構造

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT z]]]

(影山 1996: 159)

影山 (1996) によれば、使役主(x)が変化対象(y)に働きかけ(CONTROL)、その結果、変化対象(y)はある状態(z)になる(BECOME)。自他両用動詞の概念構造には二つの事象が含まれている。CONTROL は上位事象であり、使役作用を表す。一方、BECOME は下位事象であり、変化結果を表す。使役主(x)と変化対象(y)が同一である場合、自動詞用法となるが、使役主(x)と変化対象(y)が別物の場合は他動詞用法となる。(実際に使用された個々の動詞では、上位事象と下位事象のうち、いずれかの事象に意味的な重点が置かれているということである。

また、影山 (1996) は、動詞が「自動詞として機能するか他動詞として機能するかは、恣意的に決まっているのではなく、意味的な要素によって定められている」(p.202) と論じ、「実世界において原型的、典型的な状況がどのように認識されているか」(p.202) は重要な基準の一つであると主張している。したがって、「発生」「消滅」といった自動詞専用の傾向を示す二字漢語サ変動詞は、下位事象と変化結果を表すのに重点が置かれていると考えられる。一方、「開始」「破壊」といった他動詞専用の傾向を示す二字漢語サ変動詞は、上位事象と使役作用を表すのに重点が置かれていると考えられる。話者の中で、各動詞の描写する典型的な事態が違って

いるという認識があるため、自他両用の漢語サ変動詞に自動詞用法専用や他動詞用法専用になる傾向が見られると考えられる。

ヤコブソン (1989) は、漢語動詞について、「動詞の他動性はその意味だけで決まるとは言いにくい」と述べた。例えば、「開始する(始まる、始める)」「落下する(落ちる、落とす)」「拡大する(広がる、広げる)」「燃焼する(燃える、燃やす)」のような漢語動詞は、その意味に対応する和語動詞は自動詞も他動詞もあるということである。しかし、言語表現においてどのように反映しているのかについて、以下のように論じている。

- (33) 人間はこの世に生まれてから、自分の周りに様々な事態の変化を経験するわけであるが、その経験の中のある種の変化は普段自発的に起こるか、又は変化する主体がそれ自体に生じさせるようなものであり、また他の種の変化は普段変化する主体以外の何物かによって引き起こされるようなものである。このように、関与しているものが一つか二つかで大きく分けて二種類の変化がある、という認識が自然に生まれてくる。

(ヤコブソン 1989: 169)

ヤコブソン (1989) が指摘したように、現実が発生した事態を、自動詞で表現するか、他動詞で表現するかは、人間の「経験」による認識によって決まるものである。

7. 母語話者によるアンケート調査

第5節では、BCCWJに基づいて、自他両用の漢語動詞の使用実態について考察した。その結果、自動詞専用の傾向にある動詞(29個)と他動詞専用の傾向にある動詞(9個)が確認された。本節では、他動詞専用の傾向、自動詞専用の傾向にある動詞を除き、偏りの激しくない語、ゆれのある語について、母語話者によるアンケート調査を行う。これらの自他両用の漢語動詞について、コーパスにおける使用上の偏りと、母語話者による使用上の偏りに偏差が見られるか否かについて考察する。

アンケートは、各二字漢語動詞の自動詞用法と他動詞用法の例文を、一個ずつ選び、述語の部分に穴埋め質問の形にして、可能だと思われる述語

の形式をすべて記入するという形になっている(アンケートおよび結果を、付録4と付録5に示す)。ここでは一例をあげる。

- (34) 質問 1: いよいよ工事が完了()てしまいます。(自動詞文)
質問 2: ほぼ一年で工事を完了()予定です。(他動詞文)

調査対象は日本語母語話者であり、計 122 人である²⁶。集計にあたり、主に「スル」「サレル」「サセル」という 3 種類に分ける。(35)に示す「～される」「～いたす」のような敬語用法や、(36)に示す「～したい」「～してしまう」のような補助動詞の用法は、すべて「する」の用法に計算する。また、「する」と「～したい」が同時に出現する場合は、一回しか計算しない。(37)のように、「できる」や「の」、空欄になっている結果は計算に入れない。

- (35) 質問 5: 審査会は、調査を終了 (いたし) ました。
質問 13: この音楽グループは今年活動を停止 (され) ます。
- (36) 質問 13: この音楽グループは今年活動を停止 (してしまい) ます。
質問 14: 国内でのボランティア活動が展開 (し始め) ました。
- (37) 質問 6: 会場の皆さんは今、視線を司会者に集中 (でき) ていますね。
質問 7: 計画を実現 (の) ため、市民力の結集をお願いします。

さらに、(38)のように、敬語の使用が考えられない文脈に使われている「られる」や、自動詞文に使われている「させる」などについて、ミスの可能性もあるが、少数しかないが結果として残る。

- (38) 質問 36: テキスト形式のファイルのデータを 更新 (される) タイミングを指定したい。
質問 32: 睡眠が十分に取れていると、ストレスが 解消 (させ)

²⁶ 年齢層: 60代以上 (14人)、40代 (5人)、50代 (1人)、30代 (9人)、20代以下 (93人)。

る) 傾向がある。

自動詞文と他動詞文のすべての結果の合計を計算し、その数値をベースに、「スル」「サレル」「サセル」の占める比率を計算する²⁷。自動詞と他動詞の占める比率の差の結果を、表 4 に示す。

表 4 各動詞の自動詞と他動詞との比率の差

自他動詞の比率差	語
5pt 以下	結合(0.4pt)、確定(0.4pt)、終了(0.8pt)、実現(1.2pt)、拡大(3.0pt)、決定(3.1pt)、完了(3.9pt)、解決(3.9pt)、接続(4.2pt)、停止(4.4pt)、継続(4.8pt)
5~10pt	確立(5.9pt)、集中(9.2pt)
10pt 以上	回復(11.1pt)、展開(11.1pt)、更新(13.2pt)、完成(13.5pt)、反映(14.5pt)、解消(16.2pt)、固定(16.4pt)

表 4 からは、母語話者の中では、自他両用の漢語動詞には、自動詞と他動詞の使用上に大きな差が見られないものが多いことがわかる。自動詞と他動詞の比率の差が 5%以下を占めるものは 11 個あり、半数以上である。そのうち、「結合」「確定」「終了」三つの語は、自動詞と他動詞との使用上に、数量上の差がほとんど見られず、すべて 1pt 以下である。以下は、グループに分けて各動詞の用法を見る。

自動詞と他動詞の比率の差が 10pt 以上の語は、7 個である。これらの語には、自動詞の数が少ない分、「サレル」の数が多くなり、他動詞の数が少ない分、「サセル」の数が多くなるという現象を呈している。例えば、

語	A 自動詞	B 他動詞	C サセル	D サレル	C と D 比率差	A と B 比率差
回復	119 (47.0%)	91 (36.0%)	37 (14.6%)	6 (2.4%)	12.2pt	11.0pt

²⁷ アンケートはコーパスの例文と違って、「サセル」には「自動詞+*-se(-ru)*」か、「他動詞+*-se(-ru)*」か、判定できないため、すべて「サセル」の用法に計算する。

完成	112 (44.6%)	78 (31.1%)	49 (19.5%)	11 (4.4%)	15.1pt	13.5pt
反映	67 (26.3%)	104 (40.8%)	25 (9.8%)	59 (23.1%)	-13.3pt	-14.5pt
解消	73 (28.1%)	115 (44.2%)	14 (5.4%)	57 (21.9%)	-16.5pt	-16.1 pt
固定	75 (30.0%)	116 (46.4%)	14 (5.6%)	44 (17.6%)	-12.0pt	-16.4pt
更新	83 (32.3%)	117 (45.5%)	4 (1.6%)	48 (18.7%)	-17.1pt	-13.2pt
展開	93 (36.9%)	121 (48.0%)	3 (1.2%)	35 (13.9%)	-12.7pt	-11.1pt

上記の表によると、「回復」と「完成」は、自動詞のほうがやや多く使われている。その分、「サレル」の使用が僅かである。一方、他動詞の数が少数であるが、その分、「サセル」の使用数が増えている。それに対して、「反映」「解消」「固定」「更新」「展開」は、他動詞のほうがやや多く使われて、「サセル」の方が少数である。特に、「更新」と「展開」はわずかしかない。一方、自動詞のほうが少なく使われている。その分、「サレル」はやや多く使われている。特に、「反映」と「解消」には、「自動詞」と「サレル」との間に大きな差が見られない。「CとDの比率差」および「AとBの比率差」の両数値は非常に近い。以上のことから、自他両用の漢語サ変動詞について、自動詞と「サレル」の使用数、他動詞と「サセル」の使用数は、相補的な関係をなしているといえる。

次は自他の使用率の差が5pt以下の語を見てみる。

語	A 自動詞	B 他動詞	C サセル	D サレル	CとD 比率差	AとB 比率差
結合	112 (42.6%)	111 (42.2%)	23 (8.7%)	15 (5.7%)	3.0pt	0.4pt
確定	103 (39.9%)	104 (40.3%)	24 (9.3%)	27 (10.5%)	-1.2pt	-0.4pt

終了	118 (47.4%)	116 (46.6%)	8 (3.2%)	7 (2.8%)	0.4pt	0.8pt
実現	103 (40.1%)	100 (38.9%)	33 (12.8%)	21 (8.2%)	4.6pt	1.2pt
拡大	106 (40.2%)	114 (43.2%)	17 (6.4%)	26 (9.8%)	-3.4pt	-3.0pt
決定	111 (43.2%)	119 (46.3%)	6 (2.3%)	21 (8.2%)	-5.9pt	-3.1pt
完了	115 (45.1%)	105 (41.2%)	25 (9.8%)	10 (3.9%)	-5.9pt	-3.9pt
解決	108 (42.2%)	118 (46.1%)	8 (3.1%)	22 (8.6%)	-5.5pt	-3.9pt
接続	105 (40.5%)	116 (44.8%)	13 (5.0%)	24 (9.3%)	-4.3pt	-4.2pt
停止	110 (43.7%)	121 (48.0%)	4 (1.6%)	17 (6.7%)	-5.1	-4.4pt
継続	110 (44.0%)	122 (48.8%)	3 (1.2%)	15 (6.0%)	-4.8	-4.8pt

上記の表は、自動詞と他動詞の使用率が 5pt 以下の語である。つまり、これらの自他両用の漢語動詞は、自動詞と他動詞の使用数に大きな差がない。母語話者の中では、これらの動詞について、自動詞用法と他動詞用法が偏りなく使われていると思われる。また、「サセル」と「サレル」との間には大きな差が見られない。全体的に見ると、「A と B の比率差」および「C と D の比率差」の両数値は非常に近い。

そのうち、「確定」と「終了」には、「サセル」と「サレル」の比率差はわずか 1pt 前後である。「決定」「完了」「解決」「停止」には、「サセル」と「サレル」の比率の差は 5pt を超えて、やや大きく見える。

自他動詞の使用率の差が 10pt 以上を持つ語と同様に、使用数においては、自動詞と「サレル」、他動詞と「サセル」は相補的な関係をなしていることがわかる。

語	A 自動詞	B 他動詞	C サセル	D サレル	C と D 比率差	A と B 比率差
確立	105 (38.9%)	121 (44.8%)	18 (6.7%)	26 (9.6%)	-2.9pt	-5.9pt
集中	116 (46.6%)	93 (37.3%)	30 (12.0%)	6 (2.4%)	9.6pt	9.3pt

「確立」と「集中」について、自他動詞の使用率の差は、5～10ptである。「確立」は他動詞のほうがやや多く、「集中」は自動詞のほうがやや多く使われているが、その分、それぞれ、「サレル」と「サセル」の使用数はやや増えている。前のグループと同様に、「C と D の比率差」および「A と B の比率差」には近い数値を持っている。自動詞と「サレル」、他動詞と「サセル」は相補的な関係をなしていることの証明である。

以上の内容をまとめてみると、母語話者のアンケートにより、自他両用の漢語動詞は、以下のような分布特徴を示している。

第一、BCCWJ においては大きなゆれが見られる漢語動詞であるが、アンケートでは、自動詞と他動詞の使用数には大きな差が見られない。その使用頻度の差は語によって違う程度を呈しているが、大きな差は 16pt 前後であり、小さな差は 0.4pt 前後である。

第二、BCCWJ においては様々なゆれ方が見られる漢語動詞であるが、アンケートでは、自動詞と「サレル」の使用数、および他動詞と「サセル」の使用数は、相補的な関係をなしているという使用上の特徴はすべての動詞に観察されている。

8. まとめ

本章では、国語辞書において自他両用とされる二字漢語サ変動詞に注目し、それらの動詞の用法について、以下の3点を明らかにした。

第一、国語辞書において「自他両用」と判定される二字漢語サ変動詞がすべて「対格構文 vs 非対格構文」という対応関係をなしているわけではない。

第二、「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立しない動詞には、「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係が成立する動詞、二格を取る自動

詞用法を併せ持つ動詞、ヲ格を取る他動詞用法が実際に見られない動詞が含まれている。

第三、「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係が成立する自他両用の二字漢語サ変動詞のうち、「自他両用」とはいえ、自動詞専用の傾向にあるもの(「消滅」「減少」「増加」など)が存在し、他動詞専用の傾向があるもの(「開始」「破壊」など)も存在する。

このような傾向を示す理由は、個々の自他両用の漢語動詞の表す典型的な事態の違いにあると考えられる。自動詞専用の傾向を示す動詞は自然に起こる事象を典型的に描写し、変化結果を表しやすい。それに対して、他動詞専用の傾向を示す動詞は他によって引き起こされる他動的な事態を典型的に描写し、使役作用を表しやすい。人間は、現実が発生した事態に対する認識の違いによって、自動詞か他動詞かを選別する。その認識は自然的に生まれてくるものである。

最後に、母語話者に対して、アンケート調査により、BCCWJでは見られない特徴が確認できた。

第一、BCCWJにおいては大きなゆれが見られる漢語動詞であるが、アンケートではその使用頻度の差は語によって違う程度を呈している。しかし、自動詞と他動詞の使用数には大きな差が見られない。

第二、BCCWJにおいては様々なゆれ方が見られる漢語動詞であるが、アンケートでは、自動詞と「サレル」の使用数、および他動詞と「サセル」の使用数は、相補的な関係をなしているという特徴がすべての動詞に観察されている。これは BCCWJ では専用の傾向にある漢語動詞のみ見られる特徴である。

第三章参考文献

青木伶子 (1977)「使役-自動詞・他動詞との関わりにおいて」『成蹊国文』

10、pp. 26-39、成蹊大学文学部日本文学科

池上嘉彦 (1981)『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店

江口泰生 (1989)「漢語サ変動詞の自他性と態」奥村三雄教授退官記念論文集刊行会(編)『奥村三雄教授退官記念 国語学論集』pp. 765-784、桜楓社

- 奥津敬一郎 (1967)「自動化・他動詞および両極化転形-自・他動詞の対応」
『国語学』70、pp. 46-66、国語学会
- 影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 佐藤琢三 (2005)『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
- 須賀一好・早津恵美子(編)(1995)『動詞の自他』ひつじ書房
- 永澤済 (2007)「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」『日本語の
研究』3-4、pp. 17-32、日本語学会
- 野村剛史 (1982)「自動・他動詞・受身動詞について」『日本語・日本文化』
11、須賀一好・早津恵美子(編)(1995)『動詞の自他』に再掲、pp. 137-150
ひつじ書房
- 早津恵美子 (2016)『現代日本語の使役文』ひつじ書房
- 森田良行 (1994)『動詞の意味論的文法研究』明治書院
- ヤコブソン、ウェスリー・M (1989)「他動性とプロトタイプ論」『日本語
学の新展開』くろしお出版 須賀一好・早津恵美子 (1995)『動詞の自
他』に再掲、pp. 166-178、ひつじ書房
- 楊尙郎 (2010)「国語辞典における自他認定について:自他両用の二字漢語
動詞を中心に」『筑波日本語研究』14、pp. 75-95、筑波大学文芸・言語
研究科日本語学研究室

国語辞書

- 『明鏡国語辞典 携帯版』大修館書店
- 『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店
- 『岩波国語辞典 第六版』岩波書店
- 『学研現代新国語辞典』学習研究社

第四章 自動詞専用の傾向を示す自他両用の二字

漢語サ変動詞の他動詞用法

0. はじめに

前章では、国語辞書において「自他サ変」とされる二字漢語サ変動詞を中心に、各動詞が「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係を持つか否かについて考察した。その結果、「対格構文 vs 非対格構文」との対応関係を持つ動詞を、186 個を選別した。また、その中には、自動詞専用の傾向を示すもの(「消滅」「増加」「減少」など)と、他動詞専用の傾向を示すもの(「開始」「破壊」など)があることが判明した。自動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語サ変動詞は自動詞用法が優勢、他動詞用法が劣勢となるものである。

本章では、自動詞専用の傾向を示す自他両用動詞を対象とする。他動詞の使用が劣勢となっているこの種の動詞は、他動詞用法に制限が見られるか否か、仮にあるとしたら、そのような制限を呈した理由について検討する。

1. 先行研究

1.1 影山 (1996) に始まる先行研究

影山 (1996) は、自他両用動詞に関しては、「他動詞をもとにして、そこから反使役化¹によって自動詞が派生されているものと思われる」

¹ 影山 (1996) の「概念構造における反使役化 (anti-causativization)」

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT -z]]]

→[x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT -z]]]

(影山 1996: 145)

「使役主(x=y)が変化対象(y)と同定され、意味的に束縛される。この操作を反使役化と名付ける。束縛を受けた使役主は対象物と同一物であることが意味構造で保証されるから、統語構造には現れない」(影山 1996: 145) ということである。

(p.203) と主張したうえで、他動詞を基本とする根拠を二つ挙げている。一つ目の根拠は、「自他両用動詞が何等かの使役主を含意していること」(p.203) である。例えば、以下のようなアスペクト的な意味を表す動詞は、「意図的な活動が対象となり、逆に、自然発生の事象はこれらの動詞で描写することができない」(p.203) ということである。

- (1) a. 会議を終了する／会議が終了する
- a'. *梅雨を終了する／ *梅雨が終了する
- b. 操作を継続する／操作が継続する
- b'. *伝染病を継続する／ *伝染病が継続する

(影山 1996: 203)

二つ目の根拠は、「他動詞用法と自動詞用法では自動詞用法のほうに意味的・認知的制限が観察される」(p.203) ことである。例えば、

- (2) a. ナポレオンがフランス領土を拡大した。
- a'. フランス領土が拡大した。
- b. コピー機を使って、図面を拡大した。
- b'. *(コピー機で) 図面が拡大した。

(影山 1996: 203)

影山は、「変化対象の自力ないし内在的コントロールが認められる場合だけ自動詞が成り立っている」(p.204) と説明した。ほかに、「分解する」「変形する」「再生する」の例文も挙げた。

金英淑 (2004; 2006) は、影山 (1996) に対して反例を示し、自他両用の漢語サ変動詞はすべて自動詞用法に制限があるわけではなく、他動詞用法に制限が見られる動詞もあると指摘した。また、他動詞用法に制限が見られる漢語サ変動詞は自動詞から他動詞への派生方向を示していると主張した。

例えば、「回復する」は、(3A)のように「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係を持つ自他両用の漢語サ変動詞である。しかし、(3Bb)と(3Cb)の他動詞文は成立せず、他動詞用法に制限が見られることが分かる。

- (3) A: a.イラクとの国交が回復した。
 b.ヨルダンがイラクとの国交を回復した。
 B: a.景気が回復した。
 b. *経済学者が景気を回復した。
 C: a.患者の意識が回復した。
 b. *医者が患者の意識を回復した。

(金 2004: 91-92)

金 (2004; 2006) はこの制限について、「再帰的な関係」を用いて説明した。つまり、(3Ab)の成立する理由は主語と目的語との間に「再帰的な関係」(ヨルダンの国交)が存在するためであるとする。他方、(3Bb)と(3Cb)は主語と目的語の間に「再帰的な関係」(*経済学者の景気)(#医者の意識)が存在しないため、他動詞文は成立しない。

また、金 (2004; 2006) は目的語をモノ名詞とコト名詞の二種類に分けて、「再帰的な関係」について詳しく考察した。

モノ名詞の第一種類は、目的語が主語の身体部位や所有物を表すものである。例えば、

- (4) A: a.肺ガンが発症した。
 b.患者が肺ガンを発症した。(患者の肺ガン)
 B: a.態度が一変した。
 b.その政治家が態度を一変した。(政治家の態度)
 C: a.記憶が喪失した。
 b.花子が記憶を喪失した。(花子の記憶)
 D: a.仕事に全神経が集中した。
 b.花子が仕事に全神経を集中した。(花子の全神経)
 E: a.社屋が全焼した。
 b.(昨日の火事で) 会社が社屋を全焼した。(会社の社屋)
 F: a.財布が紛失した²。

² 「紛失する」に関しては、金 (2006) は、(1)のように、「花子の財布」という「再帰的な関係」が存在しないにも関わらず、他動詞文が成立すると指摘している。

b.太郎が財布を紛失した。(太郎の財布)

(金 2006: 29-30)

(4)では、他動詞文の目的語は、主語の身体部位や所有物だと思われる。主語と目的語との間に「再帰的な関係」が存在するため、他動詞文が成立する。

それに対して、主語と目的語の間に「再帰的な関係」が存在しない場合は、他動詞文が成立しない。

(5) A: a.肺がんが発症した。

b. *過度な喫煙が肺ガンを発症した。(*過度な喫煙の肺ガン)

B: a.太郎の態度が一変した。

b. *花子が太郎の態度を一変した。(#花子の態度)

C: a.太郎の記憶が喪失した。

b. *花子が太郎の記憶を喪失した。(#花子の記憶)

D: a.仕事に全神経が集中した。

b. *花子が仕事に太郎の全神経を集中した。(#花子の全神経)

E: a.隣家が全焼した。

b. *少年が隣家を全焼した。(#少年の隣家、少年の家 ≠ 隣家)

(金 2006: 30-31)

モノ名詞の第二種類は、主語と目的語の間に組織的な上下関係がある場合である。例えば、

(6) A: a.子会社が解散した。

b. A 社が子会社を解散した。(A 社の子会社)

(1) a.太郎の財布が紛失した。

b.花子が太郎の財布を紛失した。

(金 2006: 30)

金 (2004; 2006) によれば、主語の「花子」と目的語の「太郎の財布」との間に、「一時的な所有関係が生じているため、再帰性が働いている」という。

- B: a. B 社の子会社が解散した。
b. *A 社が B 社の子会社を解散した。(＃A 社の子会社)
(金 2006: 31)

(6Ab)は、主語と目的語との間に「再帰的な関係」(A 社の子会社)が存在しているため、他動詞文が成立する。一方、「再帰的な関係」が存在しない(6Bb)は非文となる。

目的語がコト名詞の場合は、(7)のように、主語と目的語との間に「再帰的な関係」が見られる。

- (7) A: a. 試合が中断した。
b. 選手たちが試合を中断した。(選手たちの試合)
B: a. ローンの返済が完了した。
b. 太郎がローンの返済を完了した。(太郎の返済)
C: a. システム管理が停止した。
b. 会社がシステム管理を停止した。(会社のシステム管理)
(金 2006: 32)

同じく、(8)のように、主語と目的語との間に「再帰的な関係」が存在しない場合は、他動詞文は成立しない。

- (8) A: a. 隣の試合が中断した。
b. *選手たちが隣の試合を中断した。(＃選手たちの試合)
B: a. 太郎のローンの返済が完了した。
b. *花子が太郎のローンの返済を完了した。(＃花子の返済)
C: a. B 社のシステム管理が停止した。
b. *A 社が B 社のシステム管理を停止した。
(＃A 社のシステム管理)
(金 2006: 32)

他動詞の成立に関わる重要な条件である「再帰的な関係」について、金(2006)は、(9)のように規定している。

- (9) a. 回復 喪失 一変 紛失 全焼 集中 発症 解散 中断
 停止 結束 完了 終了 復活 等(「する」省略)
- b. a の他動詞用法が可能な場合、主語と目的語の間には再帰性、再帰的な関係が存在する。また、そのような関係が存在しない場合、他動詞文は成立しない。
- c. 再帰性、再帰的な関係とは、行為、あるいは変化の結果を被るイベントの範囲が主語に限られる性質であり、具体的には、目的語が主語の身体部位や所有物、組織における上下関係のようなモノ名詞の場合、あるいは主語が携わるイベントのようなコト名詞の場合である。
- d. a の「VN する」は自動詞用法に比べ他動詞用法に相対的な制限があり、L&RH³の派生の説明にしたがうと、自動詞用法をもとにして他動詞用法を派生させると捉えることができる。

(金 2006: 56)

金英淑 (2006) は、目的語の意味特徴によって、モノ名詞とコト名詞に分けて「再帰的な関係」を詳しく分析した。しかし、目的語の意味特徴(モノなのか、コトなのか)と「再帰的な関係」との関連性、及び目的語の意味と他動詞文の成立との関連性があるか否かについて論じていない。

また、漢語動詞の他動詞文における主語の意味役割について、金 (2006) は、以下のような「経験者」主語と「動作主」主語の区別があると指摘した。

- (10) a. 太郎が {素早く/わざと} 問題を解決した。<動作主>
 b. 太郎が {*素早く/*わざと} 意識を回復した。<経験者>

(金 2006: 43)

金 (2006) によれば、「解決する」の主語は、「意志性をもって行為を行

³ Beth Levin and Malka Rappaport Hovav (1995) Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface, MIT Press, Cambridge, MA.

う者」であり、「回復する」の主語は、「心理的な変化を被るもの、あるいは非意図的なイベントが行われる場としての経験者」であり、それぞれ「動作主」と「経験者」として捉える。

しかし、金 (2006) は、(9a)の漢語動詞は、他動詞文の主語はすべて「経験者」の意味役割になるわけではなく、「動作主」主の意味役割を持つ語も存在する⁴と指摘し、一つの問題点として残されている。例えば、

- (11) A: a. 子会社が解散した。
 b. A 社がわざと子会社を解散した。
 B: a. システムが停止した。
 b. 会社がわざとシステムを停止した。
 C: a. 試合が中断した。
 b. 選手たちがわざと試合を中断した。

(金 2006: 44)

(11)のように、同じ他動詞用法に制限が見られた漢語動詞でも、主語の

⁴ 金 (2006) では、「経験者」主語の例を以下のように挙げているが、「集中、結束、完了、終了、復活」の例文を挙げていない。

- (2) A: a. 意識が回復した。
 b. 患者が意識を {*素早く/*わざと} 回復した。
 B: a. 記憶が喪失した。
 b. 花子が記憶を {*素早く/*わざと} 喪失した。
 C: a. 肺ガンが発症した。
 b. 患者が肺ガンを {*素早く/*わざと} 発症した。
 D: a. 財布が紛失した。
 b. 太郎が財布を {*素早く/*わざと} 紛失した。
 E: a. 態度が一変した。
 b. その政治家は態度を {*素早く/*わざと} 一変した。
 F: a. 社屋が全焼した。
 b. 会社が社屋を {*素早く/*わざと} 全焼した。

(金 2006: 44)

意味役割に関して、「動作主」と「経験者」との二種類の性質を呈している。その理由、及び主語の性質と「再帰的な関係」との関係について、金 (2006) では触れなかった。

楊高郎 (2007) は、金 (2004; 2006) が取り上げている「再帰性」や「再帰的な関係」の概念について、その基準が曖昧であり、何を「再帰性」と定義すべきかが難しいという疑問を提示し、以下の問題点を指摘した⁵。

- (12) A: a.原油生産が半減した。
b.アラブ産油国が原油生産を半減した。
B: a.収入が半減した。
b. *太郎が収入を半減した。(太郎の収入)

(楊 2007: 70)

(12A)からは、「半減する」は自他両用動詞の漢語サ変動詞であることが分かる。(12Bb)のように、他動詞用法に制限が存在する。しかし、(12Bb)では「太郎の収入」という「再帰的な関係」が存在するにもかかわらず、他動詞文は成立しない。

- (13) a.国民の要求が実現した。
b.政府が (税率の引き下げという) 国民の要求を実現した。
(*政府の要求)

(楊 2007: 71)

また、(13b)では「*政府の要求」という所属関係がみられないにもかかわらず他動詞文が成立しているが、この場合は、「国民」は「政府」の構成員としてその中に所属するもの」として、金 (2004; 2006) による「再帰的な関係」と解釈してよいか否かという問題を、楊 (2007) は指摘した⁶。

⁵ 金 (2004; 2006) と楊 (2007) は、「再帰的な関係」を判定する際に、主に「N₁ (主語)の N₂ (目的語)」構文を基準としている。

⁶ (12)の「半減する」はBCCWJにおいて自動詞専用の傾向を示す動詞であるが、(13)の「実

楊 (2007) は、金 (2004; 2006) の「再帰的な関係」の曖昧の問題点を指摘したが、その曖昧性を解決する方法について触れていない。(12B)の他動詞文の不成立の理由や、(13B)の他動詞文の成立の理由について論述していない。

結論として、楊 (2007) は、自他両用の漢語サ変動詞を以下の三つのパターンに分けた。

(14) a.自動詞から他動詞が派生される動詞:

「回復する」「半減する」「増加する」

b.他動詞から自動詞が派生される動詞:

「解決する」「拡大する」「分解する」

c.自動詞と他動詞が同等に働く動詞:

「停止する」「中断する」

(楊 2007: 71)

以上は、影山 (1996) をはじめとする漢語サ変動詞の自・他動性をめぐる研究である。これらの研究は、自他両用の漢語サ変動詞の自・他動詞の派生方向を判定したものである。判定の方法は、自・他動詞のうちに、用法に制限が見られるほうは派生される側とするのである。影山 (1996) は自他両用の漢語動詞は他動詞から自動詞への派生方向を示した。また、金 (2004; 2006) は、自動詞から他動詞への派生方向を示す漢語動詞もあると論述した。さらに、楊 (2007) は、自動詞と他動詞が同等に働く動詞との種類の漢語動詞も存在すると指摘した。

しかし、上記の研究に関して、いくつかの疑問点が残されている。

第一、影山 (1996)、金 (2004; 2006) と楊 (2007) 一連の研究は、自・他動詞の用法に、どちらかに制限が見られることによって動詞の派生方向を判定するものである。しかし、同じ動詞には違った派生方向を示した結果になっている。例えば、金 (2006) は、他動詞文の成立に「再帰的な関係」という制限があるため、「中断する」を「自動詞から他動詞への派生

現する」は、BCCWJ において自動詞専用の傾向が見られず、必ず他動詞用法に制限がある動詞だとは限らない。

方向」を示す動詞としている。

- (15) A: a.試合が中断した。 (=7A)
b.選手たちが試合を中断した。(選手たちの試合)
B: a.隣の試合が中断した。 (=8A)
b. *選手たちが隣の試合を中断した。(選手たちの試合)
(金 2006: 32)

しかし、楊 (2007) は、「中断する」は(16)の用法を持つゆえに、「中断する」を「自動詞と他動詞が同等に働く動詞」としている。

- (16) a.試合が中断した。
b.選手たちが試合を中断した。
c.選手たちが試合を中断させた。
d.監督が選手たちに試合を中断させた。
(楊 2007: 79)

楊 (2007) は、金 (2006) に基づいて、他動詞文のみならず、さらに受身文と使役文も視野に入れて考察した。「中断する」は「操作使役と直接使役の両方とも表すことができる」⁷ため、「中断する」を「自動詞と他動詞が同等に働く動詞」としたのである。以上のとおり、先行研究では、自動詞と他動詞の派生方向の判別にゆれが出ている。

第二、主語と目的語の意味性質について、金 (2004; 2006) では、それぞれ「経験者」主語と「動作主」主語、「モノ名詞」の目的語と「コト名詞」の目的語との2種類に分けて考察した。金 (2004; 2006) は、他動詞

⁷ 金 (2006) は、Shibatani の使役システムに基づいて、漢語動詞の使役用法について考「操作使役」と「直接使役」の面から考察した。「操作使役」と「直接使役」の特徴はそれぞれ以下である。

- (3) 操作使役: 太郎が花瓶を壊した。 <被使役者: 対象> <形態:不規則>
直接使役: 太郎が花子を止まらせた。 <被使役者: 動作主> <形態:させ>
(金 2006: 113 により、一部改)

用法に制限がある漢語動詞は、「経験者」主語を持つものが多いと指摘したが、(11)のような「動作主」主語を持つ動詞の存在は一つの問題点として残された。

第三、主語と目的語の関係について、金 (2004; 2006) では、主語と目的語との間に「再帰的な関係」が存在する場合に、他動詞文が成立すると主張した。しかし、楊 (2007) が指摘したように、(12)には、他動詞文に「再帰的な関係」があるにも関わらず、他動詞文は成立しない。つまり、他動詞文の用法に見られた制限は、「再帰的な関係」で説明できないところがあると考えられる。

以上の問題意識に基づいて、本研究は、自動詞と他動詞の派生方向を視野に入れず、BCCWJにおける実例をもとにして考察を進む。先行研究は理論的な立場から自他両用の漢語動詞の自他派生を究明するものといえるならば、本研究は使用実態の角度から考察するものだといえる。ただし、使用実態に基づくとはいえ、先行研究の理論的な考察方法を否定するわけではない。

次の節では、先行研究で扱った「動作主」主語と「経験者」主語に関する研究を概観する。

1.2 天野 (1987) に始まる先行研究

天野 (1987) は、以下のような他動詞文を「状態変化主体の他動詞文」としている。

- (17) a. 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。
- b. 勇二は教師に殴られて前歯を折った。
- c. 気の毒にも、田中さんは昨日台風で屋根を飛ばしそうだ。
- d. ジョンは、思わず窓に手をつけて、窓をこわしてしまった。
- e. 岡村はぼんやりして煙草の灰をこぼしてしまった。
- f. 母は買った品物をうっかり店に置いてきてしまった。

(天野 1987: 109)

天野 (1987) によれば、(17a)(17b)(17c)の主体は動きや出来事の引き起こし手ではない。(17d)(17e)(17f)は、主体の意図的に引き起こした結果事

態ではないが、主体は引き起こし手である。

このように、天野 (1987) は、引き起こし手の主体を「経験者 a」を、引き起こし手でないものを「経験者 b」と名付けて、「経験者 a」と動作主と原因と同じように扱う。

- (18) 主体—引き起こし手であるもの—動作主・原因・経験者 a
引き起こし手でないもの—経験者 b

(天野 1987: 108)

また、天野 (1987) は、「状態変化主体の他動詞文」の成立条件を(19)のように規定している。

- (19) 条件 1: 状態変化主体の他動詞文を作る他動詞は、主体の動きと客体の変化の二つの意味を含む他動詞である。
条件 2: 状態変化主体の他動詞文のガ格名詞とヲ格名詞は、全体部分の関係にある。

(天野 1987: 106)

さらに、(19)の条件 2 における「全体部分の関係」について、(20)のように規定している。

- (20) X は X を様々な側面から眺めることによって、様々な特徴付けられる。こうした特徴付けの総体 X を「全体」とし、特徴付けの側面を「部分」とする。Y が、総体 X の特徴付けの側面の一つであるとき、X と Y とは「全体部分の関係」にあるという。

(天野 1987: 103)

具体的には、「特徴付けの側面 Y には、X の部分、X の持ち物、X の生産物」があり、「X が主体や客体として関わるコトを表す動作名詞」もあるということである。

天野 (1987) は、他動詞文を主体の意味によって表 1 のように分ける。

田川 (2002; 2003) は、先行研究に基づき、意味論の立場から、「動作主」を(23)の下位分類があると指摘した。

- (23) 動作主 太郎が花子をなぐった。
自然現象 霧が太郎の視界をさえぎった。
道具 小石が蟻の巣穴を塞いだ。
原因 過渡の野心が彼の寿命を縮めた。

(田川 2003: 9)

田川 (2002) は、「動因性」「現実性」「意図性」⁸という三つの意味素性から、動作主の要素を以下のようにまとめた。

- (24) A: 動作主
a. 動因性 [+]
b. 現実性 [+]
c. 意志性 [+]
B: 自然現象、道具
a. 動因性 [+]
b. 現実性 [+]
c. 意志性 [-]
C: 原因
a. 動因性 [+]
b. 現実性 [-]
c. 意志性 [-]

(田川 2003: 10-11)

⁸ 動因性: 当該の要素が事象を引き起こす第一要素であるかどうか。

任意の要素が動因性を持つとき、その要素は動作主としての資格を持つ。

現実性: 当該の要素が現実の世界において具体的な動きを伴うかどうか。

意志性: 当該の要素が意志性を持つかどうか。

(田川 2002: 50-51)

また、状態変化主体の他動詞文について、田川 (2003) は、「動因者」という用語を用いて、「他動詞の主語位置と対応する」ものとする。田川 (2003) によれば、「動作主、経験者 a、原因は全て「動因者」であり、「状態変化主体は「被影響者」である。両者は事象への関わり方において正反対の性質を持つと指摘した。

- (25) a. [動因者] → 事象
b. [被影響者] ← 事象

(田川 2003: 70)

さらに、田川 (2003) は、天野 (1987) で扱った「状態変化主体の他動詞文」について、「被影響者」⁹という概念を使い、天野 (1987) の記述に合わせて、「被影響者」他動詞文の特徴を以下のようにまとめた。

(26) [被影響者] 他動詞文の特徴

- a. ガ格句は状態変化の主体というより、[被影響者]と呼ばれる要素である。
- b. [被影響者]の解釈が成立するためには、述語が主体の動きと客体の変化の両方の意味を含む他動詞でなくてはならない。
- c. [被影響者]の解釈が成立するためには、ガ格句とヲ格句の間に、所有関係のような何らかの意味的關係が成り立っていないとなければならない。
- d. b と c の条件を満たした場合、その他動詞文は、ガ格句が[動因者]である解釈と[被影響者]である解釈を持ち、曖昧 (ambiguous)である。しかし、[動因者]である原因のデ句が生起すると、ガ格句の解釈は[被影響者]に固定される。
- e. [被影響者]他動詞文のガ格句は主題のような要素でも大主語でもなく、他動詞文の主語であると考えて良い。

⁹ 被影響者: 事象 (event) から受動的に影響を被る個体。

田川 (2003) は、「被影響者」という概念は、「少なくとも天野の「状態変化主体」という概念と同程度かそれ以上に自然な捉え方である」とする。(田川 2003: 64)

(田川 2003: 69)

(26d)と(26e)は田川 (2003) による記述であり、(26d)に関して、以下のよう
な曖昧性のある例を挙げた。原因のデ句の使用によって、曖昧性がなくな
る。

- (27) a. 太郎が家を焼いた。
b. [動因者]解釈: 太郎が「家が焼ける」という事象を引き起こし
た。
c. [被影響者]解釈: 太郎が「家が焼ける」という事象によって影
響を受けた。
- (28) a. 太郎が空襲で家を焼いた。
b. 太郎が台風で家の屋根を飛ばした。
c. 太郎が嵐でマストを一本折った。

(田川 2003: 67)

最後に、(26e)について、田川 (2003) は、日本語の二重主格文との相違
によって、[被影響者]他動詞文のガ格句は主題のような要素でも大主語で
もなく、他動詞文の主語であることを証明した。

例えば、二重主格文は概略[NP₁ ガ [NP₂ ガ述語]]というような構造を持
っているので、[NP₁ ガ 述語]という構造を作ることが許されないが、[被
影響者]他動詞文には許される。

(29) 二重主格文

A: 連体修飾

- a. 鼻が長い象
b. *象が長い鼻
c. 息子がけがをした太郎
d. *太郎がけがをした息子

B: 分裂文

- a. 鼻が長いのは象だ。

- b.*象が長いのは鼻だ。
- c.息子がけがをしたのは太郎だ。
- d.*太郎がけがをしたのは息子だ。

(30) 被影響者他動詞文

A: 連体修飾

- a.空襲で家を焼いた太郎
- b.太郎が空襲で焼いた家
- c.嵐でマストを折った太郎
- d.太郎が嵐で折ったマスト

B: 分裂文

- a.空襲で家を焼いたのは太郎だ。
- b.太郎が空襲で焼いたのは家だ。
- c.嵐でマストを折ったのは太郎だ。
- d.太郎が嵐で折ったのはマストだ。

(田川 2003: 68-69)

以上は、日本語における「状態変化主体の他動詞文」に関する研究である。漢語動詞の他動詞文に関しては、金 (2004; 2006) が指摘した「経験者」主語の他動詞文は、「状態変化主体の他動詞文」である。したがって、本稿は、これらの先行研究を参考しつつ、漢語動詞の他動詞文は「経験者」主語を持つ場合、その成立条件について考察する。

1.3 西村 (1998) に始まる先行研究

この節では、認知言語学において他動詞文に関する研究を概観する。主に西村 (1998) の「使役構文」「無生物使役構文」「意図しない結果を引き起こす使役構文」に関する論述を概観する。

西村 (1998) は以下 (31A) の例文を使役構文と称する。

- (31) A: a. I opened the door.
 b. 私はドアを開けた。
 B: a. The door opened.

b. ドアが開いた。

(西村 1998: 120)

西村 (1998) によれば、(31A)と(31B)の間では、前者が後者を意味として含む関係にあり、(31A)の表す事態が生じていれば、(31B)の表す事態が必ず生じる。主語の行為と目的語の変化をそれぞれ事態(X)と事態(Y)で表すと、両者の間に、「Xが原因となってYが生じるという因果関係が成立している」(p.120) ことが分かる。「因果関係」は使役構文の成立に重要な要素の一つである。

西村 (1998) は、使役構文及び(使役)行為者のプロトタイプを(32)(33)のように規定したうえで、典型的な使役行為の特性として、<意図> <行為> <結果> <責任>という四つの素性があると指摘している。

(32) 使役構文のプロトタイプ

- A. 行為者(人間)は行為対象に(位置、状態などにおける)何らかの変化を生じさせることを目標としている。
- B. 行為者は A の目標を達成するために何らかの身体的な動作を行為対象に対して行う。
- C. 行為者はその身体的動作をコントロールしている(他者等に強制されているわけではない)。
- D. B の動作によって、行為者から行為対象にエネルギーが伝達された結果、後者に A の目標通りの変化が直ちに生じる。
- E. B の動作の実行およびその結果行為対象に生じる D の変化の主たる責任は行為者に帰せられる。

(西村 1998: 124)

(33) <(使役)行為者>のプロトタイプ

自らの力ないしエネルギーを、意図的にかつ自らの責任において用いることによって、<対象>の位置ないし状態に何らかの変化を生じさせる目標を達成する人間である。

(西村 1998: 125)

また、下記のような無生物主語の使役構文について、

(34) a. This book gives you some idea of life in Ancient Greece.

cf. I gave you that idea.

b. That argument didn't convince her.

cf. How can I convince her?

(西村 1998: 142-143)

西村 (1998) は、「無生物主語」は、特定の事態を引き起こす(比喩的なものも含めた) <基礎行為>に相当するふるまいを示す主体として捉えることができるという点が、<使役行為者>のプロトタイプと共通していた¹⁰(p.143) と指摘した。これは、「無生物を<(使役)行為者>として『擬人化』する過程が関わっている」(p.142) ため、「<行為>の概念のメタファーによる拡張である」(p.142) と主張する。

最後に、意図しない結果を引き起こすことを表す使役構文について、

(35) a. John broke the window while playing catch with a friend.

b. 太郎は友達とキャッチボールをしていて窓を壊した / 壊して
しまった。

(西村 1998: 162)

(35)は、行為者が意図的に結果を引き起こしたわけではないが、使役主

¹⁰ 西村 (1998) は、「I opened the door. / 私はドアを開けた」を例に、基礎行為と使役行為について説明を行った。「ドアを押す」と「ドアを開ける」との二つの行為をそれぞれ X と Z、と呼び、「ドアに対する『押す』などの行為とは別にドアを『開ける』という行為が行われたのではない」のである。しかし、「ドアを『押す』という行為の結果、そのドアが『開く』ということが起これば、その行為はドアを『開ける』という行為で(も)ある。」(p.123) つまり、「X と Y との間に(ある種の)因果関係が成立すれば、その X は Z で(も)ある」ということである。この場合、「X を行うことが Z を遂行することに(も)なるという関係にある X と Z」(p.123) をそれぞれ「基礎行為 (basic action)」と「使役行為 (causative action)」と呼ぶ。

体に<責任>を問うことができる。西村 (1998) は、意図しない結果を表す使役構文とプロトタイプの使役構文から、使役構文の意味のスキーマを以下のように抽出した。

(36) 使役行為のスキーマ

W (主語)が意図的に遂行する行為 X の直接の結果として、Y (目的語)に(含意される)変化 Z が生じる

(西村 1998: 163)

西村 (1998) は、(36)のスキーマを<使役行為>のスキーマ、W を<使役行為者>のスキーマ、X を<基礎行為>のスキーマと呼んでいる。西村 (1998) は、意図しない結果を表す使役構文におけるプロトタイプ的でない主語は、使役構文の主語と共通する<責任>のスキーマを特徴づけるものであり、「W は Z に対する<責任>の主体」(p.163)である。このような使役構文の成立する理由は、「人は自ら意図的に行った行為の直接の結果に対して、その結果自体を意図したか否かにかかわらず、何らかの責任を問われる」(p.163) ためである。例えば、

(37) a. George dropped the dish (accidentally / inadvertently).

b. 靖は(うっかり / 思わず)皿を落とした / 落としてしまった。

(西村 1998: 164)

(37)では、主語(「靖」)が意図的に行為(「皿を落とした」)を行ったわけではない。しかし、主語「靖」は結果事態「皿を落とした」を引き起こした責任を持っている。

西村 (1998) は、意図しない結果事態 Z について、「W(主語)が Z の生起を阻止すべく行為 X'を遂行することができる立場にあるのにそれを遂行しないこと」(p.165) で、「『X'を遂行する』『X'を遂行しない』という可能な選択肢のうち後者を意図的に選択することで、プロトタイプの使役構文と等価である」(p.165) と指摘した。

姚艷玲 (2018) は、西村 (1998) に基づき、日本語における「N- が N-を Vt」構文のカテゴリー化について考察した。そこでは(38)に示した 5 種

類の例文が扱われる。

- (38) a. 太郎が庭の落ち葉を焼いた。
b. 太郎が(業者に依頼して)工場のゴミを焼いた。
c. 太郎が不注意から家の倉庫を焼いた。
d. 太郎が空襲で家財道具を焼いてしまった。
e. 火が原^マ一面の草を焼いた。

(姚 2018: 111)

姚 (2018) は、(38a)のような「N-が N-を Vt」構文が、〈意図〉 〈行為〉 〈結果〉 〈責任〉という四つの要素を持っているため、それを使役構文のプロトタイプとしている。そして、(38)の各例文間の関係を以下のように説明する。

(38b)については、「『太郎』は『工場のゴミを焼いた』という実際の動作者としても、また工場の責任者として業者に頼んで廃棄のゴミを焼却してもらおうという依頼者としても解釈されうる」と指摘した。主語の「太郎」が依頼者と解釈する場合に、「ゴミを焼いた業者」は焦点にならない。したがって、「実際の動作主は言語的に明示化される必要がなく、依頼者や指示者、命令を下した者を他動詞文の主語に立てている。動作者の脱焦点化によって依頼者に認知的際立ちを与え、文の意味理解を成立させている」とする。

(38c)では、主語「太郎」が自分の「不注意」のため、「倉庫が焼けた」という結果を招いてしまった。このような「不本意な結果が主語のコントロール下にあって回避可能なはずであるにも関わらず防げなかった」ので、「太郎自身の不注意という『内的原因』によって『倉庫が焼けた』という結果がもたされた」ために、太郎に責任が負わされるものとする。姚 (2018) はまた、他動詞文の主語について、「結果をもたらした原因が焦点化され、認知的際立ちが実際の起こし手に与えられる」とも述べている。

(38d)からは、主語「太郎」が事態(空襲による家財道具の損失)を「未然に防ぐことが可能な立場にあったのに、何もしなかったため、自分の持ち物が焼失した」という事態を招いてしまったという自責の念も読み取れる」

とする。つまり、「このような事態が起こらないようにコントロールしているのは太郎であるため、コントロールの力を持つ参加者に認知的際立ちが与えられる」ということで、「太郎」が他動詞文の主語となるのである。

姚 (2018) によれば、(38a)と(38b)は、「結果の事態が起こるように、人がコントロールする」ことができる事態を描く例文である。一方、(38c)と(38d)は、「結果の事態が起こらないように、人がコントロールすべき」事態を描く例文である。いずれの場合も、コントロールの力を持つ存在としての「人」に、認知的際立ち(第1焦点参加者)が与えられているということである。

(38e)では、主語は有生物ではなくて、無生物の「火」である。このような無生物主語の場合は、対象の「変化を引き起こす力を持っている」及び「実際に対象の変化を引き起こしている」という点で、「行為者」のプロトタイプと共通する。「この意味的共通性から <行為者> にはプロトタイプの「人間」から「自然現象」へとメタファー的拡張が行われている」と、姚 (2018) は指摘した。

以上は、姚 (2018) による(38)に示した他動詞構文のカテゴリー化に関する解説である。(38a)は使役構文のプロトタイプ構文であり、(38b)～(38e)はプロトタイプ構文からの拡張構文である。両者の間には、「事象変化の実現、あるいは事象変化の阻止(防止・抑制)に対して、ガ格名詞句の参加者がコントロールの力を持っているという共通性を抽出することができる」と、姚 (2018) は述べている。

姚 (2018) は、最後の結論として、「N-が N-を Vt」構文のスキーマを、(39)に規定する。

(39) 「N-が N-を Vt」構文のスキーマ: 個体化された二者間のコントロール

(姚 2018: 124)

姚 (2018) は、「N-が N-を Vt」構文のカテゴリー化に係わる認知プロセ

スを図 1¹¹に示す。

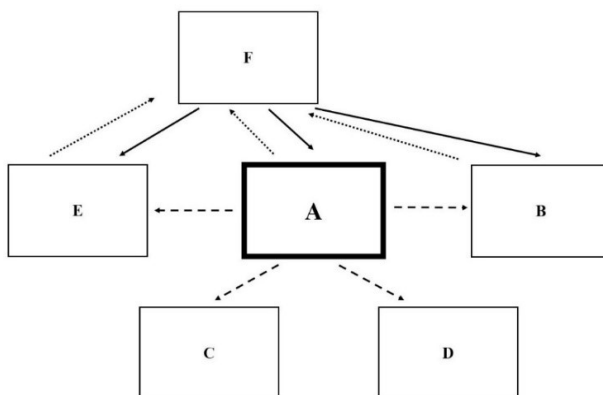


図 1 「N-が N-を Vt」構文のカテゴリー化

- A: 典型事例: 太郎が庭の落ち葉を焼いた。
B: 拡張事例: 太郎が(業者に依頼して)工場のゴミを焼いた。
C: 拡張事例: 太郎が不注意から家の倉庫を焼いた。
D: 拡張事例: 太郎が空襲で家財道具を焼いてしまった。
E: 拡張事例: 火が原^{ママ}一面の草を焼いた。
F: 「N-が N-を Vt」構文のスキーマ

姚 (2018) は「A→B、A→C、A→D の間はメトニミーによってプロトタイプ構文から拡張されている」ものだと主張する。拡張事例の B、C、D においては、認識的際立ち(焦点)が文内で移動して、結果事態を引き起こす原因である「太郎」に焦点が当てられている。また、「A→E」の拡張

¹¹ 姚艶玲 (2018) によれば、破線の矢印 (--->) はプロトタイプとしての典型事例から拡張事例への認知プロセスを示し、点線の矢印 (.....>) はプロトタイプの典型事例と拡張事例の類似性、共通性に基づいてスキーマを抽出していく認知プロセスを示し、実線の矢印 (→) はスキーマから具体事例を事例化する認知プロセスを示す。

は、人間主語から無生物主語へと、「動作主体のプロトタイプが写像されるというメタファー」による拡張とされる。

しかし、姚 (2018) による解釈について、一つ疑問点がある。(38c)と(38d)とは、二つの事態とも「結果の事態が起こらないように、人がコントロールすべき」事態であると説明した。(38c)では、「太郎の不注意」が原因で「倉庫が焼けた」という結果事態を招いてしまったため、太郎には責任があり、事態が起こらないようにコントロールすべき立場にあると考えられる。しかし、(38d)では、「家財道具が焼けた」との事態を引き起こした原因は「空襲」である。主語「太郎」には、自責の念を持つと考えることは可能であるが、「空襲」のような予想外のことが引き起こした結果事態を、本当に未然に防ぐ立場にあるのかは疑問である。したがって、(38d)のような他動詞文は、(39)に示した「個体化された二者間のコントロール」というスキーマを持つか否かは疑問である。

したがって、本稿では、天野 (1987) と田川 (2003) に従い、他動詞文の主語にあたる名詞句を、引き起こし手である主体と引き起こし手でない主体に分けて考察を進める。天野 (1987) が分類した「動作主・原因・経験者 a」にあたる引き起こし手である主体を「動因者」主語¹²と記し、「経験者 b」にあたる引き起こし手でない主語を「経験者」主語と記し、西村 (1998) 及び姚 (2018) による他動詞構文に関する論述に合わせて、漢語サ変動詞の他動詞文に見られる制限について考察する。

2. 研究対象と研究方法

本章で扱った対象は、前章で選別した自動詞専用の傾向が見られる自他両用の漢語サ変動詞である¹³。表 2 に示す。

¹² ここでの「動因者」は、田川 (2003) の概念に従う。

¹³ 表 2 に示す自他両用の漢語サ変動詞は自動詞の用例数が、他動詞の用例数をはるかに上回っている (A>B)。それと同時に、「自動詞+ -se (-ru)」形で他動詞として使われる用例数は、他動詞の用例数を超えている (C>B)。したがって、表 1 に示す自他両用の二字漢語サ変動詞は他動詞の使用が劣勢、自動詞の使用が優勢になっていることが分かる。これらの自他両用の漢語サ変動詞は自動詞専用になる傾向が見られる。

表 2 自動詞専用の傾向を示す自他両用漢語サ変動詞

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
増加	7015	6520 (92.9%)	102 (1.5%)	377 (5.4%)	16 (0.2%)	5.1pt	91.5pt
発生	8007	7432 (92.8%)	146 (1.8%)	427 (5.3%)	2 (0.0%)	5.3pt	91.0pt
減少	4762	4375 (91.9%)	42 (0.9%)	342 (7.2%)	3 (0.1%)	7.1pt	91.0pt
消滅	1284	1142 (88.9%)	14 (1.1%)	128 (10.0%)	0 (0.0%)	10.0pt	87.9pt
増大	1694	1380 (81.5%)	59 (3.5%)	252 (14.9%)	3 (0.2%)	14.7pt	78.0pt
復活	1116	762 (68.3%)	53 (4.7%)	282 (25.3%)	19 (1.7%)	23.6pt	63.5pt
乾燥	1141	672 (58.9%)	55 (4.8%)	402 (35.2%)	12 (1.1%)	34.2pt	54.1pt

影山 (1996)、金英淑 (2004; 2006)、楊尙郎 (2007) といった研究は、理論的な立場から、自他両用の漢語動詞の自動詞と他動詞の派生方向を判定したものである。自動詞用法に制限が見られる動詞は、他動詞から自動詞への派生方向を示す。一方、他動詞用法に制限が見られる動詞は、自動詞から他動詞への派生方向を示すという結論である。本章では、先行研究の理論的な論述を否定する立場を取るわけではなく、ひとまず自他両用の派生の方向は措いて、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (中納言)」(BCCWJ) における自他両用の漢語動詞の使用実態に基づいて考察を進める。

本章では、表 2 に示した自動詞専用の傾向が見られる漢語サ変動詞に注目し、これらの動詞の他動詞用法に制限が見られるか否か、また、制限がある場合、その理由について考察する。金 (2004; 2006) は目的語の種類を「モノ名詞」と「コト名詞」に分けて、目的語の性質により「再帰性」や「再帰的な関係」の範囲を規定したが、楊 (2007) にも指摘したように、

「再帰性」や「再帰的な関係」で説明できない用例も存在する。

本稿では、目的語ではなく、主語の意味役割及び主語と目的語の關係に注目し、西村 (1998) による「他動詞文のプロトタイプ」における <意図> <行為> <結果> <責任> の 4 要素を参照すると同時に、姚 (2018) が提唱する「個体化された二者間のコントロール」という他動詞文のスキーマを適応することにより、他動詞の用法に制限が見られる場合の理由を説明する。

ちなみに、表 2 に示す動詞は自動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語サ変動詞である。永澤 (2007) の「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」では、近代日本語において「減少する、消滅する、増加する、乾燥する」は自他両動詞であるが、現代に至って自動詞専用の動詞となったと指摘した¹⁴。BCCWJ において、自動詞専用の傾向を示した自他両用の漢語動詞には、他動詞の実例は少数しかないが、確かに存在する。それに規範的な文章で使われた例文もある。

また、13 人の日本語母語話者を対象に、アンケート調査を行った¹⁵。

減少スル				合計
質問 1: 近年、国内生産が 減少 ()て、代わって外国からの輸入が 顕著に増加した。				
答え	する	される	させる	13
数量	11	2	0	
質問 2: 商品が売れないので、企業は生産を 減少 () ました。				
答え	する	される	させる	13
数量	3		10	

¹⁴ 永澤 (2007) では、『乾燥する』『減少する』『増加する』などは、インターネット上では他動詞用法も散見し、一部の話者は他動詞用法をとどめていると見られるが、新聞記事 (『asahi.com』) など規範的な文章では、現在、他動詞として用いられにくく、筆者の内省でもそのようにいえることから、本稿では、自動詞専用動詞とみる (p.28) とされる。

¹⁵ ここでのアンケート調査は、第三章でのアンケートの調査方法と同じである。詳しい結果は付録 6 に示す。

「減少する」は、自動詞専用の傾向を示す動詞なので、自動詞文(質問1)には、「する」の使用数が多い。それに対して、他動詞文(質問2)には「させる」の使用数が多い。しかし、他動詞文に「する」の使用が3人存在する。つまり、日本語母語話者のなかには、これらの動詞には他動詞用法がある程度残存していると考えられる。したがって、本章では、このような動詞を自動詞専用の傾向を示す自他両用の動詞として扱う。

次の節では、これらの動詞の他動詞用法に注目し、他動詞用法に制限が見られるか否か、さらに、金英淑 (2004; 2006) が提唱した「再帰的な関係」が認められるか否かを観察する¹⁶。観察にあたって、他動詞文の主語を、意味特徴により、主として「動因者主語」と「経験者主語」¹⁷の2種に分類する。

3. 動因者主語

主語 N_1 が動因者として働くときには、有生物を表す名詞句と無生物を表す名詞句の二つの場合が見られる。

3.1 有生物主語

有生物を表す名詞句が主語になる場合、主語 N_1 はヒト、あるいはヒトに準ずる組織や機構を表す名詞が多い。

3.1.1 主語 N_1 がヒトを表す名詞句

- (40) a. 商品投資顧問業者は、第五条第一項第六号に掲げる事項を変更しようとするとき、又はその資本金の額を減少しようとするときは、主務大臣の認可を受けなければならない。

¹⁶ 金英淑 (2004; 2006) と楊高郎 (2007) は、主に「主語(N_1)の目的語(N_2)」構文を使って「再帰的な関係」を判定した。

¹⁷ 本章で扱う「動因者主語」と「経験者主語」は、天野 (1987) が指摘した「引き起こし手主体」と「引き起こし手でない主体」という2種類に相当するものである。実際に「人間」を表す名詞の場合に限られず、「モノ」や「デキコト」を表す名詞が主語に当たる場合も含まれる。

『商品投資に係る事業の規制に関する法律』

b.商品投資顧問業者が資本金の額を減少した。

(商品投資顧問業者の資本金の額)

- (41) a.商品投資顧問業者は、第五条第一項第一号から第四号まで、第七号若しくは第八号に掲げる事項に変更があったとき、又はその資本金の額を増加したときは、その日から二週間以内に、その旨を主務大臣に届け出なければならない。

『商品投資に係る事業の規制に関する法律』

b.商品投資顧問業者が資本金の額を増加した。

(商品投資顧問業者の資本金の額)

- (42) a.当時、ラサ市内では、婦人を中心とした少人数の大衆がデモ行進をして、「ダライ・ラマを守ろう」「ダライ・ラマ万歳」「チベットは独立せよ」などのスローガンを呼びながら、八角街から軍区のゲートに向かい、何時間か騒ぎたてた。見物人もしだいに多くなったが、ラサ市内で暴力行為を発生することはなかった。

『パンチェン・ラマ伝』

b.大衆が暴力行為を発生した。(大衆の暴力行為)

- (43) a.逆相分配 TCL 用材料 シリカゲル等の薄層にあらかじめ流動パラフィンやシリコンオイルの溶液を展開させ、乾燥することで吸着剤粒子にこれらの液相を含浸させると、逆相展開用プレートとなる。

『環境測定と分析機器』

b.科学研究者がシリコンオイルの溶液を乾燥した。

(科学研究者のシリコンオイルの溶液)

(40)~(43)では、「減少する」「増加する」「発生する」「乾燥する」の他動詞文である。すべて規範的な文章で使用された文章語である。主語 N₁の「業者」「大衆」「研究者」はヒトを表す名詞である。文脈を見れば、

(40)~(43)の描く事態は、動作主が意図的に対象物の変化を引き起したものである。動作主の意図的な行為の結果により、対象物に変化が生じた。そして、その変化をもたらした責任は動作主に帰せられる。

つまり、(40)~(43)では、<意図> <行為> <結果> <責任>の4要素が揃っている。他動詞文のプロトタイプ的な特徴を持っているといえる。

しかし、(40)~(43)の目的語はどうであろう。(40) (41) (43)の目的語は、それぞれ「資本金」と「シリコンオイルの溶液」であり、個性を持つ実在物である。それに対して、(42)の目的語(「暴力行為」)は、個性の持つ「対象物(object)」と考えにくい。しかし、「暴力行為」は主語である「大衆」が行った行動の結果であり、主語の一部だと認識でき、「再帰的な意味」を持つと考えられる¹⁸。

(40)~(43)は、主語と目的語の間に「N₁の N₂」の関係が存在していることが分かる。これが他動詞文の成立する理由だとする場合は、金英淑(2004; 2006)の説明に一致している。しかし、主語と目的語の間に「N₁の N₂」の関係が見られない実例もある。

- (44) a.ロナルド・レーガンは、強いアメリカと称して軍事費を増大
し、最高税率や法人税を引き下げるなど、なりふり構わず、産

¹⁸ ヤコブソン (1989) は、「赤ん坊が花瓶を壊した」のような典型的な他動詞文は、以下のような特徴を持つと指摘した。

- (4) a.関与している事物(人物)が二つある。すなわち、動作主(agent)と対象物(object)である。
b.動作主に意図性がある。
c.対象物は変化を被る。
d.変化は現実の時間において生じる。

(ヤコブソン 1989: 168)

ヤコブソン (1989) では、「体を傾ける」「目をそむける」等のような場合は、「動作主と対象物が同一のもの又は同一のものに属している部分を指す」という再帰的な意味を持つと指摘した。しかし、ヤコブソン (1989) が規定した「再帰的な意味」は、主に身体部位の例を指す。この場合は、金 (2006) が規定した「再帰的な関係」の範囲と共通する部分があるが、完全に一致しているわけではない。

業界と富裕者には徹底的に尽くした功績で、富裕者の間では神様の存在です。

『アメリカ人はバカなのか』

b.ロナルド・レーガンが軍事費を増大した。

(*ロナルド・レーガンの軍事費)

(45) a.大正五年十一月二十九日午後十一時五十分、青森県の東北本線古間木駅(現三沢駅)で列車衝突事故があり、死者二十九人、重軽傷者百八十余人を出す大惨事を起こしていた。原因は駅員の飲酒による判断ミスだった。新平は鉄道技監を復活し、鉄道巡察課を新設した。

『後藤新平伝』

b.新平が鉄道技監を復活した。

(*新平の鉄道技監)

(44)の「軍事費」や、(45)の「鉄道技監」は、主語「ロナルド・レーガン」や、「新平」の「所有物」や「身体部位」に属するものではないため、金(2004; 2006)が指摘した「再帰的な関係」の定義に属さない。主語と目的語との間に「再帰的な関係」が存在しない。それにもかかわらず、他動詞文は成立する。

(44)では、「ロナルド・レーガン」は当時のアメリカ大統領であるため、アメリカの軍事費を増大することは大統領の権限の一つであると考えられる。(45)では、「新平」が「内務大臣兼鉄道院総裁」に務めていたため、「鉄道技監を復活する」ことは「鉄道院総裁」である「新平」の権限の一つだと考えられる。つまり、(44)と(45)では、動作主である主語 N_1 は職務での権限を使い、対象物に変化を生じさせている。対象物に変化をもたらすことを決めるのは動作主 N_1 であるため、主語 N_1 が目的語 N_2 の変化をコントロールすることができて、責任があると考えられる。これは姚(2018)が提唱した「個体化された二者間のコントロール」という他動詞文のスキーマに一致する。つまり、主語 N_1 が目的語 N_2 の変化をコントロールできるゆえに、他動詞文が成立する。

3.1.2 主語 N_iがヒトに準ずる組織や機構を表す名詞句

- (46) a.景気の下降は、概していえば、上昇よりも急激である。景気の急激な下降のあとに不景気な状態が続く。企業は商品が売れないので、生産を減少する。

『金融読本』

- b.企業が生産を減少した。(企業の生産)

- (47) a.しかし連日の雨のため、車両部隊が追及できなくなり補給が絶え、また中国軍の抵抗が頑強で苦戦をつづけた。そこで軍は兵力を増加し、火砲弾薬をととのえて攻撃し、八月八日にこれを占領した。

『B29 戦略爆撃隊を壊滅せよ』

- b.軍が兵力を増加した。(軍の兵力)

- (48) a.枢密院は、原内閣が企図した武官総督専任制廃止に同意し、植民地支配における軍部勢力の牽制に同調した。しかしその一方で、内閣が植民地支配へ影響力を増大することには警戒を示し、特に朝鮮総督の施策に内閣総理大臣が介入する余地をなるべく少なくしようとし、朝鮮総督の高い地位を保持する役割を果たした。

『枢密院の研究』

- b.内閣が植民地支配へ影響力を増大した。
(内閣の植民地支配への影響力)

- (49) a.もちろん、革命政権の教会弾圧は熾烈だったよ。革命直後、ロシア正教会は総主教制を復活したが、これは明らかにボルシェビキ政権に対抗することを目的としてたからな。

『ソ連社会は変わるか』

- b.ロシア正教会が総主教制を復活した。
(ロシア正教会の総主教制)

(46)~(49)では、主語 N_1 はそれぞれ、「企業」「軍」「内閣」「教会」といった組織や機構である。目的語 N_2 は、「生産」「兵力」「影響力」「総主教制」等の抽象的なものであり、主語 N_1 (組織や機構)の所有物や属性の一つだと考えられる。主語と目的語の間に「 N_1 の N_2 」の関係が存在していることが分かる。これらの他動詞文には再帰的な意味特徴を持っている。

(50) a.いま、米国は知恵の限りを尽くして貿易収支を改善し、活気あるアメリカを復活しようとしている。

『「日本の技術」いまが復活の時』

b.米国が活気あるアメリカを復活する。

(*米国のアメリカ)

(50a)では、主語「米国」は、「活気あるアメリカを復活しようとする」ため、主語 N_1 は動作主の意味役割だと考えられる。そして、主語「米国」と目的語「アメリカ」とは、同じ対象物(「アメリカ」)を指し、「 N_1 の N_2 」の関係が見られない。ただし、実際に目的語 N_2 は主語「米国」の一つの側面(「活気がある」)を指している。主語の一つの側面を主語の「所有物」と扱い、「再帰的な意味」で解釈することができるか否かは疑問である。いずれにせよ、動作主である「米国」が「活気あるアメリカ」復活の成否を決定することになる。この場合、主語 N_1 と目的語 N_2 との間にコントロールの関係だとも考えられる。

(46)~(50)では、組織や機構を表す名詞句が主語の位置に立てられているものの、実際に対象物に変化をもたらす決定権を持つのは、組織や機構の権力者である。組織や機構の意思決定権をもつ人は、対象物の変化に決定的な役割を果たし、組織や機構の変化をコントロールすることができるといえる。

主語 N_1 が人に準ずる組織や機構を表す名詞である場合は、「使役者」のプロトタイプとは異なる性質が見られる。主語 N_1 は権力者などを表す名詞ではないが、実際に対象物の変化を引き起こすことは、組織や機構の意思決定権を握る人の意志によるものである。実際に組織や機構の意思決定権を握る人は、脱焦点化によって言語的に明示化される必要がなくなるため、組織や機構全体が他動詞文の主語に立てられている。メトニミー

により、認知の焦点(主語)が組織や機構の意思決定権者から組織や機構全体に移される。(46)~(50)は、プロトタイプ of 他動詞文からのメトニミーによる拡張事例だとも考えられる。

以上のように、主語がヒトやヒトに準ずる組織、機構の場合、他動詞文の成立には、主語が目的語の変化をコントロールできることは重要な条件である。そのうち、(42)と(50)のような再帰的な関係を持つような例文もあり、(44)と(45)のような再帰的な関係を持たない例文もあるが、すべての例文には、主語が目的語の変化をコントロールできるという要素を持つ。したがって、「再帰性」ですべての例を説明することができないため、本稿は「コントロール」という要素が働くと主張する。

3.2 無生物主語

主語 N_i が無生物を表す名詞句の場合は、モノ名詞とコト名詞の二つの場合が存在する。

3.2.1 主語 N_i がモノを表す名詞句

- (51) a. 樹木は CO2 を減少するだけではなく、大切な水がめの役目をしています。

『市報きよせ』

- b. 樹木が CO2 を減少した。(*樹木の CO2)

- (52) a. 特に生姜の香気の成分は、鼻粘膜や肺を通して血液に入り、気力、体力を増加します。

『石原結實式体温を上げて病気を治す』

- b. 生姜の香気の成分が気力、体力を増加した。
(*生姜の香気の成分の気力、体力)

- (53) a. これはやはり乾燥する過程で、乾燥機は洗濯物を動かしながら(ほぐしながら) 乾燥するため衣類の繊維がほぐれて柔らかく感じられるのだと思います。

「Yahoo!知恵袋」

b.乾燥機が洗濯物を乾燥した。(*乾燥機の洗濯物)

- (54) a.私たちがかかわっている美容において考えてみると、お客様の喜びや美容師としての喜びは、五感を通じて魂に語りかけるものであり、精神的充実感を得ることができます。そして、精神的な充実感は魂的な健康をさらに増大してくれます。

『めざせ！健康美容師』

b.精神的な充実感が魂的な健康を増大した。

(*精神的な充実感の魂的な健康)

- (55) a.富裕なブルジョアの指導のもとに、この憲法は財産による制限選挙を復活し、執政官政府は民主勢力にたいするテロ支配をおこなった。これは千七百九十九年のナポレオンのクーデターまでつづいた。

『空想から科学へ』

b.この憲法が選挙を復活した。(*この憲法の選挙)

(51)～(55)では、主語 N_1 と目的語 N_2 との間に、「 N_1 の N_2 」の関係が認められないが、他動詞文の実例がコーパスで見られた。これらの文の主語 N_1 は、「樹木」「生姜の香気の成分」「乾燥機」といった無生物である。主語の性質や特性により、目的語の変化を引き起こすことができる。例えば、(51)における「CO₂を減少する」ことは「樹木」の機能である。(52)における「気力や体力の増加」は「生姜の香気の成分」の作用である。(53)における「洗濯物を乾燥する」ことは「乾燥機」の性能である。(54)において、「魂的な健康を増大する」ことは「精神的な充実感」の特質がもたらした結果である。(55)では、「選挙を復活する」ことは「憲法」の内容によって決められた結果である。

主語 N_1 がモノを表す名詞であるため、対象物に変化を生じさせる意図性を持たず、対象物の変化を実現するための行為を行うこともできない。しかし、無生物主語自体はある性質や機能を有するため、対象物の変化を引き起こす原因とあり、主語と目的語との間にある種の因果関係が存在すると考えられる。

西村 (1998) と姚 (2018) の記述によれば、(51)~(55)の無生物主語は、対象物の「変化を引き起こす力を持っている」ため、「実際に対象の変化を引き起こしている」こと、プロトタイプの他動詞文と共通する部分がある。これらの他動詞文は、メタファーによる拡張事例だと思われる。

3.2.2 主語 N_i が出来事を表すコト名詞句

- (56) a. 肥育中の反芻動物では、ナイアシン補給はルーメン微生物タンパク質合成を高め、尿中窒素排泄を減少し、吸収された窒素の蓄積を向上することにより、体重が増える。

『新ルーメンの世界』

- b. ナイアシン補給が尿中窒素排泄を減少した。

(*ナイアシン補給の尿中窒素排泄)

- (57) a. 社会事情のあらゆる改善は、直接にか間接にかのいずれにもせよ、土地の実質的地代をひきあげ、地主の実質的地代を増加する傾向がある。

『マルクス経済学と近代経済学』

- b. 社会事情のあらゆる改善が地主の実質的地代を増加した。

(*社会事情のあらゆる改善の実質的地代)

- (58) a. X財の生産活動は環境汚染を発生するが、この環境汚染をコントロールするため、政府が環境汚染の発生源である企業に対して汚染の排出1単位につき τ だけの支払いを要求すると仮定する。

『経済学の進路』

- b. X財の生産活動が環境汚染を発生した。

(*X財の生産活動の環境汚染)

- (59) a. われわれの性戦略はほとんど変わっていないが、われわれがいま生きている現代社会は大きく様変わりしている。これらの変化は浮気の利益を増大し、コストを減少して、損益の計

算をすると、浮気の誘惑を優勢にしている。

『一度なら許してしまう女一度でも許せない男』

b. これらの変化が浮気の利益を増大した。

(*これらの変化の浮気の利益)

(56)~(59)では、主語 N_1 は、「ナイアシン補給」「社会事情のあらゆる改善」「生産活動」といった出来事を表す名詞句である。主語と目的語の間に「 N_1 の N_2 」の関係が存在しない。主語 N_1 は、目的語 N_2 の変化を引き起こす原因事態であり、実際に対象の変化を引き起こしたため、他動詞文が成立する。

西村 (1998) からは、「因果関係」が使役構文の成立に重要な要素の一つであることが分かる。主語 N_1 が出来事を表すコト名詞の場合は、主語 N_1 が原因事態となり、原因事態が結果事態を引き起こすことになる。主語と目的語の変化の間に明確な「因果関係」が存在しているため、他動詞文が成立する。

西村 (1998) と姚 (2018) の無生物主語の他動詞文に関する論述に従い、出来事名詞が主語である場合は、無生物主語と同様に、使役主のプロトタイプである「人間」から「自然現象」へのメタファーによる拡張だと考えられる。

ここまでの内容をまとめると、動因者主語の場合は、主語の意味性質と他動詞文の成立する理由は、以下のようになる。

- (60) A: 主語 N_1 がヒトを表す名詞句: プロトタイプ (典型事例)
B: 主語 N_1 がヒトに準ずる組織や機構を表す名詞句: メトニミーによるプロトタイプからの拡張事例
C: 主語 N_1 がモノを表す名詞句: メタファーによるプロトタイプからの拡張事例
D: 主語 N_1 が出来事を表すコト名詞句: メタファーによるプロトタイプからの拡張事例
A と B: 主語と目的語の間に、必ず「 N_1 の N_2 」の関係が存在するわけではない。ただし、主語 N_1 が目的語 N_2 の変化をコントロールできなければならない。

C と D: 主語と目的語の間に、「N₁の N₂」の関係の存在が見られない。主語 N₁が目的語 N₂との間に因果関係が存在しなければならぬ。

ここで使われた「コントロール」は、「意志性」とは違うものに注意されたい。田川 (2002) で論じた「動作主」「自然現象、道具」「原因」との3種の主語のうち、「意志性」を持つのは「動作主」主語のみで、「自然現象、道具」「原因」には「意志性」要素を持たない。したがって、(60C)と(60D)の無生物主語の場合、「意志性」要素を持たず、「因果関係」の存在が重要な要素と主張する。(60A)と(60B)に関しては、有生物主語であり、「意志性」を持つものである。しかし、事態の実現は、「わざと」のような主語の意志による場合もあり、「うっかり」のように意志によらない場合もある。したがって、「事象変化の実現、あるいは事象変化の阻止(防止・抑制)に対して、ガ格名詞句の参加者がコントロールの力を持っている」という要素から、「コントロール」という用語を使用する。

また、「コントロール」と「再帰性」や「再帰的な関係」との関係について、先行研究で扱った例文「太郎が財布を紛失した」のように、一般的に「太郎の財布」という「再帰性」を持つ関係で解釈することが優先である。しかし、「太郎が花子の財布を紛失した」場合、「一時的に再帰的な関係」を持つと解釈することも可能であるが、「財布の紛失」との「事態の発生を抑制する」責任は、「太郎」にあるため、「太郎」を他動詞文の主語にすることが可能である。

上記(60)に示した結果で、楊 (2007) での反例を確認する。

(61) a. 収入が半減した。 (=12B)

b. *太郎が収入を半減した。(太郎の収入)

(楊 2007: 70)

楊 (2007) が指摘したように、(61b)には、目的語の「収入」が主語の「太郎」の所有物と扱うことができる。主語と目的語との間に「太郎の収入」という「再帰的な関係」が存在するにもかかわらず、他動詞文が成立しない。ここで、(60)の主張によれば、「太郎」は有生物の主語であり、他動詞

文の成立には、主語と目的語の変化をコントロールできなければならない。しかし、一人の収入は基本的に決められたものであり、「太郎」自身が自分の収入を半減したりすることができず、コントロールできない。両者の間に「コントロール」の関係が見られないため、他動詞文が成立しない。次の例を見よう。

- (62) 日本の銀行など各金融機関は従業員数や支店数を半減し、従業員の給与も大幅に節減する徹底したリストラを断行すべきである。

『日本崩壊』

(62)の主語である「金融機関」は、自分の会社の「従業員数」や「支店数」の数量変化をコントロールすることができるため、他動詞文が成立する。言うまでもなく、他社の「従業員数」や「支店数」の増減を決めることができず、自社のものでなければならない。

4. 経験者主語

経験者主語の場合、本章で扱う自動詞専用の傾向を示す自他両用漢語サ変動詞の主語 N_i は、モノを表す名詞の実例しか見られない。このような主語は動作主や変化の原因ではなく、変化が起こった主体と解釈できる。ここでは、無生物の主語も「経験者」主語の範疇に収まる¹⁹。例えば、

- (63) a. 攻撃ソフトは自らの痕跡を消滅してしまったので、犯人の割り出しは難しい。

『IT 大国アメリカの真実』

- b. 攻撃ソフトが自らの痕跡を消滅した。
(攻撃ソフトの (自らの) 痕跡)

- (64) a. オレフィンが過酸化剤となったことで、揮発性を減少し、事

¹⁹ 金英淑 (2004; 2006) で扱った主語はすべて有生物主語であり、無生物主語は言及されていない。

実上非揮発性の物質に変わる（換言すれば、飽和蒸気圧が低下する）。

『微粒子が気候を変える』

b. オレフィンが揮発性を減少した。（オレフィンの揮発性）

(65) a. 肉は繊維がないために腸内で停滞し、腐敗・発酵をおこして、大量の毒素を発生する。

『クスリをいっさい使わないで病気を治す本』

b. (腐敗した) 肉が毒素を発生した。（肉の毒素）

(66) a. 電気器具の消費電力の表示の例熱量実験 4 で、電流が流れている電熱線は、それぞれの電力で一定時間、熱を発生している。

『新しい科学 1 分野上』

b. 電熱線が熱を発生した。（電熱線の熱）

(63)～(66)では、主語 N_1 がモノを表す名詞である。主語 N_1 と目的語 N_2 との間に「 N_1 の N_2 」の関係が見られる。主語 N_1 が目的語 N_2 の変化を引き起こしたわけではない。むしろ上記の他動詞文は主語の変化を表し、目的語 N_2 の変化は主語 N_1 に帰せられる。(63)では、主語「攻撃ソフト」は、目的語「自らの痕跡」を消滅するという事態は、結果的に主語「攻撃ソフト」に帰せられ、再帰的な意味を持つ。

天野 (1987) は、「状態変化主体の他動詞文」の成立に二つの条件があると指摘した。第一、「状態変化主体の他動詞文を作る他動詞は、主体の動きと客体の変化の二つの意味を含む他動詞である」こと、第二、「状態変化主体の他動詞文のガ格名詞とヲ格名詞は、全体部分の関係にある」ことである。

(63)～(66)では、目的語 N_2 が主語 N_1 の「特徴付けの側面の一つ」と解釈でき、両者の間に「 N_1 の N_2 」の関係も成立する。したがって、第二の条件の「全体部分の関係」が成立する²⁰。

²⁰ ここで、天野 (1987) が提唱した「全体部分の関係」の規定を引用する。

また、本研究で扱った自他両用の二字漢語サ変動詞は、自動詞としても他動詞としても使えるため、主体の動きと客体の変化の両方の意味が含まれると考えられる。二つの条件を満たしているため、(63)~(66)は主体の状態変化を表す他動詞文といえる。このような他動詞文はヲ格を取るものの、自動詞文の意味に近いとのことである。(63)~(66)の他動詞文は、以下の自動詞文の意味を表す。

- (67) a. 攻撃ソフトの痕跡が消滅した。
- b. オレフィンの揮発性が減少した。
- c. 肉の毒素が発生した。
- d. 電熱線の熱が発生した。

さらに、先行研究からは、原因を表す成分は状態変化他動詞文の成立に重要な条件の一つである。(64)~(66)では、「オレフィンが過酸化物となる」こと、「肉が腸内で停滞し、腐敗・発酵を起こす」こと、「電流が流れている」ことなどのように、前後の文脈では事態の変化を引き起こした原因や条件も表明している。

最後に、加賀 (2004) は、「場所」と「存在者」の関係を取り込みながら、状態変化主体の他動詞文を分析した。例えば、「私たちが(空襲で)家財道具を焼いた」について、主語「私たち」は、<場所>の役割を持つと指摘し、「目的語の『家財道具』に対する<所有者>の役割だけではなく、『家財道具が焼ける』という事態を経験するという意味での<経験者>の役割、さらには、天野 (1987) が主張するように、<状態変化主体>としての役割をも兼ね備えている」とのことである。

(63)~(66)のような無生物主語の場合、(68)のように、無生物主語を<場

金 (2004; 2006) による「再帰的な関係」とは、「行為、あるいは変化の結果を被るイベントの範囲が主語に限られる性質であり、具体的には、目的語が主語の身体部位や所有物、組織における上下関係のようなモノ名詞の場合、あるいは主語が携わるイベントのようなコト名詞の場合である」と規定している。モノ名詞の主語 N_i がその範囲に含まれていない。したがって、本稿は天野 (1987) の「全体部分」の範囲に、金英淑 (2004; 2006) による「再帰的な関係」が含まれると考えられる。

所>の意味役割を持つと考えられる。例えば、

- (68) a. 攻撃ソフトには痕跡が消滅した。
- b. オレフィンには揮発性が減少した。
- c. 肉には毒素が発生した。
- d. 電熱線には熱が発生した。

「攻撃ソフト」「オレフィン」「肉」「電熱線」などの無生物主語は、「痕跡」「揮発性」「毒素」「熱」などの存在物が発生したり、消滅したりする場所と解釈できる。

以上のように、無生物主語が経験者の主体となる場合、それは自動詞的な事態を描写して、その事態が自発的に発生したように、主語に帰せられる。この場合の主語は、自発的に発生した出来事の場所と解釈することも可能である。

5. 動因者主語と経験者主語との関係

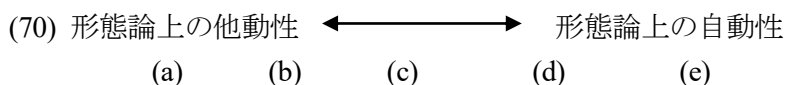
動因者主語と経験者主語との関係について、先行研究にも指摘されたように、「曖昧性」が生じる場合がある。例えば、

- (69) 企業が生産を減少した。 (46による)
- [動因者]解釈: 企業が意図的に生産の減少を引き起こした。
- [経験者]解釈: 企業が生産の減少という影響を受けた。

「原因デ」の使用により、曖昧性がなくなり、経験者解釈になる（「企業は工場の倒産で生産を減少した」）。

また、本稿で扱った「経験者主語」と「動因者主語」とは連続性にあるものであると主張する。

ヤコブソン (1989) は、他動性とその形態上の現れとの関係について考察した結果、(70)のような連続性を示したとのことである。



- (a)二つの独立している実体が係わっており、それぞれの意味的役割が異なっている。(赤ん坊が花瓶を壊す)
- (b)二つの独立している実体が係わっており、それぞれの意味的役割が異なっているが、動詞の表す変化の結果、それらが一体化される。(荷物を預かる)
- (c)同一の実体 (あるいは同一の実体の違った部分) が、二つの異なった意味的役割を苦い、二つの違った名詞として文中に現れる。(再帰的意味)(犬が尻尾を垂れる)
- (d)一つの実体のみが係わっており、それが一つの名詞句として文中に現れながらも、二つの違った意味的役割を担っている。(意図的自動詞)(おばさんが屈む、敵が寄せる)
- (e)係わっている実体が一つであり、その意味的役割も一つにすぎない。(非意図的自動詞)(花瓶が壊れる)

(ヤコブソン 1989: 177)

(70) によれば、本稿で扱った経験者主語の他動詞文は、(70c)の再帰的な意味を持つ他動詞文に相当する。このような他動詞文は、「二つの独立した実体が係わっている真の他動詞性と、一つの実体しか係わっていない真の自動詞性の、ちょうど間に位置する」と指摘した。

また、田川 (2003) が指摘したように、動因者主語と経験者主語には、「[動因者]→事象」「[経験者]←事象」のように、「両者は事象への関わり方において正反対の性質を持つ」とのことである。

6. まとめ

本章は、自動詞専用の傾向を示す自他両用の二字漢語サ変動詞に注目し、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)の実例に基づき、主語が人を表す名詞の場合だけではなく、モノやデキゴト名詞の主語の存在も確認できた。また、これらの動詞の他動詞用法に見られる制限、その制限に関わる原因について考察した。その結果、自動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語サ変動詞の他動詞文について、動因者主語と経験者主語の2種類に分けて、両者には連続性の関係を持つことが分かった。

動因者主語の場合

- A: 主語 N_1 がヒトを表す名詞の場合: プロトタイプ(典型事例)
 - B: 主語 N_1 がヒトに準ずる組織や機構を表す名詞の場合: メトニミーによるプロトタイプからの拡張事例
 - C: 主語 N_1 がモノを表す名詞の場合: メタファーによるプロトタイプからの拡張事例
 - D: 主語 N_1 が出来事を表すコト名詞の場合: メタファーによるプロトタイプからの拡張事例
- A と B: 主語と目的語との間に、「 N_1 の N_2 」の関係が必ず存在するわけではない。ただし、主語 N_1 が目的語 N_2 の変化をコントロールできなければならない。
- C と D: 主語と目的語との間に、「 N_1 の N_2 」の関係が見られない。主語 N_1 が目的語 N_2 との間に因果関係が存在しなければならない。

経験者主語の場合

主語 N_1 と目的語 N_2 とは「全体部分の関係」に該当しなければならない。
主語 N_1 は状態変化の主体とも、場所の意味役割とも解釈可能である。

本章は現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)における実例に基づくという立場を取っている。本章で扱った自動詞専用傾向を示す漢語動詞は、一部の先行研究において、自他両用ではなく、自動詞として扱うものも見られる。母語話者の中でも、自動詞と承認することも多い。ただし、本稿は、国語辞書及びコーパスの実例に基づき、残存されている他動詞用法について考察した。母語話者の中では、これらの他動詞用法はどの程度認められているか、更なる考察の必要があると考えられる。

第四章参考文献

- 天野みどり (1987)「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151、pp. 97-110、国語学会
- 加賀信広 (2004)「状態変化主体の他動詞文について-意味役割理論からの提案」『筑波英学展望』23、pp. 73-86、筑波大学現代語・現代文化学系英語学・英文学グループ
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論』くろしお出版

- 金英淑 (2004) 「「VN する」の自他交替と再帰性」『日本語文法』4-2、pp. 89-102、日本語文法学会
- 金英淑 (2006) 『「VN する」の自他交替と構造:現代日本語の漢語動詞の分析』筑波大学博士論文
- 児玉美智子 (1989) 「状態変化主体他動詞文の成立と構造」『甲子園短期大学紀要』9-0、pp. 67-80、学校法人甲子園短期大学
- 田川拓海 (2002) 『日本語における「に」の多義性—起点的意味役割を中心に—』卒業論文、筑波大学日本語・日本文化学類
- 田川拓海 (2003) 「現代日本語における動作主の意味論と統語論」筑波大学修士論文、筑波大学人文社会科学研究科
- 永澤済 (2007) 「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」『日本語の研究』3-4、pp. 17-32、日本語学会
- 西村義樹 (1998) 「行為者と使役構文」中村実・西村義樹『構文と事象構造』研究社出版
- ヤコブソン、ウェスリー・M (1989) 「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』くろしお出版 須賀一好・早津恵美子 (1995) 『動詞の自他』に再掲、pp. 166-178、ひつじ書房
- 楊高郎 (2007) 「自動詞・他動詞用法に意味的制限を持つ自他両用動詞について—二字漢語動詞を中心に—」『筑波日本語研究』12、pp. 65-88、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
- 姚艷玲 (2018) 「日本語の「N-が N-を V_t」構文のカテゴリー」『日中言語対照研究論集』20、pp. 110-128、日中対照言語学会

第五章 他動詞専用の傾向を示す自他両用の二字

漢語サ変動詞の自動詞用法

0. はじめに

第四章では、BCCWJにおいて、自動詞専用の傾向にある自他両用の漢語サ変動詞に注目し、このような動詞の他動詞用法に制限があることを示した。この章では、他動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語動詞に注目し、このような動詞には自動詞用法に制限が見られるか否か、仮に制限があるとしたらその理由について考察する。

今までの研究では、動詞の他動性を積極的に取り扱うものが多く見られるが、動詞の自動性に関するものは少ないと思われる。佐藤 (2005) は、「語構成のあり方から考えるならば、他動性とはそれ自体が原理的に 1 つの極をなす積極的な概念であるのに対して、自動性とは『それ以外』という消極的な形で規定される非自立的な概念に過ぎない」(p. 9) と述べている。このようなことから、自動性を中心とする研究が極めて少ない。漢語動詞の自動詞用法に関する研究はさらに少ない。

次の節では、和語動詞を中心とする日本語の自動詞に関する研究を紹介しつつ、その中から日本語の漢語動詞の自動詞用法に関する考察の有力な手がかりを探す。

1. 先行研究

本節では、漢語動詞の自他用法に関連する先行研究を、主に影山 (1996) による「反使役化」をめぐる解説と、谷口 (2010) による「行為連鎖モデル」をめぐる解説に分けて諸説を概観する。

1.1 「反使役化」による解説

早津 (1987) は、和語動詞に注目し、対応する他動詞を持つ自動詞、いわゆる有対自動詞の意味的・統語的な特徴について考察した。

その結果、有対自動詞の特徴として、「非情物を主語とすることが多い」

(早津 1987: 102) こと、および「働きかけによってひきおこしうる非情物の変化を表すことが多い」(早津 1987: 102) ことが判明した。また、非情物の変化を引き起こした要因を外的要因と内発的要因との二種類に分けている。

まず、外因的变化は、有生物の働きかけによって生じる変化(1)、および自然力の影響で生じる変化(2)に分類される。文脈によって、有生物による働きかけが明示的に表現されている場合もあり、表現されていない場合もあるとのことである。

(1) 他動詞表現

島村が女の髪の元結を切る
(実験者が) マツヤニをとかす
自分が心を静める
誰かが明かりを消す
誰かが手配を整える
誰かが年号を改める

自動詞表現

元結が切れる
マツヤニがとける
心が静まる
明かりが消える
手配が整う
年号が改まる

(早津 1987: 96)

(2) 他動詞表現

台風が木を倒し、電線を切る
火山の爆発が溶岩を流す
濁流が堤防に亀裂を入れる

自動詞表現

木が倒れ、電線が切れる
溶岩が流れる
堤防に亀裂が入る

(早津 1987: 97)

ただし、早津 (1987) は、(2)のような「自然力を主語にした他動詞文は日本語にはあまりなじまない表現である」とも述べた。

また、(3)について、自動詞の主語になる「非情物自体に変化が生じる本性あるいは力が備わっていておのずから生じた」変化の場合も見られる。早津 (1987) は、これを内発的变化と名付ける。

(3) 他動詞表現

(?セーターの袖口を伸ばす)

自動詞表現

セーターの袖口が伸びる

(?鼻緒を切る)

鼻緒が切れる

(?服を裂き、靴を破り、髪と髭を伸ばし…)

服は裂け、靴が破れ、髪と髭が伸びて…

(早津 1987: 98)

早津 (1987) によれば、非情物には「変化を生じさせる動作主のような力が備わっている」ため、「非情物が自らに働きかけて生じさせる変化」だということである。この場合の他動詞文は成立しにくいと考えられる。しかし、早津 (1987) は、和語動詞の有対自動詞の意味的および統語的な特徴に関する考察は、あくまでも傾向的なものとしている。

影山 (1996) は、日本語における他動詞から自動詞への派生は、「反使役化 (anti-causativization)」「脱使役化 (decausativization)」という 2 種類があると指摘した。

- (4) ・反使役化: 自動詞化接辞 **-e-** は、使役主を変化対象と同定することで自動詞化を行う。
- ・脱使役化: 自動詞化接辞 **-ar-** は、使役主を意味構造で抑制し統語構造に投射しないことで自動詞化を行う。

(影山 1996: 184)

影山 (1996) は、反使役化と脱使役化の概念構造を、以下のように規定している。

- (5) ・概念構造における反使役化:

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT - z]]]

→[x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT - z]]]

(影山 1996: 145)

- ・概念構造における脱使役化:

概念構造: [x CONTROL [y BECOME [y BE AT - z]]]

統語構造: \emptyset

↓
内項

(影山 1996: 188)

具体的に、(6)(7)のような動詞が挙げられる。

(6) 他動詞+ -e- → 自動詞

割る/割れる、抜く/抜ける、砕く/砕ける、折る/折れる、ほどく/
ほどける、切る/切れる、取る/取れる、織る/織れる、破る/破れ
る、崩す/崩れる、煮る/煮える、離す/離れる、もぐ/もげる

(7) 他動詞+ -ar- → 自動詞

植える/植わる、集める/集まる、詰める/詰まる、まぜる/まざる、
いためる/いたまる、掛ける/掛かる、ふさぐ/ふさがる、つなぐ/つ
ながる、儲ける/儲かる、決める/決まる、助ける/助かる、(値段
を)まける/まかる、薄める/薄まる

(影山 1996: 183)

また、影山 (1996) は、「-ar-自動詞」は、意味的に動作主の存在が前提
となると指摘し、「難なく」「どうしても」のような「使役行為から結果事
態への推移が容易かどうかを述べる副詞」がつくことができると述べる。
例えば、

- (8) (募金集めで) 難なく目標額が集まった。
(力をあわせて押すと) 鉄の扉は難なく閉まった。
(力をこめて引っ張ると) 難なく釘は抜けた。
(難しそうだったが) 難なく問題が解けた。

- (9) どうしても、この木はうまく植わらない。
どうしても、目標額が集まらない。
どうしても、これ以上はまからない。

(影山 1996: 185)

これに対して、完全な非対格動詞は、このような副詞と相容れないとの
ことである。

- (10) *難なく交通事故が起こった。
*難なく階段で滑った。
*地震で難なく地面がゆれた。

(影山 1996: 185)

さらに、影山 (1996) は、「[-e-自動詞] には、「動作主なし」という意味の「勝手に」のような副詞が共起することや命令文にすることができると指摘した。

- (11) 取っ手が勝手に取れた。
紙が勝手に破れた。
ページが勝手にめくれた。
- (12) ロープよ、切れないでくれ！
しみよ、きれいに取れてくれ！
ひもよ、ほどけるな！

(影山 1996: 189-190)

この点に関しては、「-ar-自動詞」とは対照的である。

- (13) *勝手に、箱に本が詰まった。
*勝手に、庭には木が植わった。
*ピカソの絵が勝手に壁に掛かった。
- (14) *木よ、植われ！
*絵よ、壁にうまく掛かれ！
*本よ、箱にきちきちに詰まるな！

(影山 1996: 189-190)

最後に、自他両用の漢語動詞に関して、影山 (1996) は「使役構造(他動詞)を基にして、そこから反使役化によってあ自動詞が派生されているも

の」と主張し、他動詞を基本とする根拠を二つ挙げている¹。

一つ目の根拠は、「自他両用動詞が何等かの使役主を含意していること」(p. 203) である。例えば、以下のようなアスペクト的な意味を表す動詞は、「意図的な活動が対象となり、逆に、自然発生の事象はこれらの動詞で描写することができない」ということである。

- (15)a. 会議を終了する／会議が終了する
 - a'. *梅雨を終了する／*梅雨が終了する
 - b. 操作を継続する／操作が継続する
 - b'. *伝染病を継続する／*伝染病が継続する

(影山 1996: 203)

二つ目の根拠は、「他動詞用法と自動詞用法では自動詞用法のほうに意味的・認知的制限が観察される」ことである。例えば、

- (16)a. ナポレオンがフランス領土を拡大した。
 - a'. フランス領土が拡大した。
 - b. コピー機を使って、図面を拡大した。
 - b'. *(コピー機で) 図面が拡大した。

- (17)a. 水を分解すると水素と酸素に分かれる。
 - a'. 水が水素と酸素に分解した。
 - b. 時計をばらばらに分解した。
 - b'. ?*時計がばらばらに分解した。

- (18)a. ボクシングでなぐられて、顔が変形した。
 - b. *深層構造が表層構造に変形した。

¹ 影山 (1996) が挙げた自他両用の漢語動詞: 拡大する、縮小する、変形する、完備する、完成する、正常化する、回転する、展開する、解散する、実現する、解消する、具体化する。

- (19)a. 被災地が再生した。
 b. *録音テープが再生した。

(影山 1996: 203)

影山 (1996) は、「変化対象の自力ないし内在的コントロールが認められる場合だけ自動詞が成り立っている」(p. 204) と指摘した。つまり、(16)~(19)において、成立しない自動詞文には、「内在的コントロール」が認められないからである。「内在的コントロール」とは、「変化対象そのものが使役主として働く資格ないし性質」(p. 160) とのことである。

「反使役化」の成立条件について、影山 (1996) は、変化対象の観点から「内在的コントロールを持たなければならない」ことと、使役主の観点から「動作主に重きを置く他動詞には反使役化が成立しない」こと、という2点を指摘した。したがって、(20)のように、動作主が必要とされる動詞には、反使役化が適応できないということである。

- (20)a. ポスターを破った → ポスターが破れた
 b. オリンピック記録を破った → *オリンピック記録が破れた
 政治家が約束を破った → *政治家の約束が破れた
 彼は法律を破った → *法律が破れた

(影山 1996: 190-191)

影山 (1996) は、-e-と -ar- という2種類の派生からなる自動詞、および非対格動詞も含め、日本語の自動詞を次の3種類に整理している。

- (21)a. 非対格動詞: おのずと然る (自然発生)
 事故が起こる。顔にニキビができる。天井から雨が漏る。
 b. -e-自動詞: みずから然る (反使役化)
 糸が切れる。野菜が煮える。ポスターが破れる。
 c. -ar-自動詞: 動作主を隠す (脱使役化)
 木が植わる。命が助かる。大金が儲かる。

(影山 1996: 194)

佐藤 (2005) は、「語構成のあり方から考えるならば、他動性とはそれ自体が原理的に 1 つの極をなす積極的な概念であるのに対し、自動性とは「それ以外」という消極的な形で規定される非自立的な概念にすぎない」と指摘し、先行研究²では他動詞性のプロトタイプを規定することがあるが、「自動性のプロトタイプなどが、そもそも規定の対象外となるのもその意味においては当然である」と述べた。しかし、佐藤 (2005) は、「自動詞のカバーする意味的領域が、われわれの外界をとらえるさいの認知的基盤という観点からも、意味のない消極的なものというわけではない」と主張し、自動詞の意味領域を次のように分類した。

(22) 自動詞の意味領域：

- 静的事象 — ①アル型
- 動的事象 — ②ナル型 — 変化主体
- ③スル型 — 動作主体

(佐藤 2005: 10)

佐藤 (2005) によれば、①の「アル型」に当たる動詞は「ある」と「いる」のような静的事象を叙述するものである。②の「ナル型」には、「なる」、「壊れる」「切れる」「こぼれる」のような非意志的な主体がガ格になる動詞があり、③の「スル型」には、「歩く」「泳ぐ」「出発する」のような意志的主体を取る動詞が挙げられるということである。

前田 (2019) は、影山 (1996) が指摘した反使役化と -e-接辞、脱使役化と -ar-接辞とのような対応関係を持たない場合を示し、一つの動詞が「難なく」「勝手に」と共起することができる場合があるとも述べた。

- (23) a. 勝手にパイプが詰まった (tum -ar- u)。
 b. 勝手に傷口がふさがった (husag -ar- u)。

- (24) a. 難なく氷がとれた (tok-e-ru)。
 b. 難なく紐が解けた (tok-e-ru)。

² 佐藤 (2005) は、Hooper and Thompson (1980) を取り挙げている。

- (25) a. 難なく穴がふさがった (husag-ar-u).
 b. 勝手に穴がふさがった。
- (26) a. 難なく取っ手がとれた (tor-e-ru).
 b. 勝手に取っ手がとれた。

(前田 2019: 107-108)

(23)の動詞は、副詞「勝手に」と共起し、「反使役化」によって派生されるはずであるが、-ar-接辞を持っている。一方、(24)は、副詞「難なく」と共起し「脱使役化」のはずであるが、動詞は、-e-接辞を持っている。(25)と(26)は、同じ動詞が「勝手に」とも「難なく」とも共起する現象である。以上の問題点を踏まえて、前田 (2019) は、「発話の状況によって適用される語彙規則が異なる」との可能性に基づき、「レキシコン内部の動詞の意味表示での操作」で生じる語彙規則の代わりに、一般的な語用論的な制約を利用して、自他交替の場合、「交代動詞の自他形式がどのように決定されるか」について考察した。その結果、自他交替の自動詞文と他動詞文との関係について、(27)のように主張する³。

- (27) ・自動詞文は協調の原理及び量・質の格率違反を避けるために使用される (特に、質の格率違反を消極的に避ける)
 ・他動詞文は協調の原理及び量・質の格率違反を避けるために使用される (特に、質の格率違反を積極的に避ける)

(前田 2019: 109)

³ 前田 (2019) で引用された Grice (1989) の「量の格率」と「質の格率」:

量の格率: 1. Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).

2. Do not make your contribution more informative than is required.

質の格率: Try to make your contribution one that is true

1. Do not say what you believe to be false.

2. Do not say that for which you lack adequate evidence.

(Grice 1989: 26-27)

前田 (2019) によれば、「自動詞文とは原因を明示せずに結果のみを描写する表現形式」だと指摘し、その「原因を明示」しない場合は二つあると主張した。「①話者が聞き手にとって原因が明らかであると判断した場合。②話者が「特定の」原因を知らない場合」とのことである。例えば、

- (28) a. (彼が修理をしようと引っ張ると) 難なく取っ手がとれた。
b. 難なく木が植わった。

(前田 2019:109)

- (29) (いつも通り帰宅して取っ手に触れると) 勝手に取っ手がとれた。
(前田 2019: 110)

前田 (2019) の解釈では、(28a)は、「①」すなわち「括弧内の情報が話者と聞き手とも明らか」な場合であり、量の格率が遵守され、「話者がわざわざ原因項を明示した他動詞文「彼が難なく取っ手をとった」を使う必要がない。(28b)も「木が植える」状態を作ることができるような使役主(例 造園業者)が世界知識から共有されていれば適切である」とのことから、量の格率に適応している。また、「②」すなわち自動詞文と質の格率との関連性について、前田 (2019) によれば、(29)では、「ある特定の要因を原因として捉えているのではなく、取っ手に関する何らかの原因群(経年劣化によるネジの緩みや錆等) が結果状態を引き起こしたものとして捉えている」ため、「何等かの原因群の存在を認めるにも関わらず、原因群に含まれる原因 1 つを原因項として明示しない」ことは質の格率によって説明できるということである。

以上は、日本語における自他動詞に関する先行研究である。早津 (1987) は主に和語動詞を中心に、有対自動詞の使用上の特徴を明らかにした。影山 (1996) は、「反使役化」と「脱使役化」という 2 種類の自動詞の存在を指摘し、自他両用の漢語動詞に関しては、「反使役化」によって他動詞から自動詞が派生されると主張した。それに対して、前田 (2019) は、影山 (1996) による語彙内部の意味構造に見られる制限を指摘し、一般的な

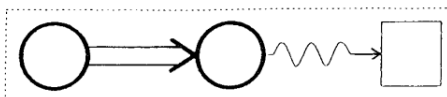
語用論的な制約、協調の原理を用いて自動詞文の成立に関わる要因を説明した。

次節では、本章で扱う言語現象と関連する認知言語学の立場からの考察を概観する。

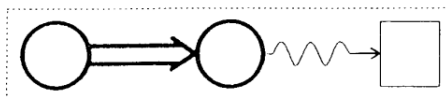
1.2 「行為連鎖モデル」による解説

中村 (2000) は、動詞 touch、kick、break、cut を取り上げて、それぞれの認知ベース上の意味構造を、図 1 のように示している。

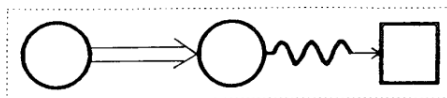
a . X touched y. *Y touched.



b . X kicked y. *Y kicked.



c . X broke y. Y broke.



d . X cut y. *Y cut.

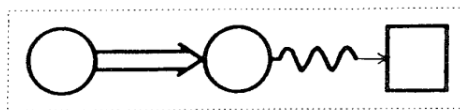


図 1: touch 系、kick 系、break 系、cut 系動詞の意味構造 (中村 2000: 86)

中村 (2000) によると、touch 系、kick 系動詞 (図 1a.b) では、「変化部分をプロファイルしない」ため、自他交替は成立しない。また、cut 系動詞で、変化部分がプロファイルされていても自他交替が成立しない理由は、「使役の働き掛けの部分がプロファイルされている」ためである。中村 (2000) は、動詞の自他交替が成立する条件を、以下のように規定している。

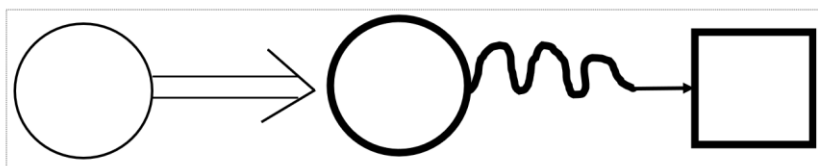
- (30) 自他交替: 使役構造を認知ベースとして変化部分のみをプロファイルするような認知プロセスで捉えられる事態を自動詞構文が叙述し、かつ同一の認知ベース上の使役構造全体をプロファイルするような認知プロセスで捉えられる事態を他動詞文が叙述しうるとき、その場合の動詞は自他交替する。

(中村 2000: 93)

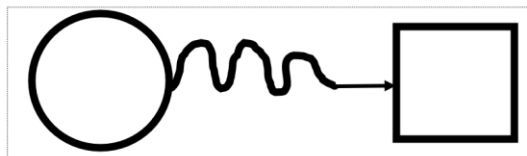
また、中村 (2000) は、「この認知プロセスは文レベルで適用されるのであり、語彙レベルの認知プロセスが必ずしも文レベルに反映する必要はなく、逆に文レベルの認知プロセスが慣習化して語彙レベルに定着していく」と指摘した。

そして、中村 (2000) は、認知的に自律的と考えられる事態には、以下の3種があると主張する。

- a. 自他交替動詞の自動詞用法の表す「自律的な」(autonomous) 事態



- b. 非対格動詞の表す「自律的な」事態



- c. verbs of emissionの表す「自律的な」事態

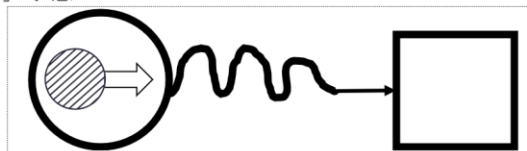


図 2: 認知的に自律的と捉えられる事態 (中村 2000: 91)

中村 (2000) によれば、自他交替の動詞の場合は、認知ベースには使役構造があるが(図 2a)、非対格動詞の場合は、認知ベースが使役構造ではな

い(図 2b)。図 2c に示した verbs of emission の表す「自律的な」事態には、変化を引き起こす要因が変化主体内部にあると考えられる。

また、谷口 (2004) は、「ジョンはハンマーで窓を壊した」という文を例に、ある参加者から次の参加者へエネルギーを伝達し、その影響によってエネルギーの伝達を受けた参加者に状態や位置の変化が生じるという事態の認知パターンを図 1 のように示している。

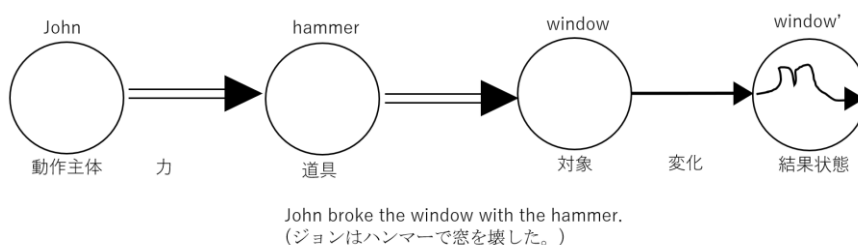


図 2: 行為連鎖モデル (谷口 2004: 53-54)

図 2 に示した認知モデルは、あくまでも事態の参加者間の相互作用を理想化したモデルである。実際の会話の中では、事態の一部がプロファイルされる状況が生じる。自動詞文の場合は、「対象の変化」の部分のみがプロファイルされていると考えられる。

2. 問題意識と研究対象

本稿では、前田 (2019) による語用論的な論述には深く関わらず、前田 (2019) で指摘された影山 (1996) の解説をめぐる問題について検討する。前田 (2019) においては、反使役化と -e-接辞、脱使役化と -ar-接辞との対応関係を持たない場合の存在、同じ動詞が「難なく」「勝手に」と共起する場合の存在が判明した。漢語動詞に関しても、同じ問題点が指摘できる。影山 (1996) によると、自他両用の漢語サ変動詞では、「反使役化」によって他動詞から自動詞へと派生するということになる。しかし、(15)~(19)における漢語動詞は、すべて副詞「勝手に」と共起できるわけで

はない。「難なく」と共起できる場合もある。例えば⁴、

(31)A: *勝手に会議が終了する。
○難なく会議が終了する。

B: ○勝手に操作が継続する。
*難なく操作が継続する。

C: *勝手にフランス領土が拡大した。
○難なくフランス領土が拡大した。

D: ○勝手に水が水素と酸素に分解した。
○難なく水が水素と酸素に分解した。

E: ?勝手に顔が変形した。
*難なく顔が変形した。

F: *勝手に被災地が再生した。
?難なく被災地が再生した。

(31)の漢語動詞は、影山 (1996) が扱った自他両用の漢語動詞で、「反使役化」によって他動詞から派生した自動詞と言われている。しかし、(31)に示したように、副詞「勝手に」と共起する場合もあり、「難なく」と共起する場合もある。これは、前田 (2019) が指摘する「発話の状況によって適用される語彙規則が異なる」ことの証拠になるかもしれない。

(31A)と(31B)について、影山 (1996) は、「継続する」「終了する」のようなアスペク的な意味を表す動詞は、「使役主を含意している」と述べる。しかし、反使役化の成立条件の一つとして、「動作主に重きを置く他動詞には反使役化が成立しない」とも指摘している。「継続する」「終了する」のような「使役主を含意している」自他両用の動詞に、「反使役化」

⁴ (31)は、日本語母語話者(4名)の内省判断による結果である。

が適応できるか否かは疑問である。実際に(31A)は「難なく」と共起し、(31B)は「勝手に」と共起する。

また、(16a') (17a') (18a) (19a)の自動詞文の成立は、「内在的なコントロール」の力を持っているからである。(17a')について、「水」は「水素と酸素に分解できる」という性質を持っているため、「水」の「自力」と解釈でき、「内在的なコントロール」が適応することが可能だと思われる。実際に(31D)では、「勝手に」と共起する例文も確認できる。しかし、同時に「難なく水が水素と酸素に分解した」ともいえる。この文の描いた事態は、事態の達成のために、背景化された使役主の存在が予想できる。ここ場合はむしろ「脱使役化」の操作が働くと思われる。したがって、動詞の描いた事態によって、適応する語彙規則が異なると考えられる。

一方、(16a')の「フランス領土が拡大する」、(18a)の「顔が変形する」、(19a)の「被災地が再生する」について、副詞「勝手に」と共起できないため ((31C) (31E) (31F))、「変化対象の自力」や「内在的なコントロール」の力を持たないと思われる。したがって、これらの自動詞文の成立する理由は他にあると思われる。

前田 (2019) と同様に、語用論的な立場に基づき、協調の原理から見れば、「話者と聞き手とも明らか」な情報、または「世界知識から共有」できる情報を明示しないことは量の格率に適応する。また、事態を引き起こす原因群の存在を認め、「ある特定の要因を原因として捉えている」わけではないことは、質の格率に適応しているという解釈も可能である。

本章では、以上のような問題意識に基づいて、他動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語サ変動詞に注目し、これらの動詞の自動詞文が描く事態について分析する。すなわち、中村 (2000) と谷口 (2004) の認知モデルを参照しつつ、異なる事態において、自他両用の漢語動詞であるか否か、自動詞文の成立する条件が存在するか否かについて考察するものである。

本章で扱った対象は表 1 に示した他動詞専用の傾向にある自他両用の漢語動詞である。これらの動詞は、他動詞の使用数は自動詞より、圧倒的に多い。同時に、「～がVNされる」の使用数は自動詞の「～がVNする」の数を超えている。つまり、他動詞の使用が優勢であり、自動詞の使用が劣勢になっている自他両用の漢語動詞である。

そのほか、アスペクトを表す動詞「開始スル」「継続スル」「終了スル」、

対義語である「拡大スル」「縮小スル」も研究対象に入れる⁵。

表 1 他動詞専用の傾向を示す自他両用動詞 (例文総数順)

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
開始	4166	180 (4.3%)	2812 (67.5%)	8 (0.2%)	1166 (28.0%)	27.8pt	63.2pt
破壊	1755	69 (3.9%)	1014 (57.8%)	10 (0.6%)	662 (37.7%)	37.2pt	53.8pt
軽減	928	100 (10.8%)	517 (55.7%)	53 (5.7%)	258 (27.8%)	22.1pt	44.9pt
再現	814	37 (4.5%)	586 (72.0%)	16 (2.0%)	175 (21.5%)	19.5pt	67.4pt
緩和	786	76 (9.7%)	409 (52.0%)	38 (4.8%)	263 (33.5%)	28.6pt	42.4pt
樹立	351	9 (2.6%)	268 (76.4%)	9 (2.6%)	65 (18.5%)	16.0pt	73.8pt
一新	142	19 (13.4%)	85 (59.9%)	5 (3.5%)	33 (23.2%)	19.7pt	45.6pt
再興	100	10 (10.0%)	58 (58.0%)	7 (7.0%)	25 (25.0%)	18.0pt	48.0pt
羅列	70	3 (4.3%)	52 (74.3%)	1 (1.4%)	14 (20.0%)	18.6pt	70.0pt

表 1 に示した動詞は、佐藤 (2005) の自動詞文の意味領域に合わせると、自動詞文が描いた事態は動的事象で、変化主体の意味を持つ。次節では、自動詞文の主語に注目して、自動詞文の描いた事態の特徴を分析する。

⁵ 「開始スル」は BCCWJ において他動詞専用の傾向にある (自動詞の用例が少ない) 動詞である。「継続スル」「終了スル」と「拡大スル」「縮小スル」は、影山 (1996) で扱った語である。

3. 自動詞文の主語

まず、自動詞文「～がVNする」の主語の意味特徴について見る。早津(1987)で指摘された有対自動詞と同じ特徴が見られる。つまり、漢語サ変動詞の自動詞文の主語には、「無生物を主語とすることが多い」、「働きかけによって引き起こした無生物の変化を表すことが多い」という特徴が見られる⁶。

第一に、無生物を表す名詞が主語になることが多い⁷。(32a)と(32b)は、「貿易摩擦」と「抑うつ不眠」が主語であり、「貿易摩擦の緩和」と「抑うつ不眠の軽減」という結果の変化、結果事態のみがプロファイルされている。

- (32)a. 米の自由化によって六十億ドルも輸入が増え、貿易摩擦が大幅に緩和する。

『大前研一の新・国富論』

- b. 入院して二週間後、ようやく山田氏は重い口を開いた。薬物療法により抑うつ不眠が軽減し、加えて職場を離れた解放感から、胃痛や食欲不振も治ってきたのである。

『日本の課長』

⁶ 早津(1987)は、「非情物」と名付けたが、本章は第四章と統一するため、「無生物」という名称を使う。

⁷ 本稿で扱う自他両用の漢語動詞のうち、自動詞文の主語は無生物の場合が多い。動詞自体の意味によって、まれに有生物が主語になる場合も見られる。例えば、「再任する」は「続けてもう一度その職務に任ずる」との意味であり、他動詞文の目的語および自動詞文の主語には有生物が必要とされる。

- (1)a. 第十一期第1回会議 03年9月3日、最高人民会議第十一期第1回会議が開かれ、金正日総書記を任期5年の国防委員長に再任した。

『北朝鮮憲法を読む』

- b. 父の死後、軍を掌握するのに3年の歳月を要し、九十七年、朝鮮労働党総書記に就任。九十八年に国防委員会委員長に再任し、同委員長を国家最高のポストと位置づけるとともに、国家主席制度を廃止し、権力の継承を完成した。

『世界を変えたテロ決定的瞬間』

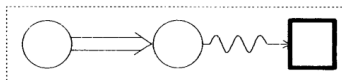
- (33) 当時の寺運も天慶二年（九百三十九）藤原純友の乱で焼失したが、国府の援助で再興された。貞治三年（千三百六十四）には、讃岐の細川氏の侵入で焼失、再興したが、天正十二年（千五百八十四）土佐の長宗我部との戦いで、伊予の河野道直が破れ滅亡する。

『空海の道を行く』

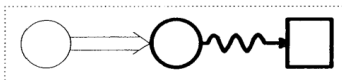
(33)では、主語は無生物の「寺」である。(33)では主に「寺の再興」という結果事態が焦点化され、「再興される」と「再興する」という二つの形が使われている。自動詞と比べて、受身形には使役主の存在が含意されていると言われている。中村 (2000)⁸によれば、両者には、事態の認知モデルにおいては、異なる部分がプロファイルされて、受動態の場合、働きかけもプロファイルされているということである。

⁸ 中村 (2000: 98-99) は、「結果状態」「状態変化」と「受動態」との認知モデルの違いについて、下記の図で解釈を行っている。

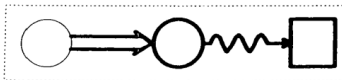
- a. My arm was (so) burned (I could hardly move it). (結果状態)



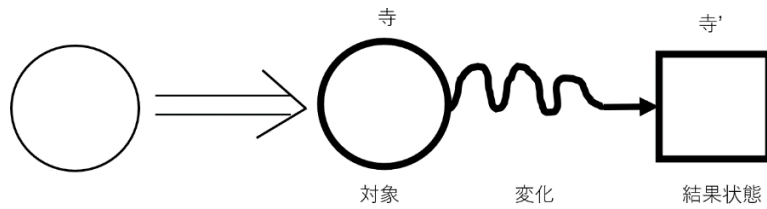
- b. My arm was burned (as soon as I reached into the fire). (状態変化)



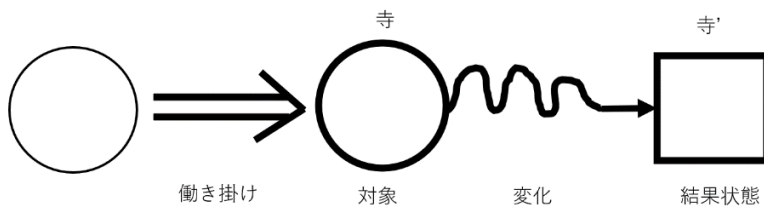
- c. The town was destroyed (house by house). (受動態)



中村 (2000)によれば、「～の状態にある」から「～の状態になる」へ、更に受動態の「～されて～の状態になる」とのように、プロファイル部が徐々に増加している。プロファイル部の増加は、叙述内容の増加と対応するとのことである (中村 2000: 99)。



a. 寺が再興した



b. 寺が再興された

図 3: 「寺が再興した」「寺が再興された」の認知モデル

第二に、外的な要因の働きかけによって引き起こされた変化を表すことが多い。その外的な要因は、人間などの有生物の働きの場合もあり、外的な出来事などの働きの場合もある。例えば、

- (34)a. 第七には、[比丘たちが] 他人を優先し、自分のことはあと廻しにして、名誉と利益とを貪るといことがないならば、長老たちと若者たちが仲よく従順に協力し合って、仏法は破壊することがない。

『ブッダの入滅』

- b. IC に最大定格値を超える入力 (信号) 電圧を加えると、入力回路が機能不良、または破壊するおそれがありますから、信号源または前段の回路の出力電圧に注意が必要です。

『はじめて見るオペアンプの本』

以上は、他動詞専用の傾向にある自他両用の漢語サ変動詞に注目し、これらの動詞の自動詞文における主語には、「無生物が主語になる場合が多い」と「外的な要因の働きかけによって引き起こされた変化を表すことが

多い」という特徴があると判明した。これは、早津 (1987) が指摘した有対自動詞の用法の特徴と一致する。

次節では、漢語動詞の自動詞文に対応する他動詞文が存在するか否か、および対応する他動詞文の主語の特徴について考察する。

4. 自動詞文に対応する他動詞文

漢語動詞の自動詞文に対応する他動詞文の主語は、有生物主語と無生物主語の場合が確認できる。

4.1 有生物主語の他動詞文

漢語動詞の自動詞文に対応する他動詞文の主語は、有生物と無生物との二つの場合がある。まず、有生物の他動詞主語を見る。例えば、

- (35)a. ケーブルテレビが発達しなかったイタリアでも、千九百九十九年に「FastWeb」というサービスが開始し、地上デジタルテレビ放送の再送信を行うという面でも、重要なインフラとして注目を集めている。

『NHK 放送研究と調査』

- b. テレビ局が新しいサービスを開始した。
c. 新しいサービスが (テレビ局によって) 開始された。

- (36)a. 第一次世界大戦中の千九百十七年、ロシア革命が起こってソビエト政権が樹立した。日本はチェコを救済する名目でシベリアに出兵し、ソビエト政権打倒をくわだてたが、多大な犠牲を払って4年後には撤兵することになる。

『新聞と報道』

- b. 革命軍が新たな政権を樹立した。
c. 新たな政権が (革命軍によって) 樹立された。

- (37)a. 「榎本さんのゴミ箱から、こういうものが見つかりましたよ」手渡されたしわくちゃの半紙を広げると、筆で書かれた漢字が羅列していた。

- b. 榎本さんが半紙に漢字を羅列した。
 - c. 漢字が (榎本さんによって) 半紙に羅列されていた。
- (38)a. 「地域による違いもありますし、泌尿器科、心療内科、精神科など、どの科でもいいと思います。なるべく早く受診することが大事です」半年程度のホルモン補充療法で症状が軽減していく。

『40代から、もっときれいになる本』

- b. 治療者が (患者の) 症状を軽減した。
- c. 症状が (治療者によって) 軽減された。

(35a) (36a) (37a) (38a)では、自動詞文の主語に起きた変化を引き起こしたのは、人(「榎本さん」「治療者」)や人からなる組織や機構(「テレビ局」「革命軍」)であり、有生物と解釈できる。(35b)(36b)(37b)(38b)のように、これらの有生物は他動詞文の主語になることができる。文脈から見れば、これらの主語は結果状態を引き起こした動作主と思われる。上記の場合の自動詞文は他動詞文と対応関係をなし、非対格自動詞文である。また、(35c) (36c) (37c) (38c)は、動作主が背景化された降格受身文である⁹。動作主を構文に明示する場合に、「によって」を使わなければならない。

4.2 無生物主語の他動詞文

無生物主語の他動詞文は、先行研究にも指摘されるように、日本語にはなじまない表現であるため、例文数は少ない。例えば、

- (39)a. 9月7日午前7時ごろ、市内で震度6弱の強い地震が発生。電気や水道などのライフライン施設や、道路の一部が破壊したほか、多くの建物が倒壊し負傷者が発生—という想定で市防災訓練を実施します。

『広報遠野』

⁹ 益岡 (1987) 『命題の文法-日本語文法序説』による。

b. 地震がライフライン施設や、道路の一部を破壊した。

(40)a. 地層が横から押されると、大きく波を打ったように変形されることがある。これを褶曲という。しかし、岩石はそのような力に耐えきれなくなると、ついには破壊する。実は、これが地震の原因である。

『新編理科総合B』

b. 褶曲の力が岩を破壊した。

(41)a. リウマチ、通風、膠原病、腰痛、関節痛、神経痛などに効果があるとして、多くの学者から効能が明らかにされたWHO認定薬用の学者から効能が明らかにされたWHO認定薬用植物〈キャツクロー〉を試したいのなら、業界初最高濃度の《三十倍濃縮キャツクローエキス》がオススメ。すでにアメリカやヨーロッパでは爆発的な人気を誇っており、リウマチなどの慢性的な痛みや腫れが緩和するということが話題。

『売れすじヒット大賞』

b. 《三十倍濃縮キャツクローエキス》という薬が慢性的な痛みや腫れを緩和する(効果がある)。

(39)～(41)では、自動詞文の変化を引き起こしたのは無生物である。無生物が他動詞文の主語になることは、メタファー的な用法である。無生物が対象の変化を引き起こす力を持っているため、結果状態を引き起こす原因であると考えられている。

(42)a. 先にも記述したように、通常は片状黒鉛鑄鉄の製造には亜共晶組成を用いる。したがって、オーステナイトデンドライトが初晶としてまず晶出する。そして、凝固が共晶温度に到達すると、共晶凝固が開始する。

『状態図と組織』

b. 片状黒鉛鑄鉄の原材料が共晶凝固を開始する。

- (43)a. 通常の乳化重合ではモノマー液滴に比べ大多数のミセルが存在し、水層で解裂した開始剤ラジカルは高い確率でミセルに侵入し重合が開始する。

『水性コーティング』

- b. ミセルが重合を開始する。

(42)(43)では、自動詞文の主語は、「共晶凝固」「(乳化) 重合」のような出来事を表す名詞句である。対象の変化を引き起こすのに必要な条件は文脈にも明示されている（「共晶温度に到達すること」「水層で解裂した開始剤ラジカルが高い確率でミセルに侵入すること」）。(42b)と(43b)においては、他動詞文の主語は、目的語の変化を引き起こした原因というより、むしろ目的語の変化の存在する場所あるいは在り処と解釈し、再帰的な関係と解釈したほうが適切である。

4.3 対応する他動詞文が存在しない場合

最後に、対応する他動詞文の主語が特定できない、あるいは対応する他動詞文が存在しない場合がある。この場合には、自動詞文の主語が内項であり、非対格自動詞文である。

- (44) ただし、家屋の所有者が相続又は遺贈により取得した家屋をその生計を一にする親族が引き続き居住の用に供している場合において、次に掲げる要件のすべてを満たしているときは、被相続人に相続が開始した日から次のロ又はハの要件に該当しないこととなった日までの期間は、居住期間に含めて取扱うこととされます。

『法人と個人の不動産の税務』

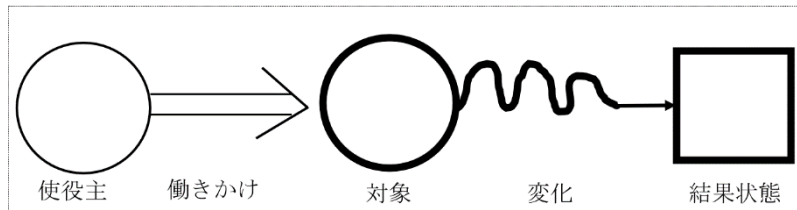
- (45) 妊産婦検診を受けることもなく、その必要性さえも知らずに生きるために働きづめだった。8カ月に入ったとき早く分娩が開始し、産婆が介助した。

「Yahoo!ブログ」

との意味での自動詞である。背景にある使役作用、あるいは働きかけの要素の存在は考えられない。そのため、これらの自動詞文に対応する他動詞文は考えにくい¹⁰。

以上の内容をまとめると、他動詞専用の傾向にある自動詞の自動詞の自動詞文には、対応する他動詞文が存在する場合もあり、存在しない場合もあることが分かる。それぞれの場合で漢語動詞の意味構造が異なると考えられ、使役構造が認知ベースにあるかないかの違いが見られる。

a. 対応する他動詞文が存在する場合



b. 対応する他動詞文が存在しない場合

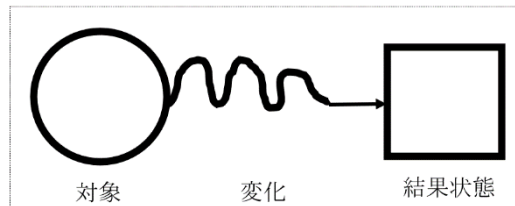


図 4: 2 種類の漢語動詞の自動詞文の認知ベース

他動詞専用の傾向にある自他両用の漢語動詞は、自動詞の使用が劣勢になっている。これらの自動詞文は一般的な自動詞文と同じ特徴を持つ。

第一に、自動詞文の主語には、無生物や出来事を表す名詞が多い。

第二に、自動詞文が描く事態は、外的要因によって引き起こされた事態が多い。外的要因は、無生物や出来事が引き起こしたものと、有生物の働きかけによって引き起こされたものがある。外的要因になる条件や事態な

¹⁰ 母語話者のなかでは、(46)について、堅い文章語ではありうるが話し言葉ではこなれない表現であるとの意見、また(47)について、「会社は新しい会計年度を開始した」のような意図的な行為の特殊な場合は他動詞文が使われる可能性もあるとの意見がある。

どは文脈に明示される場合がある。

第三に、他動詞専用の傾向を示す漢語動詞では、江口 (1989) が指摘した「他の力を經由して他の力が主体に作用して変化を生じさせる事」に意味的な重点が置かれている。降格受身文になることが多い。

第四に、自動詞文では、対象の変化による結果の状態が焦点化されて、プロファイルされている。認知ベースにおいて使役構造がある場合、対応する他動詞文が存在するが、認知ベースにおいて使役構造がない場合に、対応する他動詞文が存在しない。

第五に、文レベルで漢語動詞の意味構造を解釈する場合、一つの動詞が、描く事態によって、異なる意味構造を持つことがある。「開始スル」を例に、影山 (1996) による三つの動詞分類に合わせると、以下のようになる。

- (48) a. おのずと然る (自然発生)
新たな日常が開始する、相続が開始する。
- b. みずから然る (反使役化)
共晶凝固が開始する、ミセルの重合が開始する。
- c. 動作主を隠す (脱使役化)
サービスが開始する。

5. アスペクト的な意味を持つ漢語動詞

影山 (1996) は、「開始する」「終了する」「継続する」のようなアスペクト的な内容を表す動詞を取り上げ、これらの動詞は自然発生の事象を描写することができないと指摘した。前節では、実際に「新たな日常が開始する」のような自然発生を表す例文が確認した。この節では、「開始する」「終了する」「継続する」の自動詞文の用法について考察する。「開始する」「終了する」「継続する」は、BCCWJ において、異なる様態を呈している。

表2 「開始する」「終了する」「継続する」の各用例数

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差

開始	4166	180 (4.3%)	2812 (67.5%)	8 (0.2%)	1166 (28.0%)	27.8pt	63.2pt
終了	2580	1895 (73.4%)	553 (21.4%)	125 (4.8%)	7 (0.3%)	4.6pt	52.0pt
継続	1921	906 (47.2%)	804 (41.9%)	56 (2.9%)	155 (8.1%)	5.2pt	5.3pt

BCCWJ において、「開始する」は、他動詞の数は自動詞の数より圧倒的に多く、他動詞の使用が圧倒的に優勢にある。一方、「他動詞+ -re (-ru)」の数は自動詞の数を多く超えている。「開始する」は他動詞専用の傾向を示している。しかし、「終了する」と「継続する」は、専用の傾向が見られない。「終了する」は、他動詞の数と比べて、自動詞 (～が終了する) のほうが多く使われているが、他動詞 (「～を終了する」) の使用数もまれではない。「継続する」には、「自動詞」と「他動詞」の数、「自動詞+ -se (-ru)」と「他動詞+ -re (-ru)」の数には、大きな差が見られない。自動詞と他動詞が同等に働く動詞だといえる。

次節では、「開始する」「終了する」と「継続する」の自動詞文が描く事態について考察する。

5.1 有生物の働きかけによる出来事

この種の自動詞文は、有生物の働きかけによる出来事が発生し、発生の結果としての事態を描く。その出来事を表す名詞が自動詞文の主語になる。この場合には、自動詞文に対応する他動詞文の存在が想定できる。

- (49)a. 建物は十月に完成し、その後臨床試験を行い平成二十二年4月には本治療が開始する予定です。

『広報まえばし』

- b. 医者が本治療を開始する。

- (50)a. では、日本において自民党による一党支配が継続した結果、政治と行政との関係がどのように変化したのであろうか。

『政治改革』

b. 自民党が一党支配を継続する。

(51)a. 都市計画公園である備前町、馬田池公園南側の拡張工事が終了し、7月3日、その完成を祝うとともに記念のグラウンド・ゴルフ大会が開かれました。

『広報「町から町へ」』

b. 業者が工事を終了した。

(49a)(50a)(51a)は、自動詞文の主語は「本治療」「一党支配」「拡張工事」といった出来事を表す名詞句である。文脈から他動詞文の動作主を想定することができ、使役主を補足して対応する他動詞文も成立する((49b)(50b)(51b))。この場合の自動詞文には、図 4a と同様に、使役主による働きかけは背景化されて、結果状態が焦点化されて、プロファイルされていると考えられる。

5.2 自然発生 of 出来事

この種の自動詞文は、外的な力や働きかけなどの要素の存在が見られず、自然に発生した出来事を表す。

(52) 1 週間後には、炭化層は自然剥離し、周辺から上皮化が開始します。4 週間後には癒痕もなくきれいに治癒しています。

『婦人病・不妊症の最新レーザー治療』

(53) これに対し、シカゴ大都市圏を例外としてデトロイト・セントルイス・クリーブランドなど鉄鋼や自動車といった伝統的な工業を中核とする中西部の大都市圏では、七十年代に引き続き八十年代も人口減少が継続し、都市の衰退が大きな問題となっている。

『参加型まちづくり時代のコンサルタント』

(54) 二億五千万年前の噴火が終了した頃、その低い粘性のためほぼ平らな地形をしていたであろう。洪水玄武岩の広大な高原は、

その後長年の浸食を受け、幾筋にも穿たれていた。

『大量絶滅』

(52) (53) (54)について、「上皮化の開始」「人口減少の継続」「噴火の終了」といった自然現象や社会現象が自動詞文の主語になっている。このような事態には、事態の発生をコントロールできる使役主は想定できないため、自動詞文に対応できる使役主の他動詞文は成立しない。

また、(55a)のように、「傷ついた箇所」「日本」「山」の出来事の発生した場所、ないし在り処と解釈できる要素を補足することは可能である。一方、「上皮化の開始」「人口減少の継続」「噴火の終了」の出来事の発生は、「傷ついた箇所」「日本」「山」に帰すると解釈でき、両者の間に、再帰性の存在も認められる。したがって、(55b)のようなヲ格を取る他動詞文も成立する。

(55)a. 傷ついた箇所では上皮化が開始する。

日本では人口減少が継続する。

山では噴火が終了する。

b. 傷ついた箇所が上皮化を開始する。

日本が人口減少を継続する。

山が噴火を終了する。

しかし、(55b)の他動詞文は、典型的な他動詞文とは異なり、ヲ格を取るものの、(56)のような自動的な事態を描いている。

(56) 傷ついた箇所の上皮化が開始する。

日本の人口減少が継続する。

山の噴火が終了する。

漢語動詞の自動詞文には、上記 2 種類の出来事を描くものがある。一つは、有生物の働きかけによる出来事であり、もう一つは自然発生の出来事である。有生物の働きかけによる出来事の場合には、働きかけの使役作用は背景化され、結果状態が焦点化されている。一方、自然発生の出来事

には、使役作用の背景化という部分の認知ベースは存在しない。再帰性が見られる出来事の場合には、ヲ格を取る場所や在り処を示す他動詞文の主語を補足することはできる。

ここで、再び表2のデータを見よう。「開始する」は、他動詞専用の傾向にある自他両用動詞であり、使役主の働きかけによる使役作用による出来事を描くことがデフォルトで、自然発生の事態を描くのは例外的と思われる。それに対して、「継続する」と「終了する」には、そのような傾向はない。次の自動詞文と受動文との対比を見てみたい¹¹。

- (57) *工事が開始する ○工事が継続する ○工事が終了する
*戦争が開始する ○戦争が継続する ○戦争が終了する
*噴火が開始する ?噴火が継続する ?噴火が終了する
?日常が開始する ?日常が継続する ?日常が終了する

- (58) ○工事が開始される ○工事が継続される *工事が終了される
○戦争が開始される ○戦争が継続される *戦争が終了される
*噴火が開始される *噴火が継続される *噴火が終了される
?日常が開始される ?日常が継続される ?日常が終了される

現代の日本語母語話者にとって、「開始する」は使役主の「誰かが」を必要とし、使役作用が背景化されにくいと思われる。そのため、「～が開始する」という自動詞用法は不自然に感じられやすい。「工事」や「戦争」など使役主の存在が見られる事態の場合は、受動態が自然であるが、「噴火」「日常」のような使役主の働きかけが考えにくい事態では、受身形もなじまない。一方、「終了する」には、使役主の「誰かが」それほど必要ではないため、使役作用が背景化される可能性もあり(「時間の流れに沿って自然にそうなる」)、自動詞の用法が一般的になると思われる。「工事」や「戦争」のような使役主の働きかけが見られる事態でも、「終了する」の受動態はなじまない。

¹¹ (57)と(58)は、日本語母語話者(4名)の内省判断による結果である。「動詞のヴォイスの問題ではなく、名詞と動詞の組み合わせの問題」との意見もある。

この違いを図5で見ると、「開始する」は図5bの認知モデルになりやすく、「終了する」には図5aの認知モデルになりやすいことを意味する。「継続する」は、描く事態によって図5aの場合もあり、図5bの場合もある。

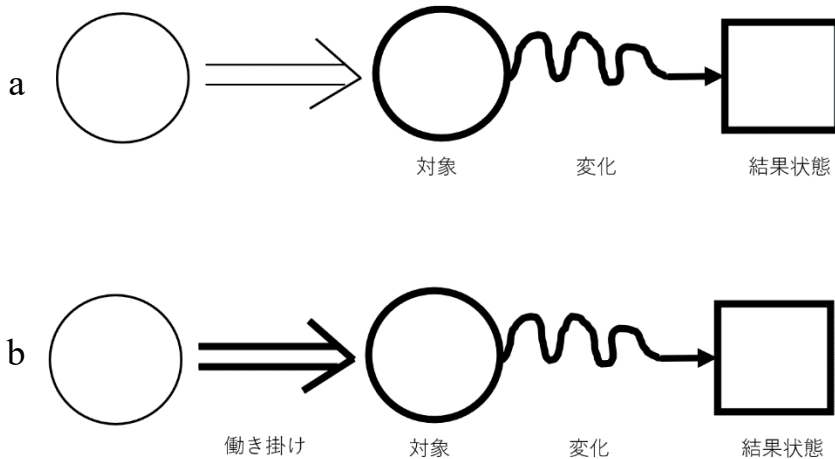


図5: 「開始する」と「終了する」の典型的な認知モデル

5.3 先行研究に対する再考察

ここで、影山 (1996) が挙げた例文について再び考察する。

- (59)a. 会議を終了する／会議が終了する
 a'. *梅雨を終了する／*梅雨が終了する
 b. 操作を継続する／操作が継続する
 b'. *伝染病を継続する／*伝染病が継続する

[(15)再掲]

影山 (1996) によれば、「開始する」「継続する」のようなアスペクトの意味を持つ漢語動詞部は、「意図的な活動が対象となり、逆に、自然発生の事象はこれらの動詞で描写することができない」とのことである。つまり、(59a)と(59b)について、「会議の終了」や「操作の継続」という事態の成立は、「使役主」の存在が必要であり、自動詞文が成立する。逆に、(59a')

と(59b')のような自然に発生した現象を描写する場合は、自動詞文が使えない。

しかし、(53)(54)のように、「継続する」「終了する」には、使役主の存在が見られず、自然発生の現象を描く自動詞文も存在する。したがって、(59a')(59b')の不成立について、自然発生であるか否か、使役主が含意されているか否かでの解釈では、足りないところがあると思われる。ここで、(53)(54)と(59a')(59b')との違いに注目したい。(53)(54)は、(55b)のように、出来事の発生する場所や在り処を表す他動詞文の主語を補足し、再帰性がある事態で描写することができる。しかし、(59a')(59b')は、そのような主語を補足しても、他動詞文が成立しない。

- (60) ?日本が梅雨を終了した。
?日本が伝染病を継続する。

(60)のように、「梅雨」「伝染病」と「日本」との間には、再帰的な関係がない。「梅雨」「伝染病」はある種の出来事を表しているのではないため、「日本」には場所や在り処としての解釈が成立しない。仮に、出来事を表す「伝染病の流行」に変えれば、「日本」は「伝染病の流行」という事態の発生した場所と解釈でき、再帰性のある事態として、ヲ格を取る他動詞文が成立するようになる。これは(61b)のような自動的な事態を表す。

- (61) a.日本が伝染病の流行を継続する¹²。
b.日本で伝染病の流行が継続する。

したがって、本稿では、影山(1996)の指摘した「自然発生の事態を描写することができない」との条件に、以下の例外の場合もあると指摘する。すなわち、事態の発生した場所、在り処を表す他動詞文の主語が導入できるような、再帰性のある事態を描く場合には、自然発生の事態を描く漢語動詞の自動詞文が成立する。

¹² (61a)は、「日本に責任がある」とのニュアンスがある。

6. 「拡大する」「縮小する」の自動詞用法

この節では、先行研究でも扱った漢語動詞「拡大する」、およびその対義語である「縮小する」の自動詞文用法について考察する。BCCWJにおける「拡大する」と「縮小する」の各用法の数を表3に示す。

表3 「拡大する」「縮小する」の各用例数

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	CとD 比率差	AとB 比率差
拡大	3831	1761 (46.0%)	1551 (40.5%)	163 (4.3%)	356 (9.3%)	5.0pt	5.5pt
縮小	923	516 (52.4%)	240 (29.5%)	52 (5.6%)	115 (12.5%)	6.8pt	23.0pt

「拡大する」「縮小する」は、BCCWJにおいて、自動詞専用の傾向、他動詞専用の傾向を示していない。「拡大する」には、自動詞と他動詞の使用数、「自動詞+ -se (-ru)」と「他動詞+ -re (-ru)」の使用数は、差が非常に小さく、自動詞と他動詞は同等に働く動詞と思われる。次の節では、漢語動詞の自動詞文の描写する事態について考察する。

6.1 有生物の働きかけによる出来事

この種の自動詞文の主語は、有生物が携わる動作や活動を表す名詞が多い。主に「生産、運動、紛争、戦争、サービス、消費、栽培、売り上げ、～の利用、～の使用、～との対話」など、有生物や有生物からなる組織、機構など携わる動作や活動を表す名詞である。

- (62)a. 三十年以降、先進地域であるバグダード州や、アマラ州とバグダード州の中間に位置するクート州では商業的農場経営が拡大し、バグダード州の地主や族長は積極的に農業投資を行った。

『中東イスラム世界の社会学』

- b. 自社の生産が海外に移転、国内生産が縮小し、国内において

は下請中小企業の後継者問題・技術の喪失の懸念が生じる中で、従来は確たる方針もなく執り行ってきた生産・購買政策を見直し…

『中小企業白書』

- c. これが、二千一年同期には百十六社、8億九千八百万ドルと大幅に減少している。しかし、投資全体が縮小しているため、ベンチャー投資全体に対する無線関連企業の比率は、二千一年の十一.五パーセントから二千一年の十.九パーセントと、それほど減少していない。

『iINTERNET magazine』

(62)は、機構や組織に所属する一つの側面である生産、経営、投資などの規模の変化を表している。文脈を除くと、(63)のように簡略化することができる。

- (63)a. 会社が {生産 / 経営 / 投資} を {拡大 / 縮小} する。
b. (会社の) {生産 / 経営 / 投資} が {拡大 / 縮小} する。

(63)は、主語の意味役割により2種類の解釈が可能である。一つは、会社は、自分の生産、経営、投資などをコントロールして、変化を引き起こす動作主である。一方、何かの外的な原因で、会社は生産、経営、投資等を増加したり、減少したりする状況にあり、その変化が生じた場所、ないし在り処としても解釈できる。(62)では、文脈から見れば、使役的な作用が背景化されていて、変化の結果状態が焦点化されている。

6.2 自然発生の出来事を表す名詞

この種の事態は、使役的な作用が見られず、自然に発生した出来事や現象を表すものである。

- (64)a. 微弱な明かりが水中にただよう藻のごとく揺らめき、徐々に拡大していく。

『妖少女』

- b. 一万二千年ほど前、温暖化とともに大西洋側のローレンタイド氷床と太平洋側のコルディエラ氷床が縮小し、行手を覆っていた氷壁に“無氷回廊”と呼ばれる狭い道が現れる。

『熊野学事始め』

- c. 五百七十三℃では素地粘土に含まれている珪石が縮小して、もとの大きさに戻るといふ変化を現わしますが、これにともなつて収縮現象が現われます。

『陶芸の釉薬入門』

(64a)における「明かり」は自然現象である。「明かりの範囲の拡大」といふ事態は、「明かり」の自力で実現したことである。使役作用の存在が見られない。(64b)(64c)では、「氷床の縮小」「珪石の縮小」は、「温暖化」「五百七十三℃の高温」によつて引き起こした変化であり、使役主の存在は見られない。したがつて、対応する動作主主語を持つ他動詞文は存在しない¹³。

6.3 先行研究に対する再考察

ここで、再び影山 (1996) に挙げられた例文について考察する。影山 (1996) が自他両用の漢語動詞について、「自動詞用法のほうに意味的・認知的制限が観察される」と述べたが、その制限について「変化対象の自力ないし内在的コントロールが認められる場合だけ自動詞が成り立っている」と解説した。しかし、「内在的コントロール」の判断について、困難な場合があると先行研究で指摘されている。例えば、(65a)の「領土の拡

¹³ (64b)(64c)について、影山 (1996) が指摘する「CAUSE」という意味要素を導入することで使役化することができると思われるが、早津 (1987) は「自然力を主語にした他動詞文は日本語にはあまりなじまない表現である」とも述べている。

- (2) a. 温暖化 (という原因) が氷床を縮小した。
b. 高温 (という原因) が珪石を縮小した。

大」には「内在的コントロール」の存在が考えにくいと思われる。

- (65)a. ナポレオンがフランス領土を拡大した。
a'. フランス領土が拡大した。
b. コピー機を使って、図面を拡大した。
b'. *(コピー機で) 図面が拡大した。

[(16)再掲]

(65a')における「領土の拡大」は、(65a)の使役主「ナポレオン」という使役主の働きかけによって発生した変化である。その変化の結果が焦点化されるのは(65a')である。

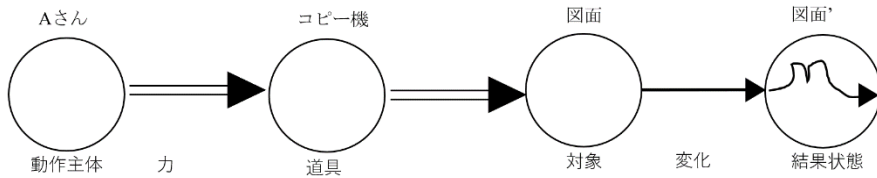
また、(66)のように、「フランス」を他動詞文の主語に立てれば、2種類の解釈ができる。一つは、(65a)と同じく、使役主主語であるが、もう一つは、「領土が拡大した」との事態が生じる場所、あるいは所有する経験者主語との解釈である。

- (66) フランスが領土を {拡大/縮小} した。
a. 動作主: 「フランス」が「領土の拡大/縮小」を引き起こした。
b. 経験者: 「フランス」が「領土の拡大/縮小」を経験した。

つまり、「フランス領土が拡大した」との自動詞文の表す結果状態は、(66a)の使役的な働きかけによる結果であり、この場合は、他動詞文と自動詞文とは「対格構文 vs 非対格構文」との対応関係をなしている。(66b)の経験者の場合は、構文的な対応関係をなしているものの、同一の事態の二つの側面を描いていないため、対応関係をなしていない。どちらにせよ、(65a')は使役作用が背景化されて、結果状態のみが焦点化されている。

(65b')では、「図面」はおのずから大きくなったり、小さくなったりするようには見ることがない。明確な外力が働かないかぎり、「図面」自身は変化しない。つまり、「図面の拡大・縮小」という事態の達成には、「コピー機を使う動作主」が必要不可欠である。つまり、「図面の拡大」という事態が成立するときは、「コピー機」という道具に働きかける使役主が必ず

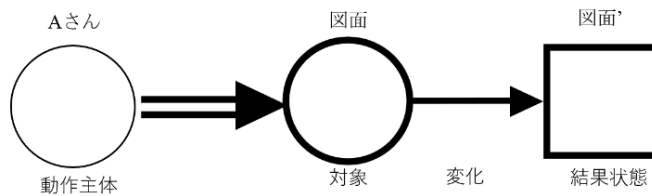
存在する¹⁴。使役作用は「ナポレオン」の「フランス領土」に対するものより直接的であり、認知ベースにおいては、背景化されることはない。



Aさんが（コピー機で）図面を〔拡大/縮小〕した。

図 6: 「(コピー機で) 画面を拡大した」の認知モデル

図 6 は、「コピー機で図面を拡大した」という事態を描く認知モデルである。対象の変化のみを描く場合、図 7 のように、働きかけの作用が背景化できない。そのため、その働きかけの作用が言語構造に表現されなければならない、受動態「図面が〔拡大 / 縮小〕された」で表す必要がある。



図面が〔拡大/縮小〕された。

¹⁴ L & RH (1995) は、なぜ動詞 cut が自他交替をなさないかについて、以下のように論述している。

- (3) ...this specification, in turn, implies existence of a volition agent. The very meaning of the verb *cut* implies the existence of a sharp instrument that must be used by a volitional agent to bring about the change of state described by the verb.

(Levin & Rappaport Hovav 1995:103)

つまり、cut という動詞の意味は通常、その動詞で表現された状態の変化をもたらすために、鋭い道具を使う意志を持った動作主が存在しなければならない(動作主の不在を明示すれば、the rope cut of itself のような自動詞用法が生じる)。

図 7: 「図面が {拡大 / 縮小} された」の認知モデル

上記の例文における「図面」は、「コピー機」で拡大する紙の図面である。しかし、パソコンの画面の場合は、その画面が勝手に変化することもあり、働きかけの使役作用は背景化されることは可能と考えられる。BCCWJにおいて、(67)のような実例が見られた。

(67)a. 子供が何かのキーを押したらすべての画面の文字が拡大してしまいました。

「Yahoo!知恵袋」

b. 画像をクリックすると拡大します。

「Yahoo!ブログ」

(67)では、パソコンの「画像」や「文字」の変化を表す自動詞文である。その変化を引き起こした外的な働きかけは文脈に明示されている。この場合の認知ベースでは、働きかけによる使役作用が背景化されることは可能であり、結果状態のみが焦点化されている。つまり、認知ベース上で、事態の結果状態の成立に関わる外的な働きかけの要素が背景化できない場合は、自動詞文が成立しない。この点を用いて、影山 (1996) で挙げられたほかの例を確認しよう。

(68)a. 水を分解すると水素と酸素に分かれる。

a'. 水が水素と酸素に分解した。

b. 時計をばらばらに分解した。

b'. ?*時計がばらばらに分解した。

(69)a. ボクシングでなぐられて、顔が変形した。

b. *深層構造が表層構造に変形した¹⁵。

¹⁵ 「変形する」は再帰的な自動詞であり、もともと使役主がないと思われる。「深層構造を表層構造に変形する」「深層構造が表層構造に変形される」は、文法論においてのみ認められる特殊な用法である。

- (70)a. 被災地が再生した。
b. *録音テープが再生した。

(影山 1996: 203)

(68b)(69b)(70)では、共通する特徴は、結果事態の変化の成立には、外的な働きかけが必要不可欠である。「(コピー機で)図面の拡大」「時計の分解」「深層構造の変形」「録音テープの再生」のような事態は、その変化の実現には、外力による働きかけが必要である。認知ベースにおいて、それが背景化されることはできない。その場合は、結果事態のみを描写したい場合は、自動詞文が使えず、受動態でその事態を表さなければならない。

7. おわりに

本章では、他動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語サ変動詞の自動詞用法について考察した。本章で扱った対象には、以下の3種がある。

第一、BCCWJにおける他動詞専用の傾向にある自他両用の漢語動詞。

第二、アスペクト的な意味を表す動詞「開始する」「継続する」「終了する」

第三、先行研究で扱った「拡大する」、および対義語の「縮小する」

まず、他動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語サ変動詞の自動詞文について、和語動詞の有対自動詞文の主語と同様に、①無生物や出来事を表す名詞を主語に取ることが多い。②自動詞文が表した事態は、外的な働きかけによって生じた事態が多い。

また、外的な働きかけによって生じた結果事態は、認知ベースにおいて、その働きかけが背景化されうる場合、結果事態が焦点化されて、自動詞文が成立する。しかし、認知ベースにおいて、その働きかけが背景化されえない場合、自動詞文が成立しない。その働きかけの要素が必要不可欠であるため、言語構造において受動態で表す必要がある。働きかけと結果との直接性に関わる。

さらに、漢語動詞の自動詞文の中には、自然発生の事態も少数ながら存在する。この場合の自動詞文には対応する他動詞文は成立しない。ただし、事態の発生を所有する再帰的な事態の場合は、事態の発生した場所や

在り処と解釈できる他動詞文の主語を補足することができる。

最後に、漢語動詞は、和語動詞とは異なり、語形によって反使役化または脱使役化という自動詞の派生方法を判断することはできない。動詞の描写する各事態に沿って、自動詞文の意味役割を分析しなければならない。

第五章参考文献

- 江口泰生 (1989)「漢語サ変動詞の自他性と態」奥村三雄教授退官記念論文集刊行会(編)『奥村三雄教授退官記念 国語学論集』pp.765-784、桜楓社
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論』くろしお出版
- 佐藤琢三 (2005)『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
- 谷口一美 (2003)『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』研究社
- 谷口一美 (2004)「行為連鎖と構文 I」中村芳久編『認知文法論 II』pp. 53-87、大修館書店
- 中村芳久 (2000)「認知文法から見た語彙と構文: 自他交替と受動態の文法化」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』20、pp. 75-103
- 早津恵美子 (1987)「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』6、pp. 79-109、京都大学言語学研究会
- 早津恵美子 (1989)「有対他動詞と無対他動詞の違いについて-意味的な特徴を中心に」『言語研究』95、pp. 231-256、日本言語学会
- 前田宏太郎 (2019)「日本語の自他交替: 協調の原理の観点から」日本語用論学会第21回発表論文集 14、pp. 105-112
- 益岡隆志 (1987)『命題の文法-日本語文法序説』くろしお出版
- ヤコブソン、ウェスリー・M (1989)「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』くろしお出版 須賀一好・早津恵美子 (1995)『動詞の自他』に再掲、pp. 166-178(本文中のページ数は再掲による)、ひつじ書房

第六章 「移動スル」から見る自他両用の二字漢語サ変動詞の用法

0. はじめに

本章は、漢語サ変動詞「移動スル」に注目し、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(中納言) (BCCWJ)の実例に基づき、漢語サ変動詞「移動スル」の用法について考察するものである。「移動スル」に注目する理由は、「移動スル」には、「椅子を移動する」のような「対象格」の用法も持っており、「世界の各地を移動する」のような「移動格」の用法も持っているためである¹。そのうち、自他両用の「対格構文 vs 非対格構文」との対応関係を持っているのは、「対象格」である。本章では、「移動スル」の「移動格」と「対象格」の各用法を記述したうえで、各用法の間に関連性が見られるか否かについて考察する。

1. 先行研究

奥津 (1967) は、「富樫ハ 弁慶ヲ 安宅ノ関ヲ 通シタ」における二つの「ヲ格」は文法的な機能が異なると指摘し、「弁慶の移動の行為が行われる場所を示す」ヲ格を、「移動格」と名付けた。

杉本 (1986) は、動詞と「移動に関わる場所」との関わりによって、移動の「経路」「経由点」「起点」の三つの場合があると指摘した。

- (1) a. 太郎は遊歩道を歩いた。(経路)
- b. バスは駅前の交差点を過ぎた。(経由点)
- c. 人工衛星は軌道を離れた。(起点)

(杉本 1986: 282)

また、杉本 (1986) は、(1)のような「移動に関わる場所」を表すヲ格名

¹本章は、奥津 (1967) などの研究に従い、移動補語を取るヲ格を「移動格」と、目的語補語を取るヲ格を「対象格」と呼ぶ。

詞句を「移動補語」と呼び²、移動補語と「ヲ」を取る目的語、二者の境界の曖昧性について論じた。例えば、

- (2) a.参加者は千人を越えた。
(Cf. 第3部隊はその峠をやっと越えた。)
b.加藤さんはその仕事を降りた。
(Cf. 加藤さんは先に山を降りた。)
c.太郎は6年かかって大学を出た。(=卒業した)
(Cf.太郎が駅を出た。)

(杉本 1986: 308)

杉本 (1986) によれば、(2)における動詞はすべて「抽象的な動作」を表し、「ヲを格」名詞句も抽象的な場所を示している」と述べた。この点は括弧にある例文と対照的である。(2)と同様に、(3A)の「会社をやめる」は「抽象的な起点」を示している。

- (3) A: a.山田さんがこの会社をやめた。
b. ?加藤さんは山田さんを自分の思惑からこの会社をやめさせた。
c. ?加藤さんが山田さんをやめさせたのは進学だ。
B: a.太郎が煙草をやめた。
b. *花子は太郎を健康上の理由から煙草をやめさせた。
c. *花子が太郎をやめさせたのは煙草だ。

(杉本 1986: 309-310)

しかし、(3B)は(3A)と異なり、移動補語ではないとされている。両者には、(3Ab) (3Ac)と(3Bb) (3Bc)の構文において異なる用法を呈している。

²杉本 (1986) では、(1a)のヲ格名詞句を「移動補語」と呼ぶ。(1b)のヲ格名詞句を「状況補語」と呼び、両者とも研究対象に入れている。

- (1) a. 道を歩く。
b. 吹雪の中を 山小屋を探した。

つまり、「やめる」の「ヲ格」名詞句は、「場合によって、目的語のように振る舞ったり、移動補語のように振る舞ったりするのである」とのことである。

さらに、杉本 (1986) は、Hopper&Thompson (1980) による「他動性 (Transitivity)」の概念に基づいて³、「影響性」の面から目的語と移動補語との相違を論じた。

- (4) a. 国籍不明機が日本の領空を離れた。
 b. 国籍不明機が日本の領空から離れた。

(杉本 1986: 315)

杉本 (1986) によれば、(4a)では、「国籍不明機」は必ず「日本の領空」の中にいる必要がある。しかし、(4b)は、その必要がないとのことである。一方、(5a)に示した主語「太郎」が「花子」の領域に入っていないため、文は不成立である。(5b)と(5c)のように、「カラ」格を使うか、「花子のそば」との名詞補語を使うか、これで二つの文は成立するようになる。

- (5) a.*太郎は花子を離れた。

³ Hopper&Thompson (1980) による「他動性(Transitivity)」

	高	低
(1) A. 参加者	参加者が2かそれ以上(AとO)	参加者が1
B. 運動性	動作	非動作
C. アスペクト	完了	非完了
D. 期間性	瞬間	継続
E. 意志性	意志的	非意志的
F. 肯定性	肯定	否定
G. ムード	現実	非現実
H. 動作主性	Aの能力が高い	Aの能力が低い
I. Oの影響性	Oが全体的に影響を受ける	Oが影響を受けない
J. Oの個別化	Oが高度に個別化されている	Oが個別化されていない

- b. 太郎は花子から離れた。
- c. 太郎が花子のそばを離れた。

(杉本 1986: 315)

(4)と(5)について、杉本 (1986) は、「「ヲ」格名詞句で示される領域内での移動が必要だということは、起点の場合も、移動補語に対する影響性が高い」と述べて、目的語と移動補語との共通点を示していると主張した。

杉本 (1995) は、杉本 (1986) の観点を継承し、移動の経路、経由点と起点との三つの面から、移動格の「ヲ格」の「影響の全体性」について検証した。まず、移動の経路について、

- (6) A: a. 校庭を走る。
- b. 校庭で走る。
- B: a. 公園を散歩する。
- b. 公園で散歩する。

(杉本 1995: 120)

杉本 (1995) によれば、「「~で」も「~を」も移動の場を表すが、「で」が移動の範囲を限定するだけであるのに対して、「を」を用いると、その場所を全体的に移動する」という意味上の異なりを示した。そのため、(7)において、「を」格と「で」格の交代により、文は不成立になる。

- (7)A: a. 学校で校庭を走る。
- b. * 学校を校庭で走る。
- B: a. 公園で森を散歩する。
- b. * 公園を森で散歩する。

(杉本 1995: 121)

また、経由点の「ヲ格」の場合について、

- (8) 列車が鉄橋を通過した。

選手がチェックポイントを過ぎた。

(杉本 1995: 121)

杉本 (1995) の説明により、(8)に示した移動動詞の通過点について、線
的もの(「鉄橋」)であれ、点的なもの(「チェックポイント」)であれ、経
由する行為は経由された領域に全体的に及ぶものだと言える。

最後に、起点の「ヲ」格について、杉本 (1995) は、(4)と同様に解釈し
ている。

- (9) a.船が港を離れた。
b.船が港から離れた。

(杉本 1995: 121)

(9a)の場合は、船は「港」に停泊した後、「港」の外に移動する」と
のことで、「離れる」前に、「港」の「領域内での移動が必要」となり、
(9b)の場合はその必要がないとのことである。

杉本 (1995) は、「起点」「経由点」「経路」の全体性の特徴に関しては、
「経路 > 経由点 > 起点」との順序をつけた⁴。この順序に従うと、「全体
性の最も高い経路の「を」は、目的語に最も近い性質を持つことになる」
はずである。しかし、これが杉本 (1986) の結論に矛盾することは、杉本
(1995) にも指摘された。杉本 (1986) に従うと、「全体性の最も高い経路の
「を」は、目的語に最も近い性質をもつことになるはずであるが、これ
は事実とは異なる。実際に、目的語の「を」と最も近い性質を持つのは、
起点の「を」である」ということである。

したがって、杉本 (1995) は、「全体性という特徴から移動格の「を」

⁴ 「経路 > 起点」の順序について、杉本 (1995) は、「太郎が部屋を出た」を例に、「部屋」
の中での移動があるにしても、局部的であってかまわない (例えば、ドアの所に立っ
ていて、外に出る場合)。この点で、起点の「を」の全体性は、経路の「を」のそれよりも
低い」と述べた。また、「経由点 > 起点」の順序について、杉本 (1995) は、「太郎が川を
渡った」を例に、「川」を横切るなのであって、「川」全体を移動するわけではなく、全体
性は低い」と述べた。ただし、「経由点 > 起点」の順序について触れていない。

を考慮することが、妥当ではない」ことを主張し、「移動の方向性の明確さ」という特徴を提案した。例えば、(10a)における「部屋」には方向性が認めにくいので、不自然である。一方、(10b)の起点を表す場合、方向性が明確的なものとしている。

- (10) a. ?太郎は部屋を歩いた。
b. 太郎は建物を出た。

(杉本 1995: 124)

杉本 (1993) は、状況を表す「ヲ格」について、状況のヲ格と移動のヲ格を同じものとして扱うことができると指摘し、(11)の理由を挙げている。

- (11) a. 状況補語は、何らかの移動を伴う動詞としか共起できない。
b. 状況補語と移動補語とで、曖昧な場合がある。
c. 状況補語は、「中」などによって場所化される必要がある。

(杉本 1993: 32)

例えば、「殴りかかる」は移動動詞とは言えないが、「何らかの移動を伴う動作を表す動詞」だと考えられる。そのため、状況のヲ格と共起することができる。

- (12) 太郎は友人の制止の中を次郎に殴りかかった。

(杉本 1993: 29)

また、(13)に示したように、杉本 (1993) は、「状況補語は、移動場所を含む移動動作が行われる場所を示す働きを持っている」と述べ、「状況補語と移動補語の語順を逆にすると、落ち着きが悪くなる」と指摘した。

- (13) a. 暗闇の中を洞窟をさまよった。
b. ? 洞窟を暗闇の中をさまよった。

(杉本 1993: 33)

杉本 (1993) によれば、(13a)の「暗闇の中を」は、「意味的に、「洞窟をさまよう」全体的にかかっている」とのことから、「状況の「を」は、移動との結び付きが弱くなった移動格、弱化した移動格」だと言えると指摘した。

杉本 (1986; 1993; 1995) の一連の研究は、目的語の「ヲ格」、移動補語の「ヲ格」と状況補語の「ヲ格」を取り上げて、目的語の「ヲ格」と移動補語の「ヲ格」との関連性、状況補語の「ヲ格」と移動補語の「ヲ格」との関連性について論述した。しかし、「全体性」による説明であれ、「方向性」による説明であれ、3種の「ヲ格」の関係が不明なところが多いと思われる。

三宅 (1996) は、「起点」と「経路」を表す「ヲ格」を対象にし、移動動詞の対格標示には、「語彙概念構造と統語構造の両方における制約／原理に基づいて成立すると結論付けられる」と主張した。

また、三宅 (1996) は、「起点」を表すヲ格について、「「着点」をも同時に含意する場合は、「起点」を対格で標示できない」(14)と述べて、「意志的にコントロールされない移動の場合は、「起点」は対格で標示できない」(15)と指摘した。

- (14) a. 太郎が部屋 *ヲ／カラ庭に出た。
b. 太郎が国内 *ヲ／カラ海外に出発した。

(三宅 1996: 145)

- (15) a. けむりが煙突 *ヲ／カラ出た。
b. 涙が目 *ヲ／カラこぼれた。
c. 血が傷口 *ヲ／カラあふれた。
d. 荷物が網棚 *ヲ／カラ落ちた。

(三宅 1996: 145)

影山・由本 (1997) は、「移動」の物理的な状況を、「ある物体がある場所(起点)から動き始め、途中の道筋(経路)を通りながら、最終的になんらかの地点(着点)にたどり着く」(p.133)とのように解釈した。また、日本語においては、「起点、経路、着点のすべてを同時にカバーできる動

詞はむしろ少数」であり、「起点、着点、経路のうちいずれか1つに重点を置いて表現する」(p.133) 動詞が多いと述べた。

- (16) 移動する、行く、渡る、上る、往復する、退く、進む、移る
a. 彼女は泳いで、英仏海峡をイギリスからフランスに渡った。
b. 夜行列車は東海道を京都から静岡に進んだ。

(影山・由本 1997: 133)

影山・由本 (1997) は、アスペクトの点から、移動を表す動詞を、「完了相を持つ起点重視/着点重視動詞」と、「継続相を持つ経路重視の動詞」に分けている。

- (17) a. 起点/着点指向の移動動詞(30分で～する)

起点重視: 出発する、(町を)出る、離れる、脱出する、発車する、離陸する、去る、立つ、逃げる

着点重視: 入る、着く、到着する、(表通りに)出る、至る、乗る、入学する、入社する、届く、上陸する、上京する

- b. 経路指向の移動動詞(30分間～する)

移動の方向に関する動詞: さまよう、うろつく、放浪する、越える、くだる、回る、貫く、漂う、伝う、通過する、徘徊する

移動の様態に関する動詞: 歩く、走る、泳ぐ、流れる、這う、飛ぶ、闊歩する、転がる、滑る

(影山・由本 1997: 134)

影山・由本 (1997) は、「移動する」の例文を示さなかったが、「移動する」は「起点、経路、着点のすべてを同時にカバーできる動詞」に属すると指摘した。

田中・松本 (1997) は、方向性を包入(語彙化)した移動動詞(18a)、経路位置関係性を包入した移動動詞(18b)、との2種の動詞を挙げている。

- (18) a. 行く、来る、登る、下る、上がる、下がる、降りる、落ちる、沈む、戻る、帰る、進む

b. 越える、渡る、通る、過ぎる、抜ける、横切る、曲がる、くぐる、回る、巡る、寄る、通過する、入る、出る、至る、達する、着く、到着する、去る、離れる、出発する

(田中・松本 1997: 141)

また、「経路位置関係の包入に関しては、起点、着点、通過点を表すものの中で、包入のあり方に差がある」と述べている。

- (19) a. その町 {から / を} {去る / 離れる / 出発する}
 b. その町 {に / *を} {着く / 到着する}
 c. その町を {通る / 過ぎる / 抜ける / 横切る}

(田中・松本 1997: 141)

田中・松本 (1997) によれば、(19a)は、起点を表し、カラ格でもヲ格でも示されることは可能である。(19b)は、着点を表すもので、ニ格が必ず現れる。(19c)は、通過点を表すもので、基準物がヲ格で表される。

加藤 (2006) は、日本語におけるヲ格の用法を表 1 にまとめた。そのうち、必須の「ヲ格」を、「対象格」と「場所格」の 2 種に分けている。

表 1 加藤 (2006) による「ヲの用法」

ヲ の	接続助詞的 ⁵	
	格助詞的	非必須格 背景状況格 ⁶

⁵ 接続助詞的なヲ格は、以下の用例がある。

- (2) a. 使い方がわからないのを適当にいじっていたら、ついに動かなくなってしまった。
 b. 東も西もわからないのを気の向くままに歩いていたら、いつのまにか駅で出た。
 c. お忙しいところをすみません。

(加藤 2006: 136)

⁶ 杉本 (1986) で扱った「状況補語」の場合を指す。例えば、

- (3) a. 吹雪の中をさまよひ歩く。(下線は筆者による)
 b. 雨の中を走り回る。(下線は筆者による)

(加藤 2006: 140)

用法	(ヲ格)	必須格	対象格		
			場所格	離格	
				経路格	通過域 ⁷
					移動経路
移動領域					

(加藤 2006: 176)

加藤 (2006) は、ヲ格の表す場所格の用法を 2 つに分けている。一つは、「離れていくことを表す」ものであり、「離格」(desertive) と呼び、もう一つは、「移動行為を行う上で存在することが前提になっている移動経路を表す」ものであり、「経路格」(path-locative) と呼んでいる。そのうち、移動経路について、「移動経路そのもののほかに、移動経路を含む移動領域全体」と「移動経路上の一地点たる通過点」も含まれていると指摘した。例えば、

- (20) a. のぞみ号が新横浜駅を通過する。
- b. 中国を旅行しました。
- c. 校庭を走る。
- d. 永代橋を渡る。

(加藤 2006: 163)

加藤 (2006) は、(20a)の「新横浜駅」は「経路上に存在する通過点であり、経路のごく一部ではあって、経路の全体ではない」と述べた。(20b)と(20c)の「中国」「校庭」は、「移動行為を行う領域である」と指摘し、その領域で行われたのは、「線的に移動するとは限らない、無秩序に見える移動であることも排除されない」とも述べた。(20d)の「永代橋」は、「始点と終点が明確な線分的な経路であり、点的なものではないが、境

⁷加藤 (2006) は、「《通過域》は、従来通過点などと呼んでいたものを精密化したもの用語法である」と述べて、「《通過点》と《通過域》が連続的な関係にある」として、「《通過点》とは《通過域》の特殊な一形態」であり、「《通過域》は《通過点》を「終端の境界線として広がった領域」であると述べている。

界を明確に有するという意味では、「通過点に近い」ということである。ちなみに、加藤 (2006) は、境界を明確に持っているという特性を「有境界性」と名付けた。

以上を踏まえて、加藤 (2006) は、経路格を、さらに「通過点」「移動経路」「移動領域」と下位区分して、各種類は(21)のように解釈している。

- | | | |
|------|----------------------|--------|
| (21) | 移動行為の範囲 < 移動域 | ……移動領域 |
| | 移動行為の範囲 = 移動域 | ……移動経路 |
| | 移動行為の範囲 > 移動域 | ……通過域 |
| | 移動行為の範囲 >>> 移動域 (極小) | ……通過点 |
- (加藤 2006: 166)

(21)における各場合の図示は以下のようになる。

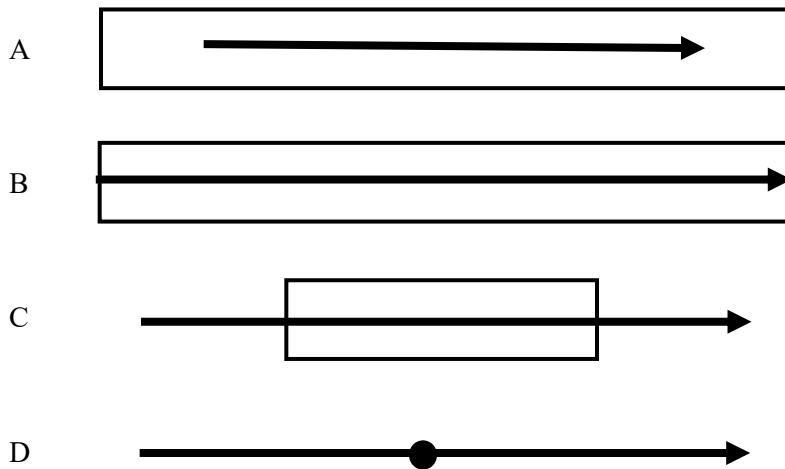


図 1: 加藤 (2006) による「移動範囲」と「移動域」の関係

加藤 (2006) は、「通過点」とは極小化された「通過域」であり、「≪通過域≫の特殊の一形態」と述べて、両者は連続的な関係にあるとしている。また、加藤 (2006) は、「通過域」と「移動領域」は連続的なものでもであると述べた。つまり、「通過点」「通過域」「移動領域」とは連

続性にあるものである。例えば、

- (22) a.筑波山上空を飛んだ。
b.空を飛ぶ。

(加藤 2006: 167)

加藤 (2006) によれば、(22a)は有境界性を持っているため、「通過域」とも「移動領域」とも解釈可能である。それに対して、(22b)では、「有境界性を失うと、《移動領域》の解釈しかできない」ものとあり、(22b)の「空」は「《移動領域》が極大化したもの」であるということである。

また、加藤 (2006) は、「通過点は、有境界性を持ち、点として存在するので、他の用法に比べて客体化しやすい」と述べた。その特徴に基づいて、「場所格」と「対象格」とは、連続性の関係を持つと指摘した。

- (23) a.第三ゲートを突破する。
b.封鎖されていたレインボー・ブリッジを突破した。

(加藤 2006: 146,165)

加藤 (2006) によれば、「突破する」が「通る」と「破る」の2つの意味を含むとすれば、前者の意味では経路上の通過点を通るという移動行為であるが、後者の意味では対象物に作用を及ぼすという点で被動性があり、他動詞の対象をマークするヲ(対象格)と見ることでもある」ということである。つまり、(22a)の「第三ゲート」が「突破」の対象でも、「突破」によって通過される場所でも考えられる。(22b)における「レインボー・ブリッジ」は、「第三ゲート」の《通過点》と違い、広い《通過域》であるが、「有境界性」を持っているため、突破される対象ともなりうる。対象になれるか否かについて、加藤 (2006) は、「有境界性」によって決められると主張している。

- (24) 対象として客体化されるには、有境界性がなければならないということである。どこまでが境界であるかがあまり問題にならないのは、領域が広大でかつその領域の内部にとどまっ

ている場合であるが、客体化するには外部からそれを知覚できなければならず、それに対象が実体として明確に形を持つことが重要になる。つまり、境界線が不明確なものは実体もぼんやりしたものとしてしか知覚できない。

(加藤 2006: 178)

さらに、加藤 (2006) は、「場所格」と「対象格」の連続性について、「連続性の本質は、2つの特性の間にあるというようなものではなく、2つの特性が重ね合わせられているというようなものである」と指摘した。

以上は、移動を表すヲ格をめぐる研究である。杉本 (1986) は、「起点」「経路」「通過点」との三つの面から、三宅 (1996) は、主に「起点」「経路」を表すヲ格に注目して用法の制限について考察した。影山・由本 (1997) と田中・松本 (1997) は、「起点」「経路」「着点」との三つの面から移動を表す動詞について考察した。加藤 (2006) は、「離格」と「経路格」に分けて、さらに「経路格」を、「通過域 (通過点)」「移動経路」「移動領域」と3つの下位分類をした。

2. 研究対象及び研究方法

今までの「移動動詞」をめぐる研究の中で、和語動詞を中心にして考察したものが多い。漢語サ変動詞「移動スル」に関する考察は少ないと思われる。影山・由本 (1997) では、「移動する」には「起点、経路、着点のすべてを同時にカバーできる動詞」と指摘した。例えば、

- (25) a.彼は船で、英仏海峡をイギリスからフランスに移動した。
b. *英仏海峡が移動した。

(25a)では、「英仏海峡」は移動の経路であり、「イギリス」と「フランス」はそれぞれ「起点」と「着点」である。この場合は、「移動する」「対格構文 vs 非対格構文」との構文的な対応関係を持っていない ((25b)が成立しない)ため、自他両用の漢語動詞ではない。一方、(26)では、「対格構文 vs 非対格構文」との構文的な対応関係が成立するため、自他両用の動詞である。

- (26) a.運転手はバイクを安全な処に移動した。
b.バイクが移動した。

以上に示したように、「移動スル」には、「対象格」を表すヲ格用法と、「移動格」を表すヲ格用法を持っている。

本章は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (中納言) (BCCWJ) を利用して、漢語動詞「移動スル」の各用法を記述することを目標とする。また、加藤 (2006) による「対象格」と「移動格」とは連続性にあるという観点を参考しつつ、「移動スル」の「移動格」の用法と「対象格」の用法の関係について考察する。

3. 「移動スル」の「対象格」用法

「移動スル」には、「対象格」のヲ格として使われる場合、「人や物の存在する場所を移す」という意味である。以下のような実例が見られる。

- (27) [保護責任者遺棄罪] 老人や幼児、病人などの保護者が、それらの人を生命に危険のある場所へ移動したり、必要な保護をしなかったりすること。

『泣き寝入りしないための交通事故をめぐる法律知識』

- (28) バイクの心配より自分が後続車などに轢かれないようにしなきゃ。次に身体がOKなら、バイクを安全な所に移動する。

『ロードライダー』

また、人のいる建物、機構や組織の場所や住所の変化を表す場合もある。例えば、

- (29) 二十七日、政府諸役所を山口から萩へ全部移動した。

『高杉晋作の生涯』

- (30) いつ種芋を植え、穀物の種をまき、いつ村を移動し、いつ襲撃隊を差し向けるかを決めるのは老いた男たちだった。

『なつかしく謎めいて』

- (31) 人の移動とともに店舗を移動することが出来れば良いのですが、地代、家賃、保証金、引越費用等を考えると簡単に出来るものではありません。

『高級ブティック専門店が成功する七つの法則』

(27)と(28)では、人や物(「老人、幼児、病人」「バイク」)の移動を表し、主語は文脈に明示している(「保護者」「ライダー」)。(29)(30)(31)では、建物や機構(「政府諸役所」「村」「店舗」)の移動を表し、建物や機構の移動とともに、人の移動も考えられる。文脈から見れば、「役所」「村」「店舗」などの場所の変更を決めたり、実行したりする主体の存在は想定できる。(32)のように、文脈を除き、文を簡略化すれば、多義性が生じる。

- (32) a.彼は役所を移動した。
b.彼は村を移動した。
c.彼は店舗を移動した。

(32)は、主語「彼」には二つの解釈がありうる。一つは、「役所」「村」「店舗」の住所を変化させたことを決定し、事態を実現させた主体である(「市長」「村長」「店長」など)。この場合の「役所」「村」「店舗」は移動された対象である。もう一つは、「役所」「村」「店舗」は離れる場所と解釈し、彼は移動動作の主体とあり、移動の事態を描写する。

さらに、「足」「手」といった人間の身体部位の位置変化を表す場合である。人間の身体部位が他動詞文の目的語になる場合、主語と目的語との間に「再帰的」な関係が見られる。例えば、

- (33) わたしは足を移動してブレーキを踏む用意をしながら、ギアレバーへ手をやった。

『片目の説教師』

- (34) 立っている犬の鼻の上あたりにエサを持っていき、そのまま

犬の背中の方に手をゆっくり移動する。

『あきらめないで！必ず直せる愛犬のトラブル』

- (35) 時間軸上に沿って視点を移動するとき、価値は刻々と変化しているのだから、通時言語学とは、動的価値の研究であると言える。

『言葉とは何か』

- (36) 両足を曲げたまま、身体の重心を右足に移動しながら、右手を上側に両手の掌を向かい合わせる。

『太極拳への誘い』

最後に、移動の対象となる目的語は、形のあるものとは限らず、抽象的なものも可能である。(37)と(38)における「政策の重点」や「順序」などは形のあるものではない。

- (37) この頃から高齢者福祉と高齢者環境の整備に政策の重点を移動する準備をしておけば、今ごろ慌てなくて済んだのかも知れない。

『定年後』

- (38) [アニメーションの設定] 作業ウィンドウで順番を変更するアニメーションを選択し、[順序の変更]のまたはボタンをクリックし、順序を移動します。

『Excel & Word & PowerPoint スパテク 369』

以上は、「移動スル」の対象格を取る用法である。使用上に以下の特徴が見られる。

第一、対象となる目的語は移動できる形のあるものと、形のないものもありうる。

第二、対象が身体部位の場合は、主語と目的語との間に再帰性のある関係が見られる。

第三、機構や組織、建物などが目的語になる場合、多義性が生じる可能性がある。それは、機構や組織、建物自体は移動行為の実現する場所と解釈できるためである。

加藤 (2006) は、角田 (1991) が提案した二項述語の種類⁸を参考にし、「変化」と「非変化」の面から述語の分類をした⁹。その結果に合わせると、「移動スル」には、対象の位置変化を表す場合は、物理的な「対象変化」の種類である。一方、主体の移動を表す場合は、対象物の変化ではなく、主体の位置変化を表す。

加藤 (2006) の分類に従えば、他動詞としての「移動スル」は、主に対象物の位置や場所の変化を意味し、「対象変化」を表す。対象物の変化が焦点化される場合、(39)のように、非対格自動詞文が成立する。

⁸ 角田 (1991:95) は、二項述語を 7 つの種類に分けた。①直接影響(変化/無変化)、②知覚、③追求、④知識、⑤感情、⑥関係、⑦能力

⁹ 加藤 (2006) は、角田 (1991) が提案した二項述語の種類を参考にし、「変化」と「非変化」の面から述語の分類をした。

変化	物理的	対象変化	A
		対象消滅	B
		対象出現	C
		対象作成	D
	非物理的	関係変化	E
		意味変化	F
		感情変化	G
		認識変化	H
非変化	物理的	対象動作	I
		知覚動作	J
	非物理的	関係叙述	K
		意味叙述	L
		属性叙述	M
		感情叙述	N

(加藤 2006: 150)

加藤 (2006) は、動詞「焼く」を例に、「石を焼く」なら (A) であろうが、「パンを焼く」なら (D) であり、「ゴミを焼く」なら (B) と見ることにもできる」と述べた。また、「本を買う」「お菓子をもらう」は (E) であり、「富士山を見る」「音楽を聴く」は (J) であり、「友人を待つ」は (K) であり、「彼の成功を喜ぶ」「友人の死を悲しむ」は (N) である」と述べている。

- (39) a.バイクが移動した。 [(28)に対応する自動詞文]
 b.店舗が移動した。 [(31)に対応する自動詞文]
 c.身体の重心が移動した。 [(36)に対応する自動詞文]
 d.政策の重点が移動した。 [(37)に対応する自動詞文]

ちなみに、「移動スル」は対象物の位置や場所の変化という意味であるため、空間的な位置変化の場合に、目的語に「場所」や「位置」の名詞節を補うことができる。

- (40) a.バイク (の位置) が移動した。
 b.店舗 (の場所) が移動した。
 c.身体の重心 (の位置) が移動した。

以上は漢語サ変動詞「移動スル」の対象格の用法に見られる特徴である。次の節では主に「移動スル」の移動格の用法について考察する。

4. 「移動スル」の「移動格」用法

この節では、主に移動の起点、経路、着点の面から「移動スル」の移動格の用法について考察する。

4.1 移動経路

「移動スル」には、線的な移動を表す移動の経路を表す場合が多く見られる。例えば、

- (41) 北米、ヨーロッパ、シベリア、南米の氷床から生じた氷河波は、陸上を何千キロも移動し、氷床の端から遠く離れた地域を徹底的に破壊するのに十分な運動エネルギーを持っていたはずだ。

『神々の世界』

- (42) 体の極小さな蜘蛛や、蜘蛛の幼生は、尻から糸を吐き出して風に乗り、空中を移動します。この現象を「飛行蜘蛛」とか「風船蜘蛛」と呼びます。

「Yahoo!知恵袋」

- (43) 途方に暮れていると、通路の向こうからロロが歩いてきた。彼は水面をゆっくりと移動しながら、何かを探していた。

『『瑠璃城』殺人事件』

- (44) このような自然条件を使って、古代人はカヌーで太平洋を移動していたといえるが、こう言うと、「それはおかしい。あるぜんちな丸やカリフォルニア丸など、五万トン以上もある船が瞬時にして沈没してしまうような太平洋で、どうしてカヌーや小さな木造船が航海できようか」と考える方もおられるかもしれない。

『船と古代日本』

(41) (42)では、「陸上」「空中」での移動経路を表す。「陸上」と「空中」では、極めて広大な移動域であり、境界性のあるものと考えにくい。一方、(43) (44)では、「水面」「太平洋」の上での移動経路を表す。「水面」と「太平洋」は範囲の広い移動域であるが、境界性のあるものである。境界性のあるかないかにも関わらず、加藤 (2006) では、移動域が移動行為の範囲より大きい場合を、「移動領域」と名付けた。また、移動領域の中での移動行為は、線的な移動とは限らず、無秩序に見える移動も可能であると指摘した。(45) (46) (47)に示した移動経路は、無秩序の移動だと考えられる。

- (45) ある先生のクラスでは、子どもたちの机が「ロ」の字型になっていた。「コ」の字型になっているのはよく見かけるが、このときは感動した。先生は子どもたちの学んでいる机の間をうまく移動しながら、障害のある子どもだけではなく一人ひとりの子どもの学びをていねいに援助していったのである。

『ちがうからこそ豊かに学びあえる』

- (49) 「志津どの」平七郎は棧橋の上を移動しながら、志津の顔を見つめた。志津は無言のまま立ちすくみ、ついには顔を背け、そのまま平七郎の問いには答えようとはしなかった。

『螢の舟』

- (50) NaS (ナトリウム-硫黄) 電池は、負極にナトリウムを、正極には硫黄を活物質として用い、電解質にはナトリウムイオン伝導性のあるベータアルミナセラミックスが使用され、ベータアルミナを介して、ナトリウムイオンが正極と負極の間を移動することによって充放電を行う。

『実務に役立つ非常電源設備の知識』

- (51) 千八百四十六年から四十七年にイリノイ州からユタ州まで二千三百キロを移動したモルモン教開拓者を記念する百五十周年行事の一環として、現代版の開拓者グループが、当時の旅を再現したのだ。

『もっとも大切なこと』

(48)では、「道路上」での移動であり、「道路」は移動の経路である。道路の始点と終点が文脈上からは判断できない。それに対して、(49)における「棧橋」は始点と終点が明確な移動経路である。

(50)(51)では、「正極と負極」「イリノイ州とユタ州」との两点の間の移動で、两点の間には移動の経路が生じる。つまり、移動経路の始点と終点が明確的に示されている。しかし、(51)では、ヲ格を取る「二千三百キロ」は、移動経路というより、移動行為の結果だとも言える。

加藤(2006)によれば、「橋」「道路」のようなものは、「移動が始まる以前にそれ自体が経路として用意されているもの」であり、「移動が行われてしかる後に移動行為の軌跡を経路と認識したり、移動の結果に従って経路を推測したりする必要がある場合もある」とのことである。したがって、(50)における「正極と負極」との間の移動は、「移動が行われてしかる後に移動行為の軌跡を経路と認識」したものである。(51)は、「移動の結果に従って経路を推測」できる状況である。

さらに、「移動スル」には、(52)の用例も見られる。

- (52) 「惑星」が「距離の二乗に反比例する力」で太陽を楕円軌道で移動することを発見した十六世紀の科学者。

「Yahoo!ブログ」

(52)では、移動の経路の用法である。しかし、ヲ格を取る「太陽」自身が経路になっているわけではなく、「太陽の周り」に「惑星」が軌道を描くことが想定できる。加藤 (2006) は「ことばの粗略性 (looseness) で解釈している¹¹。

以上は、「移動スル」の移動経路を表す用法である。以下のような特徴が見られる。

第一、境界性のある移動領域の上での移動経路が存在し、境界性のない広い移動領域の上での移動経路も存在する。

第二、移動経路には、線的な移動経路も存在し、無秩序の移動経路も存在する。

第三、移動経路のうちに、始点と終点が明示されるものも存在し、始点と終点が明示されないものも存在する。

¹¹ ことばの粗略性 (looseness) とは、「発話も、発話として用いられる文も、話者の意図を完全に特定して、論理的に完璧な情報形式にする上では常に不完全で不十分だということであり、言語が表現手段として本質的に持つものだと考えられる」特質であり、「よく言えば使い回しがきく融通性を持っている」という語用論的な概念である。

(加藤 2004: 257)

また、加藤 (2006) は、(4)の用例を示し、「ことばの粗略性 (looseness)」に頼って解釈している。

- (4) a.地球は太陽の周りを回る。

b. *地球は太陽を回る。

(加藤 2006: 171)

加藤 (2006) は、(4b)について、「完全な適格文とはしにくい」と指摘し、「太陽の周り」にもともと移動のための経路が存在する」わけではないが、「回る」と移動行為を行う際に地球の移動経路は想定して解釈することができるということである。

4.2 移動起点が含まれる経路

「移動スル」には、移動経路を表す用法のうち、移動起点が含まれる経路を表すことができる。例えば、

- (53) 同席しているほかの看護師の耳を気にしたようだ。いかなる場合でも患者の病状については口外してはいけないのだろう。場の雰囲気や和み、席を頻繁に移動する者が現れるようになってからも、穰治は望のそばを離れなかった。

『週刊新潮』

- (54) 「リュウはここで降りろ。車は俺が回す」ケインがいった。素早い判断だった。私は頷き、ハザードを点した。運転席のドアを開けて降りた。ケインが車内で座席を移動した。

『秋に墓標を』

- (55) ニセモノは出海が部屋と部屋を素早く移動することで、認識が鈍り、一分ほどだが、動きを停止させてしまうのだ。

『迷路』

(53) (54) (55)では、「席から席へ」「部屋から部屋へ」との移動を表している。「席」と「部屋」は移動の起点である。(53)では、二つの「席」から離れる可能性もあり、複数の「席」の間での移動の可能性もある。(54)では、「助手席」と「運転席」との二つ席の間での移動である。(55)では、少なくとも二つの「部屋」の間での移動である。

移動の起点を表す「席を離れる」「家を出る」とは異なり、(53) (54) (55)における複数の対象物の間での移動の場合は、複数の場所を繋がって i 一種の経路と解釈することも可能である。

各種の場合は、図3のようになる。



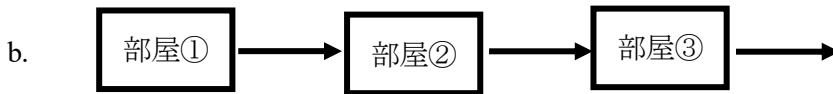


図 3: 「{席 / 部屋} を移動スル」

図 3a は、二つの席の間での移動であり、「座席①」は移動の起点であり、移動ヲ格の補語である。「座席②」は移動の終点であり、二つの座席の間に移動行為を行うことによって、一つの経路が形成する。図 3b は、複数の部屋の間で行われた、連続的な移動行為である。最初の部屋は起点であるが、一連の移動行為によって、起点と通過点が繋がり全体で一つの経路となる。

「席を離れる」のような起点を表す移動行為とは異なり、「席を移動する」というと、少なくとも二つの席の存在が想定する。二つにせよ、複数にせよ、必ず起点となる席が含まれている。したがって、「移動スル」には、移動の起点が含まれる経路という特殊な用法を持つ。



図 4: 「席を離れる」

また、「橋を移動する」「道路上を移動する」などの移動経路では、「橋」や「道路」そのものが移動の経路となっている。それに対して、「席」「部屋」などは移動の経路となれず、移動経路上に存在する点¹²に過ぎない。したがって、「席」や「部屋」を移動の起点として、移動行為の全体像は図 3 に示したように、「起点が含まれる移動経路」と解釈することができる¹³。

¹² 「席」「部屋」が二つある場合、それぞれ起点と終点であり、「席」が三つ以上ある場合は、起点、通過点、終点と思われる。

¹³ 加藤 (2006: 174) は、以下の用例を扱っている。

また、(56) では、図 3b と同様に、最初の「職場」を起点として、複数の通過点(「職場」)が繋がることで、形成した移動経路である¹⁴。つまり、「移動スル」には、「職場」のような場所性の物を繋いで、ある種の移動経路を形成することは可能である。

- (56) 大きな団地の中には、必ず病院あるいは診療所を併設するのが原則になっているため、病院建設のベテラン、セルガチョフさんは、団地が出来ると共に、点々と職場を移動しなければならない。

『もう一つのソビエト』

「{席 / 部屋 / 職場…} を移動する」のような「{場所性のある名詞句} を移動する」には、図 5 のように、「起点が含まれる移動経路」であり、複数の点を繋いで形成した移動経路でもあり、二つの状況が考えられる。



-
- (5) a.花子は席をか変わった。
b.花子は席がか変わった。
c.花子は席をかえた。

加藤 (2006) は、(5a) のような「自動詞なのにヲ格の目的語と共起する」例を「文法的不整合の例」として、その「ヲ格」名詞句は「対象格ではなくて、場所格なのであって、移動経路として「席」が認識されているのである」と述べた。つまり、「席」が複数個存在しており、そこに順序が存在すれば、点としての存在であるそれらの「席」を線のつないで、経路を見立てることができるのである」と解釈している。

¹⁴加藤 (2006) は、「車両を移った」「会社を変わった」といった例を挙げていて、「この種の経路性が認められるには、通過点の連続とみなされる必要があり、通過点には場所性がなければならない」と指摘した。「移動スル」には、「{会社 / 職場} を移動する」の用法があり、「会社」や「職場」も場所性を持っている。



図5 「{場所性のある名詞句}を移動する」の移動経路

図5から見れば、「場所」を移動するには、起点が含まれる移動経路と考えることができる。ただし、「終点」「通過点」について、必ず含まれるとは限らない。両者の違いは、通過点が含まれているか否かことである。

「移動スル」の移動格の用法を表2にまとめることができる。

表2 「移動スル」の移動格の用法

用例	移動格
{空中/陸上/水面}を移動する	広い移動領域での移動経路
{橋の上/道路上/太陽の周り}を移動する	線的な移動経路
{机の間/各地/あちこち}を移動する	無秩序な移動経路
{席/座席/部屋/職場}を移動する	起点が含まれる移動経路

5. 「移動スル」の状況格

この節では、(57)のような状況補語を取るヲ格を、「状況格」と呼ぶ¹⁵。

(57) a. 吹雪の中をさまよい歩く。

b. 雨の中を走り回る。

(加藤 2006: 140)

漢語動詞「移動スル」には、「状況補語」のヲ格を取る用法もある。例えば、

(58) 追う者と追われる者。闇の中を移動する速度は、臭いをたどる分だけ、追手の方が遅くなるかとも思えるが、闇の中では、

¹⁵ 杉本 (1986, 1993) では、(57) のヲ格を、「状況」のを」と呼び、「状況」のを」を伴った名詞句を「状況補語」と名付けた。加藤 (2006) では、「背景状況格」と呼んでいる。

かえってそれが進むべき方向を間違えずに済むので、速度は五分と五分。

『荒野に獣慟哭す』

杉本 (1993) は、状況補語には以下の特徴があると指摘した。

- (59) a. 状況補語は、何らかの移動を伴う動作を表す動詞としか共起しない¹⁶。
b. 状況補語と移動補語とで曖昧な場合がある¹⁷。
c. 状況補語は、「中」などによって場所化される必要がある。

(杉本 1993: 32)

加藤 (2006) は、杉本 (1993) の指摘に基づき、三つの面から「状況補語」の特徴を解釈した。

- (60) a. 「吹雪」「雨」など単独では場所性を持たず、場所名詞と解釈されない名詞に「の中」をつけることで、場所性を帯びさせていると見られること。
b. 対象格や場所格の用法の「を」と共起できる場合があること¹⁸。
c. 逆接の意味合いを持つこともあるが、接続助詞的な用法ほど

¹⁶ 杉本 (1993: 5) の実例:

- (6) a. 太郎は友人の制止の中を次郎を殴った。
b. 太郎は友人の制止の中を次郎に殴りかかった。

ただし、(6a)の不成立には、二重ヲ格の制限がかかる可能性も考えられる。一つの文には二つのヲ格がある場合、不自然だと言われる。

¹⁷ 杉本 (1993: 6) の実例:

- (7) 桜吹雪の中を歩いた。

「桜吹雪の中」が状況補語であるのか、移動補語であるのか決定できないという。

¹⁸ 加藤 (2006: 140) の実例:

- (8) a. 吹雪の中を、東京行きの最終便が富山空港を離陸した。
b. 大雨の中を、太郎は故障部品の交換を済ませた。

明確ではなく義務的でもないこと¹⁹。

(加藤 2006: 140)

(58)では、「闇」に「の中」をつける事によって場所化されている。「状況補語」のヲ格を「で」に置き換えることが可能である²⁰。

(61) 闇の中で移動する速度は、…。

本章は、「移動スル」が取る状況補語のヲ格に関して、加藤 (2006) の解釈に従い、場所のヲ格と連続性にあるものだと強調する。

(62) のび太やドラえもんが、引き出しの中に開いている穴に飛び込むと、ちょうどタイムマシンの上におり立つ。それに乗って、洞窟のような時空間の中を移動する。

『ドラえもんの秘密』

(62)における「時空間」は、「橋」「道路」といった移動経路とは異なり、形や境界を持つものではない。「時空間」そのものは移動の経路として理解し難い。したがって、「…の中」をつけることによって場所化される必要がある。また、「時空間の中で移動する」のように、ヲ格を「で」置き換えることもできる。この点から見れば、「時空間の中」を

¹⁹この点では、加藤 (2006) は、状況のヲ格について、「接続助詞的な用法よりも格助詞としての場所格用法にやや近いものの、項として必須の関係を結ばない点で、第三のカテゴリを想定するべきだと思われる」と述べて、状況のヲ格と接続助詞のヲ格との関係について論じる。

²⁰加藤 (2006) は、「状況補語」のヲ格には、「で」と置き換えることも可能であると指摘した。また、加藤 (2006) は、状況補語に取る「…の中」は「副詞句に近く、「を」の格助詞の用法から遠ざかっている」という考えを示し、「動詞句の項になるような名詞句ではなく、背景的な状況を付加的に述べるものだ」とした。さらに、「状況と場所は認知上は比較的によく関係にあり、「の中」を義務的に付加することで《場所性》を付与した上で状況を示すものであることから、場所を表すヲ格の用法と連続的である」と指摘した。

状況補語として解釈することができる。

一方、「時空間」は、「空中」や「陸上」のように、広大な範囲を持つ境界性のない移動領域だと考えることも可能である。ただし、「時空間」には「の中」をつけて場所化する必要がある。つまり、状況ヲ格と移動ヲ格とは曖昧性が生じる場合があり、状況ヲ格と場所ヲ格とは連続性にあると考えても差し支えないであろう。

「移動スル」のヲ格の各用法をまとめると、表3のようになる。

表3 「移動スル」のヲ格の各用法

ヲ格		例	
対象格	対象補語を取るヲ格	A	
移動格	移動経路	広い移動領域での移動経路	B
		線的な移動経路	C
		無秩序な移動経路	D
		起点が含まれる移動経路	E
状況格	状況補語を取るヲ格	F	

- A: { バイク / 店舗 / 足… } を移動する
- B: { 空中 / 陸上 / 水面… } を移動する
- C: { 橋の上 / 道路上 / 太陽の周り… } を移動する
- D: { 机の間 / 各地 / あちこち… } を移動する
- E: { 席 / 部屋 / 職場… } を移動する
- F: { 闇の中 / 時空間の中… } を移動する

6. 「移動スル」の多義性を持つ用例

前節では、「移動スル」の状況格と移動格との連続性にある関係について述べた。この節では、「移動スル」の対象格と移動格との関係について考察する。「移動スル」には、対象格なのか、移動格なのか、多義性が生じる場合がある。例えば、

- (63) 階段を移動したおかげで、もとの階段スペースが空き、ひろびろとした浴室・脱衣室に生まれ変わりました。

『新しい住まいの設計』

- (64) 「なんだ、あれは？」思わず、アルバイトの口から声が洩れる。
階段を移動し、幾つかの隔壁を潜った末に目にした光景である。
『《世界》。』

(63)における「階段を移動する」の「階段」は、移動された対象である。(64)における「階段を移動する」の「階段」は、移動行為に伴って通過した経路である。(63) (64)のヲ格は、それぞれ対象格と移動格である。同様に、「橋」は、移動行為の行なわれる経路としても、移動される対象物としても解釈できるため、対象格と移動格との多義性を持つ用例である。場所性を示す成分をつけることによって多義性がなくなる。

- (65) a. 工事業者が橋を移動した。 (対象格)
b. 彼は橋(の上)を移動した。 (移動格)

(65b)では、「橋」に「の上」をつけることで、場所性が明確になり、対象格の解釈がなくなる。(65a)の対象格の場合は、橋の位置変化が生じたため、対応する非対格自動詞文と受動文が成立する²¹。一方、(65b)の移動格の場合は、橋に変化が生じないため、非対格自動詞文と受動文は成立しない。

- (66) 対象格: a. 彼は {階段 / 橋} を移動した。
b. {階段 / 橋} が移動 {した / された}。
移動格: a. 彼は {階段 / 橋(の上)} を移動した。

²¹ 非対格自動詞文について、日本語母語話者から非文の意見があるが、BCCWJにおいて、(9)の実例が見られた。

(9) 洋風のスタイルの中で細部装飾に和風の意匠を取り入れる等、明治の人の「和魂洋才」の片鱗がうかがえます。その後、正面の階段が奥に移動するなどの大改修は行われましたが(時期不明、ご存じであればお知らせ下さい)、ほとんど改変されずに今日まで保存されており、当時の明治洋風木造建築を知る上で大変貴重なものです。

『市報松江』

b. *{階段 / 橋 (の上)} が移動 {した / された}。

また、「橋」「階段」のほか、以下の実例も見られたい。

- (67) スイートルームはすべての機材がキャビネットの中に備えられており、患者の病状が急変しても、部屋を移動しないで治療ができるようになっている。

『BRUTUS』

「部屋」は、「橋」「階段」と同様に、場所性を持っているため、動作主体が移動行為を行う場所と解釈できる。また、移動行為が施される対象物と解釈することもできる。したがって、(67)は、対象格と移動格との二つの解釈がある。

- (67') a.患者が部屋を移動した。 (移動格)
b.主治医が患者の部屋を移動した。 (対象格)

(67'a)は、患者が移動行為の主体であり、「部屋①」は移動行為の起点であり、「部屋①から部屋②へ」との移動行為を全体的に見ると、起点と終点が含まれる移動経路と解釈することもできる²²。

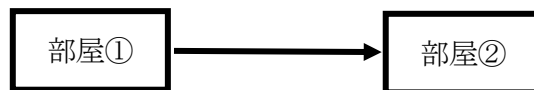


図 5: 「部屋を移動する」

(67'b)は、「患者の部屋」は移動行為が施された対象である。「主治医」が「患者の部屋」の変更を決めて、責任を持っているため、他動詞文の

²² 「患者が部屋を移動した」とは、二つの部屋の間で発生した移動経路と考えるのは一般的であるが、「患者が部屋の中を移動した」とは、部屋の間に行われた移動行為ではなく、一つの部屋の中で描いた線的または無秩序の移動経路である。

主語となり、「患者の部屋」の変化を実現させた。

しかし、「{ 階段 / 橋 } を移動する」が対象格に使われる場合は、階段や橋の物理的な空間位置の変化を表す。つまり、橋と階段の場所が移動した。それに対して、(67'b)では、部屋の物理的な空間位置の変化が生じることはなく、実際に場所を移動したのは、「部屋」ではなく「患者」である。患者の移動に伴った変化は、「患者」と、患者の使用するあるいは所属する部屋という抽象的な関係の変化である。加藤 (2006) による述語の分類²³に合わせると、対象格の「{ 階段 / 橋 } を移動する」は「対象変化(A)」を表し、対象格の「患者の部屋を移動する」は「関係変化(E)」を表す。

「橋」「階段」「部屋」は、場所性のあるものであると同時に、有境界性²⁴のある実体物であるため、物理的な空間位置の変化が施される対象

²³加藤 (2006) による述語の種類 (再掲)

変化	物理的	対象変化	A
		対象消滅	B
		対象出現	C
		対象作成	D
	非物理的	関係変化	E
		意味変化	F
		感情変化	G
		認識変化	H
非変化	物理的	対象動作	I
		知覚動作	J
	非物理的	関係叙述	K
		意味叙述	L
		属性叙述	M
		感情叙述	N

(加藤 2006: 150)

²⁴「有境界性」は加藤 (2006) による概念である。加藤 (2006) は、「対象として客体化されるには、有境界性がなければならない」と指摘した。加藤 (2006) は、「第三ゲートを突破する」を例に、「場所格」と「対象格」とは、連続性の関係にあると主張した。加藤 (2006) は、「突破する」が「通る」と「破る」の2つの意味を含むとすれば、前者の意味では経路上の通過点を通るという移動行為であるが、後者の意味では対象物に作用を及ぼすという点で被動性があり、他動詞の対象をマークするヲ (対象格) と見ることができると述べた。言い換えれば、「第三ゲート」が「突破する」対象であるし、「突破」に

物にもなり、客体化される対象にもなりうる。そこから、「移動スル」の多義性が生じるのである。

最後に、(68)(69)の用例も見られたい。

- (68) また、最後に宮中におきまして天皇陛下の晩さん会が行われることもございまして、場所を移動することはいかがであるかと、そういうような諸般の点を考えまして東京に決めた次第でありまして、御理解をいただきたいと思う次第でございます。

『国会会議録』

- (69) 私がお世話になっているNPO法人ネパール・ミカの会も大道芸に出店して4回目になります。今年は会場が移動して野村証券前になり、この町では一番土地の価格が高いところです。

「Yahoo!ブログ」

(68)(69)における「{場所/会場}を移動する」は、(68')のように、二つの解釈が考えられる。一つは「場所」を対象として移動される対象物である。もう一つは、移動行為の主体が行う移動行為の起点であり、移動行為の全体で一つの経路となる。

- (68') a. イベントの参加者が {場所/会場} を移動した。 (移動格)
b. 主催者がイベントの {場所/会場} を移動した。 (対象格)

(68'a)は、参加者の移動行為を表す事態である。「場所」は移動行為の起点であり、全体的に見ると、図6のように、「起点と終点が含まれる」移動経路となる。

よって通過される場所でもある。



図 6: 「{場所/会場} を移動する」

(68'b)における変化は、(67'b)と同様に、物理的な空間位置の変化を表すものではない。実際に空間的な移動をしたのは、(その場所にいる)イベントの参加者である。主催者には、イベントの場所を利用する権限の変化が生じたと思われる。非物理的な抽象的な関係の変化を表す。しかし、「橋」「階段」「部屋」とは異なり、「場所」「会場」は、形を持つ実在物が存在しない、いわば有境界性を持つものではない。しかし、「場所」「会場」は、物理的な空間に依存して、人の認識の中に形成する抽象的な場所の概念だと考えられる。つまり、「会場」「場所」は、形を持つ実在物ではないものの、イベントの参加者は、空間的な隣接性(メトニミー)により、外部からそれを一つの個体として認識する可能性があり、「会場」「場所」を対象として客体化することは可能である。

(69)の非対格自動詞文は、(68'b)と対応する関係になるが、(68'a)と対応関係にならない。自他両用動詞の「移動スル」には、同じ事態の二つの側面を描かなければならないため、「対格構文 vs 非対格構文」の構文的な対応関係にあるのは、対象格のヲ格である。場所格を取る場合には、構文的な対応関係が成立しないため、自他両用の動詞ではない。移動格と対象格の場合をまとめると、以下のようになる。

- (70) A: a.医療者が患者の部屋を移動した。(対象格)
 b.患者の部屋が移動した。
 B: a.患者が部屋を移動した。(移動格)
 b. *部屋が移動した。
 C: a.主催者がイベントの {場所/会場} を移動した。(対象格)
 b. イベントの {場所/会場} が移動した。
 D: a.参加者が {場所/会場} を移動した。(移動格)
 b. *{場所/会場} が移動した。

7. まとめ

本章は、二字漢語サ変動詞「移動スル」に注目し、「移動スル」の対象補語を取るヲ格用法、場所補語を取るヲ格用法、状況補語を取るヲ格用法について考察した。そのうち、「移動スル」の移動格の用法について、移動経路を表すのは一般的であるが、そのなかには、移動の起点が含まれる経路の場合がある。また、場所性を持つ名詞句がヲ格補語になる場合、一つの個体として対象化される可能があるとき、多義性が生じることがある。

漢語動詞「移動スル」のヲ格の用法を、表4に示す。

表4 「移動スル」のヲ格

ヲ格		例	
対象格	対象補語を取るヲ格	A	
移動格	移動経路	広い移動領域での移動経路	B
		線的な移動経路	C
		無秩序な移動経路	D
		起点が含まれる移動経路	E
状況格	状況補語を取るヲ格	F	

- A: {バイク/店舗/足…}を移動する
- B: {空中/陸上/水面…}を移動する
- C: {橋の上/道路上/太陽の周り…}を移動する
- D: {机の間/各地/あちこち…}を移動する
- E: {席/部屋/職場…}を移動する
- F: {闇の中/時空間の中…}を移動する

また、表5に示したように、移動格と対象格との間に、多義性が生じる用例がある。

表5 「移動スル」の多義性用例

用例	意味	自他動詞
{橋/階段}を移動する	対象格: 対象の位置変化	自他両用
	場所格: 主体の移動経路	自動詞

部屋を移動する	対象格: 所属関係の変化	自他両用
	場所格: 起点が含まれる経路	自動詞
{場所/会場}を移動する	対象格: 所属関係の変化	自他両用
	場所格: 起点が含まれる経路	自動詞

第六章参考文献

- 池上嘉彦 (1993) 「<移動>のスキーマと<行為>のスキーマ -日本語の「ヲ格+移動動詞」構造の類型論的考察-」『外国語科研究紀要』43-3、pp. 34-53、東京大学教養学部外国語科
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動詞および両極化転形-自・他動詞の対応」『国語学』70、pp. 46-66、国語学会
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語-言語類型論から見る日本語』くろしお出版
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社出版
- 加藤重広 (2004) 『日本語語用論のしくみ』研究社
- 加藤重広 (2006) 「対象格と場所格の連続性:格助詞試論(2)」『北海道大学文学研究科紀要』118、pp. 135-182
- 杉本武 (1986) 「格助詞-「が」「を」「に」と文法関係」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』、pp. 227-380、凡人社
- 杉本武 (1991) 「ニ格をとる自動詞—準他動詞と受動詞」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 杉本武 (1993) 「状況の「を」について」『九州工業大学情報工学部紀要 人文・社会篇』6、pp. 25-37、九州工業大学
- 杉本武 (1995) 「移動格の「を」について」『日本語研究』15、pp. 120-129、首都大学東京
- 田中茂範・松本曜 (1997) 『空間と移動の表現』研究社出版
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110、pp. 143-168、日本言語学会
- Hopper Paul J. & Sandra A. Thompson (1980), "Transitivity in Grammar and Discourse" *Language* 56: 2, pp. 251-299.

第七章 「反映スル」から見る自他両用の二字漢語サ変動詞の用法

0. はじめに

本章は、漢語サ変動詞「反映スル」に注目し、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(中納言) (BCCWJ)の実例に基づき、漢語サ変動詞「反映スル」の用法について考察するものである。「反映スル」には、「XがYをZに反映する」のように、「Zに」という二格補語を取ることができる。「反映スル」はBCCWJにおいて、自動詞または他動詞専用の傾向にはならず、やや特殊の用例数の分布になっている。それは「二格」の使用に関係を持つかもしれない。また、「反映スル」には、「二格」と主格との間に、「再帰性」の関係を持つと考えられる。本章では、BCCWJの用例に基づいて、「反映スル」の「二格」を取る用法に注目し、その中に、「再帰性」や「再帰用法」があるか否かについて考察する。

1. 先行研究

本節では、日本語における「再帰動詞」や「再帰用法」をめぐる先行研究を概観する。

高橋(1975)は、「他に対するはたらきかけをあらわしているのではなく、主体である自分の状態をかえることをあらわしている」という種の「自分の所属物にはたらきかける再帰構文がある」と指摘した。例えば、

- (1) a. 柄杓にやんまが一疋止まって、羽を垂れて動かずにゐる。(森『阿部一族』)
- b. 一人の男が猫のやうに身をちぢめて(芥川『羅生門』)
- c. もし春琴が災禍のため性格を変えてしまったとしたら(谷崎『春琴抄』)

(高橋 1975: 4)

高橋 (1985) は、日本語のヴォイスの中に「再帰態」があると述べて、「自分自身またはその部分に対する動作のばあいのヴォイスを再帰態」といい、「日本語には形態論的なカテゴリーとしての再帰動詞は発達していないが、構文論的なカテゴリーとしての再帰構文がある」と指摘している。

- (2) a. 太郎が まどから くびをだした。
b. 花子が あしを くじいた。

- (2') a.*くびが 太郎によって まどから だされた。
b.*あしが 花子によって くじかれた。

(高橋 1985: 11)

また、高橋 (1985) は、「能動構文が受動構文と対立するのに対して、再帰構文は対立のあいてをもたない」と述べて、「再帰構文では、述語が補語といっしょになって、動作主体の動作をあらわしている。いわば、両方がくみあわさって自動詞相当になっている」ことを示し、再帰態は「ヴォイスとして消極的である」と指摘した。

仁田 (1982) は、「再帰」について、「動作主から出た働きかけが結局動作自身に戻ってくることによって動作が完結する」といった現象を言う」と定義している。日本語には、「動作主の働きかけが、他の存在ではなく、常に動作自身に及ぶことによって、動作が終結する」ということを表す「再帰動詞」があると指摘した。「浴びる」「かぶる」「履く」「着る」「脱ぐ」はその例である(3aと3b)¹。一方、「普通の他動詞でありながら、その一用法として再帰的な用法を有する動詞も少ない」と述べて、この用法を「再帰用法」と呼ぶ(3c)。

- (3) a. その男はエナメルの靴を履き派手な背広を着ていた。
b. 彼は入浴後いつも冷水を浴びることにしている。

¹ 仁田 (1982) によれば、着脱動詞「着る」「履く」「浴びる」「かぶる」などが、必ず主体自らへの着脱を表し、他者への着脱を表さない。

c. 子供は手を叩いて喜んだ。

(仁田 1982: 79-80)

天野 (1987a) は、日本語文における「再帰動詞」と「再帰性」を特立する有効性について検討した。高橋 (1975; 1985)、仁田 (1982) といった研究では、再帰構文が他の他動詞文と違って統語的に自動詞文に近いふるまいをすると強調し、その根拠として以下の三点が挙げられる。

- (4) a. まともの受動文が対応しない。
b. ヲ格成分と動詞とが組みあわさった意味を表す自動詞に対応する(「～ヲ+他動詞」=「自動詞」)ことが多い。
c. 対応する自動詞が無く、対応する使役-他動性他動詞がある。
(天野 1987a: 4)

上記(4a)について、天野 (1987a) は、「再帰構文でありながら対応するまともの受動文が存在する場合もある」と反例を示した。再帰構文が「再帰性」がゆえにまともの受動文と対応しないことに対して疑問に思い、(5)の反例を示した。

- (5) a. 森尾氏の意図したのよりも若い年齢層が、よく彼のデザインした服を着ている。(再帰動詞)
a'. 森尾氏のデザインした服は、彼が意図したのよりも若い年齢層によく着られている。
b. 葉子は爪を真赤に塗っていた。(再帰用法)
b'. (葉子の) 爪は真赤に塗られていた。
(天野 1987a: 5)

(4b)について、高橋 (1985) では、「手をあげる=挙手する」「あたまをたれる=うなだれる」「ぼうしをぬぐ=脱帽する」のように、再帰構文は自動詞との対応が多いということである。しかし、天野 (1987a) は、以下のような再帰構文に關与する他動詞でなくても似た意味の自動詞が対応することもあると指摘した。

- (6) 本を読む。 / 読書する。
 火を消す。 / 消火する。
 人を殺す。 / 殺人する。

(天野 1987a: 6)

最後に、(4c)について、仁田 (1982) は、再帰動詞「浴びる、かぶる、履く、着る、脱ぐ」には対応する自動詞がないが、このうち「浴びる、かぶる、着る」には「浴びせる、かぶせる、着せる」という使役-他動性他動詞が対応すると指摘した。しかし、その対応関係について、天野 (1987) は、(7)に示したように、「浴びる-浴びせる」の関係は、「かぶさる-かぶる」の関係に平行なのではなく、「かぶる-かぶせる」に平行なのであると指摘した。

(7)	自動詞	他動詞	使役-他動性他動詞
a.	—	浴びる(再帰動詞)	浴びせる
b.	立つ	立てる	—
c.	かぶさる	かぶる(再帰動詞)	かぶせる

(天野 1987a: 7)

以上のことから、天野 (1987a) は、「再帰性」を持つ他動詞文が自動詞文に近づくとは言えないことを明らかにして、他動詞文でありながら自動詞文に近い意味を表すものとして、「状態変化主体の他動詞文」を挙げた。

天野 (1987b) は、以下のような他動詞文を「状態変化主体の他動詞文」としている。

- (8) a. 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。
 b. 勇二は教師に殴られて前歯を折った。
 c. 気の毒にも、田中さんは昨日台風で屋根を飛ばしそうだ。
 d. ジョンは、思わず窓に手をついて、窓をこわしてしまった。
 e. 岡村はぼんやりして煙草の灰をこぼしてしまった。
 f. 母は買った品物をうっかり店に置いてきてしまった。

(天野 1987b: 109)

天野 (1987b) は、「経験者」を 2 種類に分けて、引き起こし手の主体を「経験者 a」を、引き起こし手でないものを「経験者 b」と名付けて、「経験者 a」を動作主と原因と同じように扱う。

- (9) 主体—引き起こし手であるもの—動作主・原因・経験者 a
引き起こし手でないもの—経験者 b

(天野 1987b: 108)

また、天野 (1987b) は、「状態変化主体の他動詞文」の成立条件が二つあることを示している。

- (10) 条件 1: 状態変化主体の他動詞文を作る他動詞は、主体の動きと客体の変化の二つの意味を含む他動詞である。
条件 2: 状態変化主体の他動詞文のガ格名詞とヲ格名詞は、全体部分の関係にある。

(天野 1987b: 106)

さらに、(10)における「全体部分の関係」について、(11)のように規定している。

- (11) X は X を様々な側面から眺めることによって、様々な特徴付けられる。こうした特徴付けの総体 X を「全体」とし、特徴付けの側面を「部分」とする。Y が、総体 X の特徴付けの側面の一つであるとき、X と Y とは「全体部分の関係」にあるという。

(天野 1987b: 103)

具体的には、「特徴付けの側面 Y には、X の部分、X の持ち物、X の生産物」があり、「X が主体や客体として関わるコトを表す動作名詞」もあるということである。

ヤコブソン (1989) は、再帰性を持つ構文を、他動性と自動性の中間にある構文としている。

(12) 形態論上の他動性 ←————→ 形態論上の自動性

(a) (b) (c) (d) (e)

- (a)二つの独立している実体が係わっており、それぞれの意味的役割が異なっている。(赤ん坊が花瓶を壊す)
- (b)二つの独立している実体が係わっており、それぞれの意味的役割が異なっているが、動詞の表す変化の結果、それらが一体化される。(荷物を預かる)
- (c)同一の実体 (あるいは同一の実体の違った部分) が、二つの異なった意味的役割を担い、二つの違った名詞として文中に現れる。(再帰的意味)(犬が尻尾を垂れる)
- (d)一つの実体のみが係わっており、それが一つの名詞句として文中に現れながらも、二つの違った意味的役割を担っている。(意図的自動詞)(お婆さんが屈む、敵が寄せる)
- (e)係わっている実体一つであり、その意味的役割も一つにすぎない。(非意図的自動詞)(花瓶が壊れる)

(ヤコブソン 1989: 177)

金英淑 (2004; 2006) は、自他両用の漢語サ変動詞に注目し、他動詞用法に制限が見られる自他両用の漢語動詞があると指摘した。その制限について、「再帰性」「再帰的な関係」で説明している。例えば、

- (13) A: a.肺ガンが発症した。
b.患者が肺ガンを発症した。(患者の肺ガン)
- B: a.態度が一変した。
b.その政治家が態度を一変した。(政治家の態度)
- C: a.記憶が喪失した。
b.花子が記憶を喪失した。(花子の記憶)
- D: a.仕事に全神経が集中した。
b.花子が仕事に全神経を集中した。(花子の全神経)

- E: a. 社屋が全焼した。
 b. (昨日の火事で) 会社が社屋を全焼した。(会社の社屋)
- F: a. 財布が紛失した。
 b. 太郎が財布を紛失した。(太郎の財布)
- H: a. 子会社が解散した。
 b. A社が子会社を解散した。(A社の子会社)
- I: a. 試合が中断した。
 b. 選手たちが試合を中断した。(選手たちの試合)
- G: a. ローンの返済が完了した。
 b. 太郎がローンの返済を完了した。(太郎の返済)
- K: a. システム管理が停止した。
 b. 会社がシステム管理を停止した。(会社のシステム管理)
- (金 2006: 29-32)

(13) に示した他動詞文の成立に関わる重要な条件である「再帰的な関係」について、金 (2006) は、(14) のように規定している。

- (14) a. 回復 喪失 一変 紛失 全焼 集中 発症 解散 中断
 停止 結束 完了 終了 復活 等(「する」省略)
- b. a の他動詞用法が可能な場合、主語と目的語の間には再帰性、再帰的な関係が存在する。また、そのような関係が存在しない場合、他動詞文は成立しない。
- c. 再帰性、再帰的な関係とは、行為、あるいは変化の結果を被るイベントの範囲が主語に限られる性質であり、具体的には、目的語が主語の身体部位や所有物、組織における上下関係のようなモノ名詞の場合、あるいは主語が携わるイベントのようなコト名詞の場合である。
- d. a の「VNする」は自動詞用法に比べ他動詞用法に相対的な制限があり、L&RH²の派生の説明にしたがうと、自動詞用

² Beth Levin and Malka Rappaport Hovav (1995) Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface, MIT Press, Cambridge, MA.

法をもとにして他動詞用法を派生させると捉えることができる。

(金 2006: 56)

金 (2004;2006) による「再帰性」の規定は、(13) に示した自他両用の漢語動詞の実例に基づいてまとめたものである。「再帰的な関係」を判断するにあたり、「主語 N₁の目的語 N₂」構文を判断する手段とした。

以上は、日本語における「再帰動詞」「再帰用法」をめぐる研究である。高橋 (1975; 1985) は、「自分の所属物にはたらきかける」ことを表す構文を再帰構文としている。仁田 (1982) は、「動作主の働きかけが動作自身に及ぶ」ことを表す「再帰動詞」の存在を指摘して、「再帰的な用法」を持つ一般的な他動詞もあると述べた。一方、天野 (1987a.b) は、「状態変化主体の他動詞文」の存在があると指摘し、状態変化主体の他動詞文の成立に、「全体部分の関係」との条件が必要であると指摘した。

2. 本章の立場

高橋 (1975; 1985) や仁田 (1982) は、「再帰動詞」や「再帰用法」について、動作主の働きかけが結局動作主自身に戻るという性質である。そのうち、主体の身体部位や所属物といった状況が多い。

金 (2004;2006) で規定した「再帰性」や「再帰的な関係」は、主語と目的語との関係について規定している。所属関係、所有関係が存在するか否かを再帰性の判断基準としている。

しかし、高橋 (1975; 1985) や仁田 (1982) で扱った再帰動詞のうち、必ず所有関係が存在するとは限らない。例えば、(15)における「彼」と「冷水」との間に、所有関係の存在が考えにくい。

(15) 彼は入浴後いつも冷水を浴びることにしている。 (=3b)

(仁田 1982: 79-80)

金 (2004;2006) による「再帰性」の範囲は、天野 (1987b) が規定した格名詞とヲ格名詞との「全体部分」の関係に含まれると考えられる。

一方、天野 (1987b) で挙げた「状態変化主体の他動詞文」は、主体は

経験者として発生した事態を所有するということを意味し、「主体以外に動きの実質的な引き起こし手」(「空襲で」「台風で」)の存在が必要である³。また、主語と目的語との間に、全体部分の関係が重要な条件の一つである。

漢語動詞について、主語と目的語との「全体部分」の関係も重要な条件であるが、金(2004; 2006)で挙げた漢語他動詞の例文は、すべて「状態変化主体」であるわけではない。例えば、(16)の例文の主体は、「動作主」主語の解釈である⁴。

- (16) A: a. 子会社が解散した。
b. A社が子会社を解散した。(A社の子会社)
- B: a. 試合が中断した。
b. 選手たちが試合を中断した。(選手たちの試合)
- C: a. ローンの返済が完了した。
b. 太郎がローンの返済を完了した。(太郎の返済)
- D: a. システム管理が停止した。
b. 会社がシステム管理を停止した。(会社のシステム管理)
- (金 2006: 29-32)

以上三種の研究をまとめると、以下のようになる。

高橋(1975; 1985)、仁田(1982)による再帰性: 動作主の働きかけが結局動作主自身に戻るという性質をいう。身体部位や所属物といった所有関係が存在する状況が多い。

天野(1987b)による状態変化主体の他動詞文: 主体は経験者として発生した事態を所有する。全体部分の関係は文の成立に関わる重要な条件の一つである。

金(2004; 2006)による再帰性: 主語と目的語の間に見られる所有関係、所属関係など。天野(1987b)による「全体部分の関係」に含まれること

³ 児玉(1989)は、他動詞文の主語は状態変化の主体になるために、「主体以外に動きの実質的な引き起こし手」が必要であると主張した。

⁴ 金(2006)では、「動作主」主語の例文を残された問題点としている。

は可能である。

本章は、「反映スル」を対象にして、「反映スル」の用法に再帰性が存在するか否かについて考察する。本稿は、ひとまず再帰動詞を措いて、動詞には「再帰用法」を有するという仁田 (1989) の主張に従い、「動作主から出た働きかけが結局動作自身に戻ってくることによって動作が完結する」といった現象」を動詞の「再帰用法」として扱う。「全体部分」の関係を「再帰性」や「再帰的な関係」を判断する条件の一つとする。

また、「反映スル」の用法について考察する際に、小柳 (2015) による再帰動詞に関する考察も参照する。小柳 (2015) は、日本語の再帰には「働きかけ」の違いによって次の二つのタイプがあると指摘している。

(17) ①自分自身あるいは自身の体の一部が直接働きかけの対象になる。

②外部の対象物に働きかけ対象物が自分自身あるいは自身の体の一部に移動する⁵。

①は自身が働きかけの対象となる点で再帰であり、②は対象物は外部にあるが、自身が対象物の着点になるという点で再帰であると考える。

(小柳 2015: 132)

3. 研究対象及び研究方法

本章は、漢語動詞「反映スル」を研究対象とする。「反映スル」には、

⁵小柳 (2015) は、再帰①と再帰②の構文的特徴を以下のように規定している。

再帰①：自身（の体）がヲ格名詞で示されるが、動作主と対象は全体と部分の関係で同定されており、意味的につながりが保証されるので、日本語では「自分の」という句は統語構造に現れないのが普通である。

例) 太郎は立ち止った。そして（自分の／*他の人の）腰を曲げてゴミを拾った。

再帰②：外部の対象物がヲ格名詞句で示されるが、着点は動作主と同定されているので、意味的につながりが保証されており、「自分に」「自分の」は統語構造には現れない。

例) 太郎は（*自分に）服を着た。太郎は（*自分の）（頭に）帽子をかぶった。

(小柳 2015: 132)

ニ格補語を取る用法が見られる。

- (18) a. 1) 人々の生活を豊かにし、人々のつながりを深めることができるような、ユニークで高品質な製品を開発する。2) ホールマーク社の製品の「温かくて親しみやすい」という精神を、店舗にも反映する。

『マーケティング・ゲーム』

- b. ホールマーク社は、製品の精神を店舗に反映する。
c. 製品精神が店舗に反映する。

(18b)と(18c)から見れば、「反映スル」には、「非対格構文 vs 対格構文」の対応関係が成立するため、自他両用の漢語動詞である。「反映スル」が取るニ格補語(「店舗に」)は、「着点」の意味を持つと考えられる⁶。

自他両用の漢語サ変動詞のうち、ニ格補語を取れるものは、他に「移動する」「接続する」「集中する」などがある。例えば、

- (19) a. 結び目を好みの位置に移動する。

『えりの形別スカーフ・ストール・マフラーの結び方』

- b. 謙太郎はノートパソコンに銃を接続し、それを三脚に据えつけた。

『まぼろし曲馬団』

- c. 自分自身に注意を集中し、相手や過去の成績に集中してはならない。自信を自己満足でつくり上げること。

『ランニング事典』

(19)に示したニ格補語は、「反映スル」のニ格補語と同様に、「着点」の意味解釈を持つと思われる。しかし、(19)に比べて、「反映スル」は、ニ格補語の必須度がより高いと思われる。

⁶ 益岡 (1987) は、文法記述に一般化をもたらすような意味役割を、「動作主、対象、経験者、相手、着点、起点、場所、時間、共同者、道具、受益者、原因、その他」などを挙げた。そのうち、「必須的な名詞句」になりうるのは、「動作主、対象、経験者、相手、着点、起点、場所」とのことである (p.106)。

BCCWJにおいて、「反映スル」の各用法は表1に示す。

表1 BCCWJにおける「反映スル」の各用法

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞 + -se (-ru)	D 他動詞+ -re (-ru)	CとD 比率差	AとB 比率差
反映	3454	356 (10.3%)	1721 (49.8%)	483 (14.0%)	894 (25.9%)	11.9pt	39.5pt

「反映スル」には、他動詞の使用数は、半数近く占めて(49.8%)、自動詞の使用数を超えている。一方、「他動詞+ -re (-ru)」の用例数は「自動詞」の数よりも多い。他動詞専用の傾向にあるように見えるが、「自動詞+ -se (-ru)」の用例数は少なくない(14.0%)。

本章は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(中納言)」(BCCWJ)を利用して、漢語動詞「反映スル」に見られる「再帰性」について考察することを目標とする。

4. 「反映スル」に見られる再帰性

「反映スル」の他動詞文は、(20)のように、ニ格補語を取ることができる。ニ格が現れない場合もある。

- (20) a. Xガ Yヲ Zニ 反映スル
b. Yガ Zニ 反映スル

例えば、

- (21) a. 1) 人々の生活を豊かにし、人々のつながりを深めることができるような、ユニークで高品質な製品を開発する。
2) ホールマーク社の製品の「温かくて親しみやすい」という精神を、店舗にも反映する。 (＝18a)

『マーケティング・ゲーム』

- b. ホールマーク社は、製品の精神を店舗に反映する。

- (22) a. 「反省」とは、「本質」が、「仮象」に自らを反映し、自らへと立ち帰る「運動」であり、「無から無への運動」である。

『ヘーゲルを読む』

b. 「本質」が「仮象」に自らを反映する。

(21)では、ヲ格補語である「製品の精神」は、「ホールマーク社」自体の製品であり、ニ格補語である「店舗」は、「ホールマーク社」自体の店舗でもある。したがって、(21)では、主語とヲ格補語とニ格補語との間に、所有関係がある。(22)では、ヲ格補語となったのは「自ら」である。つまり、「本質が本質自身を仮象に反映する」ということである。

(21)と(22)は、ある主体は、自分自身を、または自分の所有物を、何処かに映すということを表す。自分の所有物が目的語となる場合、主語と目的語との間に所有関係が見られる。全体的に見ると、(21)と(22)が描いた事態には、ある種の変化が主体に帰せられ、主体がこの変化を被るという再帰的な関係が見られる。

(23) a. 一方また、基本法は、第2条第8項において、「文化芸術の振興に関する政策形成に民意を反映し、その過程の公正性及び透明性を確保するため、芸術家等、学識経験者その他広く国民の意見を求め、これを十分考慮した上で政策形成を行う仕組みの活用等を図る」旨を規定している。

『文化行政法の展開』

b. 基本法は、文化芸術の振興に関する政策形成に民意を反映する。

(24) a. 現在、大学は多くの課題に取り囲まれている。社会や科学技術の変革を教育や研究にどのように反映するか。

『明日を拓く人間力と創造力』

b. 大学は、社会や科学技術の変革を教育や研究に反映する。

(25) a. そのとき意識は、自らのなかに宇宙を反映し、マクロコスモスとしての宇宙と同質的なミクロコスモスとなる。内と外とが意識を介して呼応し合うわけだ。

『気功入門』

b.意識は、自らのなかに宇宙を反映する。

(23)では、「基本法」とヲ格補語である「民意」との間に所有する関係が存在しない。一方、ニ格補語である「文化芸術の振興に関する政策形成」とは、「基本法」の内容であり、一部でもある。(24)では、ニ格補語「教育や研究」は、「大学」の教育内容の一部でもあると考えられる。(25)では、ニ格補語は「意識」そのものである、「意識は意識の中に反映する」という事態である。

(23)(24)(25)は、ニ格補語は、主語そのものであるか、主語の内容に属する一部である。この場合、ある主体は、自分自身に、または自分の内部に別のものや出来事を反映する事態を描く。ある物や事態が映されることは、主体そのものに帰せられて、再帰的な関係が見られる。

- (26) a.それらの状況は、当該国の研究活動の活力及び水準を反映し、これらに関する統計は研究開発水準・技術力を示す重要な指標と考えられている。

『科学技術/科学技術白書』

b.それらの状況は、当該国の研究活動の活力及び水準を反映する。

- (27) a.五十二年の価格変数の推移をみると価格の上昇時には、生産地価格が仮需要を反映し、かなり早目に高騰している。

『漁業白書』

b.生産地価格が仮需要を反映する。

- (28) a.永田町という政治の世界から見た時は、確かに戦術的なミスといった要素が大きかったのかもしれない。しかし金融市場は粛々と、ただ黙々と結果を反映し、織り込む動きとなっていた。

『さよなら円高』

b.金融市場は結果を反映する。

(26)(27)(28)は、ニ格補語が構文に現れない例文である。ニ格補語がな

いものの、主体そのものは、対象の「反映される」着点と考えることは可能である。(29)のように、「二格」補語は、主体と同一物であり、省略されている。

- (29) a.それらの状況は、(それらの状況に)当該国の研究活動の活力及び水準を反映する。
b.生産地価格は、(生産地価格に)仮需要を反映する。
c.金融市場は、(金融市場に)結果を反映する。

(29)のように、主体は、二格補語になるとこともできる。言い換えれば、主体自体は、「反映する」の着点となるのである。この場合、主体自体には場所性を帯びるようになる。反映する事態は主体の場所に生じ、これらの文は、実際に表したのは、自動詞に近い事態である⁷。

- (30) a.それらの状況に、当該国の研究活動の活力及び水準が反映する。
b.生産地価格に、仮需要が反映する。
c.金融市場に、結果が反映する。

本節の内容をまとめると、漢語動詞「反映スル」には、「再帰性」や「再帰的な関係」が見られる事態を描くのは典型的である。「再帰性」が構文に現れる形としては、以下の三つのパターンがある。

1. 「XガYヲZニ反映スル」：YがXそのものか、Xの一部であり、XとYの間に再帰性が見られる。
2. 「XガYヲZニ反映スル」：ZがXそのものか、Xの一部であり、XとZの間に再帰性が見られる。
3. 「XガYヲ(Xニ)反映スル」：X自身が二格補語の着点となる。

⁷ヤコブソン(1989)は、再帰的な構文を、他動性と自動性の中間にある構文としている。本章でも、ヤコブソン(1989)の考察に従う。

5. 「反映サセル」に見られる再帰性

前節では、「反映スル」の他動詞文に見られる「再帰性」について考察した。この節では、「反映サセル」の用法について考察する。BCCWJにおいて、漢語動詞「反映スル」には「サセル」形の使用は少なくない。

- (31) a. Xガ Yヲ Zニ 反映スル
b. Yガ Zニ 反映スル

例えば、

- (32) a.ここで問われるのは、自分の手をどれだけ客観的に見ているかどうかです。あまり正解を得られなかった人は、「こうなればいい」という自分の夢をそのまま作戦に反映させているきらいがあります。

『麻雀力検定 140』

- b.人は自分の夢を作戦に反映させる。

- (33) a.ここでは、完全な遺跡地図が作られ、集中的な発掘調査が行われた。それらの資料により、この都市の住民たちがいかに彼らの文化を都市の景観に反映させたかがわかる。
b.住民たちが彼らの文化を都市の景観に反映させる。

(32) (33)は、主体とヲ格補語との間に、所有関係が見られる(「自分の夢」「住民たちの文化」)。これは、主体が自分の所属物や所有物を対象にして、ある着点のところに映すことを意味する。この場合は、主体とヲ格補語との間に、再帰的な関係が見られる。

- (34) a.これに対して、企業による市場の寡占化、独占化を背景に、企業の行動原理は利潤極大化ではなく、企業が市場を支配する力を自己の価格決定に反映させ、利潤をコスト視し、平均費用に一定の利潤マージンを積み上げるフルコスト原理によって行動しているとする考えが力を持ってきた。

『都市の財政負担』

b.企業が市場を支配する力を自己の価格決定に反映させる。

- (35) a.政党は国民の意向をくみあげ、政治指導者を提供し、そして国民の意向を政策に反映させる装置として民主政治になくてはならない組織である。

『現代社会』

b.政党は、国民の意向を政策に反映させる。

- (36) a.翻訳をするときはただ英語を日本語に置き換えるだけでなく、原書にこめられたメッセージを自分なりに取り入れ、自分自身の著書に反映させるという一石二鳥、三鳥を狙うスタイルで、精力的に仕事を続けています。

『朝2時起きで、なんでもできる!』

b.翻訳者は、原書にこめられたメッセージを自分自身の著書に反映させる。

(34)では、二格補語は「企業自己の価格決定」である。(35)では、二格補語は「政党の政策」である。(36)では、二格補語は「自分自身の著書」である。二格補語の名詞句はすべて主体の一部と考えられる。(34)(35)(36)では、主体と二格補語との間に、再帰的な関係が存在する。

この節の内容をまとめると、「反映サセル」には、再帰性の存在が見られる。「再帰性」が構文に現れる形としては、以下の二つのパターンがある。

1. 「XガYヲZニ反映サセル」：YがXそのものか、Xの一部であり、XとYの間に再帰性が見られる。
2. 「XガYヲZニ反映サセル」：ZがXそのものか、Xの一部であり、XとZの間に再帰性が見られる。

「反映スル」に比べて、「反映サセル」には、「XガYヲ(Xニ)反映サ

セル」というパターンが見られない。考えられる要因の一つとして、「反映サセル」には、使役形の使用により、主体 X には動作主主体の意味を持つのは一般的であり、主体 X とニ格補語は同一物を指すことが困難と思われる。例えば、

- (37) 株式持合いが一番遅くなったのは影響が大きいからである。時価と簿価の差額は、損益計算書には反映させず、直接、貸借対照表の資本の部に計上することになる。

『金融・証券市場分析の理論』

- (38) 『太平記』は、後醍醐天皇の即位から後村上天皇の時代まで五十年の南北朝の動乱を描いた軍記物語。同じ戦争の物語でも『平家物語』は仏教思想を反映させたロマンがありますが、『太平記』のほうは現実に立って政権の争奪に明け暮れる政治に、民衆が巻きこまれる悲劇を描きあげた四十巻におよぶ大長篇です。

『おもしろ講談ばなし』

(37) (38)は、「時価と簿価の差額」「『平家物語』」は、「は」を取っているが、実際に構文に現れない動作主の存在が想定できる。この場合、動作主と「ニ格補語」着点と同じ対象にならないため、再帰的な関係が見られない。

- (37') 企業は、時価と簿価の差額を損益計算書に反映させる。

- (38') 著者は、仏教思想を『平家物語』に反映させる。

つまり、「反映サセル」は、使役形の使用により、動作主の要素が構文に要求される。そのため、「反映スル」より、「反映サセル」のほうが、意図性を表す助動詞「～たい」と共起するケースが多く見られる。BCCWJ において、「～を反映させたい」の例文は、12 件(2.5%)であるが、

「～を反映したい」の例文は2件(0.1%)しかない⁸。例えば、

- (39) ただ私ども、そのようにレートが急速に円高になっていく過程におきまして、極力円高を反映したいということで考えまして、直近三カ月の平均値をとるという従来のルールがございしますが…

『国会会議録』

- (40) VBA では特に指定しないとすべての引数は参照渡しで処理されます。逆にプロシージャ内で引数を変更し、それを呼び出し元の変数に反映したくない場合は、値渡しにします。

『DIY 競馬プログラミング』

- (41) 真に地方自治に参加をして町づくりにも協力し、また地方自治にも自分の意思を反映させたいという熱意を持つ方々に対してのみ与えたらいい、こういうことで考えてきたわけですが、その法案を出した後も、従来にも増して強い反対の運動が起こったわけでございます。

『国会会議録』

- (42) ところが、暮らし方については、がらりと様変わりして「人並み」志向はぐんと後退する。「個性や自分の趣味を衣食住に反映させたい」とする個性派が四十六パーセントで、「あまりこだわらない」の三十七パーセントを上回る。

『人間大好き、雑談大好き』

(39) (40) (41) (42)は、すべて動作主の主体が存在する例文である。(39) (40)のような「～を反映したい」の比率は非常に少ない。一方、(41) (42)のような「～を反映させたい」の比率は「～を反映したい」より多い。しかし、本章では、両者の違いについて触れずに、別の機会に譲りたい。

⁸ 「自動詞+ -se (-ru)」の例文総数(483)、他動詞文の例文総数(1721)による比率である。

6. まとめ

本章は、漢語動詞「反映スル」に注目して、「再帰性」の観点から、「反映スル」の他動詞文と使役文について考察した。その結果、「反映スル」の他動詞文と使役文に、「再帰性」や「再帰的な関係」の存在が確認された。

まず、「反映スル」について、「再帰性」が構文に現れる形としては三つのパターンがある。

1. 「XガYヲZニ反映スル」: YがXそのものか、Xの一部であり、XとYの間に再帰性が見られる。
2. 「XガYヲZニ反映スル」: ZがXそのものか、Xの一部であり、XとZの間に再帰性が見られる。
3. 「XガYヲ(Xニ)反映スル」: X自身が二格補語の着点となる。

また、「反映サセル」について、「再帰性」が構文に現れる形としては二つのパターンがある。

1. 「XガYヲZニ反映サセル」: YがXそのものか、Xの一部であり、XとYの間に再帰性が見られる。
2. 「XガYヲZニ反映サセル」: ZがXそのものか、Xの一部であり、XとZの間に再帰性が見られる。

最後に、「反映サセル」は、使役形の使用により、動作主の意味要素が構文に要求される。そのため、「反映スル」より、「反映サセル」のほうが、意図性を表す助動詞「～たい」と共起するケースが多く見られる。

第七章参考文献

- 天野みどり (1987a) 「日本語文における <再帰性> について一構文論的概念としての有効性の再検討一」『日本語と日本文学』7、pp. 1-9、筑波大学国語国文学会
- 天野みどり (1987b) 「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151、pp. 97-110、国語学会
- 小柳昇 (2015) 『日本語のモノと場の二者関係の概念化と自動詞・他動詞構文に関する研究』博士学位論文、東京外国語大学
- 金英淑 (2004) 「VN する」の自他交替と再帰性」『日本語文法』4-2、pp. 89-102、日本語文法学会

- 金英淑 (2006) 『「VN する」の自他交替と構造:現代日本語の漢語動詞の分析』筑波大学博士論文
- 児玉美智子 (1989) 「状態変化主体他動詞文の成立と構造」『甲子園短期大学紀要』9-0、pp. 67-80、学校法人甲子園短期大学
- 高橋太郎 (1975) 「文中にあらわれる所属関係の種々の相」『国語学』103、pp. 1-17、日本語学会
- 高橋太郎 (1985) 「現代日本語のヴォイスについて」『日本語学』4-4、pp. 4-23、明治書院
- 仁田義雄 (1982) 「再帰動詞、再帰用法—Lexico-Syntax の姿勢から—」『日本語教育』47、pp. 79-90、日本語教育学会学会誌
- ヤコブソン、ウェスリー・M (1989) 「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』くろしお出版 須賀一好・早津恵美子 (1995) 『動詞の自他』に再掲、pp. 166-178、ひつじ書房

第八章 終章

1. 各章内容のまとめ

本研究は、序章にあたる第一章および終章にあたる第八章を除けば、本論の部分にあたる第二章から第七章までを、以下のようにまとめる。

第二章では、漢語動詞をめぐる先行研究について概観している。漢語動詞をめぐる研究について、動詞の内部構造に関する研究と、動詞の自他用法に関する研究が多く見られる。先行研究に従い、「対格構文 vs 非対格構文」という構文的な対応関係を持つ動詞を自他両用の動詞とする本研究の立場を明らかにする。

第三章では、国語辞書において「自他サ変」とされる漢語動詞に着目し、これらの動詞は「対格構文 vs 非対格構文」という構文的な対応関係を持つか否かを判定する。その結果、国語辞書で「自他サ変」とされる動詞は、すべて「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係を持つわけではないことが確認された。そのなかに、「対格構文 vs 非能格構文」の対応関係を持つ動詞、二格を取る自動詞用法を持つ動詞、実際に他動詞用法が見られない動詞が含まれている。さらに、「対格構文 vs 非対格構文」の対応関係を持つ自他両用の漢語動詞は、自動詞と他動詞の使用上に傾く傾向を示すものがある。「開始する」「破壊する」のような他動詞専用の傾向を示す動詞があるが、「増加する」「減少する」「発生する」のような自動詞専用の傾向を示す動詞もある。また、このような傾向を示す理由は、人間は現実に発生した事態に対する認識の違いによって、自動詞か他動詞かを選別することにあるについて論じる。最後に、母語話者に対して、アンケート調査により、BCCWJ では見られない使用上の特徴が確認できた。

第一に、BCCWJ においては大きなゆれが見られる漢語動詞であるが、アンケートではその使用頻度の差は語によって違う程度を呈している。しかし、自動詞と他動詞の使用数には大きな差が見られない。

第二に、BCCWJ においては様々なゆれ方が見られる漢語動詞であるが、アンケートでは、自動詞と「サレル」の使用数、および他動詞と「サセル」の使用数は、相補的な関係をなしているという特徴がすべての動詞に観

察されている。これは BCCWJ では専用の傾向にある漢語動詞のみ見られる特徴である。

第四章では、「増加する」「減少する」「発生する」といった自動専用の傾向にある動詞に着目し、これらの動詞の他動詞用法に見られる制限について考察した。先行研究では、「再帰性」や「再帰的な関係」で説明できない例を解釈してみた。本章では、他動詞文の主語を、「動因者主語」と「経験者主語」との2種類に分けて、認知言語学における動詞の他動性に関する論述を参考にしつつ、以下のことを明らかにした。

第一に、動因者主語の場合は、

A: 主語 N_1 がヒトを表す名詞の場合: プロトタイプ(典型事例)

B: 主語 N_1 がヒトに準ずる組織や機構を表す名詞の場合: メトニミーによるプロトタイプからの拡張事例

C: 主語 N_1 がモノを表す名詞の場合: メタファーによるプロトタイプからの拡張事例

D: 主語 N_1 が出来事を表すコト名詞の場合: メタファーによるプロトタイプからの拡張事例

A と B: 主語と目的語との間に、「 N_1 の N_2 」の関係が必ず存在するわけではない。ただし、主語 N_1 が目的語 N_2 の変化をコントロールできなければならない。

C と D: 主語と目的語との間に、「 N_1 の N_2 」の関係が見られない。主語 N_1 が目的語 N_2 との間に因果関係が存在しなければならない。

第二に、経験者主語の場合は、主語 N_1 と目的語 N_2 とは「全体部分の関係」に該当しなければならない。主語 N_1 は状態変化の主体とも、場所の意味役割とも解釈可能である。

第五章では、「開始する」「破壊する」といった他動詞専用の傾向にあるに着目し、これらの動詞の自動詞用法に見られる制限について考察した。その結果、以下のことを明らかにした。

まず、他動詞専用の傾向を示す自他両用の漢語サ変動詞の自動詞文について、和語動詞の有対自動詞文の主語と同様に、①無生物や出来事を表す名詞を主語に取ることが多い。②自動詞文が表した事態は、外的な働きかけによって生じた事態が多い。

また、外的な働きかけによって生じた結果事態は、認知ベースにおい

て、その働きかけが背景化されうる場合、結果事態が焦点化されて、自動詞文が成立する。しかし、認知ベースにおいて、その働きかけが背景化されえない場合、自動詞文が成立しない。その働きかけの要素が必要不可欠であるため、言語構造において受動態で表す必要がある。働きかけと結果との直接性に関わる。

さらに、漢語動詞の自動詞文の中には、自然発生の事態も少数ながら存在する。この場合の自動詞文には対応する他動詞文は成立しない。ただし、事態の発生を所有する再帰的な事態の場合は、事態の発生した場所や在り処と解釈できる他動詞文の主語を補足することができる。

最後に、漢語動詞は、和語動詞とは異なり、語形によって反使役化または脱使役化という自動詞の派生方法を判断することはできない。動詞の描写する各事態に沿って、自動詞文の意味役割を分析しなければならない。

第六章では、漢語動詞「移動スル」に着目して、「移動スル」の対象補語を取るヲ格用法、場所補語を取るヲ格用法、状況補語を取るヲ格用法について考察した。「移動スル」の移動格の用法について、移動経路を表すのは一般的であるが、そのなかに、移動の起点が含まれる経路の場合がある。また、場所性を持つ名詞句がヲ格補語になる場合、一つの個体として対象化される可能があるとき、多義性が生じることがある。

まず、漢語動詞「移動スル」のヲ格の用法を、表に示す。

ヲ格		例	
対象格	対象補語を取るヲ格	A	
移動格	移動経路	広い移動領域での移動経路	B
		線的な移動経路	C
		無秩序な移動経路	D
		起点が含まれる移動経路	E
状況格	状況補語を取るヲ格	F	

- A: { バイク / 店舗 / 足… } を移動する
- B: { 空中 / 陸上 / 水面… } を移動する
- C: { 橋の上 / 道路上 / 太陽の周り… } を移動する
- D: { 机の間 / 各地 / あちこち… } を移動する

E: { 席 / 部屋 / 職場… } を移動する

F: { 闇の中 / 時空間の中… } を移動する

また、移動格と対象格との間に、多義性が生じる用例がある。

用例	意味	自他動詞
{橋 / 階段} を移動する	対象格: 対象の位置変化	自他両用
	場所格: 主体の移動経路	自動詞
部屋を移動する	対象格: 所属関係の変化	自他両用
	場所格: 起点が含まれる経路	自動詞
{場所/会場} を移動する	対象格: 所属関係の変化	自他両用
	場所格: 起点が含まれる経路	自動詞

第七章では、漢語動詞「反映スル」に着目して、「再帰性」の観点から、「反映スル」の他動詞文と使役文について考察した。その結果、「反映スル」の他動詞文と使役文に、「再帰性」や「再帰的な関係」の存在が確認された。

まず、「反映スル」について、「再帰性」が構文に現れる形としては三つのパターンがある。

1. 「XガYヲZニ反映スル」: YがXそのものか、Xの一部であり、XとYの間に再帰性が見られる。
2. 「XガYヲZニ反映スル」: ZがXそのものか、Xの一部であり、XとZの間に再帰性が見られる。
3. 「XガYヲ(Xニ)反映スル」: X自身がニ格補語の着点となる。

また、「反映サセル」について、「再帰性」が構文に現れる形としては二つのパターンがある。

1. 「XガYヲZニ反映サセル」: YがXそのものか、Xの一部であり、XとYの間に再帰性が見られる。
2. 「XガYヲZニ反映サセル」: ZがXそのものか、Xの一部であり、XとZの間に再帰性が見られる。

最後に、「反映サセル」は、使役形の使用により、動作主の意味要素が構文に要求される。そのため、「反映スル」より、「反映サセル」のほうが、意図性を表す助動詞「～たい」と共起するケースが多く見られる。

2. 今後の課題

本稿の問題点および今後の課題について述べる。

まず、例文の扱い方について、本稿は日本語学習者の立場から、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(中納言)」の実例に基づいて、自他両用の漢語動詞の自動詞用法と他動詞用法について考察した。しかし、コーパスから選別した実例について、日本語母語話者のなかには、非文との意見もある。母語話者の内省と実例との接点、またその相違について、本稿ではうまく解決できない問題点である。

また、本稿で扱った二字漢語動詞は、自他両用とされる動詞である。他動詞文と使役文、自動詞文と受身文が同時に使われている可能性が考えられる。漢語動詞とヴォイスとの関連性、漢語動詞と和語動詞との関連性について、本稿では詳しく考察できなかった。

さらに、漢語動詞は文章語の場面に使われることが多いと思われるが、漢語動詞と文体との関係、漢語動詞が使われる文体の特徴、日本語の漢語動詞と中国語の漢語動詞の相違について、興味深い課題である。

最後に、本稿は、主に漢語動詞の実例や使用上の特徴を中心に記述している。特に第六章と第七章は、「移動スル」と「反映スル」との二つの動詞のみに注目し、その用法を記述するものである。さらに視野を広げて関連性のある動詞をできるだけ多く考察する必要があると思われる。そして、言語現象の記述には至らないところがあり、理論的な考察は一切触れなかった。以上のような問題点を、今後と課題として更なる考察する必要があると考えられる。

参考文献

日本語文献

- 青木伶子 (1977)「使役-自動詞・他動詞との関わりにおいて」『成蹊国文』10、pp. 26-39、成蹊大学文学部日本文学科
- 天野みどり (1987a)「日本語文における<再帰性>について一構文論的概念としての有効性の再検討」『日本語と日本文学』7、pp. 1-9、筑波大学国語国文学会
- 天野みどり (1987b)「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151、pp. 97-110、国語学会
- 天野みどり (1991)「経験的間接関与表現-構文間の意味的密接性の違い」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 天野みどり (2011)『日本語構文の意味と類推拡張』笠間書院
- 庵功雄 (2008)「漢語サ変動詞の自他に関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』11、pp. 47-63、一橋大学留学生センター
- 庵功雄 (2010)「中国語話者の漢語サ変動詞の習得に関わる一要因一非対格自動詞の場合を中心に」『日本語教育』146、pp. 174-181、日本語教育学会
- 庵功雄、宮部真由美 (2013)「二字漢語動名詞の使用実態に関する報告:「中納言」を用いて」『一橋大学国際教育センター紀要』4、pp. 97-108
- 池上嘉彦 (1981)『「する」と「なる」の言語学一言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店
- 池上嘉彦 (1993)「<移動>のスキーマと<行為>のスキーマ -日本語の「ヲ格+移動動詞」構造の類型論的考察-」『外国語科研究紀要』43-3、pp. 34-53、東京大学教養学部外国語科
- 江口泰生 (1989)「漢語サ変動詞の自他性と態」奥村三雄教授退官記念論文集刊行会(編)『奥村三雄教授退官記念 国語学論集』pp. 765-784、桜楓社
- 奥津敬一郎 (1967)「自動化・他動詞および両極化転形-自・他動詞の対応」『国語学』70、pp. 46-66、国語学会
- 奥津敬一郎 (1981)「移動変化動詞文—いわゆる spray paint hypallage について—」『国語学』127、pp. 40-68、国語学会
- 小柳昇 (2010)「コーパスに基づいた漢語サ変動詞の他動詞用法の分析—「場主語構文」の観点から—」『言語・地域文化研究』16、pp. 69-91、東京外国語大学大学院
- 小柳昇 (2011)「存在と所有の意味概念はいかに日本語の言語現象を説明するか—場主語の視点から—」『第12回日本語文法学会 大会発表予稿集』pp. 115-122
- 小柳昇 (2015)『日本語のモノと場の二者関係の概念化と自動詞・他動詞構文に関する研究』博士学位論文、東京外国語大学
- 加賀信広 (2001)「意味役割と英語の構文」米山三明・加賀信広(著)『語の意味と意味役割』研究社、pp. 87-181
- 加賀信広 (2003)「日本語二重主格文:意味役割理論からの提案」『筑波英学展望』22、pp.

- 147-159、筑波大学現代語・現代文化学系英語学・英文学グループ
- 加賀信広 (2004)「状態変化主体の他動詞文について-意味役割理論からの提案」『筑波英
学展望』23、pp. 73-86、筑波大学現代語・現代文化学系英語学・英文学グループ
- 角田太作 (1991)『世界の言語と日本語-言語類型論から見る日本語』くろしお出版
- 影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論』くろしお出版
- 影山太郎・由本陽子 (1997)『語形成と概念構造』研究社出版
- 影山太郎 (2002)「非対格構造の他動詞」『文法理論：レキシコンと統語』pp. 119-145、
東京大学出版会
- 影山太郎 (2005)「書評 小林英樹著『現代日本語の漢語動名詞の研究』」『日本語の研究』
1-3、pp.195-200、日本語学会
- 片山きよみ (2005)「日本語他動詞文の再帰的用法について」『熊本大学言語学論集』4、
pp. 325-369、熊本大学文学部言語学研究室
- 加藤弘 (2001)「他動・再帰・使役」『自然言語処理』144-25、pp. 183-190、東北大学大学
院情報科学研究科
- 加藤重広 (2004)『日本語語用論のしくみ』研究社
- 加藤重広 (2006)「対象格と場所格の連続性:格助詞試論(2)」『北海道大学文学研究科紀要』
118、pp. 135-182、北海道大学文学研究科
- 金英淑 (2004)「「VN する」の自他交替と再帰性」『日本語文法』4-2、pp. 89-102、日本
語文法学会
- 金英淑 (2006)『「VN する」の自他交替と構造:現代日本語の漢語動詞の分析』筑波大学
博士論文
- 金田一春彦 (1965)「動詞」『続日本文法講座』第1巻 明治書院
- 楠木徹也 (2001)「「を」格における他動性のスキーマ」『留学生日本語教育センター論集』
28、pp. 1-12、東京大学留学生日本語教育センター
- 熊薇 (2013)「VV 型の日中 2 字同形漢語の自他性について」『国際文化学研究: 神戸大学
国際文化学部紀要』26、pp. 105-120、神戸大学国際文化学部
- 小栗哲哉 (2016)「日英語の再帰構文の受動化に関する一考察」『言語文化共同研究プロジェ
クト』2015、pp. 1-10、大阪大学大学院言語文化研究科
- 児玉美智子 (1989)「状態変化主体他動詞文の成立と構造」『甲子園短期大学紀要』9-0、
pp.67-80、甲子園短期大学
- 小林英樹 (2004)『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 小林英樹 (2016)「書評 張志剛著『現代日本語の二字漢語動詞の自他』」『日本語の研究』
12-2、pp. 76-83、日本語学会
- 斎賀秀夫 (1957)「語構成の特質」(岩淵悦太郎 等編)『現代国語学第 2 (ことばの体系)』
筑摩書房 斎藤倫明・石井正彦(編)(1997)『日本語研究資料集第 1 期第 13 巻 語構成』

- ひつじ書房 に再掲、pp. 24-45
- 定延利之 (1991) 「SASE と間接性」 仁田義雄(編) 『日本語のヴォイスと他動性』 くろしお出版
- 佐藤琢三 (1994) 「動詞の自他対応と様態指定」 『筑波応用言語学研究』 01、pp. 21-32 筑波大学大学院
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』 笠間書院
- 佐藤豊 (2010) 「『を VN だ』 構文の出現頻度について」 『ICU 日本語教育研究』 7、pp. 55-64、国際基督教大学日本語教育研究センター
- 佐藤豊 (2011) 「『を VN だ』 構文の出現頻度:Google 検索による再調査」 『ICU 日本語教育研究』 8、pp. 35-48、国際基督教大学日本語教育研究センター
- 佐藤佑 (2009) 「現代日本語の事態描写に関する動詞連用形・サ変動詞語幹の名詞用法について—連体修飾句と複合語の形態分析」 『コーパスに基づく言語学教育研究報告』 1、pp. 103-128、東京外国語大学大学院地域文化研究科グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」
- 佐藤佑 (2012) 「『太陽コーパス』 にみる、動名詞名詞『報告』 の使用実態」 『第 2 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp. 77-86、第 2 回コーパス日本語学ワークショップ
- 澤田淳 (2006) 「日本語の他動詞構文の事象構造に関する認知言語学的考察—非動作主-主語の他動詞構文を中心に」 『言語科学論集』 12、pp. 19-34、京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座
- 須賀一好 (1999) 「動詞「かわる」の意味と自他」 『山形大学日本語教育論集』 2、pp. 69-78
- 須賀一好・早津恵美子(編) (1995) 『動詞の自他』 ひつじ書房
- 杉本武 (1986) 「格助詞-「が」「を」「に」と文法関係」 奥津敬一郎・沼田善子 『いわゆる日本語助詞の研究』、pp. 227-380、凡人社
- 杉本武 (1991) 「ニ格をとる自動詞—準他動詞と受動詞」 仁田義雄(編) 『日本語のヴォイスと他動性』 pp. 233-250、くろしお出版
- 杉本武 (1993) 「状況の「を」について」 『九州工業大学情報工学部紀要 人文・社会篇』 6、pp. 25-37、九州工業大学
- 杉本武 (1995) 「移動格の「を」について」 『日本語研究』 15、pp. 120-129、首都大学東京
- 高橋太郎 (1975) 「文中にあらわれる所属関係の種々の相」 『国語学』 103、pp. 1-17、日本語学会
- 高橋太郎 (1985) 「現代日本語のヴォイスについて」 『日本語学』 4-4、pp. 4-23、明治書院
- 高見健一・久野暲 (2002) 『日英語の自動詞構文』 研究社
- 田川拓海 (2002) 『日本語における「に」の多義性—起点的意味役割を中心に—』 卒業論文、筑波大学日本語・日本文化学類
- 田川拓海 (2003) 「現代日本語における動作主の意味論と統語論」 筑波大学修士論文、筑

波大学人文社会科学部研究科

- 田中茂範・松本曜 (1997) 『空間と移動の表現』 研究社出版
- 田中佑 (2015) 「数詞と結合する二字漢語サ変動詞について」『言語学論叢 オンライン版』
8、pp. 14-24、筑波大学 一般・応用言語学研究室
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』 研究社
- 谷口一美 (2004) 「行為連鎖と構文I」 中村芳久編 『認知文法論II』 pp.53-87、大修館書店
- 谷口一美 (2005) 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 ひつじ書房
- 田辺和子・中條清美 (2014) 「日英新聞コーパス及び BCCWJ 比較に基づく二字漢語動名
詞使用の分析」『日本女子大学紀要 文学部』 63、pp.1-11、日本女子大学
- 田辺和子・中條清美・船戸はるな (2012) 「新聞コーパスにおける二字漢語動名詞の動詞
的・名詞的ふるまいについて」『日本女子大学紀要 文学部』 61、pp. 19-32、日本女子大
学
- 田村康仁・野村雅昭 (1982) 「サ変動詞の抽出と分析」『計量国語学』 13-4、計量国語学
会
- 張志剛 (2014) 『現代日本語の二字漢語動詞の自他』 くろしお出版
- 張善実 (2013) 「日本語の V-N 型漢語動詞の語構成論的研究—離脱・帰着を表す動詞を
中心に—」 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 博士学位論文
- 永澤濟 (2007) 「漢語動詞の自他体系の近代から現代への変化」『日本語の研究』 3-4、pp.
17-32、日本語学会
- 永澤濟 (2010) 「変化パターンからみる近代漢語の品詞用法」『東京大学言語学論集』 30、
pp. 115-168、東京大学文学部言語学研究室
- 中村芳久 (2000) 「認知文法から見た語彙と構文：自他交替と受動態の文法化」『金沢大
学文学部論集 言語・文学篇』 20、pp. 75-103
- 西尾寅彌 (1954) 「動詞の派生について-自他对立の型による」『国語学』 17、pp. 105-117、
国語学会
- 西尾寅彌 (1988) 『現代語彙の研究』 明治書院
- 西村義樹 (1998) 「行為者と使役構文」 中村実・西村義樹 『構文と事象構造』 研究社出版
- 仁田義雄 (1982) 「再帰動詞、再帰用法—Lexico-Syntax の姿勢から—」『日本語教育』 47、pp.
79-90、日本語教育学会学会誌
- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論の観点から』 ひつじ書房
- 野村剛史 (1982) 「自動・他動詞・受身動詞について」『日本語・日本文化』 11、須賀一
好・早津恵美子(編)(1995) 『動詞の自他』 ひつじ書房に再掲、pp. 137-150
- 野田尚史 (1991) 「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」 仁田義雄(編) 『日本語
のヴォイスと他動性』 pp. 211-232、くろしお出版
- 野村雅昭 (1988) 「二字漢語の構造」『日本語学』 7-5、pp. 44-55、明治書院
- 野村雅昭 (1999) 「サ変動詞の構造」 森田良行教授古稀記念論文集刊行会(編) 『日本語研

- 究と日本語教育』 pp. 1-23 明治書院
- 早津恵美子 (1987)「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』 6、 pp. 79-109、京都大学言語学研究会
- 早津恵美子 (1989)「有対他動詞と無対他動詞の違いについて-意味的な特徴を中心に」『言語研究』 95、 pp. 231-256、日本言語学会
- 早津恵美子 (2016)『現代日本語の使役文』 ひつじ書房
- 日向敏彦 (1984)「漢語サ変動詞の構造」『上智大学国文学論集』 18、 pp. 161-179、上智大学国文学会
- 藤川友紀子 (2013)「自他両用漢語動詞の自動詞専用化と他動詞用法」神戸市外国語大学 学士論文
- 藤原優美 (2013)「日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の対照研究—語構成の異同と文法的振る舞いを中心に—」神戸大学大学院国際文化学研究所 博士学位論文
- 前田宏太郎 (2019)「日本語の自他交替：協調の原理の観点から」日本語用論学会第 21 回発表論文集 14、 pp. 105-112
- 益岡隆志 (1979)「日本語の経験的間接関与構文と英語の have 構文について」『林栄一教授還暦記念論文集 英語と日本語と』くろしお出版
- 益岡隆志 (1987)『命題の文法-日本語文法序説』くろしお出版
- 益岡隆志 (1991)「受動表現と主観性」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』pp. 105-121、くろしお出版
- 益岡隆志 (1993)「書評 W.M. Jacobsen: The Transitive Structure of Events in Japanese」『言語研究』 103、 pp. 167-182、日本言語学会
- 益岡隆志 (2013)『日本語構文意味論』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法改訂版』くろしお出版
- 松下大三郎 (1928)『改選標準日本語文法』中文館
- 三上章 (1853)『現代語法序説:シンタクスの試み』刀江書院
- 三宅知宏 (1996)「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』 110、 pp. 143-168、日本言語学会
- 宮島達夫 (1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告 43) 秀英出版
- 宮島達夫 (1994)『語彙論研究』むぎ書房
- 村井聖徳 (2007)『日本語における『自他』と『ヴォイス』の諸問題』一橋大学言語社会研究科 博士学位論文
- 森篤嗣 (2014)「漢語サ変動詞におけるスルーサセルの置換について」『帝塚山大学現代生活学部紀要』 10、 pp. 139-147、帝塚山大学現代生活学部
- 森岡健二 (1994)『日本文法体系論』明治書院
- 森田良行 (1990)「自他同形動詞の諸問題」『国文学研究』 102、 pp. 331-341、早稲田大学国文学会

- 森田良行 (1994)『動詞の意味論的文法研究』明治書院
- ヤコブソン、ウェスリー・M(1989)「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』くろしお出版 須賀一好・早津恵美子 (1995)『動詞の自他』に再掲、pp.166-178、ひつじ書房
- 山田一美・山田勇人 (2009)「漢語サセル動詞に関する一考察」『大阪女学院短期大学紀要』39、pp.19-29、大阪女学院短期大学
- 山田孝雄 (1936)『日本文法学概論』宝文館
- 山田勇人 (2014)「日本語における再帰構文の他動性に関する一考察—自他同形漢語動詞の分析を通して」『言語と文化』8、pp.77-85、京都外国語大学大学院紀要
- 山田勇人 (2015)「日本語における他動詞と主体意志の関係について-主体意志を持たない他動詞文の用例からの考察」『言語と文化』10、pp.49-57、京都外国語大学大学院紀要
- 山田勇人 (2018)「自他同形漢語動詞の自他の変化に関する考察」『神戸医療福祉大学紀要』19-1、pp.145-154、神戸医療福祉大学
- 由本陽子 (2009)「複合形容詞形成に見る語形成のモジュール性」由本陽子・岸本秀樹 (編)『語彙の意味と文法』pp.209-229、くろしお出版.
- 由本陽子 (2007)「複雑述語の形成に伴う事象構造の合成と項の実現」中日理論言語学研究国際フォーラム(於 パネルディスカッション『ことばは世界をどう捉えるか-事象表現の対照を通して-])
- 由本陽子 (2011)「日本語の「N+V」-する」複雑述語の形成と項実現について」第25回中日理論言語学研究会
- 楊健 (2019)「二字漢語サ変動詞の自他分布に関する一考察-BCCWJに基づいて」『神戸市外国語大学研究科論集』22、pp.47-60、神戸市外国語大学外国語学研究所
- 楊健 (2021)「国語辞書において「自他両用」とされる二字漢語サ変動詞の用法」『神戸外大論集』74、pp.173-196、神戸市外国語大学研究会
- 楊健 (2021)「自動詞専用の傾向を示す自他両用の二字漢語サ変動詞の他動詞用法」『神戸市外国語大学研究科論集』24、pp.1-22、神戸市外国語大学外国語学研究所
- 楊高郎 (2007)「自動詞・他動詞用法に意味的制限を持つ自他両用動詞について—二字漢語動詞を中心に—」『筑波日本語研究』12、pp.65-88、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
- 楊高郎 (2010)「国語辞典における自他認定について:自他両用の二字漢語動詞を中心に」『筑波日本語研究』14、pp.75-95、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
- 姚艷玲 (2018)「日本語の「N-が N-を Vt」構文のカテゴリー」『日中言語対照研究論集』20、日中対照言語学会、pp.110-128
- 吉田雅子(2005)「二字漢語の日中対照-「参照」「参考」を手がかりに」『専修人文論集』77、pp.135-158、専修大学学会
- 劉健 (2015)「二字漢語動詞の自他性について:「VN する」型漢語動詞を中心に」『筑波

日本語研究』19、pp. 1-12、筑波大学日本語学研究室
劉劍 (2013)『現代日本語の他動詞文と自動詞文: 事象構造の分析による再整理』筑波大
学博士論文

英語文献

Beth Levin & Malka Rappaport Hovav. 1975 Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface.
Cambridge Mass : MIT Press
Grice, H.P. 1989. Studies in the Way of Words. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
Hopper Paul J. & Sandra A. Thompson (1980), "Transitivity in Grammar and Discourse" Language
56: 2, pp.251-299.
Shibatani, Masayoshi ed. 1976a Syntax and semantics 5: Japanese generative grammar. New York:
Academic Press.
Shibatani, Masayoshi ed. 1976b Syntax and semantics 6: The grammar of causative constructions.
New York: Academic Press.

国語辞典

『岩波国語辞典 第六版』岩波書店
『学研現代新国語辞典』学習研究社
『明鏡国語辞典 携帯版』大修館書店
『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店

付録1 自他両用の二字漢語サ変動詞の選別結果

(1) 「非対格構文 vs 対格構文」が成立する自他両用の漢語サ変動詞 (186 個)

語	例文数	語	例文数	語	例文数	語	例文数	語	例文数
発生	8012	移転	819	消耗	259	復旧	106	伸縮	37
増加	7016	再現	814	凍結	258	結束	105	加重	37
実現	5093	再開	807	反転	244	転覆	103	破碎	36
減少	4767	転換	802	照射	243	増減	102	合同	34
決定	4718	緩和	786	生育	237	断絶	102	滴下	30
展開	4473	生成	742	成就	235	同伴	102	加圧	28
開始	4166	中断	671	集積	234	収斂	100	摩擦	28
拡大	3831	加速	661	連発	233	再興	100	遞減	27
移動	3638	解散	631	集結	232	失墜	99	集荷	26
反映	3456	合併	606	同化	232	接合	93	乳化	26
解決	3424	持続	581	露呈	228	内定	91	合一	25
完成	3195	存続	521	紛失	224	減量	86	液化	23
集中	2794	一変	509	高揚	221	具備	82	転回	23
終了	2580	逆転	495	焼失	218	入籍	81	垂下	22
確立	2554	解体	468	倍增	215	伸長	81	閉会	22
回復	2217	汚染	437	混合	214	開会	81	漏出	21
継続	1921	反射	428	点滅	205	累積	78	転位	21
破壊	1755	開業	403	低減	201	開講	76	隠滅	21
接続	1747	変形	397	破損	196	増員	72	伸張	20
増大	1695	露出	378	休止	180	羅列	70	混和	19
固定	1587	発現	370	充足	175	振興	70	流下	18
解消	1545	復元	366	完備	173	閉塞	65	鎮火	17
確定	1345	増殖	362	減速	168	連合	62	連接	17
更新	1325	樹立	351	転移	163	倍加	62	変調	17
消滅	1292	発動	334	始動	161	併発	62	電化	15
停止	1204	暴露	331	損傷	161	整頓	60	閉山	15
完了	1184	噴出	323	併合	156	大破	53	屈伸	14
乾燥	1141	結集	319	増進	155	更迭	52	減圧	13
復活	1120	平均	319	変革	155	降格	51	根治	12
結合	1082	堆積	313	接着	151	腐食	50	累増	11
分解	959	発散	297	一新	142	增量	49	消散	11

軽減	928	収縮	296	溶解	135	漏洩	48	射出	11
縮小	925	転倒	282	復興	133	析出	46	滅却	11
蓄積	903	半減	275	冷却	127	損壊	45	出庫	10
変換	895	混入	274	中和	121	鎮静	42		
再生	857	絶滅	270	収束	119	再任	42		
分離	842	稼働	266	現出	118	並列	41		
連続	824	昇格	259	孵化	107	伸展	39		

(2)「非能格構文 vs 対格構文」が成立する動詞 (14 個)

語	例文数	語	例文数	語	例文数	語	例文数	語	例文数
出産	623	競争	218	一服	105	中絶	83	飲食	44
受講	300	貯金	180	出願	99	納品	71	集金	33
作曲	299	返品	112	修業	88	預金	63		

(3)ニ格用法を取る自動詞用法を併せ持つ動詞 (8 個)

語	例文数	語	例文数	語	例文数	語	例文数
注目	3685	配慮	1951	反論	557	憤慨	240
連絡	2103	加熱	571	固執	321	反駁	80

(4)ヲ格を取る他動詞用法が実際に見られない動詞 (11 個)

語	例文数	語	例文数	語	例文数	語	例文数	語	例文数
反発	563	係属	146	開幕	125	入庫	22	断水	12
全滅	192	化粧	128	決壊	70	勉学	14	惑乱	10
逸脱	232								

付録2 BCCWJにおける例文総数が1000以上の漢語動詞の各用法 (括弧内は比率)

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞+ -se (-ru)	D 他動詞+ -re (-ru)	CとD 比率差	AとB 比率差
増加	7015	6520 (92.9%)	102 (1.5%)	377 (5.4%)	16 (0.2%)	5.1pt	91.5pt
発生	8007	7432 (92.8%)	146 (1.8%)	427 (5.3%)	2 (0.0%)	5.3pt	91.0pt
減少	4762	4375 (91.9%)	42 (0.9%)	342 (7.2%)	3 (0.1%)	7.1pt	91.0pt
消滅	1284	1142 (88.9%)	14 (1.1%)	128 (10.0%)	0 (0.0%)	10.0pt	87.9pt
増大	1694	1380 (81.5%)	59 (3.5%)	252 (14.9%)	3 (0.2%)	14.7pt	78.0pt
復活	1116	762 (68.3%)	53 (4.7%)	282 (25.3%)	19 (1.7%)	23.6pt	63.5pt
移動	3637	2667 (73.3%)	426 (11.7%)	523 (14.4%)	21 (0.6%)	13.8pt	61.6pt
集中	2794	2085 (74.6%)	388 (13.9%)	285 (10.2%)	36 (1.3%)	8.9pt	60.7pt
結合	1080	790 (73.1%)	138 (12.8%)	76 (7.0%)	76 (7.0%)	0.0pt	60.4pt
乾燥	1141	672 (58.9%)	55 (4.8%)	402 (35.2%)	12 (1.1%)	34.2pt	54.1pt
完成	3194	2021 (63.3%)	297 (9.3%)	622 (19.5%)	254 (8.0%)	11.5pt	54.0pt
終了	2580	1895 (73.4%)	553 (21.4%)	125 (4.8%)	7 (0.3%)	4.6pt	52.0pt
確定	1345	855 (63.6%)	314 (23.3%)	53 (3.9%)	123 (9.1%)	-5.2pt	40.2pt
完了	1184	800 (67.6%)	327 (27.6%)	51 (4.3%)	6 (0.5%)	3.8pt	39.9pt
回復	2215	1347 (60.8%)	616 (27.8%)	204 (9.2%)	48 (2.2%)	7.0pt	33.0pt
接続	1747	860 (49.2%)	573 (32.8%)	21 (1.2%)	293 (16.8%)	-15.6pt	16.4pt
停止	1204	595 (49.4%)	413 (34.3%)	105 (8.7%)	91 (7.6%)	1.2pt	15.1pt
拡大	3831	1761 (46.0%)	1551 (40.5%)	163 (4.3%)	356 (9.3%)	-5.0pt	5.5pt
継続	1921	906 (47.2%)	804 (41.9%)	56 (2.9%)	155 (8.1%)	-5.2pt	5.3pt
更新	1325	477 (36.0%)	521 (39.3%)	10 (0.8%)	317 (23.9%)	-23.2pt	-3.3pt

固定	1587	518 (32.6%)	663 (41.8%)	34 (2.1%)	372 (23.4%)	-21.3pt	-9.1pt
解決	3424	1276 (37.3%)	1837 (53.7%)	17 (0.5%)	294 (8.6%)	-8.1pt	-16.4pt
実現	5092	1642 (32.2%)	2581 (50.7%)	371 (7.3%)	498 (9.8%)	-2.5pt	-18.4pt
決定	4718	1253 (26.6%)	2301 (48.8%)	15 (0.3%)	1149 (24.4%)	-24.0pt	-22.2pt
展開	4472	1119 (25.0%)	2162 (48.3%)	100 (2.2%)	1091 (24.4%)	-22.2pt	-23.3pt
確立	2553	601 (23.5%)	1320 (51.7%)	55 (2.2%)	577 (22.6%)	-20.4pt	-28.2pt
解消	1542	323 (20.9%)	844 (54.7%)	30 (1.9%)	345 (22.4%)	-20.4pt	-33.8pt
反映	3454	356 (10.3%)	1721 (49.8%)	483 (14.0%)	894 (25.9%)	-11.9pt	-39.5pt
破壊	1755	69 (3.9%)	1014 (57.8%)	10 (0.6%)	662 (37.7%)	-37.2pt	-53.8pt
開始	4166	180 (4.3%)	2812 (67.5%)	8 (0.2%)	1166 (28.0%)	-27.8pt	-63.2pt

付録3 専用の傾向を示す自他両用動詞 (BCCWにおける例文総数が1000以下)

(1)自動詞専用の傾向にある動詞 (22個)

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞+ -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	CとD 比率差	AとB 比率差
生育	237	225 (94.9%)	2 (0.8%)	10 (4.2%)	0 (0.0%)	4.2pt	94.1pt
転倒	282	255 (90.4%)	7 (2.5%)	19 (6.7%)	1 (0.4%)	6.4pt	87.9pt
転移	163	146 (89.6%)	4 (2.5%)	8 (4.9%)	5 (3.1%)	1.8pt	87.1pt
孵化	107	88 (82.2%)	1 (0.9%)	18 (16.8%)	0 (0.0%)	16.8pt	81.3pt
漏出	21	17 (81.0%)	0 (0.0%)	4 (19.0%)	0 (0.0%)	19.0pt	81.0pt
点減	205	164 (80.0%)	2 (1.0%)	39 (19.0%)	0 (0.0%)	19.0pt	79.0pt
増殖	362	296 (81.8%)	15 (4.1%)	44 (12.2%)	7 (1.9%)	10.2pt	77.6pt
半減	275	228 (82.9%)	17 (6.2%)	26 (9.5%)	4 (1.5%)	8.0pt	76.7pt
収縮	296	224 (75.7%)	1 (0.3%)	71 (24.0%)	0 (0.0%)	24.0pt	75.3pt
昇格	259	196 (75.7%)	5 (1.9%)	53 (20.5%)	5 (1.9%)	18.5pt	73.7pt
絶滅	270	215 (79.6%)	18 (6.7%)	34 (12.6%)	3 (1.1%)	11.5pt	73.0pt
一変	506	386 (76.3%)	21 (4.2%)	97 (19.2%)	2 (0.4%)	18.8pt	72.1pt
集結	232	182 (78.4%)	15 (6.5%)	31 (13.4%)	4 (1.7%)	11.6pt	72.0pt
存続	519	385 (74.2%)	15 (2.9%)	115 (22.2%)	4 (0.8%)	21.4pt	71.3pt
腐食	50	35 (70.0%)	1 (2.0%)	10 (20.0%)	4 (8.0%)	12.0pt	68.0pt
収束	119	90 (75.6%)	11 (9.2%)	14 (11.8%)	4 (3.4%)	8.4%	66.4%
稼働	266	190 (71.4%)	14 (5.3%)	59 (22.2%)	3 (1.1%)	21.1pt	66.2pt
逆転	493	349	39 (7.9%)	65 (13.2%)	40 (8.1%)	5.1pt	62.9pt

		(70.8%)					
倍増	215	152 (70.7%)	24 (13.4%)	35 (16.3%)	4 (1.9%)	14.4pt	59.5pt
反転	244	163 (66.8%)	20 (8.2%)	58 (23.8%)	3 (1.2%)	22.5pt	58.6pt
高揚	221	138 (62.4%)	18 (8.1%)	59 (26.7%)	6 (2.7%)	24.0pt	54.3pt
転覆	103	62 (60.2%)	13 (12.6%)	24 (23.3%)	4 (3.9%)	19.4pt	47.6pt

(2)他動詞専用の傾向にある動詞 (7 個)

語	総数	A 自動詞	B 他動詞	C 自動詞+ -se (-ru)	D 他動詞 + -re (-ru)	C と D 比率差	A と B 比率差
樹立	351	9 (2.6%)	268 (76.4%)	9 (2.6%)	65 (18.5%)	16.0pt	73.8pt
羅列	70	3 (4.3%)	52 (74.3%)	1 (1.4%)	14 (20.0%)	18.6pt	70.0pt
再現	814	37 (4.5%)	586 (72.0%)	16 (2.0%)	175 (21.5%)	19.5pt	67.4pt
再興	100	10 (10.0%)	58 (58.0%)	7 (7.0%)	25 (25.0%)	18.0pt	48.0pt
一新	142	19 (13.4%)	85 (59.9%)	5 (3.5%)	33 (23.2%)	19.7pt	45.6pt
軽減	928	100 (10.8%)	517 (55.7%)	53 (5.7%)	258 (27.8%)	22.1pt	44.9pt
緩和	786	76 (9.7%)	409 (52.0%)	38 (4.8%)	263 (33.5%)	28.6pt	42.4pt

付録4 アンケート問題用紙

年齢: •20代以下 •20代 •30代 •40代 •50代 •60代以上

質問 以下の1~40の文中の()に、適当と思う表現を記入してください。
(思いつく表現が二つ以上あるときは、それらをすべて記入してください)

1. 市民の協力のおかげで、この計画が 実現 () しました。
2. 年金の支給額を事前に 確定 () ことに無理がある。
3. いよいよ工事が 完了 () てしまいます。
4. 政府の基本方針が 決定 () しました。
5. 審査会は、調査を 終了 () しました。
6. 会場の皆さんは今、視線を司会者に 集中 () していますね。
7. 計画を 実現 () ため、市民力の結集をお願いします。
8. 二つのセルがひとつに 結合 () しました。
9. カメラを 固定 () ための道具として三脚があげられます。
10. すべての問題が 解決 () しました。
11. その企業はサービスの範囲を大きく 拡大 () しました。
12. プリンターがコンピューターと 接続 () しています。
13. この音楽グループは今年活動を 停止 () します。
14. 国内でのボランティア活動が 展開 () しました。
15. 政府が事態を認定したうえ、対処基本方針を 決定() しました。
16. 捜査官がすべての事件を 解決 () しました。
17. 町では、広く町民の皆さんの意見を 反映 () ことを目指します。
18. サービスの範囲が大きく 拡大 () しました。
19. データが自動的に 更新 () ように設定されています。

20. 効果的にストレスを 解消 () 方法はありますか。
21. すべての工事が 完成 () しました。
22. 皆さんの視線は今、司会者に 集中 () ています。
23. 彼は国内を中心に音楽活動を 展開 () ています。
24. 調査がようやく 終了 () しました。
25. 新しい保険制度が 確立 () しました。
26. 社会の景気が 回復 () しました。
27. あの歌手は、今でも音楽活動を 継続 () ています。
28. 今回の問題点は、町民の意見が適切に 反映 () なかったということです。
29. 一方のパソコンにプリンターを 接続 () て、他方のプリンターと共有します。
30. カメラが 固定 () ように、三脚を使った。
31. 景気を 回復 () ために、政府は新たな政策を始めました。
32. 睡眠が十分に取れていると、ストレスが 解消 () 傾向がある。
33. 国は新しい保険制度を 確立 () しました。
34. チェックマークをタップすると、変更内容が 確定 () ます。
35. 彼の音楽活動はこれからも 継続 () ていくでしょう。
36. テキスト形式のファイルのデータを 更新 () タイミングを指定したい。
37. 彼の音楽活動がもうすぐ 停止 () ます。
38. ほぼ一年で工事を 完了 () 予定です。
39. Excel で形の異なる表を 結合 () 場合、このようにします。
40. 元請業者が工事を 完成 () しました。

付録5 アンケートにおける各問の結果整理

実現スル				合計
質問 1. 市民の協力のおかげで、この計画が 実現 () しました。				
答え	する	される	させる	124
数量	103	21		
比率	40.1%	8.2%		
質問 7. 計画を 実現 () ため、市民力の結集をお願いします。				
答え	する	される	させる	133
数量	100		33	
比率	38.9%		12.8%	

確定スル				合計
質問 2. 年金の支給額を事前に 確定 () ことに無理がある。				
答え	する	される	させる	128
数量	104		24	
比率	40.3%		9.3%	
質問 34. チェックマークをタップすると、変更内容が 確定 () ます。				
答え	する	される	させる	130
数量	103	27		
比率	39.9%	10.5%		

完了スル				合計
質問 3. いよいよ工事が 完了 () てしまいます。				
答え	する	される	させる	125
数量	115	10		
比率	45.1%	3.9%		
質問 38. ほぼ一年で工事を 完了 () 予定です。				
答え	する	される	させる	130
数量	105		25	
比率	41.2%		9.8%	

決定スル				合計
質問 4. 政府の基本方針が 決定 () しました。				

答え	する	される	させる	132
数量	111	21		
比率	43.2%	8.2%		
質問 15. 政府が事態を認定したうえ、対処基本方針を 決定() しました。				
答え	する	される	させる	125
数量	119		6	
比率	46.3%		2.3%	

終了スル				合計
質問 5. 審査会は、調査を 終了 () しました。				
答え	する	される	させる	124
数量	116		8	
比率	46.6%		3.2%	
質問 24. 調査がようやく 終了 () しました。				
答え	する	される	させる	125
数量	118	7		
比率	47.4%	2.8%		

集中スル				合計
質問 6. 会場の皆さんは今、視線を司会者に 集中 () していますね。				
答え	する	される	させる	123
数量	93		30	
比率	37.3%		12.0%	
質問 22. 皆さんの視線は今、司会者に 集中 () しています。				
答え	する	される	させる	126
数量	116	6	4	
比率	46.6%	2.4%		

結合スル				合計
質問 8. 二つのセルがひとつに 結合 () しました。				
答え	する	される	させる	129
数量	112	15	2	
比率	42.6%	5.7%		
質問 39. Excel で形の異なる表を 結合 () 場合、このようにします。				

答え	する	される	させる	134
数量	111		23	
比率	42.2%		8.7%	

固定スル				合計
質問 9. カメラを 固定 () ための道具として三脚があげられます。				
答え	する	される	させる	130
数量	116		14	
比率	46.4%		5.6%	
質問 30. カメラが 固定 () ように、三脚を使った。				
答え	する	される	させる	120
数量	75	44	1	
比率	30.0%	17.6%		

解決スル				合計
質問 10. すべての問題が 解決 () しました。				
答え	する	される	させる	130
数量	108	22		
比率	42.2%	8.6%		
質問 16. 捜査官がすべての事件を 解決 () しました。				
答え	する	される	させる	126
数量	118		8	
比率	46.1%		3.1%	

拡大スル				合計
質問 11. その企業はサービスの範囲を大きく 拡大 () しました。				
答え	する	される	させる	131
数量	114		17	
比率	43.2%		6.4%	
質問 18. サービスの範囲が大きく 拡大 () しました。				
答え	する	される	させる	133
数量	106	26	1	
比率	40.2%	9.8%		

接続スル				合計
質問 12. プリンターがコンピューターと 接続 () ています。				
答え	する	される	させる	130
数量	105	24	1	
比率	40.5%	9.3%		
質問 29. 一方のパソコンにプリンターを 接続 () て、他方のプリンターと共有します。				
答え	する	される	させる	129
数量	116		13	
比率	44.8%		5.0%	

停止スル				合計
質問 13. この音楽グループは今年活動を 停止 () ます。				
答え	する	される	させる	125
数量	121		4	
比率	48.0%		1.6%	
質問 37. 彼の音楽活動がもうすぐ 停止 () ます。				
答え	する	される	させる	127
数量	110	17		
比率	43.7%	6.7%		

展開スル				合計
質問 14. 国内でのボランティア活動が 展開 () ました。				
答え	する	される	させる	128
数量	93	35		
比率	36.9%	13.9%		
質問 23. 彼は国内を中心に音楽活動を 展開 () ています。				
答え	する	される	させる	124
数量	121		3	
比率	48.0%		1.2%	

反映スル				合計
質問 17. 町では、広く町民の皆さんの意見を 反映 () ことを目指します。				
答え	する	される	させる	129

数量	104		25	
比率	40.8%		9.8%	
質問 28. 今回の問題点は、町民の意見が適切に 反映 () なかったということです。				
答え	する	される	させる	126
数量	67	59		
比率	26.3%	23.1%		

更新スル				合計
質問 19. データが自動的に 更新 () ように設定されています。				
答え	する	される	させる	132
数量	83	48	1	
比率	32.3%	18.7%		
質問 36. テキスト形式のファイルのデータを 更新 () タイミングを指定したい。				
答え	する	される	させる	125
数量	117	4	4	
比率	45.5%		1.6%	

解消スル				合計
質問 20. 効果的にストレスを 解消 () 方法がありますか。				
答え	する	される	させる	129
数量	115		14	
比率	44.2%		5.4%	
質問 32. 睡眠が十分に取れていると、ストレスが 解消 () 傾向がある。				
答え	する	される	させる	131
数量	73	57	1	
比率	28.1%	21.9%		

完成スル				合計
質問 21. すべての工事が 完成 () ました。				
答え	する	される	させる	124
数量	112	11	1	
比率	44.6%	4.4%		

質問 40. 元請業者が工事を 完成 () ました。				
答え	する	される	させる	127
数量	78		49	
比率	31.1%		19.5%	

確立スル				合計
質問 25. 新しい保険制度が 確立 () ました。				
答え	する	される	させる	131
数量	105	26		
比率	38.9%	9.6%		
質問 33. 国は新しい保険制度を 確立 () ました。				
答え	する	される	させる	138
数量	121		18	
比率	44.8%		6.7%	

回復スル				合計
質問 26. 社会の景気が 回復 () ました。				
答え	する	される	させる	125
数量	119	6		
比率	47.0%	2.4%		
質問 31. 景気を 回復 () ために、政府は新たな政策を始めました。				
答え	する	される	させる	128
数量	91		37	
比率	36.0%		14.6%	

継続スル				合計
質問 27. あの歌手は、今でも音楽活動を 継続 () ています。				
答え	する	される	させる	125
数量	122		3	
比率	48.8%		1.2%	
質問 35. 彼の音楽活動はこれからも 継続 () ていくでしょう。				
答え	する	される	させる	125
数量	110	15		
比率	44.0%	6.0%		

付録6 自動詞専用の傾向にある動詞のアンケート調査結果

増加スル				合計
質問1. 近年、軍の兵力は飛躍的に 増加 () たであろう。				
答え	する	される	させる	13
数量	7	6	0	
質問2. 軍は兵力を 増加 () て、すぐそこを占領しました。				
答え	する	される	させる	14
数量	7	0	7	

発生スル				合計
質問1. 環境汚染が 発生 () 場合、的確に対処しなければなりません。				
答え	する	される	させる	13
数量	13	0	0	
質問2. 人間の生産活動は環境汚染を 発生 () ます。				
答え	する	される	させる	13
数量	1	0	12	

減少スル				合計
質問1. 近年、国内生産が 減少 () て、代わって外国からの輸入が顕著に増加した。				
答え	する	される	させる	13
数量	11	2	0	
質問2. 商品が売れないので、企業は生産を 減少 () ました。				
答え	する	される	させる	13
数量	3	0	10	

消滅スル				合計
質問1. このソフトは自らの痕跡を 消滅 () てしまうように設定されています。				
答え	する	される	させる	13
数量	8	0	5	
質問2. ソフトの痕跡が 消滅 () ても、探すことができます。				
答え	する	される	させる	13
数量	9	4	0	

増大スル				合計
質問 1. 農業生産を 増大 () ていくことが重要な課題となっている。				
答え	する	される	させる	14
数量	6	0	8	
質問 2. 鉄の道具ができたことによって、農業の生産が 増大 () た。				
答え	する	される	させる	13
数量	10	3	0	

復活スル				合計
質問 1. 国保制度が復活 () ました。				
答え	する	される	させる	13
数量	9	4	0	
質問 2. ロシア正教会は総主教制を復活 () た。				
答え	する	される	させる	13
数量	3	0	10	

乾燥スル				合計
質問 1. 葉を乾燥 () て、お茶と同じように利用できます。				
答え	する	される	させる	13
数量	3	0	10	
質問 2. 茶葉がそのままの形で乾燥 () ている。				
答え	する	される	させる	13
数量	8	5	0	